

岩手大学大学教育総合センター

年次報告

2012

THE ANNUAL REPORT OF UNIVERSITY EDUCATION CENTER,
IWATE UNIVERSITY, 2012

CONTENTS

- 1 運営委員会
- 2 入試部門
- 3 全学共通教育部門
- 4 教育改善部門
- 5 専門教育等連携部門
- 6 学生支援部門
- 7 キャリア支援部門



国立大学法人岩手大学

大学教育総合センター

Iwate University : University Education Center

岩手大学大学教育総合センター

年次報告

2012

THE ANNUAL REPORT OF UNIVERSITY EDUCATION CENTER,
IWATE UNIVERSITY, 2012

CONTENTS

- 1 運営委員会
- 2 入試部門
- 3 全学共通教育部門
- 4 教育改善部門
- 5 専門教育等連携部門
- 6 学生支援部門
- 7 キャリア支援部門



はじめに

大学教育総合センター長
高畑 義人

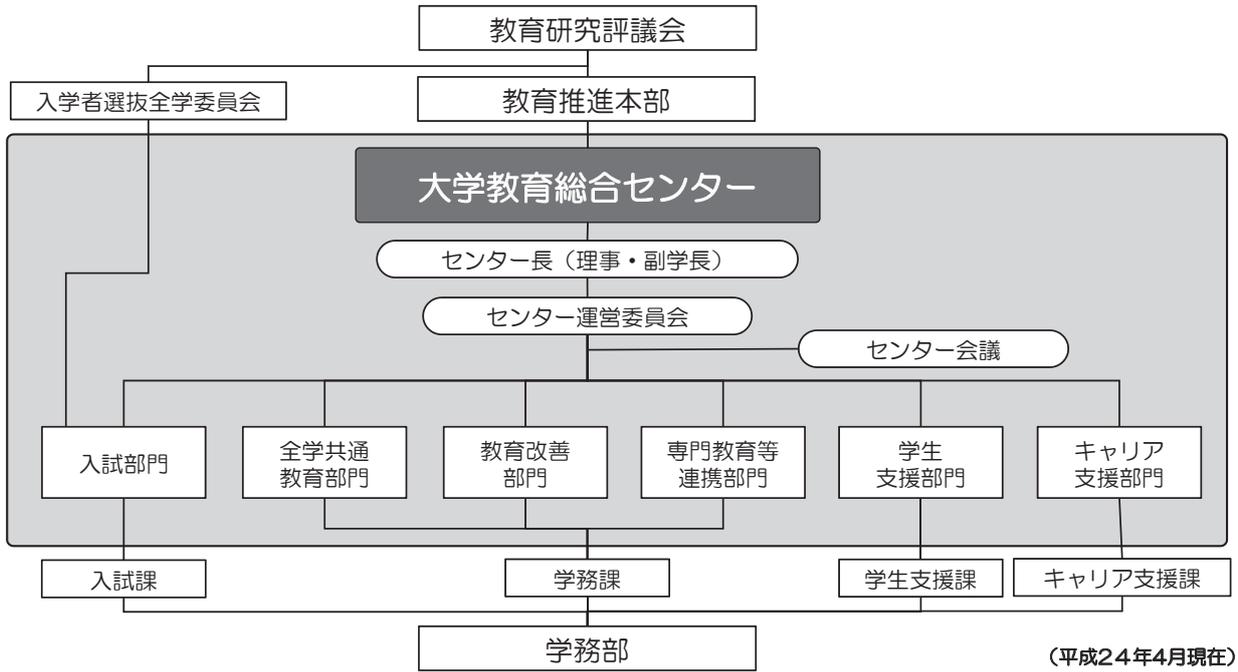
本報告書は大学教育総合センターの1年間の様々な活動を網羅したものです。電子化しホームページだけの公開で十分であるという声を聞くこともありますが、確かに電子化された媒体は、ピンポイントで見たり検索するには便利ですが、全体像を知るには必ずしも便利とは言えません。また電子化された媒体がこの先保存されていくかも不明なところ。それに対し、このような冊子体は全体像を包括的に把握する情報源として、またセンターの適正な評価を受けるための証拠資料として価値あるものと考えています。本報告書が多くの関係者に役立つことを願っております。

大学教育総合センターは、入学者選抜、全学共通教育、教育改善、専門教育の全学的連携、修学支援・課外活動、キャリア支援、と学生に係わる入学から卒業・就職までの一切の業務を行うことになっています。それらを行うために6つの部門があり、各部門長のもとで各学部から選出された兼務教員並びにセンターの専任教員がそれぞれの業務を行っています。さらに、それらを統括する大学教育総合センター運営委員会があり、各学部から選出された委員と各部門長から構成されています。このつくりはうまくできていると思いますが、問題がないわけではありません。その問題の一つは、各部門で行われている業務がなかなか学部構成員に伝わらず、大学教育総合センターが行っている業務の全体像が見えないことです。原因としてはそれぞれの部門で審議決定していることが多くありますが、そこに出席している兼務教員は各学部を代表する委員ではないため、それらの審議内容を学部へ報告する義務がないためと考えられます。平成26年度に向けて教育研究支援施設の見直しが決まり、現在本センターの任務を引き継ぐ教育推進機構設置の準備を進めていますが、このような問題点の解消も含めて分かりやすく風通しの良い組織を作っていく必要があります。新たな機構の業務も今までと同様に各学部と共に進んでいく必要があります。今後とも皆様のご協力をお願いするとともに、新たな組織に対するご意見等をお寄せいただくようお願いいたします。

最後になりますが、全学の学生の教育と支援のために努力していただいた各学部から選出されたセンター運営委員会委員、各部門の部門長、兼務教員、センター専任教員、そして事務職員の皆様に感謝申し上げます。特に、人文社会科学部長就任のため任期途中の平成24年度末で退任となられた長野俊一副センター長には、様々な面でご支援、ご協力を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

平成25年7月

大学教育総合センター 組織図



大学教育総合センター運営委員会委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏 名	担 当 部 局 等
センター長	高 畑 義 人	理事 (教育・学生担当)
副センター長	長 野 俊 一	人文社会科学部
入試部門長	高 畑 義 人	理事 (教育・学生担当)
全学共通教育部門長	横 山 英 信	人文社会科学部
教育改善部門長	武 井 隆 明	教育学部
専門教育等連携部門長	松 川 倫 明	工学部
学生支援部門長	栗 林 徹	教育学部
キャリア支援部門長	安 田 準	農学部
副学部長又は評議員	吉 村 泰 樹	人文社会科学部
	遠 藤 孝 夫	教育学部
	船 崎 健 一	工学部
	古 賀 潔	農学部
教務関係委員長	山 本 昭 彦	人文社会科学部
	菊 地 洋 一	教育学部
	嶋 田 和 明	工学部
	居在家 義 昭	農学部
学務部長	渡 部 徹	学務部

大学教育総合センターセンター会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
センター長	高畑 義人	理事(教育・学生担当)
副センター長	長野 俊一	人文社会科学部
入試部門長	高畑 義人	理事(教育・学生担当)
全学共通教育部門長	横山 英信	人文社会科学部
教育改善部門長	武井 隆明	教育学部
専門教育等連携部門長	松川 倫明	工学部
学生支援部門長	栗林 徹	教育学部
キャリア支援部門長	安田 準	農学部
専任教員	江本 理恵	大学教育総合センター
	岡本 崇宅	大学教育総合センター
学務部長	渡部 徹	学務部

入試部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	高畑 義人	大学教育総合センター長
専任教員	岡本 崇宅	大学教育総合センター
兼務教員	吉村 泰樹	人文社会科学部
	土屋 明広	教育学部
	伊藤 歩	工学部
	庄野 浩資	農学部
各学部入試委員会 (正・副委員長)	家井 美千子	人文社会科学部
	横山 英信	人文社会科学部
	境野 直樹	教育学部
	我妻 則明	教育学部
	平塚 貞人	工学部
	水野 雅裕	工学部
	倉島 栄一	農学部
木村 賢一	農学部	
入試課長	藤原 昇	学務部

全学共通教育部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	横山英信	人文社会科学部
専任教員		
兼務教員	横井雅明	外国語分科会
	清水茂幸	健康・スポーツ分科会
	藤本忠博	情報基礎分科会
	中村安宏	思想と文化分科会
	神常雄	心と表象分科会
	横山英信	公共社会分科会
	三井隆弘	現代の諸問題分科会
	西山賢一	生物の世界分科会
	八木一正	自然と数理の世界分科会
	柳岡英樹	科学技術分科会
	河合成直	環境分科会
各学部教務委員会	河田裕樹	人文社会科学部
	遠藤匡俊	教育学部
	嶋田和明	工学部
	伊藤芳明	農学部
学務課長	浅沼良庸	学務部

教育改善部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	武井隆明	教育学部
全学共通教育部門長	横山英信	人文社会科学部
専任教員	江本理恵	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出委員)	五味壮平	人文社会科学部
	後藤尚人	人文社会科学部
	宮川洋一	教育学部
	山崎浩二	教育学部
	松浦哲也	工学部
	吉野泰弘	工学部
	横井修司	農学部
学務課長	三浦靖	農学部
	浅沼良庸	学務部

専門教育等連携部門会議委員名簿

(平成 24 年 4 月 1 日)

	氏 名	担 当 部 局 等
部門長	松 川 倫 明	工学部
専任教員		
兼務教員 (各学部教務委員会選出教員)	河 田 裕 樹	人文社会科学部
	犬 塚 博 彦	教育学部
	嶋 田 和 明	工学部
	國 崎 貴 嗣	農学部
学務課長	浅 沼 良 庸	学務部

学生支援部門会議委員名簿

(平成 24 年 4 月 1 日)

	氏 名	担 当 部 局 等
部門長	栗 林 徹	教育学部
兼務教員 (各学部学生委員会選出教員)	松 林 城 弘	人文社会科学部
	ホー ル ジェームズ	教育学部
	土 岐 規 仁	工学部
	出 口 善 隆	農学部
学部選出教員	白 倉 孝 行	人文社会科学部
	菊 地 悟	教育学部
	海 田 輝 之	工学部
	立 川 史 郎	農学部
学生支援課長	佐 藤 祐 一	学務部

キャリア支援部門会議委員名簿

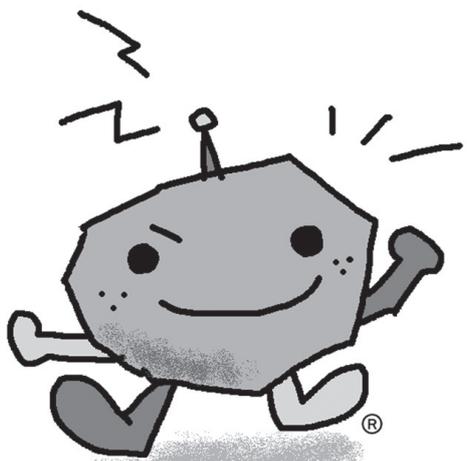
(平成 24 年 4 月 1 日)

	氏 名	担 当 部 局 等
部門長	安 田 準	農学部
兼務教員 (各学部就職委員会選出教員)	竹 村 祥 子	人文社会科学部
	大河原 清	教育学部
	高 木 浩 一	工学部
	古 賀 潔	農学部
キャリア支援課長	大 内 正	学務部

目 次

□センター長あいさつ	
□組織構成図 名簿	
□目次	
□運営委員会	001
運営委員会報告	003
岩手大学「学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)	005
岩手大学「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)	021
学修支援室(ラーニング・サポート・ルーム)の開設	037
(専門教育科目)成績評価ガイドライン	040
□入試部門	057
活動報告	059
□全学共通教育部門	061
活動報告	063
平成24年度分科会メンバー表・開講科目一覧	066
分科会教育目標及び成績評価基準のガイドライン	086
オムニバス方式授業科目の講義間の連携のためのガイドライン	099
「総合科目」の教育目標と成績評価のガイドライン	100
第3回岩手大学全学共通教育シンポジウム	101
□教育改善部門	103
活動報告	105
平成24年度学習会等実施報告	107
平成24年度岩手大学教員参加研修会等一覧	109
過去の学習講演会等	111
平成24年度FD合宿研修会実施報告	113
学生による授業アンケート実施スケジュール	119
平成23年度優秀授業選出方針	120
平成23年度後期学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目一覧	122
平成24年度前期授業アンケート集計結果	123
平成24年度優秀授業選出方針	131
平成24年度前期学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目一覧	133
平成24年度後期授業アンケート集計結果	134
平成24年度前期全学共通教育授業公開実施報告	140
平成24年度後期全学共通教育授業公開実施報告	143
平成24年度入学前教育実施報告	144
平成24年度卒業時アンケート集計結果	153
卒業時アンケート4年間の推移	159

□専門教育等連携部門	163
活動報告	165
専門基礎科目に関する懇談会メモ（数学・理科）	167
専門基礎科目の習熟度別アンケート結果最終報告	179
基礎ゼミ総括	188
外国語自主学習総括	189
初年次教育アンケート集計	190
放送大学活用プロジェクト	192
□学生支援部門	193
活動報告	195
平成 24 年度岩手大学学生表彰者名簿（個人・団体）	199
□キャリア支援部門	201
活動報告	203
キャリア支援部門活動推移（平成 1 5 年度～平成 2 4 年度）	206
キャリア支援部門会議	207
学部就職委員会	209
会議等	212
企業合同説明会	215
就職ガイダンス等	216
企業訪問	221
大学生の就業力育成支援事業	222
産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業	223
キャリア相談状況	224



がんちゃん



大学教育総合センター 運営委員会

大学教育総合センター運営委員会委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
センター長	高畑 義人	理事(教育・学生担当)
副センター長	長野 俊一	人文社会科学部
入試部門長	高畑 義人	理事(教育・学生担当)
全学共通教育部門長	横山 英信	人文社会科学部
教育改善部門長	武井 隆明	教育学部
専門教育等連携部門長	松川 倫明	工学部
学生支援部門長	栗林 徹	教育学部
キャリア支援部門長	安田 準	農学部
副学部長又は評議員	吉村 泰樹	人文社会科学部
	遠藤 孝夫	教育学部
	船崎 健一	工学部
	古賀 潔	農学部
教務関係委員長	山本 昭彦	人文社会科学部
	菊地 洋一	教育学部
	嶋田 和明	工学部
	居在家 義昭	農学部
学務部長	渡部 徹	学務部

運営委員会報告

センター長 高畑 義人

「学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」

平成 23 度から検討していた、学部、学科、課程、コースのそれぞれのレベルにおける「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」及び「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」の最終案を 2 月の運営委員会で決定しました。最終案決定までの間に、8 月には「カリキュラムマップ作成ワークショップ」、11 月には「ブラッシュアップセミナー」を行い、それぞれの方針案の作成とそれらのブラッシュアップを行うと共に研究科の「学位授与の方針」等との整合性をとってまいりました。これらの方針は、2 月の教育研究評議会で承認され、ホームページに掲載されています（<http://www.iwate-u.ac.jp/kyoikujoho/index.shtml>）。この 2 つのポリシーの決定に伴い、すでに策定している「入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）」との整合性を 25 年度にかけて確認することとしています。また、関連して各学部で作成したカリキュラムマップやカリキュラムチェックリストについては、平成 25 年度に全学的な確認をすることとしましたが、カリキュラムマップについては、新入生に対し各学部で活用することとしました。

成績評価ガイドライン

各学部の成績評価ガイドラインに関して、12 月の運営委員会で最終案を了承しました。また、成績評価ガイドラインに沿った成績評価が行われていることの検証に関して、工学部で作成している「授業実施報告書」を紹介し、他学部で検討する際の参考としました。なお、検証については中期目標・中期計画のロードマップにも載っていることから平成 25 年度に各学部で検討することになります。

FD ガイドライン

平成 23 年度に作成し各学部意見を求めていた FD ガイドライン（案）について、各学部からの意見に基づいて教育改善部門会議において審議・修正した案について、8 月の運営委員会で審議・了承しました。

全学共通教育の「教育目的」・「修得すべき能力」及び関連事項について

全学共通教育の「教育目的」及び「修得すべき能力」に関しては、全学共通教育部門会議で作成した案を一部修正のうえ決定しました。本項目は平成 25 年度の「履修の手引き」に掲載することにしました。また、全学共通教育分科会のうち「公共社会」と「現代の諸問題」分科会の統合についても全学共通教育部門会議から提案があり、関係規則の改正も含めて決定しました。さらに、新設科目の提案があり、こちらも関係規則の改正も含めて決定しました。

「保留」単位に関する成績評価報告の期限設定

成績報告における「保留」について、数年間「保留」のまま単位認定されない科目が多く存在し、「保留」としたまま退職や転任してしまう場合もある等の問題点があるため、「保留」の期限設定について審議し、9 月の運営委員会において、「保留」については原則として 6 ヶ月の期限とすることを決定しました。また、すでに退職・転任した教員の科目で「保留」になっているものについては、各学科、課程で対応することとしました。

休退学者減少のための対応策ならびにアンケート

本件は学生支援部門会議から運営委員会に審議を依頼されたもので、審議の結果、休退学者減少の対応策として、1年次の成績配布時に担任等から面談も含めて直接成績を手渡し、必要に応じて指導を行って欲しい旨の依頼が委員長からなされました。本対応策は一部の学部で行っているものを全学的に実施するものです。また、休退学者に対するアンケートの見直し案を一部修正の上、決定しました。

学習支援室（ラーニング・サポート・ルーム）の設置

リメディアル教育等の学修支援を充実させるための方策として、平成25年度から図書館に学習支援室（ラーニング・サポート・ルーム）を整備することを決定し、その準備のために立ち上げたワーキンググループで具体的な案作りを依頼しました。また、関連して、学修支援を行うための嘱託教員についても決定しました。なお、学習支援室は平成25年度からスタートしています (<http://uec.iwate-u.ac.jp/LSRLeaf.pdf>)。

その他

平成24年度FD合宿研修会を8月23～24日に「これからの大学教育のあり方を考えるー「大学改革実行プラン」を受けて」というテーマで、4学部教員の外いわて高等教育コンソーシアムに所属する大学の教員も参加し、開催しました。12月7日には全学共通教育の実施体制の現状と課題をテーマに全学共通教育シンポジウムを、3月18日には学生による授業アンケートに関する意見交換会を開催しました。また、平成24年度高大連携ウインターセッションを「復興を支える知の力」というテーマで12月25～27日に開催し、141名の受講者がありました。

岩手大学「学位授与の方針：学士課程」(ディプロマ・ポリシー)

岩手大学は、地域における知の府として、国際的な視野を持ち、幅広い教養と深い専門性を備えて持続可能な共生社会の形成に寄与する人材の育成を目指しています。

そのために岩手大学は、すべての学生を対象とする全学共通教育と、人文社会科学部、教育学部、工学部、農学部が専門性に依拠して行う専門教育により、学生が下記のような学習成果を得られるようにしています。

学生は、各学部にて所定の期間在学し、全学共通教育科目と専門教育科目の中から必要な授業科目を履修し、成績の評価を受けて、所定の単位数を修得することにより学士の学位が授与されます。

1. 幅広い基礎的知識

文化・社会・自然に関する諸現象についての学問的な基礎的知識を有する

2. 学問的専門性

所属する学部、学科・課程での学士課程に求められる学問的な専門性を習得する

3. 領域を超えた学際的知識

グローバル化、高度情報化、環境問題や持続可能性等の人類的諸課題を正しく捉えるための学際的知識を有する

4. 論理的思考力

自然現象や社会現象等を多面的に考察し、自分の考えを論理的に展開できる

5. コミュニケーション・スキル

日本語や他の言語を運用して、課題解決に向けて他者と効果的に意思疎通を図ることができる

6. 情報リテラシー

多様な情報を適切かつモラルに則って収集・処理・分析し、その結果を有効に活用できる

7. 持続可能な共生社会への志向性

環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題に対して、持続可能性と共生の観点からその解決に取り組む姿勢を持つ

8. 市民としての社会的責任

人や自然を思いやり、自己の良心にしたがって市民として責任ある判断や行動ができる

9. 課題探求力

生涯を通じての持続的な学習に備え、課題を主体的に探求できる

学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)：人文社会科学部

岩手大学人文社会科学部では、所定の課程を卒業し、以下に掲げる各課程・コースの学位授与の方針に該当する者に学位を授与する。

人間科学課程

【人間情報科学コース】

(知識・理解)

1. 人間とはどのような存在かを人間科学的及び情報科学的な方法で理解している。
2. その理解を人間科学と情報科学との横断領域(心理学など)で補完することによって、複雑化した現代社会における諸課題に適切に対処できる。
3. 伝統的な人間科学と萌芽期にある情報科学との連携の中で、人間存在についての新たな学問のあり方を探求する能力をもっている。

(態度)

4. 人間に対する深い理解と広い視野に基づく学際的・総合的な課題探求能力を習得し、現代社会の様々な課題を全体的に把握し、それらの課題に適切かつ柔軟に対処できる。

(技能・表現)

5. 現代社会において、新たに直面する事象を自らの力で理解し判断する自発的課題探求を身につけている。
6. 他者との関わり、他者理解に際して、発表や討論を通じてのコミュニケーションやプレゼンテーションのスキルを習得している。
7. 経験(実習・実験)を通して、チームワークやリーダーシップなどの集団活動場面におけるスキルを習得している。

【行動科学コース】

(知識・理解)

1. 心理学的、社会的、地理学的アプローチによって得られた人間行動に関する知識を有し、人間行動とその諸条件を心理面と社会面の両側面から複眼的に理解することができる。

(思考・判断)

2. 現代社会における多様な人間行動をめぐる諸問題に適切に対処するために、多面的かつ全体関連的に思考し、判断し、積極的な提案を行うことができる。

(関心・意欲)

3. 人間行動に深い関心を持ち、現代社会における人間行動の探求と理解に強い意欲を持っている。

(態度)

4. 人間に対する深い理解と広い視野に基づく学際的・総合的な課題探求能力を習得し、現代社会の様々な課題を全体的に把握し、それらの課題に適切かつ柔軟に対処できる。

(技能・表現)

5. 現代社会において、新たに直面する事象を自らの力で理解し判断する自発的課題探求を身につけている。
6. 他者との関わり、他者理解に際して、発表や討論を通じてのコミュニケーションやプレゼンテーションのスキルを習得している。
7. 経験(実習・実験)を通して、チームワークやリーダーシップなどの集団活動場面におけるスキルを習得している。

国際文化課程

【文化システムコース】

(知識・理解)

1. 現代社会の文化諸現象や地域文化を含む文化の動態について、広く新しい視座から理解するための知識を獲得している。

(思考・判断)

2. 現代の文化について、社会文化論、社会文化思想論、文化領域論、ジェンダー文化論、表象文化論、文化記号論、メディア文化論等の学問領域の研究方法を用いて、自ら設定した課題を批判的に考察することができる。

(技能・表現)

3. 現代の文化について、自らの理解を他者との議論を通じて深め、地域社会に文化的な発信・貢献を行うことができる。

(関心・意欲)

4. 現代の文化の諸課題について、自分の日常生活とも結びついた深い関心を持ち、それを探求する意欲をもっている。

【アジア文化コース】

(知識・理解)

1. 日本と中国を中心とするアジア地域に関する諸問題について、言語・文学・歴史・思想のそれぞれの分野を研究するのに必要な知識を獲得している。

(思考・判断)

2. 日本と中国を中心とするアジア地域に関する知見をもとに、世界の各地域の文化や各時代の文化を比較検討することを通して、自らの観点や価値判断を相対化し、問い直すことができる。

また、日本と中国を中心とするアジア地域に関する従来の研究成果を、批判的に検討し、自らの見解を論理的に組み立てることができる。

(技能・表現)

3. 漢字文化圏の文献資料及び非文献資料を適切に取り扱い、読み解く能力を身につけている。

また、自らの見解を論理的に組み立て、資料に基づいて適切に発表することができる。

(関心・意欲)

4. 日本と中国を中心とするアジア地域に関する諸問題について、自ら課題を見出し、言語・文学・歴史・思想のそれぞれの方面から主体的に探求する意欲を持っている。

【欧米言語文化コース】

(知識・理解)

1. 欧米諸国(イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、ロシアのいずれか)の歴史・文化・文学・言語の諸相に関する知識を獲得している。

(思考・判断)

2. 欧米諸国を対象とした歴史学・文化・文学・言語学・コミュニケーション論のいずれかの学問領域の研究方法を用いて、自ら設定した課題を考察し、解決することができる。

(技能・表現)

3. 欧米諸言語のコミュニケーション能力を用いて、自分の考えを口頭や文章によって伝えることができる。

(関心・意欲)

4. 欧米諸国の歴史・文化・文学・言語・コミュニケーションに関する諸問題に深い関心を持ち、それを探求する意欲をもっている。

法学・経済課程

【法学コース】

(知識・理解)

1. 法学を体系的に学ぶことにより、その幅広い知識と理論を習得している。
2. 法令を正確に理解する能力を習得している。
3. 判例を正確に理解する能力を習得している。

(思考・判断)

4. 法的な思考力(リーガルマインド)を身につけている。
5. 法令を客観的に解釈する力を身につけている。
6. 判例を客観的に解釈する力を身につけている。

(関心・意欲・態度)

7. 社会や地域が抱える様々な法的問題を意識し、正確に認識することができる能力を身につけている。
8. 社会や地域が抱える様々な法的問題に対して、能動的に取り組むことのできる能力を身につけている。

(技能・表現)

9. 法的な課題に対して、自らの見解、論理を正確に相手に伝え、それに対する相手の意見を正確に理解しながら自らの見解を再検討できる能力を身につけている。
10. 判例、専門書等の収集した資料から、客観性のある分析ができる能力を身につけている。

【経済コース】

(知識・理解)

1. 経済学、経営学、会計学などの基礎知識を修得し、これらの基礎知識を踏まえて経済社会のしくみを理論的・総合的に理解している。
2. 経済学的素養に加えて、法律学、政治学の基礎知識を修得し、現代社会のしくみを理論的・総合的に理解している。

(思考・判断)

3. 経済学的素養に基づいて、高度に発達した現代社会のしくみを総合的・複合的に思考するすなわち経済学的思考をすることができる。
4. 経済学的思考に基づいて、現代社会が抱えるさまざまな課題を分析できる。

(関心・意欲)

5. 経済学的な基礎知識を踏まえて、理論的、歴史的、政策的分析をおこない、国際社会及び地域社会の課題に主体的・実践的に取り組むことができる。
6. 他者の意見を聞き、また同時に自分の意見を構築し伝えることができる。

(態度)

7. 総合的な分析力に基づいて物事を主体的に考え、柔軟で前向きな姿勢をもっている。
8. 現代社会の多様性を理解するとともに、創造的な思考力と積極的な行動力をもっている。

(技能・表現)

9. 資料分析や歴史分析に基づいて経済現象を実証的に評価し、それらに基づく政策的判断ができる。
10. 自分の意見や見解を積極的に社会に伝えることができる。

環境科学課程

【環境科学コース】

(知識・理解)

1. 自然環境とそこでの人間・社会のあり方について、人文社会・自然科学諸分野の専門的観点からの幅広い教養・知識を身につけている。
2. 環境の問題の解決、「持続可能な共生社会」の構築に向けて、人間・社会と自然環境相互の関わりを踏まえ、総合的・学際的に把握していく重要性をよく理解している。
3. 環境科学の諸分野における研究手法、とりわけ科学的な情報・データ収集方法を理解している。

(思考・判断)

4. 自然環境と人間・社会のあり方、環境をめぐる様々な問題について、環境科学諸分野のいずれかの領域の研究手法を用い、考察できる。
5. 環境問題の解決、「持続可能な共生社会」構築のために、総合的・学際的に思考・判断し、具体的方策を提案できる。

(関心・意欲)

6. 地球規模から身近な地域まで、多岐にわたる環境の問題に強い関心を持っている。
7. 文献によって論理的に思考するにとどまらず、問題の現場(フィールド)に積極的に出かけ、自然や社会的現実の把握を通じ、実態解明や解決策を探究しようとする意欲を持っている。
8. 環境に関わる人文社会・自然科学諸分野の多角的な視点からの見解や、他者からの意見を柔軟に取り入れる姿勢を持っている。

(態度)

9. 人間・社会と自然環境との関わりについての幅広い知識を身につけ、環境をめぐる問題の解決に求められる科学的・客観的な情報の収集及び議論を積極的に行うことができる。
10. 環境問題の解決、「持続可能な共生社会」の構築に向け、他者と協調しながら主体的・継続的に取り組むことができる。

(技能・表現)

11. 環境科学諸分野の研究手法に基づき、自らの見解を論理的に思考・判断したプロセスや結果を的確に発表し、他者の声に耳を傾けながら討議する、プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を持っている。
12. 実際の環境をめぐる問題の把握・解決のため、文献やフィールドでの調査・実験等から収集した情報・データを、科学的に分析・評価することができる。

学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー):教育学部

教育学部は、教育に関わる実践的な知識・技能と学術諸分野に関する専門的な知識の修得を通して、幅広い視野と専門的な能力を持つ学校教員、地域社会における生涯教育の指導者及び芸術文化活動の指導者の養成を目的とする。

(知識・理解)

1. 多様な価値観と変わりゆく社会の中で、人間教育を行うための基本的知識基盤と創造的活動を支える専門的知識基盤を有する。

(技能・表現)

2. 学校内外の教育分野における指導者として活躍するための技能的基盤を有する。
3. 協調性を持って物事を進めるとともに、自らの意見を適切に表現することができる。

(思考・判断)

4. 物事を総合的な観点から思考し、創造的に推進する判断力を有する。

(関心・意欲・態度)

5. 持続可能な社会の構築において、真の豊かさを探究しながら教育分野に貢献する意欲を持ち、自らも自己目的を達成するために持続的に成長する資質と態度を有する。

学校教育教員養成課程

【学校教育コース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 教育及び子どもに関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 各教科等の内容及び指導法に関する基礎的な知識を身に付けている。
4. 専攻する学問分野の専門的な知識を有する。

(技能・表現)

5. 学習指導及び生活指導のための基礎的な技能を身に付けている。
6. ものごとを計画的に進め、その結果を整理して口頭や文章で表現できる。また授業や話し合いなどを主導的に進めたり協動的に議論したりすることができる。

(思考・判断)

7. 教育に関する総合的な基礎力と実践的な体験を通して、教育に関する多面的なものの見方や実践的な思考・判断力を養っている。
8. 専攻する学問分野の探究的な活動を通して、課題分析力、論理的思考力及びものごとを創造的に推進する力を養っている。

(関心・意欲・態度)

9. 教育の在り方や教育現場の現状に強い関心を持ち、教育分野に貢献する意欲を有する。
10. 専門的に学問を深める過程を通して、課題解決能力及び自己向上力を養い、持続的に成長する資質と態度を有する。

【特別支援教育コース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 教育及び子どもに関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 各教科等の内容及び指導法に関する基礎的な知識を身に付けている。
4. 特別支援教育分野の専門的な知識を有する。

(技能・表現)

5. 学習指導及び生活指導のための基礎的な技能を身に付けている。
6. 特別支援教育に求められる専門的な指導力を身に付けている。
7. ものごとを計画的に進め、その結果を整理して口頭や文章で表現できる。また授業や話し合いなどを主導的に進めたり協調的に議論したりすることができる。

(思考・判断)

8. 教育に関する総合的な基礎力と実践的な体験を通して、教育に関する多面的なものの見方や実践的な思考・判断力を養っている。
9. 特別支援教育分野の探究的な活動を通して、子ども一人ひとりの教育的ニーズを把握する能力、課題分析力、論理的思考力及びものごとを創造的に推進する力を養っている。

(関心・意欲・態度)

10. 教育全般や特別支援教育の在り方や教育現場の現状に強い関心を持ち、特別支援教育分野に貢献する意欲を有する。
11. 特別支援教育を深める過程を通して、課題解決能力及び自己向上力を養い、持続的に成長する資質と態度を有する。

生涯教育課程

【日本語・地域文化コース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 生涯教育に関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 地域文化や地域社会、地域の歴史、そして地域における文化活動に関する専門的な知識を身に付けている。
4. 日本語や日本文学など日本の言語文化とその歴史、日本語教育及び中国など諸外国の言語文化との関わりなどに関する専門的な知識を身に付けている。

(技能・表現)

5. 地域文化・地域の文化活動にかかわる様々な課題に対応できる技能を身に付けている。
6. 日本語教育や、日本の言語文化の普及・啓蒙にかかわる様々な課題に対応できる技能を身に付けている。

(思考・判断)

7. 地域文化に関する総合的な基礎力を背景として、個々の課題に対応できる実践的な思考力・判断力を養っている。
8. 日本語文化と日本語教育に関する総合的な基礎力を背景として、個々の課題に対応できる実践的な思考力・判断力を養っている。

(関心・意欲・態度)

9. 地域の文化に強い関心を有し、生涯学習社会に貢献する意欲を持ち、地域文化・社会の課題に対し主体的に対応できる。
10. 日本語文化・日本語教育に強い関心を有し、生涯学習社会及び国際化社会に貢献する意欲を持ち、日本語文化・日本語教育の課題に対し主体的に対応できる。

【スポーツ教育コース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 生涯教育及び生涯スポーツに関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 地域社会におけるスポーツの実践と指導に関する基礎的な知識を身に付けている。
4. 人間の身体及びスポーツに関する専門的な知識を身に付けている。

(技能・表現)

5. スポーツの実践に必要な実技力及び指導に関する基礎的な技能を身に付けている。
6. ものごとを計画的に進め、その結果を整理して口頭や文章で表現できる。また授業や話し合いなどを主導的に進めたり協動的に議論したりすることができる。

(思考・判断)

7. スポーツに関する総合的な基礎力を背景として、スポーツに関する個々の課題に対応できる実践的な思考力・判断力を有する。
8. 専攻するスポーツ分野の探究的な活動を通して、課題分析力、論理的思考力及びものごとを創造的に推進する力を有する。

(関心・意欲・態度)

9. スポーツに関する科学的探究心や社会的諸課題への強い関心を持ち、地域スポーツの普及・発展に貢献する意欲を有する。
10. 主体的に問題を探求し、生涯を通じて学習し続ける資質と態度を有する。

芸術文化課程

【美術・デザインコース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 美術に偏らず芸術文化全般に関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 美術活動や美術教育に関する基礎的な知識を身に付けている。
4. 専攻する美術分野の専門的な知識を身に付けている。

(技能・表現)

5. 美術活動や美術教育のための基礎的な技能・実践力を身に付けている。
6. 美術活動や美術教育のための専門的な技能・実践力を身に付けている。

(思考・判断)

7. 美術に関する総合的な基礎力と実践的な体験を通して、地域社会の美術活動や美術教育に関する多面的なものの見方や実践的な思考・判断力を身に付けている。
8. 専攻する美術分野の探究的な活動を通して、課題分析力、論理的思考力及びものごとを創造的に推進する力を身に付けている。

(関心・意欲・態度)

9. 地域社会における美術活動や美術教育の在り方や現状に強い関心を持ち、それに貢献する意欲を身に付けている。
10. 専門的に美術を深める過程を通して、課題解決能力及び自己向上力を養い、持続的に成長する資質と態度を身に付けている。
11. 自国・他国の美術文化や異なる価値観に関心を持っている。

【書道コース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 書道に偏らず芸術文化全般に関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 書道活動や書道教育に関する基礎的な知識を身に付けている。
4. 専攻する書道分野の専門的な知識を身に付けている。

(技能・表現)

5. 書道活動や書道教育のための基礎的な技能・実践力を身に付けている。
6. 書道活動や書道教育のための専門的な技能・実践力を身に付けている。

(思考・判断)

7. 書道に関する総合的な基礎力と実践的な体験を通して、地域社会の書道活動や書道教育

に関する多面的なものの見方や実践的な思考・判断力を身に付けている。

8. 専攻する書道分野の探究的な活動を通して、課題分析力、論理的思考力及びものごとを創造的に推進する力を身に付けている。
(関心・意欲・態度)
9. 地域社会における書道活動や書道教育の在り方や現状に強い関心を持ち、それに貢献する意欲を身に付けている。
10. 専門的に書道を深める過程を通して、課題解決能力及び自己向上力を養い、持続的に成長する資質と態度を身に付けている。
11. 自国・他国の書道文化や異なる価値観に関心を持っている。

【音楽コース】

(知識・理解)

1. 総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けている。
2. 音楽に偏らず芸術文化全般に関する基礎的な知識を身に付けている。
3. 音楽活動や音楽教育に関する基礎的な知識を身に付けている。
4. 専攻する音楽分野の専門的な知識を身に付けている。
(技能・表現)
5. 音楽活動や音楽教育のための基礎的な技能・実践力を身に付けている。
6. 音楽活動や音楽教育のための専門的な技能・実践力を身に付けている。
(思考・判断)
7. 音楽に関する総合的な基礎力と実践的な体験を通して、地域社会の音楽活動や音楽教育に関する多面的なものの見方や実践的な思考・判断力を身に付けている。
8. 専攻する音楽分野の探究的な活動を通して、課題分析力、論理的思考力及びものごとを創造的に推進する力を身に付けている。
(関心・意欲・態度)
9. 地域社会における音楽活動や音楽教育の在り方や現状に強い関心を持ち、それに貢献する意欲を身に付けている。
10. 専門的に音楽を深める過程を通して、課題解決能力及び自己向上力を養い、持続的に成長する資質と態度を身に付けている。
11. 自国・他国の音楽文化や異なる価値観に関心を持っている。

学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)：工学部

(知識・理解)

1. 工学分野とそれに関連する幅広い専門知識を有し、それらの知識や技術を十分に咀嚼し活用することのできる人物であることを学位授与の要件とする。

(思考・判断)

2. 獲得した知識や技術を様々な科学技術分野に役立てることを通して、地域や国際社会の様々な問題解決に結びつけることのできる人物であることを学位授与の要件とする。

(技能・表現・意欲・態度)

3. 工学的課題を解決する専門的能力を有し、持続可能な社会づくりに向けてそれを地域社会や国際社会の中で積極的に生かそうとする人物であることを学位授与の要件とする。

応用化学・生命工学科

(知識・理解)

1. 化学、生物、数学、物理の各分野の基礎知識及び化学と生命工学に関する専門基礎知識を備えている。
2. 化学反応及び分子の構造変化より成り立つ化学現象を伴う工業プロセス並びに生命プロセスを原子・分子レベルで理解できる。

(思考・判断)

3. 文化・社会・自然・環境などの共通教育科目を履修し、社会における諸問題を化学と生命工学の見地から分析し、解決のための論理的な判断や提案ができる。
4. 化学と生命工学の専門分野における科目を履修し、実践的な専門知識を学び、直面する諸問題を的確に整理・解析し、解決のための正しい判断ができる。

(関心・意欲)

5. 文化・社会・自然・環境などの共通教育科目で学んだ多様な社会性、地域性を考慮しつつ、社会における諸問題を化学及び生命工学分野で修得した問題解決能力を活用して解決するように努められる。

(技能・表現)

6. 化学及び生命工学分野の演習・実験科目を履修し、化学と生命工学分野の科学技術者として必要な基本的実験技能を有する。
7. 国際共通語である英語科目及び現代社会で必須の情報に関わる科目を履修し、国際オンライン文献などの様々な情報源を利用できる。また、科学的な事象に対して、自らの思考・判断を英語を用いて論理的に表現できる。

(態度)

8. 全教育課程を通して培った幅広い人間性と化学及び生命工学分野の専門知識により、社会人として人間社会の生活環境を改善し、同時に自然との共生を図るために社会に貢献できる。

マテリアル工学科

(知識・理解)

1. 材料工学と物質科学の基本的な知識を有し、材料や物質の作製と性質の発現の仕組みについて理解している。

(思考・判断)

2. 材料工学と物質科学の知識と理論に基づいて、関連する課題を考察することができる。

(興味・関心)

3. 新しい材料や物質と新しい技術を開発することに積極的に取り組むことができる。
(技能・表現)
4. 材料や物質の作製及び性質の測定を実施することができる。
(態度)
5. 省エネルギーと環境保全に十分な配慮をすることができる。

電気電子・情報システム工学科

【電気電子工学コース】

(知識・理解)

1. 電気電子工学に関する基礎的な専門知識を備え、基礎的な原理、法則、理論を修得している。

(思考・判断)

2. 電気電子工学に関する基礎的な課題に対して、可能な理論や技術を適用することができる。
3. 電気電子工学の観点から実験データを分析し、論理的に評価や考察を行うことができる。

(技能・表現)

4. 電気電子工学分野の機器及びコンピュータを活用し、所望の機能を実現する基礎的な能力を身につけている。

5. 電気電子工学に関する技術的内容を論理的に表現する文章能力と、課題解決のために他人に説明するコミュニケーション能力を身につけている。

6. 専門分野の英語で書かれた基礎的な文献を理解できる英語能力を身につけている。

(興味・関心)

7. 電気電子工学の進展に関心を持ち、知識と実践を結びつけ主体的に学習をすることができる。

(態度)

8. 社会における電気電子工学の役割を理解し、環境や安全に対する倫理観を身につけている。

【情報システム工学コース】

(知識・理解)

1. 情報システム工学に関する基礎的な専門知識を備え、基礎的な原理、法則、理論を修得している。

(思考・判断)

2. 情報システム工学に関する基礎的な課題に対して、可能な理論や技術を適用することができる。

3. 情報システム工学の観点から実験データを分析し、論理的に評価や考察を行うことができる。

(技能・表現)

4. 情報システムを構成するハードウェアやソフトウェアの開発を行う基礎的な能力を身につけている。

5. 情報システム工学に関する技術的内容を論理的に表現する文章能力と、課題解決のために他人に説明するコミュニケーション能力を身につけている。

6. 情報システム工学に関する基礎的な英語文献を読める英語能力を身につけている。

(興味・関心)

7. 情報システム工学の進展に関心を持ち、主体的に学ぶための基礎的な能力を身につけている。

(態度)

8. 社会における情報システムの役割を理解し、技術者として社会に貢献する基礎的な能力

を身につけている。

機械システム工学科

(知識・理解)

1. 工学に関する基礎的知識と、機械工学に関する専門的な知識及び技術を修得している。

(思考・判断)

2. 幅広く深い教養と総合的な判断力を身につけ、社会における科学技術者の在り方や社会への貢献について考察できる。

(関心・意欲・態度)

3. 機械工学に関する課題に関心を持ち、専門的知識を応用しながら自ら計画・実行・検討ができる。

(技能・表現)

4. 日本語と英語による論理的な表現力とコミュニケーション能力を身につけている。

社会環境工学科

(知識・理解)

1. 数学・自然科学及び情報技術に関する能力を身につけている。

2. 社会環境工学の専門技術に関する知識とその知識を応用する能力を身につけている。

(思考・判断)

3. 問題解決能力、デザイン・計画・遂行能力を身につけている。

4. 自ら課題を発見・解決する能力及び主体的・持続的に学習を行う能力を身につけている。

(関心・意欲・態度)

5. 地球環境・地域環境を理解する能力及び持続可能な循環社会構築のための技術を考える能力を身につけている。

6. 技術者としての社会的使命・責任を認識する能力を身につけている。

(技能・表現)

7. 語学力とコミュニケーション能力を身につけている。

8. 文章作成能力とプレゼンテーション能力を身につけている。

学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)：農学部

岩手大学農学部では、所定の課程を卒業し、以下に掲げる各課程・コースの学位授与の方針に該当する者に学位を授与する。

農学生命課程

【生命資源科学コース】

(知識・理解)

1. 生命機能を解明するための広範な知識を有するとともに、有用植物の遺伝育種・機能開発、新規作物の創出、植物ウィルスと昆虫の制御及び機能利用、さらにはそれらの応用開発と持続的農業生産の科学的方法について広く理解している。

(思考・判断)

2. 生命資源に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめ、行動することができる。

(関心・意欲)

3. 豊かな課題探求能力と課題解決能力をもって生命資源に関連する諸課題を解決しようとする意欲を持っている。

(態度)

4. 生命資源の創出・発展のニーズに、協調性と倫理性をもって、自律的・継続的に行動することができる。

(技能・表現)

5. 自らの論理的な思考・判断のプロセスや結果を説明するためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を修得している。

【生物産業科学コース】

(知識・理解)

1. 食料安定供給と環境負荷低減を両立させる戦略・技術と、農作物の生産環境・保存流通、農作業・農業経営を科学的に解明する方法について広く理解している。

(思考・判断)

2. 生物産業に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめ、行動することができる。

(関心・意欲)

3. 生物産業について多面的な関心を持ち、技術や経営の革新を通じて諸課題を解決しようとする意欲を持っている。

(態度)

4. 生物産業における技術開発や経営活動において、協調性と倫理性をもって、自律的に行動できる。

(技能・表現)

5. 自らの論理的な思考・判断のプロセスや結果を説明するためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を修得している。

応用生物化学課程

(知識・理解)

1. 微生物や動植物などの生物資源に関する分子レベルから生態系レベルまでの生命現象や食品素材の特性を理解するための基礎的な知識を化学的な視点で理解している。

(思考・判断)

2. 生物資源や食品素材に関する知識と理解を基礎に、食糧、環境、健康に関する諸課題・未知事項について、多面的に思考し、自らの考えをまとめることができる。

(関心・意欲)

3. 食糧、環境、健康に関する課題や未知事項に関心を持ち、その解決・解明に意欲的に取り組むことができる。

(態度)

4. 生物資源の有効利用やその応用を通じて、食品産業や医薬品産業を始めとするバイオ関連産業の創出・発展に寄与し、地域や社会に貢献する考え方や行動がとれる。

(技能・表現)

5. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断結果を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得している。

共生環境課程

【共生環境学コース】

(知識・理解)

1. 人と自然が創り出し、維持してきた農山漁村の自然と文化についての幅広い教養を持ち、それらの社会、歴史・価値と重要性をよく理解している。
2. 農山漁村の自然生態系や景観、生活文化やライフスタイルを生かしながら、地域の持続可能な発展を図るための知識を持っている。

(思考・判断)

3. 他者に自分の考えを積極的に表現できる。
4. より良い地域社会の創造のために思考し、判断し、提案ができる。

(関心・意欲)

5. 地域課題に深い関心を持ち、その問題解決へ向けての情熱を持っている。
6. 他者とのコミュニケーションを図れる柔軟で前向きな姿勢を持っている。

(態度)

7. 地域社会の伝統や生業を尊重し、農山漁村に居住する自然、人及びそれらを取り巻く環境に対して、適切な深い理解と配慮の心を持つことができる。
8. 地域課題の解決に向けて、多様な主体と協働しながら自ら行動できる。

(技能・表現)

9. 農林漁業の多面的機能の発揮に寄与でき、かつ適切な利用に生かせる技術・能力を持っている。
10. 良好な人間関係、社会を構築するための技術・能力を持っている。

【森林科学コース】

(知識・理解)

1. 数学、自然科学、情報処理に関する基礎的知識を持ち、それらを応用できる。
2. 森林科学の学問内容及び方法を説明できる。

(思考・判断)

3. 森林の多面的機能について、総合的に考えることができる。
4. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめることができる。

(関心・意欲)

5. 自国・他国の文化や異なる価値観に関心を持っている。

(態度)

6. 技術者が社会に対して負っている責任を感じる。

(技能・表現)

7. 日本語で論理的に記述し、的確に発表し、討議することができる。
8. 森林科学の技術や情報を利用し、社会の要求を解決するために創造し、表現できる。

【農村環境デザイン学コース】

(知識・理解)

1. 自然科学や情報技術の基礎知識と、農村環境デザイン学の基本・応用分野の知識を身につけている。

(思考・判断)

2. 実践現場の問題点と課題を理解し専門知識を総合して、地域基盤と環境づくりの計画・設計の在り方を考察することができる。

(関心・意欲)

3. 地域の生産・生活基盤の充実と環境改善の必要性に関心を持ち、それに寄与できる人材として成長しようとする意欲がある。

(態度)

4. 広い視野を得るための素養を身につけ、技術者としての社会的責任の重さを自覚して、継続的に努力することができる。

(技能・表現)

5. 地域現場の人達とのコミュニケーションを図る能力を高めるとともに、文章や口頭発表による表現力を身につけている。

動物科学課程

(知識・理解)

1. 動物生産科学及び動物生産技術に関する知識を持っている。

(思考・判断)

2. 動物生産に関する課題の解決を適切に行うため、動物生産科学及び動物生産技術に関する知識により考察することができる。

(関心・意欲)

3. 動物生産に関する課題に関心を持ち、課題の解決に意欲的に取り組むことができる。

(態度)

4. 動物生産に関する課題の解決を客観的に行うため、情報収集及び議論を積極的に行うことができる。

(技能・表現)

5. 動物生産に関する課題を解決して論文又は口頭で発表を行うか、修得した動物生産技術を実践することができる。

共同獣医学科

(知識・理解)

1. 獣医師としての責務を遂行するために、動物の健康・福祉、公衆衛生などに関する高度な専門知識を修得している。

(思考・判断)

2. 獣医学領域に関わる課題について、生命科学を基礎とした知識と技能を用いて論理的に判断できる。

(関心・意欲)

3. 獣医師として国内での責務を果たすのみならず、国際的視野を有している。
4. 地球規模での感染症対策や畜産物の安全確保等に対して貢献できる知識を修得しており、

意欲も有している。

(態度)

5. 幅広い専門知識や技能に基づいた説明ができる。
6. 倫理性も備えた行動規範を身につけており、適切なコミュニケーションができる。

(技能・表現)

7. 高度な専門知識に基づいて修得した獣医学領域に必要な技能を実践できる。
8. 論理性と倫理性を兼ね備えた行動規範を身につけている。

教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー) : 人文社会科学部

私たちを取り巻く様々な問題への適切な対処には、いろいろな学問分野からの幅広い取組が必要とされている。人文社会科学部は、この幅広い取組の必要性を認識したうえで、全学共通教育科目と専門として選んだ分野を深く学ぶ態度を身につけることを教育の目的としている。

この目的を達成するために、専門教育科目を、学部共通科目・課程科目・コース科目の3つのカテゴリーに分けている。

「課程科目」は、当該課程の教育の概要を示す導入的な科目と、コース横断で学べる課程共通科目から成っており、課程としての問題設定と取組の共通性を提示するようになっている。

「コース科目」には、コースの問題設定と取組に欠かせないコース基礎科目、学生の興味・関心に基づいて選択できるコース展開科目及び課程の枠を超えて学ぶことを可能にする関連他課程科目や学部の枠を超えることも可能な自由選択科目が含まれている。

そして、各課程で専門分野をある程度学んだ後に、あらためて他分野の問題設定や取組のあり様に目を向ける機会として、3年次に「学部共通科目」を必修科目として配置している。さらに、各課程・コースでは、課程開設科目を組み合わせた副専攻パッケージを用意して、実際に他分野における問題設定や取組を学ぶ機会を提供している。

人間科学課程

人間科学課程は、人間情報科学コースと行動科学コースの2つの教育コースから構成され、人間性の解明をテーマに、人間存在（人間のあり方）と人間行動（人間のふるまい）について、身体と精神の両次元及び個人と社会の両側面にわたる理論的・実証的考察のための教育を行っている。課程の教育目標は、人間に対する深い理解と広い視野に基づく学際的・総合的な課題探求能力を持ち、現代社会の様々な課題を全体的に把握し、それらの課題に適切かつ柔軟に対処できる人材養成である。

その実現のために人間科学課程の教育カリキュラムでは、1年次に課程導入科目と課程共通科目、2～3年次には各コースの基礎科目とコース展開科目、4年次には特別研究が配置され、学年の進行とともに徐々に各コースへの特化と専門深化を図りつつ、広い視野で人間諸科学の枠組みと全体像が学際的・総合的に理解できるように構成されている。

さらに、自発的課題探求能力、コミュニケーションやプレゼンテーションのスキル、チームワークやリーダーシップなどの集団活動場面におけるスキルの習得をはかるために、1年次には「人間科学基礎実習」、3年次には「人間科学特別演習Ⅰ・Ⅱ」（人間情報科学コース）と「特殊実験調査Ⅰ・Ⅱ」（行動科学コース）などの実習・演習形式の科目、自発的な問題意識にもとづく課題探求型の科目を必修として配置している。

【人間情報科学コース】

本コースでは、人間とはどのような存在かを人間科学的及び情報科学的な方法で理解するための知識を提供するカリキュラムを提供する。

さらに、その理解を人間科学と情報科学との横断領域（心理学など）で補完することによって、複雑化した現代社会における諸課題に適切に対処できるような思考力及び判断力を涵養するためのカリキュラムを提供する。

そして伝統的な人間科学と萌芽期にある情報科学との連携の中で、人間存在についての新たな学問のあり方を探求するために、それらの学問に関する学際的な能力を涵養するカリキュラムを提供する。

【行動科学コース】

行動科学コースのカリキュラムは、「人間行動」をテーマとして、人間行動の個人的側面を対象とする心理学の視点から、人間のこころや心理（人間行動の心理的メカニズム）について考察する方法を学ぶ一方、人間行動の社会的側面を対象とする社会学の視点から、人間行動に

よっておりなされる社会システムの構造や変動について考察する方法を学ぶことができるように学際的に編成されている。加えて、このカリキュラムは、特にスポーツ行動論の方法や、同じく人間行動の前提となる社会地理的諸条件について考察する行動地理学・社会地理学の方法も合わせて学ぶことができるように編成されている。

行動科学コースは、このように人間行動について全体関連的に勉学することを重視するとともに、心理学実験、社会調査実習、特殊実験調査など、実験・実習関係の授業科目においてプレゼンテーションやディスカッションの習得を促すようカリキュラムを編成している。

国際文化課程

国際文化課程では、学生が多様な文化を多角的・多元的に理解し、また文化について発信する力を身につけるため、以下のように教育内容を整備している。

1年次では、課程導入科目と課程共通科目を学び、国際文化を学ぶ基本的な姿勢と態度を身につけられるよう配慮し、その学習成果に基づいて、2年次から学生個々の専門領域を定めて各コースに所属させる。

2年次以降は、各コースでより専門的な内容を学ぶ専門教育科目を適切に配置するとともに、同時にそれらが専門深化に役立つ他コース科目となるよう内容を整備し、各学生最終年度の特別研究の作成に向けて、文化に関する体系的・総合的な学修を促す。

【文化システムコース】

文化システムコースでは、社会文化論、社会文化思想論、文化領域論、ジェンダー文化論、表象文化論、文化記号論、メディア文化論等の各学問領域について、コース基礎科目・コース展開科目を整備し、領域横断的な履修を通じて、地域文化を含む現代社会の動態や諸現象について広く新しい視座から理解できるようになることを徹底する。

【アジア文化コース】

アジア文化コースでは、コース基礎科目（アジア文化論・講義）とコース展開科目（特講・講読・演習）のうち、前者においては、1～2年次以上の学生を対象にして、それぞれの専門分野（日本史・日本思想史・日本文学・日本語学・中国思想史・中国文学・中国語学など）での基本や大きな流れを学ぶとともに、複数の専門分野の講義を幅広く履修することを求めている。後者においては、2～3年次以上の学生を対象にして、それぞれの専門分野についてより詳しく学び（特講）、文献などの資料を適切に取り扱い、読み解く能力を向上させ（講読）、学生が自主的に研究を進めるための訓練をする（演習）ことを求めている。以上の授業科目を学ぶなかで学生が、日本と中国を中心とするアジア地域に関する諸問題について自らの課題を見出し、資料に基づいて自らの見解を論理的に組み立て、最終年次において特別研究を作成できるようにカリキュラムを編成している。

【欧米言語文化コース】

欧米言語文化コースでは、欧米諸国（イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、ロシア）を対象とした、歴史・文化・文学・言語・コミュニケーションの諸相に関して、それぞれの学問領域の研究方法を用いて、自ら設定した課題を考察することを目的とする特別研究執筆に向けた授業を開講している。そのために、1年次にはコース必修科目として「欧米言語文化論」、「欧米言語文化論ゼミナール」を開講している。2年次からは、それぞれの学問領域をより深く修得するために、コース基礎科目、コース展開科目を開講している。また、1年次より欧米諸言語のコミュニケーション能力を用いて、自分の考えを口頭や文章によって伝えることができるようになるための授業を開講している。

法学・経済課程

高度化・多様化する現代においては、社会の諸現象を総合的・学際的に把握し、社会や地域が抱える課題へ対応する能力を身につけることが重要になっている。

このような時代の要請に応えるため、法学・経済課程では法学（政治学を含む）と経済学の結びつきをより緊密にすることによって、双方の学問分野の基礎的知識及び社会科学的なものの見方・考え方を身につけ、その上に立って法学・経済学の専門的知識を深めることを目的にしている。

具体的には、法学・経済学の基礎的素養を涵養するために課程導入科目（必修）として「法律学基礎」「経済学基礎」を1年次に配置するとともに、法学・経済学の基本を固めるために課程共通科目（選択必修）として、「民法総則Ⅰ・Ⅱ」「憲法（人権）Ⅰ・Ⅱ」（以上、法学分野）及び「理論経済学Ⅰ」「政治経済学Ⅰ」「社会保障論Ⅰ」「経営学Ⅰ」（以上、経済学分野）を配置している。

2年次からは、「法学コース」と「経済コース」に分かれて各専門分野を深く学んでいくが、法学コースでは経済科目のうち主要なものを、経済コースでは法学科目のうち主要なものを、それぞれ自コースの科目として位置づけており、4年間を通じて法学と経済学の密接な関連の下で総合的・学際的な把握能力を培えるようにしている。

【法学コース】

法学コースでは、法学を体系的に学びその幅広い知識と理論を習得して、法令を正確に理解し客観的に解釈することができる能力、また社会や地域が抱える法的な課題を意識し、法的な思考法を駆使しながらそれに積極的に取り組むことができる能力の修得を目的にしている。

この目的を達成するために法学コースでは、①「コース基礎科目」として専任教員が担当する講義科目を中心に、法学を専門的に学習するにあたり比較的早い段階で修得すべき科目を配置するとともに、②「コース展開科目」として、応用的・実践的な科目と、学生の法的思考法の深化を図るための専門演習科目などを配置している。また、「コース基礎科目」「コース展開科目」双方に経済学関係の科目を位置づけることによって、学生の社会科学的認識をいっそう高めるようにしている。

【経済コース】

経済コースでは、経済学的な思考を身につけ、現代社会の総合的・学際的把握をもう一段深化させることによって、社会や地域の要求にいっそう主体的・実践的に対応できる能力を身につけることを目的にしている。

この目的を達成するために経済コースでは、①「コース基礎科目」として、学生が主体的に経済学の学習に取り組んでいく契機となる科目（「時事経済論」「経済学基礎演習」）や専任教員が担当する講義科目などを配置するとともに、②「コース展開科目」として、応用的・実践的な科目と、学生の経済学的思考法の深化を図るための専門演習科目などを配置している。また、「コース基礎科目」「コース展開科目」双方に法学関係の科目を位置づけることによって、学生の社会科学的認識をいっそう高めるようにしている。

環境科学課程

【環境科学コース】

環境の問題は、地球的な規模から身近な地域の問題まで多岐に及び、その把握・解決には、多くの要因を視野に入れた全体的・学際的な立場からの取り組みが不可欠である。環境科学課程（環境科学コース・1コースのみ）では、①自然環境とそこでの人間・社会のあり方について探究する環境科学諸分野の関連性を理解し、環境科学を学ぶための基礎的な力を涵養する必修の「課程・コース導入科目」と、②諸分野の専門的な知識・研究方法の基礎を学ぶ、必修ないし学生が所定科目群の中から選択履修する「課程・コース基礎科目」、③より専門的な内

容を学び、実践的な力、技能を身につけるために設けられた、学生個々の興味・関心に応じ所定科目群から選択できる「課程・コース展開科目」、さらに④課程・学部の枠を超えた選択で、幅広い知識・教養の修得にも資する「関連他課程科目、自由選択科目」、そして⑤教育課程において習得した知識・技能に基づき、具体的な環境の問題の解決、「持続可能な共生社会」構築に向けた能力・態度を育成する必修の「特別研究関連科目」から成る教育課程を整備し、これらの体系的履修を促している。

環境科学課程・環境科学コースでは、上記の方針に沿ってカリキュラムを編成し、主に環境の現状についての分析・理解力、環境問題への対処・解決法を考察・判断する能力及び実践的対応力の養成を目指している。

教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)：教育学部

岩手大学教育学部では、教育に関わる実践的な知識・技能と学術諸分野に関する専門的な知識の修得を通して、幅広い視野と専門的な能力を持つ学校教員、地域社会における生涯教育の指導者及び芸術文化活動の指導者の養成を目的とする。この教育目的達成のために、学校教育教員養成課程、生涯教育課程、芸術文化課程ごとに、全学共通教育科目と専門教育科目で構成される系統的な教育課程を編成している。

全学共通教育科目は、学士課程を修めた知識人として幅広い教養と豊かな人間性を養うことを目的とし、大学共通の科目群が用意されている。教育学部においても各分野の教育的指導者の素養として、各課程の学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)の中に総合的思考力を養うために幅広い教養を身に付けることを掲げている。この目的達成のため、幅広い分野についてバランスの良い単位修得ができるようにカリキュラムが組まれている。

学校教育教員養成課程の専門教育科目は、①教職専門科目、②教科専門科目、③所属専門科目、④選択科目、⑤卒業研究の5つの科目区分により構成している。本課程に入学した場合には、所属のコース・サブコースや専修に応じて、小学校教員、中学校教員、特別支援学校教員のいずれかの教員免許状を取得し卒業することとなる。その際に、教員免許状の法規上の科目はもちろんのこと、さらに充実した教員養成を行うために必要な単位の取得を課している。またそのために多様な科目群が用意されている。

この中で、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)にも位置づけられているように、教員として共通に身に付けるべき基礎となる内容(基礎力の育成)に加え、自らが得意とする分野を形成することにより、〈子どもの理解〉、〈教育の諸科学〉、〈教科の内容論・方法論・授業論〉、〈新たな教育内容を開発するための諸科学〉等を深める内容(専門分野の育成)の両面の育成を図っている。ここで特に専門分野の教育では単に知識や技能を深めるだけでなく、ものの見方や課題分析力、論理的思考力などを養うことも意図している。さらに別の観点軸として、系統的に教育現場での実践的な体験を組み込み、基礎や理論的側面と教育現場における実践的側面のバランスのとれたカリキュラムを構成している。また、④選択科目の活用などで、専攻分野の他に希望に応じて複数の教員免許状が取得できるようにカリキュラム構成が行われている。

生涯教育課程と芸術文化課程の専門教育科目は、①課程共通科目、②コース基礎科目、③コース発展科目、④選択科目、⑤卒業研究の5つの科目区分により構成している。人が豊かなライフスタイルを築くために、生涯にわたって学習する機会が提供される社会のあり方が求められている。これらの課程では、それぞれの分野の特徴を生かし、このような社会教育の場面で活躍できる指導者養成を目的とする。そのために①課程共通科目として生涯教育の基礎について学ぶ科目が用意されている。またこのような社会教育の場面においては、学習者の学ぶ意欲が高く、より専門的な教育内容に対応する必要があることから、課程内のそれぞれのコースの分野において専門的な力量の育成に力を入れている。さらに学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)にも位置づけられているように、専門的な教育課程を深める中で、知識・理解や技能面に加えて、ものの見方や課題分析力、論理的思考力などを養うとともに、専門分野の文化に視座をおいた教育を行っている。

また、希望により専門分野に関わる各種の資格取得や中学・高校の教員免許状が取得できるようにカリキュラム構成が行われている。

教育学部は全ての課程に共通して卒業研究を重視している。卒業研究では専攻する諸分野の中にテーマを定め、探究的な活動を通して、課題を分析し、論理的に思考する力や、物事を総合的な観点から思考し、創造的に推進していく力、また一つの物事を主体的及び計画的に実行するとともにその成果を表現する方法論などを養うことができる。卒業研究は学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)の中に掲げられた多くの能力の総合的な実践の場として、学士課程

の集大成に位置付けられる。

学校教育教員養成課程

学校教育教員養成課程は、教育に関する理論的・実践的な力量、教育内容とその背景をなす諸学問の理解及び豊かな人間性・社会性を備え、教員としての意欲と高い使命感を持った小学校、中学校及び特別支援学校の教員の養成を教育目的とする。この教育目的の実現のために、学校教育教員養成課程の専門教育は、以下の5つの科目に区分して、体系的な教育課程を編成している。

- ① 教育及び子どもに関する基礎的知識と技能の修得のための教職専門科目
- ② 教科に関する専門的知識と技能の修得のための教科専門科目
- ③ 所属サブコース毎の専門的知識と技能の修得のための所属専門科目
- ④ 幅広い知識と教養の修得に資するための選択科目
- ⑤ 卒業研究

このうち、教職専門科目では、通常学校における発達障害等のある児童生徒等への支援を含め、学校教育全般での対応が求められている特別支援教育への基礎的な理解を学ぶ必要があるという観点から、「特別支援教育」を必修科目としている。また、4年一貫教育実習システムとして、1年次の観察実習、2年次の学校体験実習、3年次の主免教育実習、4年次の副免教育実習を配置している。4年間の教職課程の学習成果を確認し、教職への意欲と自覚を促すことを目的として、在学期間全般にわたって「教職ポートフォリオ」を導入している。

【学校教育コース】

学校教育コースは、小学校及び中学校教員の養成を主たる目的とする。このコースの学生は、1年次後期から、得意分野の形成や教科に関する専門的知識の深化を図ることを目的として、サブコース(国語、社会、数学、理科、技術、家政、英語、音楽、美術、保健体育、教育学、心理学、教育実践学、特別支援教育の14サブコース)のいずれかに配属となる。併せて、小学校の教員免許状取得を卒業要件とする「小学校教育専修」か、中学校の教員免許状取得を卒業要件とする「中学校教育専修」のどちらかを選択することになる。学校教育コースの教育課程は、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に示された資質能力を学生が修得して、卒業要件となる教員免許状を取得できるだけでなく、卒業要件以外の教員免許状(副免許状)も取得できるように編成している。

【特別支援教育コース】

特別支援教育コースは、特別支援学校教員の養成を主たる目的としており、基礎免許状としての小学校もしくは中学校教員免許状と特別支援学校教員免許状の取得が卒業要件となる。特別支援教育コースの教育課程は、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に示された資質能力を学生が修得して、卒業要件の教員免許状を取得できるだけでなく、卒業要件以外の教員免許状(副免許状)も取得できるように編成している。

生涯教育課程

生涯教育課程は、指導的立場で生涯学習社会に貢献できる人材を育成する教育研究の場として、生涯教育の基盤となる知識を深め、地域社会における文化活動やスポーツ活動・スポーツライフの充実を可能にする専門的で実践的な知識と能力を備えた人材を育てることを教育目的とする。この教育目的の実現のために、生涯教育課程の専門教育は、以下の5つの科目を区分して、体系的な教育課程を編成している。

- ① 生涯教育分野の基礎的な知識を身に付けるための課程共通科目

- ② 各コースの領域の知識と技能の基礎を学ぶためのコース基礎科目
- ③ 各コースの専門的知識と技能をさらに深く学び、各コースが目指す能力を十全に身に付けるためのコース発展科目
- ④ 各コースの専門的領域に関する知識と技能を背景に、生涯教育に関連する資格等を身に付け又は資格の条件となる資質能力を修得するための選択科目
- ⑤ 卒業研究

課程共通科目は、日本語・地域文化コース、スポーツ教育の各コースにおける学びの前提となる生涯教育分野における基礎的な知識を身に付けるための授業科目で、所属コースに応じて学生が所定科目群の中から選択して履修する。卒業研究については、専門教育を通して身に付けた知識や技能を統合し、各コースの専門領域の課題を主体的に探求し解決につなげる能力と態度を育成するために必修として課している。

【日本語・地域文化コース】

日本語・地域文化コースでは、その教育目的と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、生涯学習ニーズの高い日本語文化（日本語教育を含む）及び地域文化領域を中心に構成されたコース基礎科目・コース発展科目を修得することによって、地域社会の文化活動の発展と向上に寄与するための専門的・実践的な知識・技能を身に付ける。さらに、選択科目を修得することによって、社会教育主事資格科目、学芸員資格、日本語教育副専攻科目といった、生涯教育の指導者として求められる資格等を取得することができる。また、卒業要件としては義務付けられていないが、教職関係の単位を取得することによって中学校及び高等学校教諭一種免許状（国語、社会、地歴、公民）を取得することが可能である。

【スポーツ教育コース】

スポーツ教育コースでは、その教育目的と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、スポーツ活動の実践・指導・普及に関する専門的知識を中心としたコース基礎科目・コース発展科目を修得することによって、地域社会のスポーツ活動の発展と向上に寄与するための専門的・実践的な知識・技能を身につける。さらに、選択科目を修得することによって、スポーツ分野の指導者として必要な資質能力を修得し、各種競技・フィットネス・メディカルコンディショニング・マネジメント等の公認スポーツ指導者資格の取得に資するよう教育課程を編成している。また、卒業要件としては義務づけられていないが、教職関係の単位を取得することによって中学校及び高等学校教諭一種免許状（保健体育）を取得することが可能である。

芸術文化課程

芸術文化課程は、伝統芸術の継承から新しい芸術の創造までを含んだ芸術諸分野の幅広い領域を基礎とし、さらなる専門研究によって芸術表現の可能性を追求しつつ、その専門知識と実践力によって地域社会の芸術活動や芸術教育に携わることのできる実践者・指導者の育成を教育目的とする。この教育目的の実現のために、芸術文化課程では、以下の5つの要素を体系的・総合的に構成した教育課程を編成している。

- ① 生涯教育及び芸術文化全般（創造・受容・啓発）に関する基礎的知識と技能の修得のための課程共通科目
- ② 創造活動とその教育・啓発活動に必須とされる表現方法の基礎を修得するためのコース基礎科目
- ③ 実技・実習科目を中心とした、より高度な実践的技法・能力の修得のためのコース発展科目
- ④ 芸術表現全般についての実践的技術から得られた知見に基づいて、地域社会の芸術活動に強い関心をもち、指導的立場からその活性化に寄与できる能力を修得するための選択科目
- ⑤ 課題の探求・解決能力育成のための卒業研究

【美術・デザインコース】

美術・デザインコースでは、その教育目的と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、地域の美術活動の啓発・指導に必要な知識と技能を学び、創作活動の現場に主体的に参加できる技術と知識を備えた実践的表現者・指導者として必要な資質能力を修得する。また、卒業要件としては義務付けられていないが、教職関係の単位を取得することによって中学校及び高等学校教諭一種免許状（美術、工芸）を、また学芸員関係の単位を取得することによって学芸員の資格を取得することが可能である。

【書道コース】

書道コースでは、その教育目的と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、地域の書道活動の啓発・指導に必要な知識と技能を学び、創作活動の現場に主体的に参加できる技術と知識を備えた実践的表現者・指導者として必要な資質能力を修得する。また、卒業要件としては義務付けられていないが、教職関係の単位を取得することによって高等学校教諭一種免許状（書道）を、また学芸員関係の単位を取得することによって学芸員の資格を取得することが可能である。

【音楽コース】

音楽コースでは、その教育目的と学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、地域の音楽活動の啓発・指導に必要な知識と技能を学び、創作活動の現場に主体的に参加できる技術と知識を備えた実践的表現者・指導者として必要な資質能力を修得する。また、卒業要件としては義務付けられていないが、教職関係の単位を取得することによって、中学校及び高等学校教諭一種免許状（音楽）を、また学芸員関係の単位を取得することによって学芸員の資格を取得することが可能である。

教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)：工学部

工学部では学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に基づき、工学分野とそれに関連する幅広い専門知識を有し、さらにそれらの知識や技術を科学技術分野に役立てることにより持続可能な社会の発展に貢献できる学生を養成することを目的とする。この教育目的達成のために全学共通教育及び工学部共通の専門基礎科目と学部共通科目並びに各学科ごとの専門教育科目で構成される系統的な教育課程を編成している。

応用化学・生命工学科

応用化学・生命工学科では、化学と生命工学及びその関連分野に関する高度な専門性と幅広い知識を備え、地域社会と国際社会の持続的発展を実現するうえで解決すべき諸問題に積極的に取り組むことができる人材の育成を目的として定めている。本学科では、その教育プログラムを通して、学生が以下の能力を修得することを目指している。

- ① 履修により獲得した専門知識に基づき、化学物質の性質や機能、生命現象等を解明し、新規有用物質を開発する能力。
- ② 履修により獲得した専門知識を、人類が直面する資源・エネルギー・環境保全、人間の健康維持、生活の向上などに関わる現代社会の様々な問題の解決に適切に結び付け、それらの問題を解決する能力。

以上の目的を達成するため、応用化学・生命工学科では下記に記載する専門教育課程を編成している。

専門科目：化学と生命工学に関わる幅広く深い知識を修得し、問題解決能力を養うための専門性を高める科目である。無機化学、有機化学、物理化学、生命工学分野の科目が体系的に整備されている。

演習・実験科目：専門科目で学んだ知識を知恵として活用できるように、実際に実験器具を用いて化学と生命工学実験を行う。これにより、講義の知識だけでは得られない実践力を養うことが可能となる。

その他の科目：化学と生命工学分野の専門知識だけでは、社会における諸問題を多角的かつ専門的に解析することが困難である。そこで他学科における専門性を学び、工学的な視野を広げる。さらに、専門性の高い卒業研究に取り組めるよう、化学と生命工学分野の最先端技術の知識と知恵を学ぶため、応用化学・生命工学概論、同情報、同研修を実施する。

併せて、各学生が自らの学習と興味、将来像にふさわしい他大学、他学部、他学科の講義を履修可能な教育課程を整備している。

マテリアル工学科

工学全般の基礎的な力を養うための専門基礎科目と工学基礎科目を、初年次を中心に整備し、マテリアル工学分野の基礎を学ぶための学科内基礎科目、さらにより高い専門性を学ぶための学科内専門科目を2年次以降に整備して、工学の基礎及び高度な専門性を体系的に履修することを徹底する。これらに加え実践的な学力と工学における広い見識を身に付けるための学科内共通科目、学部内共通科目、卒業研究を整備する。

学科内専門科目は主に金属材料工学分野と電子材料工学分野の科目から成る。金属材料工学分野では、材料熱力学、材料組織学、金属構造材料学など金属とセラミックスの物理・化学的性質を基礎に、金属工学、材料精製、加工プロセスなどを体系的に履修することを徹底する。

電子材料工学分野では、電磁気学、固体物理学などを基礎に、新電子材料、計測技術、材料設計・解析などを体系的に履修することを徹底する。

電気電子・情報システム工学科

電気電子・情報システム工学科では、「電気電子工学コース」と「情報システム工学コース」の二つの教育プログラムを設けて、幅広く基礎知識を修得すると共に、専門分野をより深く学ぶことができるように整備する。

学科共通科目では、両コースにおける基盤的、共通的な科目が設定され、幅広い分野に対応できる基礎力を養う。各コース科目では、専門的な科目が整備され、より深く専門知識を体系的に修得する。加えて、コース外科目では、所属コースと関連性の高い科目が選定され、さらに幅広く専門的教育を受けることができるようにする。

【電気電子工学コース】

電気電子工学分野について、より専門的に深く学べるように、電気電子工学コース科目を整備する。電気回路、電磁気学、電子回路を基幹科目とし、電気エネルギー工学、電子デバイス工学、電子システム工学の体系的な履修を徹底する。

【情報システム工学コース】

情報システム工学分野について、より専門的に深く学べるように、情報システム工学コース科目を整備する。情報工学基礎、ソフトウェア、コンピュータシステム、ハードウェア、情報数理・知的情報・メディア情報に関する科目の体系的な履修を徹底する。

機械システム工学科

本学科がめざすのは、機械工学の基礎を確実に身につけ、次世代の科学技術の発展を担うことができる人材の育成である。本学科では、学部共通の教育課程編成・実施の方針を踏まえて、学位授与の方針に掲げる知識と能力を養うための教育課程を整備する。そのための具体的な教育研究分野として、機械科学・航空分野と機械知能・ロボティクス分野の2つを設定する。

【機械科学・航空分野】

主に航空宇宙システム工学の課題に対応して、機械材料学、水力学、熱力学、伝熱工学などを中心に機械工学の基礎と幅広い実践能力を具体的に養う。機能材料学や固体力学、粘性流体工学、航空流体工学、燃焼工学、自動車基礎工学、制御工学などの知識も身につけることができる。

【機械知能・ロボティクス分野】

主にロボティクス工学の課題に対応して、機械力学、機械加工学、機械設計学などを中心に機械工学の基礎と幅広い実践能力を養う。コンピュータ制御、制御工学、生産加工学、生産システム工学、トライボロジーなどの基礎も身につけることができる。

社会環境工学科

本学科では、「建設」、「環境」、「防災」、「福祉」をキーワードとし、建設に関する技術を基礎として、人間と自然とが共生するための自然環境や地域環境及び都市環境の在り方とその創出方法に関する教育研究、地域防災の観点から災害に強い安全な社会や社会基盤の構築に関する教育研究、高齢者や障がい者に優しく安心な地域や街づくり並びに住環境を整備するための教育研究を行い、様々な課題や問題に対する解決能力を備えた専門技術者を養成することを目指す。

このような観点から、本学科では、学部共通の教育課程編成・実施の方針を踏まえて、以下のような教育課程を編成する。

1. 地球環境・地域環境について深く理解し、環境と調和した持続可能な循環社会の構築のための技術を考える能力と素養を修得できるように体系的な履修を徹底する。
2. 科学技術が社会や自然に及ぼす影響を理解して、技術者としての社会的使命・責任を認識できるように体系的な履修を徹底する。
3. 数学・自然科学及び情報技術に関する知識を習得し、多面的な視点から考えることのできる能力を修得できるように体系的な履修を徹底する。
4. 社会環境工学の専門技術に関する知識及びその知識を応用する能力を修得できるように体系的な履修を徹底する。
5. 十分な語学力を身に付け、自国の文化・社会を学ぶとともに世界の多様な価値観を理解し、国際的に通用するコミュニケーション能力を修得できるように体系的な履修を徹底する。
6. 自分の意見や実験研究の内容・成果を論理的・客観的に表現する文章作成能力とプレゼンテーション能力を修得できるように体系的な履修を徹底する。
7. 問題の本質を理解し、必要な情報を収集・分析して解決法を考え、問題解決のための具体的なデザイン・計画を立て、遂行する能力を修得できるように体系的な履修を徹底する。
8. 自ら課題を発見・解決しようとする問題意識をもち、主体的・持続的に学習を行う能力を修得できるように体系的な履修を徹底する。

教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)：農学部

農学部は、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に基づき、生命科学・環境科学・動物医学分野で幅広い教養と基礎学力を養うために、農学生命課程(生命資源科学コース・生物産業科学コース)、応用生物化学課程、共生環境課程(共生環境学コース・森林科学コース・農村環境デザイン学コース)、動物科学課程、共同獣医学科ごとに、全学共通教育科目、学部専門基礎科目、学部共通科目及び課程・コース・学科専門教育科目で構成される系統的な教育課程を編成している。

農学生命課程

農学生命分野を学ぶための基礎的な学力をつけるための課程共通科目、より専門的な内容を学ぶために生物資源科学コースと生物産業科学コースに分けて実施するコース科目及びより広く関連分野を学ぶ課程・コース外科目によって構成される教育課程を設定し、基礎から応用へと体系的な履修ができるようにしている。

【生命資源科学コース】

1. 生命機能を解明するための広範な知識を有するとともに、有用植物の遺伝育種・機能開発、新規作物の創出、植物ウィルスと昆虫の制御及び機能利用、さらにはそれらの応用開発と持続的農業生産の科学的方法について広く理解させるため、食用作物学、植物育種学、植物病理学、果樹園芸学、蔬菜花卉園芸学、応用昆虫学に係る専門的な科目群を設けている。
2. 生命資源に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめ、行動することができるようにするため、各科目に関連する実験、演習及び農場実習を設けている。
3. 豊かな課題探求能力と課題解決能力をもって生命資源に関連する諸課題を解決する意欲を持って行動することができるようにするため、各分野に係るセミナー及び演習を設けるとともに卒業研究を設けて総合的な能力の習得を図っている。
4. 生命資源の創出・発展のニーズに、協調性と倫理性をもって、自律的・継続的に行動できるようにするため、農業や関連企業・団体での実体験が習得できる農場実習、農場特別実習及びインターンシップを設けている。
5. 自らの論理的な思考・判断のプロセスや結果を説明するためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を修得させるため、科学英語や情報処理演習を設けるとともに、各分野のセミナーや演習での発表を通じて実践的な能力形成を図っている。

【生物産業科学コース】

1. 食料安定供給と環境負荷低減を両立させる戦略・技術力と、農作物の生産環境・保存流通・農作業・農業経営を科学的に解明する方法について広く理解させるため、農畜産環境保全学、生物環境科学、農産物流通科学、農作業システム学、農業経営・経済学に係る専門的な科目群を設けている。
2. 生物産業に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題を考察し、自分の考えをまとめ、行動することができるようにするため、各科目に関連する実験、演習及び農場実習を設けている。
3. 生物産業について多面的な関心を持ち、技術や経営の革新を通じて諸課題を解決しようとする意欲をもって行動できるようにするため、各分野に係るセミナー及び演習を設けるとともに、卒業研究を設けて総合的な能力の修得を図っている。
4. 生物産業における技術開発や経営活動において、協調性と倫理性をもって、自律的に行動できるようにするため、農業や関連企業・団体での実体験が習得できる農場実習、農場特別実習及びインターンシップを設けている。
5. 自らの論理的な思考・判断のプロセスや結果を説明するためのプレゼンテーション能力と

コミュニケーション能力を修得させるため、科学英語や情報処理演習を設けるとともに、各分野のセミナーや演習での発表を通じて実践的な能力形成を図っている。

応用生物化学課程

応用生物化学課程では、微生物や動植物などの生物資源に関する分子レベルから生態系レベルまでの生命現象や、食品素材の特性を理解するための基礎的な知識を化学的な視点で理解し、食糧、環境及び健康に関する諸課題や未知事項について、多面的に思考し、自らの考えをまとめ、実践することができる人材を育成することを目的とし、以下のカリキュラムを編成している。

1. 論理性や倫理性を兼ね備えた高い行動規範を持つ能力を養うため、多様で広範にわたる共通教育カリキュラムである、大学教育導入科目群、スポーツ健康科目群、外国語科目群、人文社会科学科目群、理数系基盤科目群を設けている。
2. 微生物や動植物などの生物資源に関する分子レベルから生態系レベルまでの生命現象や、食品素材の特性に関心を持ち、その基礎的な知識を化学的な視点で理解するため、数学、物理学、化学、生物学、地学、フィールド科学科目群を設けている。さらに、基礎的な知識・技能のみならず、自らの知識と論理的な思考に基づいた判断結果を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を養成する基礎ゼミナール、実験実習を設けている。
3. 生物資源の有効利用やその応用を通じて、食品産業や医薬品産業をはじめとするバイオ関連産業の創出・発展に寄与し、地域や社会に貢献するための高度な専門的知識を醸成するため、食品科学、栄養化学、天然物化学、生化学、微生物学、植物生理学、土壌学科目群を設けている。それらの基礎的及び専門的な知識・技能のみならず、自らの知識と論理的な思考に基づいた判断結果を的確に説明する表現力や、それを意欲的に実践する技能を養成する実験実習並びに卒業研究を設けている。
4. 食品産業や医薬品産業をはじめとするバイオ関連産業、地域や社会に貢献できる総合的な能力を養うため、科学英語、インターンシップを設けている。

共生環境課程

共生環境分野を学ぶための基礎的な数学力をつけるため、基礎数学入門や生物統計学等の専門基礎科目を課している。また、共生環境分野の基礎的な力を身につけるための共生環境入門やインターンシップなどの課程共通科目を課するとともに、より専門的で実践的な力を身につけるためのコース科目及び課程・コース外科目による教育課程を整備し、これらの体系的な履修を促している。加えて、より専門的に深く学ぶように、コース別の教育課程を編成している。

【共生環境学コース】

共生環境課程共生環境学コースにおいては、「農林業の生産基盤の整備や生活環境の向上、農山村の野生動植物を中心とする生態系保全、歴史や文化を生かした地域づくり」を目指し、最終的に自然環境と人間が共生できる持続可能な地域社会の実現を担える人材育成を目的として、以下のカリキュラムを編成している。

1. 農山村地域が維持している豊かな生物多様性の理解と、それらを維持する自然生態系の保全、さらには人間と様々な野生動物との軋轢を回避し、両者が共生しうる環境の維持・回復を図るための理論と技術を学ぶために、2年生の前期で基礎的分野として農林生物共生論を学び、その後の学年進行に伴って地域生態系保全論、野生動物管理学、森林保全生態学、植生科学などの生物を中心とした自然科学の科目群を設けている。また野外における各種野生動植物の生態や里山管理の実践的手法を学ぶために、保全生物フィールド科学実習、野生動物管理学実習といった野外実習科目も設けている。
2. 農山漁村の伝統や景観、生活文化やライフスタイルを生かしながら、地域の持続可能な発

展をはかるための知識、また農林漁業の多面的機能の発揮に寄与できる技術・能力を身に付けるために、社会科学の講義として、地域おこし論、林業・木材産業論、農村計画学、NPO論といった科目を早い段階に設け、その後、学年進行にともなって地域振興政策論、地域観光学、農山村自治体経営論といった科目群を設けている。

3. 共生環境学コースの最大の特徴の一つ目としては、上記の1自然科学系、2. 社会科学系の大きく二つの分野の科目を設け、それらを偏りなく、バランスよく学習できる環境が提供されている。さらに二つ目の特徴として、上述の二つの分野両方の要素をそなえ、かつ卒業後の活躍の場として期待される、地域のマネジメントや地域社会のコーディネイトに役立つわけて実践的な科目群を設けていることである。それらは、低学年では、地域マネジメント論、実践キャリア形成ゼミ、共生環境学実習、農山村調査実習などの科目群を設け、学年進行にともなって、自然環境政策論、地域景観保全論、地理情報処理学、同演習、農業環境評価論などの科目群を設けている。また実際に地域の現状の把握や、現場での体験や技術研修を主たる目的としたインターンシップを必修科目として位置づけ、現場での様々な経験を積めるように考慮している。

これらの分野別科目群をバランスよく修得させることによって、地域が抱える課題に深い関心を持ち、他者とのコミュニケーションを大切にしつつ、それらの課題解決にむけて多様な主体と協働しながら自ら行動する人材の輩出がおこなえるカリキュラムになっている。

【森林科学コース】

森林科学コースでは、コースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を実現するために、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）ごとに履修年次を集中させた積み上げ型カリキュラムを編成している。

1. 数学、自然科学、情報処理に関する基礎的知識を獲得し、応用できるようにするため、1、2年次に全学共通教育科目の「情報基礎」及び学部専門基礎科目の履修を促している。また、森林科学の学問内容と方法を説明できるようにするため、コース科目に森林学、森林工学、自然環境・社会学、林産学に関する基礎的な授業・実験科目群を配置し、2、3年次の履修を促している。
2. 森林の多面的機能について、総合的に考えることができるようにするため、コース科目に「砂防学」、「森林政策学」、「森林保全生態学」などの応用的な授業科目群を配置し、2、3年次の履修を促している。また、与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめることができるようにするため、コース科目に「森林造成学実習」、「森林計測学実習」、「林道工学実習」などの野外実習科目群を配置し、3年次の履修を促している。
3. 自国・他国の文化や異なる価値観に関心を持てるようにするため、1、2年次に全学共通教育科目の教養教育科目と共通基礎科目の外国語の履修を促している。また、技術者が社会に対して負っている責任を感じられるようにするため、2年次に学部共通科目の「農学のための倫理学」、3年次前期に課程共通科目の「インターンシップ」の履修を促すとともに、コース科目に「森林管理技術者総合演習Ⅰ」を配置し、3年次後期の履修を促している。
4. 日本語で論理的に記述し、的確に発表し、討議することができるようにするため、1年次に全学共通教育科目の転換教育科目と課程共通科目の「基礎キャリア形成ゼミ」の履修を促している。また、森林科学の技術や情報を利用し、社会の要求を解決するために創造し、表現できるようにするため、コース科目に「森林管理技術者総合演習Ⅰ」、「森林管理技術者総合演習ⅠⅠ」、「卒業研究」を配置し、3年次後期から4年次の履修を促している。

上記のカリキュラムにより、まず1、2年次に「数学、自然科学、情報処理」と「文化と異なる価値観への関心」及び「日本語による論理的記述と的確な発表・討議」という基礎的知識・技能を学ばせる。次に、2、3年次に「森林科学の学問内容と方法」と「森林の多面的機能の総合的考察」及び「技術者倫理」という専門的知識・思考力を学ばせる。その上で、3年次から「制約下での計画的な業務遂行」と「社会の要求を解決するための創造・表現」という実

実践的思考力・技能を学ばせる。

【農村環境デザイン学コース】

農村環境デザイン学コースにおいては、このコースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を実現するために、以下のカリキュラムを編成している。

1. 自然科学や情報技術の基礎知識を身につけるため、全学共通教育の「教養科目」及び「課程共通科目」を通して、技術者に一般的に必要とされる社会性を得るための素養を習得する。また、農村環境デザイン学の基本・応用分野の知識を身につけるため、教養科目のほか、「共通基礎科目」、「専門基礎科目」の数学を履修することによって、数学や自然科学・技術について基礎知識と応用的能力を習得する。さらに、農村環境デザイン学の主要分野である「土、水、基盤、環境」の各々の分野に関する知識・知能を習得するために、「コース科目」を中心とする基本的な物理系科目の講義・演習・実験を行う。
2. 実践現場の問題点と課題を理解し専門知識を総合して、地域基盤と環境づくりの計画・設計の在り方を考察することができ、さらに地域の生産・生活基盤の充実と環境改善の必要性に関心を持ち、それに寄与できる人材として成長しようとする意欲を持つ人材を養成するために、校外実習や現地見学、実地研修などに積極的に取り組み、社会の変化と要求に常に関心を持ち、新しい情報や知識を取り入れる心構えと方法を習得する。
3. 広い視野を得るための素養を身につけ、技術者としての社会的責任の重さを自覚して、継続的に努力することができる人材を養成するために、演習や実習、実験の科目、卒業研究の内容を充実させるとともに、フィールド科学に関する講義と実習を通じて、主要専門分野の知識を吸収するだけでなく、農村環境デザイン学関連分野の専門的な知識を総合して、地域の基盤と環境づくりの計画・設計の能力を身につける。
4. 地域現場の人達とのコミュニケーションを図る能力を高めるとともに、文章や口頭発表による表現力を身につけるために、卒業研究、ゼミ発表や中間、最終発表における要旨・論文のとりまとめ、口頭発表、質疑応答によって、問題解決能力と計画的・集中的に仕事を進め、まとめる能力を習得する。

動物科学課程

1. 動物関連産業の発展に貢献することのできる技術者及び研究者を育成することを教育の目標としている。
2. 我が国有数の畜産物生産基地である東北地方という地域的背景を活かし、地球の環境保全に配慮しながら、効率的かつ機能的に動物を生産するための動物科学について学ぶ。
3. 産業動物（家畜）、実験動物、野生動物、展示動物など、幅広い動物種を対象として、動物の生理、形態、組織、遺伝育種、発生、生殖、栄養、生産生理、飼養、管理、行動及び動物資源の利用に関する講義並びに実験を行っている。
4. 附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センターでの牧場実習を実施し、また、他課程の授業科目を数多く受講できるように工夫しており、動物科学に関わる幅広い学問について学ぶことができる。
5. 基礎的学問分野から動物生産技術の応用的分野まで体系的、総合的に学ぶことができ、実践的な知識、技術を身につけることができる。

共同獣医学科

共同獣医学科では、獣医学を学ぶための基礎的な力と幅広い教養を身につける共通教育科目と、高度化が進む獣医学をより深く学ぶための専門教育科目を整備し、これらの体系的な履修を徹底する。

1. 専門教育科目では、基礎獣医学科目群・病態獣医学科目群・応用獣医学科目群からなる基盤獣医学科目と、小動物臨床獣医学科目群・大動物臨床獣医学科目群からなる実証獣医学科目を配置することにより、人類と動物の健康と福祉に貢献できる国際的な視野を持つ獣医師を育成する。
2. 基盤獣医学科目では、獣医師の任務を遂行する上で必要な倫理性及び論理性を涵養し、生命の基本的な成り立ちや動物の病気発症のしくみを分子レベルから個体レベルに至るまで理解することを目的とする。また、動物とヒトの疾病予防の方策を理解し、公衆衛生や動物衛生を実現するための能力を身につける教育を行う。
3. 実証獣医学科目では、各種動物の疾病の的確な診断、治療及び予防を実現する能力を涵養すると同時に、伴侶動物・産業動物医療に必要な知識・技術を身につける教育を行う。

学び方を 相談してみよう！

みんな、高校の時に数Ⅲを勉強したらしいけど、私、勉強してない....。

このままだったらと大学生活を送っていいのだろうか？

この問題、どうやって解くんだらう？

えっ！「物理」って必要なの？
うっそお！？

「自分で勉強しなさい」って、
どうすればいいの？

授業の内容が
まったくわからない...[！]

いつか留学してみたいなあ。

「レポート」の
書き方がわからない！

岩手大学では、学生のみなさんの「学び」を支援するために、学修支援室（Learning Support Room）を設置しています。学び方について相談してみたい学生さん、図書館の2Fのサポートデスク（Learning Support Desk）にてお待ちしております。



問い合わせ先：

学生センターA棟1F 学務課教務企画グループ（2番窓口）

学修支援室 (The Learning Support Room)

学修支援室は、すべての岩手大学の学生が、その学びを充実させ、卒業まで十分に修められるられるよう、学生の「学び」を支援することを目的として、平成25年度に設置されました。

学修サポートデスク

図書館2Fに学修サポートデスクがあります。
授業期間中の15:00～19:00までの間、ベテランコーディネーターがみなさんからの相談に対応します。

学修支援講座

最近まで岩手大学の学生を指導していた先生方が、直接、みなさんを指導します。わからない問題がある、授業についていけない、などの悩みがあったら、まず、支援講座に来てみましょう。詳細はサポートデスクにて案内します。

コーディネーター紹介



マーク・ディボア (学術研究員)

カナダ出身、日本に来たのは15年前。専門はもちろん英語教育(修士、博士論文提出有資格者)だけど、大学での専門は生化学です。私はコーヒ大好きだし、趣味はサイクリング、チェロ演奏、パン作り。気軽に相談してください。



佐藤 瀏 (岩手大学名誉教授)

専門: 「有機化学」、特に「有機硫黄化学」を研究してきました。
趣味: 音楽鑑賞(主にクラシック)、美術館めぐり、野球観戦、写真撮影
信条: 日々前進すること
目標: たくさんの新入生や在学生(修士、博士課程の学生も大歓迎)といろいろの話をし、新しい事に取り組む勇気を分けてあげたいと思っている。(岩手大学名誉教授、理学博士)

支援講座担当教員紹介



鈴木正幸 (元・岩手大学工学部准教授)
火曜日 16:30～19:00

数学とサッカーが大好きな60歳です。教えること、わかってもらえること、自分もまたわかり直すこと、みんな好きです。

火曜の夕方は図書館で数学を、月曜・水曜・金曜日のお昼休みにグラウンドでサッカーを、一緒にやりませんか?



藤田尚毅 (元・岩手大学工学部教授)
水曜日 16:30～19:00

出身地: 青森県弘前市(1947年生)
出身校: 弘前高校(1966年卒業)
岩手大学工学部(1970年卒業)

平成25年3月まで岩手大学工学部機械システム工学科教授

担当科目: 「エンジン工学」「自動車基礎工学」「環境とエネルギー」など
趣味: 軽登山、テニス、スキー、温泉巡りなど
抱負: 心穏やかに、気持ちに余裕を持って暮らす方法を模索中。皆さんと一緒に考えたいと思っています。



成田栄一 (元・岩手大学工学部教授)
木曜日 16:30～19:00

経歴: 昭和22年青森市生まれ
東北大学工学部→八戸高専→岩手大学工学部に勤務(高校化学にも詳しいことが特色)

専門: 「一般化学」、「分析化学」、「無機工業化学」、「環境化学」、「粘土化学」とくに環境浄化・健康維持に関連するエコナノ材料の研究
趣味: 映画・絵画鑑賞、読書、太極拳、スポーツ観戦(プロ野球、プロボクシング、大相撲など)
抱負: 悩める学生に適切なアドバイスができる相談相手になりたい。

		月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
相談窓口 (ラウンジ・サポートデスク) 相談員		15:00～19:00 マークディボア 佐藤 瀏	15:00～19:00 佐藤 瀏	15:00～19:00 マークディボア 佐藤 瀏	15:00～19:00 マークディボア	15:00～19:00 マークディボア
支援講座	鈴木 正幸		数学 16:30～19:00			
	藤田 尚毅			物理 16:30～19:00		
	成田 栄一				化学 16:30～19:00	
	マークディボア	英語 16:30～19:00		英語 16:30～19:00		
	English Station				英語 14:45～16:15	

開設期間 前期:平成25年4月8日(月)～平成25年8月2日(金) 後期:平成25年9月30日(月)～平成26年2月14日(金)

※ 上記支援の他、他の科目や補習曜日・時間等については対応可能な場合もありますので、窓口で相談してください。

学修支援室（ラーニング・サポート・ルーム）

前期（開設期間）：平成25年 4月 8日（月）～平成25年 8月 2日（金）
 後期（開設期間）：平成25年 9月 30日（月）～平成26年 2月 14日（金）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	備考
相談窓口 (ラーニング・サポート・デスク) (相談員)	15:00 ～ 19:00 (マーク デイボア) (佐藤 瀏)	15:00 ～ 19:00 (佐藤 瀏)	15:00 ～ 19:00 (マーク デイボア) (佐藤 瀏)	15:00 ～ 19:00 (マーク デイボア)	15:00 ～ 19:00 (マーク デイボア)	補習時間目安 ① 16:30～18:00 ② 17:30～19:00
補習支援 (鈴木正幸)		数学 16:30～ 19:00				鈴木正幸氏 (H25.3.31退職) 元 工学部准教授 (電気電子・情報システム工学科)
補習支援 (藤田尚毅)			物理 16:30～ 19:00			藤田尚毅氏 (H25.3.31退職) 元 工学部 教授 (機械システム工学科)
補習支援 (成田榮一)				化学 16:30～ 19:00		成田榮一氏 (H25.3.31退職) 元 工学部 教授 (応用化学・生命工学科)
補習支援 (マーク デイボア)	英語 16:30～ 19:00		英語 16:30～ 19:00			
イングリッシュ・ステーション (ギヤピン ヤング)				英語 14:15～ 16:15		GB32 学生センター B棟

※ 上記支援の他、他の科目や補習曜日・時間等については対応可能な場合もありますので、窓口で相談して下さい。

人文社会科学部成績評価ガイドライン

1. 授業の目的

人文社会科学部には、学部共通科目、課程科目、コース科目があり、それぞれの科目区分の特性にあわせた授業の目的を設定する。各授業の目的は、学部の教育目的に沿うものとする。

2. 到達目標

- ・各課程及びコースで策定した「学位授与の方針」に沿った到達目標を設定する
- ・各課程及びコースで策定した「修得能力」との関連性がわかる記述にする。
- ・各課程及びコースで設定した「基礎科目」「展開科目」「導入科目」等の、科目区分の特性にあわせた到達目標を設定する。
- ・どの程度の知識や能力を修得しなければならないのかを、できるだけ具体的に設定するようにする。

3. 成績評価の方法と基準

成績評価の方法

- ・講義科目では、最終試験あるいは最終レポート1回のみでの評価はできる限り避け、複数の方法・観点で評価を行うことが望ましい。
- ・演習・実習・実験科目では、原則として実践を重視し、授業内外の成果物・発表内容を成績評価に取り入れるようにする。

成績評価の基準

- ・到達目標の達成度を基準とした絶対評価を原則とする。
- ・到達目標へどの程度の水準で到達すれば、どのような成績評価を得られるのかについて、できるだけ学生にも理解しやすい基準をもうける。
- ・到達目標への各学生の到達水準を、適切に反映した成績評価を行う。

教育学部成績評価ガイドライン

学校教育教員養成課程

【学校教育コース】

【特別支援教育コース】

1. 授業の目的

「教育目的」や「学位授与の方針」に沿った人材育成を目指して、各授業はコースのカリキュラムポリシーの中に位置づけられている。この各授業の位置づけに沿って授業の目的を設定する。

2. 到達目標

- ・コースの「学位授与の方針」を踏まえながら、具体的な対応関係ができるだけわかるようにする。
- ・共通性の高い基礎的講義、選択性の発展的講義、演習、実験・実習等の授業の性質に応じて、適切な到達目標を設定する。なお、到達目標の妥当性は毎年見直すものとし、学生の状況に応じて授業内容の改善に努めることとする。

3. 成績評価の方法と基準

○成績評価の方法

- ・講義科目では、最終試験以外に、レスポンスカード、小テスト、レポート等を活用して複数の方法・観点で評価することが望ましい。
- ・演習科目では、授業中の活動や成果を重視した評価を行う。
- ・実験・実習科目では、十分な体験活動ができるように構成し、その取り組みの様子も評価対象とする。さらに必ずレポート等の提出を求め評価対象とする。

○成績評価の基準

- ・成績の評価は到達目標に基づいた絶対評価とする。
- ・各授業科目につき100点を満点として、以下の基準で判定をすることを標準とする。
 - 秀 : 100点～90点 (その科目の到達目標を超えて秀でた成績)
 - 優 : 89点～80点 (その科目の到達目標にふさわしい優れた成績)
 - 良 : 79点～70点 (その科目の到達目標をおおむね満たす成績)
 - 可 : 69点～60点 (その科目の到達目標を最低限満たす成績)
 - 不可 : 59点～0点 (その科目の到達目標に達していない成績)

生涯教育課程

【日本語・地域文化コース】

1. 授業の目的

「教育目的」や「学位授与の方針」に沿った人材育成を目指して、各授業はコースのカリキュラムポリシーの中に位置づけられている。この各授業の位置づけに沿って授業の目的を設定する。

2. 到達目標

- ・コースの「学位授与の方針」を踏まえながら、具体的な対応関係ができるだけわかるようにする。
- ・共通性の高い基礎的講義，選択性の発展的講義，演習，実験・実習等の授業の性質に応じて，適切な到達目標を設定する。なお，到達目標の妥当性は毎年見直すものとし，学生の状況に応じて授業内容の改善に努めることとする。

3. 成績評価の方法と基準

○成績評価の方法

- ・講義科目では，最終試験以外に，レスポンスカード，小テスト，レポート等を活用して複数の方法・観点で評価することが望ましい。
- ・演習科目では，授業中の活動や成果を重視した評価を行う。
- ・実験・実習科目では，十分な体験活動ができるように構成し，その取り組みの様子も評価対象とする。さらに必ずレポート等の提出を求め評価対象とする。

○成績評価の基準

- ・成績の評価は到達目標に基づいた絶対評価とする。
- ・各授業科目につき100点を満点として，以下の基準で判定をすることを標準とする。

秀：100点～90点（その科目の到達目標を超えて秀でた成績）

優：89点～80点（その科目の到達目標にふさわしい優れた成績）

良：79点～70点（その科目の到達目標をおおむね満たす成績）

可：69点～60点（その科目の到達目標を最低限満たす成績）

不可：59点～0点（その科目の到達目標に達していない成績）

【スポーツ教育コース】

1. 授業の目的

「教育目的」や「学位授与の方針」に沿った人材育成を目指して、各授業はコースのカリキュラムポリシーの中に位置づけられている。この各授業の位置づけに沿って授業の目的を設定する。

2. 到達目標

- ・コースの「学位授与の方針」を踏まえながら、具体的な対応関係ができるだけわかるようにする。
- ・共通性の高い基礎的講義，選択性の発展的講義，演習，実験・実習，実技等の授業の性質に応じて、適切な到達目標を設定する。なお，到達目標の妥当性は毎年見直すものとし，学生の状況に応じて授業内容の改善に努めることとする。

3. 成績評価の方法と基準

○成績評価の方法

- ・講義科目では，最終試験以外に，レスポンスカード，小テスト，レポート等を活用して複数の方法・観点で評価することが望ましい。
- ・演習科目では，授業中の活動や成果を重視した評価を行う。
- ・実験・実習科目では，十分な体験活動ができるように構成し，その取り組みの様子も評価対象とする。さらに必ずレポート等の提出を求め評価対象とする。
- ・実技科目では，授業中の活動や取り組みの様子，技能等について評価の対象とする。

○成績評価の基準

- ・成績の評価は到達目標に基づいた絶対評価とする。
- ・各授業科目につき100点を満点として，以下の基準で判定をすることを標準とする。
 - 秀：100点～90点（その科目の到達目標を超えて秀でた成績）
 - 優：89点～80点（その科目の到達目標にふさわしい優れた成績）
 - 良：79点～70点（その科目の到達目標をおおむね満たす成績）
 - 可：69点～60点（その科目の到達目標を最低限満たす成績）
 - 不可：59点～0点（その科目の到達目標に達していない成績）

芸術文化課程

【美術・デザインコース】

1. 授業の目的

「教育目的」や「学位授与の方針」に沿った人材育成を目指して、各授業はコースのカリキュラムポリシーの中に位置づけられている。この各授業の位置づけに沿って授業の目的を設定する。

2. 到達目標

- ・コースの「学位授与の方針」を踏まえながら、具体的な対応関係ができるだけわかるようにする。
- ・共通性の高い基礎的講義，選択性の発展的講義，演習，実技・実習等の授業の性質に応じて，適切な到達目標を設定する。なお，到達目標の妥当性は毎年見直すものとし，学生の状況に応じて授業内容の改善に努めることとする。

3. 成績評価の方法と基準

○成績評価の方法

- ・講義科目では，最終試験以外に，レスポンスカード，小テスト，レポート等を活用して複数の方法・観点で評価することが望ましい。
- ・演習，実技・実習科目では，十分な体験活動ができるように構成し，その取り組みの様子も評価対象とする。

○成績評価の基準

- ・成績の評価は到達目標に基づいた絶対評価とする。
- ・各授業科目につき100点を満点として，以下の基準で判定をすることを標準とする。

秀：100点～90点（その科目の到達目標を超えて秀でた成績）

優：89点～80点（その科目の到達目標にふさわしい優れた成績）

良：79点～70点（その科目の到達目標をおおむね満たす成績）

可：69点～60点（その科目の到達目標を最低限満たす成績）

不可：59点～0点（その科目の到達目標に達していない成績）

【書道コース】

1. 授業の目的

「教育目的」や「学位授与の方針」に沿った人材育成を目指して、各授業はコースのカリキュラムポリシーの中に位置づけられている。この各授業の位置づけに沿って授業の目的を設定する。

2. 到達目標

- ・コースの「学位授与の方針」を踏まえながら、具体的な対応関係ができるだけわかるようにする。
- ・共通性の高い基礎的講義，選択性の発展的講義，演習，実技・実習等の授業の性質に応じて，適切な到達目標を設定する。なお，到達目標の妥当性は毎年見直すものとし，学生の状況に応じて授業内容の改善に努めることとする。

3. 成績評価の方法と基準

○成績評価の方法

- ・講義科目では，最終試験以外に，レスポンスカード，小テスト，レポート等を活用して複数の方法・観点で評価することが望ましい。
- ・演習，実技・実習科目では，十分な体験活動ができるように構成し，その取り組みの様子も評価対象とする。

○成績評価の基準

- ・成績の評価は到達目標に基づいた絶対評価とする。
- ・各授業科目につき100点を満点として，以下の基準で判定をすることを標準とする。

秀：100点～90点（その科目の到達目標を超えて秀でた成績）

優：89点～80点（その科目の到達目標にふさわしい優れた成績）

良：79点～70点（その科目の到達目標をおおむね満たす成績）

可：69点～60点（その科目の到達目標を最低限満たす成績）

不可：59点～0点（その科目の到達目標に達していない成績）

【音楽コース】

1. 授業の目的

「教育目的」や「学位授与の方針」に沿った人材育成を目指して、各授業はコースのカリキュラムポリシーの中に位置づけられている。この各授業の位置づけに沿って授業の目的を設定する。

2. 到達目標

- ・コースの「学位授与の方針」を踏まえながら、具体的な対応関係ができるだけわかるようにする。
- ・共通性の高い基礎的講義、選択性の発展的講義、演習、実技・実習等の授業の性質に応じて、適切な到達目標を設定する。なお、到達目標の妥当性は毎年見直すものとし、学生の状況に応じて授業内容の改善に努めることとする。

3. 成績評価の方法と基準

○成績評価の方法

- ・講義科目では、最終試験以外に、レスポンスカード、小テスト、レポート等を活用して複数の方法・観点で評価することが望ましい。
- ・演習科目では、授業中の活動や成果を重視した評価を行う。
- ・実技・実習科目では、日頃のレッスンにおいて十分な体験活動ができるように構成し、そこでの取り組みの様子と、学期末にある演奏実技試験の音楽性を評価対象とする。

○成績評価の基準

- ・成績の評価は到達目標に基づいた絶対評価とする。
- ・各授業科目につき100点を満点として、以下の基準で判定をすることを標準とする。

秀 : 100点～90点 (その科目の到達目標を超えて秀でた成績)

優 : 89点～80点 (その科目の到達目標にふさわしい優れた成績)

良 : 79点～70点 (その科目の到達目標をおおむね満たす成績)

可 : 69点～60点 (その科目の到達目標を最低限満たす成績)

不可 : 59点～0点 (その科目の到達目標に達していない成績)

工学部成績評価ガイドライン

応用化学・生命工学科

(授業の目的)

持続可能な社会づくりに不可欠な工学やその周辺の幅広い専門知識と地域や国際社会で活躍できる豊かな人間性を兼ね備え、かつ科学技術の調和的発展に貢献できる技術者を養成することが授業の目的である。

(授業の到達目標)

講義、実験、実習、演習の担当教員は、その講義、実験等における学習の到達目標（合格基準）を設定し、それをシラバスに明記することで、事前に履修学生に周知するものとする。

(学業成績評価の方法)

講義、実験、実習、演習の学業成績の評価を行うにあたっては、期末試験、レポート、および平常点を各科目にふさわしい割合に配分する。具体的な成績評価の方法はシラバスに記載し、事前に履修学生に公表するものとする。

(期末試験)

期末試験は、筆記、口述、発表などにより実施する。期末試験の実施方法及び日時は担当教員が定めるものとするが、試験の実施にあたっては、その日時、場所、実施方法等を学生に事前に公表し周知させることを必須とする。

(レポート)

レポートは、講義、実験、実習、演習等において、学生の学習を補完するために実施する課題であり、教室外学習に相当する。その成績評価は、課題に対するレポートの記述内容、記述書式、及び指定された提出期限の遵守の有無等により担当教員が総合的に判定する。

(平常点)

平常の成績は、授業中に行う小テスト、学習状況や学習態度、レスポンスカード、及び出席状況等によって判定する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、実習、演習の担当教員は試験、レポート、および平常点の成績を数値化するにあたって主に以下の4つの観点に基づく評価を行う。ただしこれらの比重の設定については担当教員の判断に委ねる。

- (1) 関心・意欲
- (2) 知識・理解

- (3) 技能・表現
- (4) 思考・判断

(学業成績評価における期末試験、レポート、及び平常点の比重)

学業成績の評価における期末試験、レポート、及び平常点の比重については担当教員が講義に応じて決定し、シラバスに公表する。

(学業成績の評価基準)

各講義には、教育の目指すべき最高地点（100点）が設定されている。講義の内容を理解し修得することで、その講義の合格基準（60点）を学習の到達目標として定め、その基準を超えた者を合格とし、さらに、目指すべき最高地点への学習の達成度に応じて、秀・優・良・可を定めるものとする。

- (1) 秀 : 100点～90点（目指すべき最高地点に到達もしくはほぼ到達した者）
- (2) 優 : 89点～80点（目指すべき最高地点にもう一歩で到達すると考えられる者）
- (3) 良 : 79点～70点（到達目標を余裕を持って満たした者）
- (4) 可 : 69点～60点（到達目標を最低限満たした者）
- (5) 不可 : 59点～0点（到達目標に達していない者）

マテリアル工学科

(授業の目的)

持続可能な社会づくりに不可欠な工学やその周辺の幅広い専門知識と地域や国際社会で活躍できる豊かな人間性を兼ね備え、かつ科学技術の調和的発展に貢献できる技術者を養成することが授業の目的である。

(授業の到達目標)

講義、実験、実習、演習の担当教員はその到達目標を設定し、その到達目標をシラバスに明記することにより事前に履修学生達に周知させるものとする。

(学業成績評価の方法)

講義、実験、実習、演習の学業成績の評価を行うにあたっては絶対評価に基づき、期末試験、レポート、および平常点により評価し、これらの比重は担当教員の総合的判断に委ねる。その成績評価の方法はシラバスに記載して事前に履修学生に公表するものとする。

(期末試験)

期末試験は、筆記、口述、発表などにより実施する。期末試験の実施方法及び日時はその授業科目の担当者が定めるものとするが、試験の実施にあたってはその日時、場所、実施方法等を学生達に事前に公表し周知させることを必須とする。

(レポート)

レポートは、講義、実験、実習、演習等において随時行う課題であり、教室外学習に相当する。その成績は課題に対するレポートの記述内容、記述書式、及び指定された提出期限の遵守の有無等により担当教員が総合的に判定する。

(平常点)

平常の成績は、授業中に随時行う小テスト、学習状況や学習態度、レスポンスカード、及び出席状況等によって判定する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、実習、演習の担当教員は期末試験、レポート、および平常点の成績を数値化するにあたって主に以下の4つの観点に基づく評価を行う。ただしこれらの比重の設定については担当教員の判断に委ねる。

(1) 関心・意欲、(2) 知識・理解、(3) 技能・表現、(4) 思考・判断

(学業成績の評価基準)

各授業科目の成績の評価は絶対評価に基づき、100点を満点として原則として以下の基準により判定する。

- (1) 秀 : 100点～90点 (到達目標を超えて秀でた成績)
- (2) 優 : 89点～80点 (到達目標にふさわしい優れた成績)
- (3) 良 : 79点～70点 (到達目標をおおむね満たす成績)
- (4) 可 : 69点～60点 (到達目標を最低限満たす成績)
- (5) 不可 : 59点～0点 (到達目標に達していない成績)

電気電子・情報システム工学科

【電気電子工学コース】

(授業の目的)

講義、実験、実習、研修により、電気電子工学分野で活躍するために必要な基礎知識を確実に身に付けさせ、応用に展開できる能力を養成する。また、論理的に考察をすることができる思考力、および課題解決のために必要なコミュニケーション能力を養うことが授業の目的である。

(授業の到達目標)

教員は、担当科目の到達目標を設定し、シラバスに明記することにより事前に履修学生に周知させる。

(学業成績評価の方法)

講義、実験、実習、研修の学業成績の評価を行うにあたっては、科目に応じて、試験、レポート、および平常点等により評価する。成績評価の方法はシラバスまたは掲示により履修学生に周知する。

(試験)

試験は、筆記により実施する。試験の実施方法及び日時は、担当教員が事前に公表し周知する。

(レポート)

レポートは、実験、実習、研修には必ず課す。講義については課題等により適宜実施する。レポートは、教室外学習に該当する。レポートの評価は記述内容および及び提出期限の遵守の有無等により担当教員が総合的に判定する。

(平常点)

平常の成績は、授業中に随時行う小テスト、学習状況や学習態度、及び出席状況等によって判定する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、実習、研修の担当教員は試験、レポート、および平常点の成績を数値化するにあたって主に以下の4つの観点に基づく評価を行う。ただしこれらの比重の設定については担当教員の判断に委ねる。

- (1) 関心・意欲
- (2) 知識・理解
- (3) 技能・表現
- (4) 思考・判断

(学業成績評価における試験、レポート、及び平常点の比重)

学業成績の評価における試験、レポート、及び平常点の比重については担当教員の総合的判断に委ねる。

(学業成績の評価基準)

到達目標の達成度を基準とした絶対評価に基づき、以下の基準により判定をする。

- | | | |
|----|-------------|------------------|
| 秀 | : 100 - 90点 | 特に優れている。 |
| 優 | : 89 - 80点 | 優れている。 |
| 良 | : 79 - 70点 | 妥当と認められる。 |
| 可 | : 69 - 60点 | 合格の最低基準は満たしている。 |
| 不可 | : 59 - 0点 | 合格の最低基準を満たしていない。 |

【情報システム工学コース】

(授業の目的)

講義、実験、演習の担当教員は、その授業によって履修学生が修得できる内容を授業の目的として設定し、それをシラバスに明記することにより事前に履修学生に周知させる。

(授業の到達目標)

講義、実験、演習の担当教員は、その授業の受講により履修学生が到達すべき目標を設定し、それをシラバスに明記することにより事前に履修学生に周知させる。

(学業成績の評価方法)

講義、実験、演習の学業成績の評価を行うにあたっては絶対評価に基づき、期末試験、レポート、平常点などの評価事項から適切なものを選定して評価を行う。その成績評価の方法はシラバスに記載して事前に履修学生に公表する。

(期末試験)

期末試験の実施方法、日時、場所等は担当教員が定め、事前に履修学生に公表し周知させる。試験の設問に対する解答の妥当性を担当教員が公正な基準により判断して採点することで成績を評価する。

(レポート)

レポートによる課題の学習は授業内容の理解を深めるための教室外学習に相当し、課題に対するレポートの記述内容、記述書式、提出期限の遵守等によって成績を評価する。

(平常点)

平常点は履修学生の平常の授業内容の理解度や授業への参加態度などに関する評価事項であり、授業中に行う小テスト、レスポンスカード、出席状況等によって成績を評価する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、演習の担当教員は、試験、レポート、平常点などの評価事項から適切なものを選定し、点数化することにより評価を行う。各評価事項の点数化の具体的な方法については授業科目の性格に応じて適切な方法を用いることとし、主に以下の4つの評価項目のうち、適宜、その講義、実験、演習にとって適切な項目を評価に含めるものとする。

- (1) 関心・意欲
- (2) 知識・理解
- (3) 技能・表現
- (4) 思考・判断

(成績評価における期末試験、レポート、及び平常点の比重)

学業成績の評価における期末試験、レポート、及び平常点の比重については授業科目の性格に応じて適切な比重を用いる。

(学業成績の評価基準)

学業成績の評価は絶対評価に基づき、100点を満点として原則として以下の基準により判定する。

- (1) 秀 : 100点～90点 (到達目標を超えて秀でた成績)
- (2) 優 : 89点～80点 (到達目標にふさわしい優れた成績)
- (3) 良 : 79点～70点 (到達目標をおおむね満たす成績)
- (4) 可 : 69点～60点 (到達目標を最低限満たす成績)
- (5) 不可 : 59点～0点 (到達目標に達していない成績)

機械システム工学科

(授業の目的)

持続可能な社会づくりに不可欠な工学やその周辺の幅広い専門知識と、地域や国際社会で活躍できる豊かな人間性を兼ね備え、かつ科学技術の調和的発展に貢献できる技術者を養成することが授業の目的である。

(授業の到達目標)

講義、実験、実習、演習の担当教員は、科目の到達目標を設定し、その到達目標をシラバスに明記することにより事前に履修学生達に周知させるものとする。

(学業成績評価の方法)

講義、実験、実習、演習の学業成績を評価するにあたっては絶対評価に基づき、期末試験、レポート、および平常点により評価する。その成績評価の方法は、シラバスに記載して事前に履修学生に公表するものとする。

(期末試験)

期末試験は、筆記、口述、発表などにより実施する。期末試験の実施方法と日時は、その授業科目の担当者が定めるものとするが、試験の実施にあたっては、その日時、場所、実施方法等を学生達に事前に公表し、周知させることを必須とする。

(レポート)

レポートは、講義、実験、実習、演習等において随時行う課題であり、教室外学習に相当する。その成績は、課題に対するレポートの記述内容、記述書式、指定された提出期限の遵守の有無等により担当教員が総合的に判定する。

(平常点)

平常の成績は、授業中に随時行う小テスト、学習状況や学習態度、レスポンスカード、出席状況等によって判定する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、実習、演習の担当教員は、試験、レポート、および平常点の成績を数値化するにあたって、主に以下の4つの観点に基づいて評価する。ただし、これらの比重の設定については担当教員の判断に委ねる。

- (1) 関心・意欲
- (2) 知識・理解
- (3) 技能・表現
- (4) 思考・判断

(成績評価における期末試験、レポート、及び平常点の比重)

学業成績の評価における期末試験、レポート、および平常点の比重については担当教員の総合的判断に委ねる。

(学業成績の評価基準)

各授業科目の成績の評価は絶対評価に基づき、100点を満点として以下の基準により判定する。

- (1) 秀 : 100点～90点 (到達目標を超えて秀でた成績)
- (2) 優 : 89点～80点 (到達目標にふさわしい優れた成績)
- (3) 良 : 79点～70点 (到達目標をおおむね満たす成績)
- (4) 可 : 69点～60点 (到達目標を最低限満たす成績)
- (5) 不可 : 59点～0点 (到達目標に達していない成績)

社会環境工学科

(授業の目的)

持続可能な社会づくりに不可欠な工学やその周辺の幅広い専門知識と地域や国際社会で活躍できる豊かな人間性を兼ね備え、かつ科学技術の調和的発展に貢献できる技術者を養成することが授業の目的である。

(授業の到達目標)

講義、実験、実習、演習の担当教員はその講義、実験等の到達目標を設定し、それをシラバスに明記することにより事前に履修学生達に周知させるものとする。

(学業成績評価の方法)

講義、実験、実習、演習の学業成績の評価を行うにあたっては、期末試験、小テスト、レポートなどのいずれか、もしくは総合して評価する。その成績評価の方法は原則的にシラバスに記載し、事前に履修学生に公表し周知させるものとする。

(期末試験)

期末試験は、筆記などにより実施する。期末試験の実施方法及び日時は担当教員が定めるものとする。

(小テスト)

小テストは、講義、演習等において随時行う課題である。その成績は課題に対する正解率により評価される。

(レポート)

レポートは、講義、実験、実習、演習等において随時行う課題であり、教室外学習に相当する。その成績は課題に対するレポートの記述内容、記述書式、及び指定された提出期限の遵守の有無等により担当教員が総合的に判定する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、実習、演習の担当教員は試験、小テスト、レポートなどの成績を数値化するにあたって主に以下の4つの観点に基づく評価を行う。ただしこれらの比重の設定については担当教員の判断に委ねる。

- (1) 関心・意欲
- (2) 知識・理解
- (3) 技能・表現
- (4) 思考・判断

(学業成績評価における期末試験、小テスト、レポートなどの比重)

学業成績の評価における期末試験、小テスト、レポートなどの比重については担当教員の総合的判断に委ねる。

(学業成績の評価基準)

各授業科目の成績の評価は絶対評価に基づき、100点を満点として原則として以下の基準により判定する。

- (1) 秀 : 100点～90点 (到達目標を超えて秀でた成績)
- (2) 優 : 89点～80点 (到達目標にふさわしい優れた成績)
- (3) 良 : 79点～70点 (到達目標をおおむね満たす成績)
- (4) 可 : 69点～60点 (到達目標を最低限満たす成績)
- (5) 不可 : 59点～0点 (到達目標に達していない成績)

農学部成績評価ガイドライン

(授業の到達目標・目的)

講義、実験、実習、演習の担当教員はその到達目標・目的を設定し、その到達目標・目的をシラバスに明記することにより事前に履修学生に周知させるものとする。

(学業成績評価の方法)

講義、実験、実習、演習の学業成績の評価を行うにあたっては絶対評価に基づき、期末試験、レポート及び平常点により担当教員が評価する。その成績評価の方法は、シラバスに記載して事前に履修学生に公表するものとする。

(期末試験)

期末試験は、筆記、口述、発表などにより実施する。期末試験の実施方法及び日時は担当教員が定めるものとするが、試験の実施にあたってはその日時、場所、実施方法等を履修学生に事前に公表し周知させる。

(レポート)

レポートは、講義、実験、実習、演習等において随時行う課題であり、教室外学習に相当する。その成績は、課題に対するレポートの記述内容、記述書式及び指定された提出期限の遵守の有無等により担当教員が総合的に判定する。

(平常点)

平常の成績は、授業中に随時行う小テスト、学習状況や学習態度、レスポンスカード及び出席状況等によって担当教員が判定する。

(学業成績の評価項目)

講義、実験、実習、演習の担当教員は、試験、レポート及び平常点の成績を数値化するにあたって主に以下の4つの観点に基づく評価を行う。ただしこれらの比重の設定については、担当教員の判断に委ねる。

- (1) 関心・意欲・態度
- (2) 知識・理解
- (3) 技能・表現
- (4) 思考・判断

(成績評価における期末試験、レポート、及び平常点の比重)

学業成績の評価における期末試験、レポート及び平常点の比重については、担当教員の総合的判断に委ねる。

(学業成績の評価基準)

各授業科目の成績の評価は絶対評価に基づき、100点を満点として原則として以下の基準により判定する。

- (1) 秀 : 100点～90点 (到達目標を超えて秀でた成績)
- (2) 優 : 89点～80点 (到達目標にふさわしい優れた成績)
- (3) 良 : 79点～70点 (到達目標をおおむね満たす成績)
- (4) 可 : 69点～60点 (到達目標を最低限満たす成績)
- (5) 不可 : 59点～0点 (到達目標に達していない成績)



入試部門

入試部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	高畑 義人	大学教育総合センター長
専任教員	岡本 崇宅	大学教育総合センター
兼務教員	吉村 泰樹	人文社会科学部
	土屋 明広	教育学部
	伊藤 歩	工学部
	庄野 浩資	農学部
各学部入試委員会 (正・副委員長)	家井 美千子	人文社会科学部
	横山 英信	人文社会科学部
	境野 直樹	教育学部
	我妻 則明	教育学部
	平塚 貞人	工学部
	水野 雅裕	工学部
	倉島 栄一	農学部
	木村 賢一	農学部
入試課長	藤原 昇	学務部

活動報告

部門長 高畑 義人

平成24年度入試について

平成24年度入試の志願者は、一般・推薦・AO入試の総志願者数が3,679人で昨年比196人増で志願倍率についても3.4倍と0.2ポイント上昇しました。この結果、過去10年で最も志願者の少なかった平成22年度の3,323人と比べこの2年連続増加へ転じました。また、一般入試についてみても、志願者3,083人で昨年度の2,860人から223人増となるとともに、平成21年度までの志願者3,000人台を回復しました。詳細については、入試部門が中心となり作成した「平成24年度入学試験実施結果報告書」をご覧ください。

入試部門会議

作題体制、入試電算処理・日程、志願票、審査資料について確認しました。また、平成27年度以降の新学習指導要領に対応した入試教科・科目を公表しました。6月29日に入試部門専任教員による「平成24年度入試分析結果及び高校訪問報告会」を実施しました。全国大学入学者選抜研究連絡協議会の平成26年度大会を本学が共催大学として岩手県地域で開催することを決定しました。「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」及び「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」を大学として決定したことに伴い、これら2つの方針とすでに策定している「入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）」との整合性について各学部にて検討を依頼しました。

入試広報

平成24年度入試広報活動として、東北地区内の募集広報は前年度同様に東北地区新聞社連合主催の「2012東北の著名大学進学説明会」に5月から6月にかけて7都市の会場に参加し、本学ブース訪問者は349人（総入場者4,476人）という結果でした。また、高校訪問は、地元岩手は日常訪問し、北海道、青森、秋田、宮城、静岡、愛知、大阪の高校、予備校延べ90校に訪問とともに29会場（北海道、宮城、栃木、東京、神奈川、静岡、愛知、大阪）でのガイダンスと本学紹介講演を行いました。





全学共通教育部門

全学共通教育部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	横山英信	人文社会科学部
専任教員		
兼務教員	横井雅明	外国語分科会
	清水茂幸	健康・スポーツ分科会
	藤本忠博	情報基礎分科会
	中村安宏	思想と文化分科会
	神常雄	心と表象分科会
	横山英信	公共社会分科会
	三井隆弘	現代の諸問題分科会
	西山賢一	生物の世界分科会
	八木一正	自然と数理の世界分科会
	柳岡英樹	科学技術分科会
	河合成直	環境分科会
各学部教務委員会	河田裕樹	人文社会科学部
	遠藤匡俊	教育学部
	嶋田和明	工学部
	伊藤芳明	農学部
学務課長	浅沼良庸	学務部

第3回岩手大学全学共通教育シンポジウムの開催

一昨年度の第1回、昨年度の第2回に続いて、第3回目となる「岩手大学全学共通教育シンポジウム」を開催しました。今回のシンポジウムのテーマは、第1回の「全学共通教育の意義と役割」、第2回の「専門教育と全学共通教育の連携」を踏まえて、全学共通教育の実施体制が抱える問題に焦点を当てたため「岩手大学全学共通教育の実施体制の現状と課題—安定的・継続的な実施のための全学的体制づくりに向けて—」としました。

当日は、藤井克巳学長の挨拶のあと、まず、横山英信・大学教育総合センター全学共通教育部門長から、岩手大学の全学共通教育をめぐる諸問題（①教養科目の開講数の減少とクラスサイズの大規模化、②総合科目の位置づけの曖昧化、③授業担当者確保に関する責任体制の不明確化）が報告されました。

次に、弘前大学21世紀教育センター長の木村宣美教授から弘前大学の21世紀教育（＝全学共通教育）の実施体制に関するお話を頂きました。弘前大学では教員全員に教養科目担当を義務づけ、2科目を必ず登録させるとともに授業の基準担当時間を設けていること、科目区分ごとに主任（＝責任者）を選出する学部を明確にしていることなど、岩手大学の全学共通教育の実施体制を再検討する上でとても有益な内容が報告されました。

その後、実施体制上の問題を具体的に把握するため、「現代の諸問題」分科会代表の三井隆弘准教授、「環境」分科会代表の河合成直教授、総合科目「科学技術と現代社会」代表の小野寺英輝准教授から、各分科会・科目で実際に生じている問題と解決の方向性についての御報告を頂きました。

以上を受けて、参加者間の意見交流に移りました。そこでは、授業実施上の責任体制のあり方、全学共通教育科目担当と大学院科目担当との間での負担の公平性、全学共通教育科目と専門基礎科目との関係、などについての有意義な議論が行われました。

今回のシンポジウムの成果も踏まえて、今後、弘前大学のような「科目区分ごとに授業科目実施に責任をもつ学部を明確にする」体制を構築することも選択肢の一つとして、全学共通教育の実施体制の見直しを行っていく予定です。

全学共通教育の「教育目的」および「修得すべき能力」の作成

岩手大学では、各学部の専門教育について課程・学科、コースなどの単位でそれぞれの「教育目的」と「修得すべき能力」を作成していましたが、全学共通教育についてはまだ作成されていませんでした。

このため、今年度は全学共通教育全体の「教育目的」「修得すべき能力」を作成するとともに、各分科会代表の皆様の御協力を頂きながら各科目区分等についても「教育目的」「修得すべき能力」を作成しました。これらは、平成25年度の『履修の手引き』に掲載されました。

「公共社会」分科会と「現代の諸問題」分科会の統合

平成18年度以降、教養科目区分「人間と社会」の諸科目は、「公共社会」分科会と「現代の諸問題」分科会の2分科会が対応し、2分科会でそれぞれ開講に責任を持つ科目を分担してきました。しかし、当初の分科会立ち上げの際、教員相互の連絡・調整が十分図られないままに本人の希望によって所属する分科会を決定したため、一部の近似分野の教員が「公共社会」分科会と「現代の諸問題」分科会に分かれることになり、科目開講に責任を持つ分科会と科目担当教員の所属分科会が異なるという状況が生じました。そして、その後これを改善する措置がとくにとられなかったため、時間割編成の際に一部の科目について開講時間帯などについて両分科会ですりあわせを行わなければならないという「二度手間」が続いていました。加えてこの間の教員の退職・転出によってとくに「現代の諸問題」分科会所属の授業担当教員が減少してきたこともあり、「1科目区分・2分科会担当」の体制を今後継続すべきかどうか、検討が必要になっていました。

これを受けて、「公共社会」分科会と「現代の諸問題」分科会の双方で検討を行った結果、両分科会とも教養科目区分「人間と社会」については「1科目区分・1分科会」に再編成した方が機動的に開講に当たれると判断し、平成25年度から両分科会を統合して新たに「人間と社会」分科会を発足させることになりました。平成25年度からはこの新分科会が教養科目区分「人間と社会」の諸科目の開講に責任を持つこととなります。

平成25年度新規開講科目について

従来、教養科目の「総合科目」として開講されていた「科学技術と現代社会」は、とくに文系学生を対象として科学・技術のあり方と社会の関係を検討することを目的としていました。しかし、この間の各学部カリキュラムにおける「総合科目」の選択科目化がなされる中、名称が理系内容という先入観を与えることもあって受講者数が減少するという状況を生じていました。このため、平成25年度から同科目の科目区分を教養科目の「人間と社会」に変更するとともに、科学と技術の相互関係を明確化するために科目名称も「科学・技術と現代社会」に改めました。

また、教養科目「高年次課題科目」として「異文化理解と実践」が新設されました。同科目は、日本人が異文化に接する時に必要な知識を習得するとともに、異なる文化的背景を持つ人たちと国内または国外で積極的に交流・協力していける実践的な能力やコミュニケーション能力を養うことを目的とし、すべて英語によって授業を行います。

総合科目の維持・発展

総合科目についてはこれに対応する分科会は設けず、各分科会からそれぞれ1名選出された担当者と各総合科目の代表者から構成される「総合科目企画・実施委員会」によって必要な連絡・調整が行われています。

本年度も同委員会にて平成24年度の実施状況を踏まえて総合科目のあり方・実施体制について意見交換を行うとともに、平成25年度の開講科目の実施について確認を行いました。また、総合科目の「教育目的」「修得すべき能力」は同委員会によって作成されました。

F D活動について

全学共通教育のF D活動については各分科会がその実施主体として位置づけられています。各分科会のF D活動経費については、昨年度と同様に今年度も各分科会からのF D活動経費の請求に対して原則として10万円を上限として各分科会に配分することにしました。本年度は8分科会から請求があり、F D活動経費は講演会やF D関連資料・文献の購入等として使用されました。

大規模クラスの対応

全学共通教育科目では、毎年度、曜日・時間帯・科目区分等に着目しながら各授業の履修者数の動向を分析しています。特定の曜日・時間帯に受講者が集中しないように開講数の調整を行っていますが、残念ながら大規模クラスを解消するには至っていません。

この対応としては、さらに開講数の調整を細やかにするとともに開講数自体を増やすことが必要になっており、今後これらについて検討を行っていく予定です。

なお、今年度も大規模クラスについては、担当教員の希望によって、受講生が150名を超える場合は1名、200名を超える場合は2名のティーチング・アシスタントを配置することにしました。

日常的な業務について

全学共通教育のカリキュラムを円滑に実施するために、各分科会や学務部学務課と連携して以下の事項についての審議・策定を行いました。

①翌年度授業計画の策定、②時間割の変更、③非常勤講師の採用、④資格試験等による単位認定、⑤高大連携科目の選定、⑥北東北3大学単位互換集中講義の実施、⑦放送大学利用科目の選定、⑧学年歴の策定、⑨ガイドラインに基づく成績評価の検証、ガイドラインの見直し、⑩年度計画の把握、など。

全学共通教育分科会名簿

(平成 25 年 3 月 31 日現在)

外国語分科会名簿

	氏 名	専任担当
1 代表者	横井 雅明	人文社会科学部
2	秋田 淳子	人文社会科学部
3	大友 展也	人文社会科学部
4	金子 百合子	人文社会科学部
5	川村 和宏	人文社会科学部
6	川本 榮三郎	人文社会科学部
7	北村 一親	人文社会科学部
8	GRAS Alexandre Jean	人文社会科学部
9	後藤 尚人	人文社会科学部
10	小林 葉子	人文社会科学部
11	齋藤 伸治	人文社会科学部
12	齋藤 博次	人文社会科学部
13	Schwamborn, Frank	人文社会科学部
14	中里 まき子	人文社会科学部
15	長野 俊一	人文社会科学部
16	橋本 学	人文社会科学部
17	松林 城弘	人文社会科学部
18	MULVEY Bern Martin	人文社会科学部
19	山口 春樹	人文社会科学部
20	山本 昭彦	人文社会科学部
21	梁 仁實	人文社会科学部
22	UNHER MICHEL	教育学部
23	犬塚 博彦	教育学部
24	大河原 清	教育学部
25	菊地 悟	教育学部
26	境野 直樹	教育学部
27	HALL JAMES	教育学部
28	山崎 友子	教育学部
29	加藤 大雅	工学部
30	呉(諸) 松竹	工学部
31	鈴木 忠彦	農学部
32	原科 幸爾	農学部
33	岡崎 正道	国際交流センター
34	尾中 夏美	国際交流センター
35	松岡 洋子	国際交流センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
外国語科目	英語総合 I (上級)	

英語総合Ⅱ（上級）	
英語総合Ⅰ（中級）	
英語総合Ⅱ（中級）	
英語総合Ⅰ（初級）	
英語総合Ⅱ（初級）	
英語コミュニケーションⅠ（上級）	
英語コミュニケーションⅡ（上級）	
英語コミュニケーションⅠ（中級）	
英語コミュニケーションⅡ（中級）	
英語コミュニケーションⅠ（初級）	
英語コミュニケーションⅡ（初級）	
初級ドイツ語（入門）	
初級ドイツ語（発展）	
中級ドイツ語	
初級フランス語（入門）	
初級フランス語（発展）	
中級フランス語	
初級ロシア語（入門）	
初級ロシア語（発展）	
中級ロシア語	
初級中国語（入門）	
初級中国語（発展）	
中級中国語	
初級韓国語（入門）	
初級韓国語（発展）	
中級韓国語	
上級日本語A	
上級日本語B	
上級日本語C	
上級日本語D	
上級日本語E	
上級日本語F	
上級日本語G	
上級日本語H	

健康・スポーツ分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	清水 茂幸	教育学部
2		浅沼 道成	人文社会科学部
3		浅見 裕	教育学部
4		鎌田 安久	教育学部
5		上濱 龍也	教育学部
6		栗林 徹	教育学部
7		澤村 省逸	教育学部
8		清水 将	教育学部
9		大川井 宏明	工学部
10		佐々木 誠	工学部
11		立原 聖子	保健管理センター
12		立身 政信	保健管理センター
13		早坂 浩志	保健管理センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H 2 4)

履修区分	授業科目名	備考
健康・ス ポーツ科目	健康・スポーツA	
	健康・スポーツB	
	健康・スポーツC (シーズン)	集中講義

情報基礎分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	藤本 忠博	工学部
2		遠藤 教昭	人文社会科学部
3		五味 壮平	人文社会科学部
4		白倉 孝行	人文社会科学部
5		天木 桂子	教育学部
6		井上 祥史	教育学部
7		宮川 洋一	教育学部
8		明石 卓也	工学部
9		小栗栖 太郎	工学部
10		小山 猛	工学部
11		佐藤 拓己	工学部
12		清水 友治	工学部
13		鈴木 正幸	工学部
14		関本 英弘	工学部
15		出戸 秀明	工学部
16		中谷 直司	工学部
17		平山 貴司	工学部
18		本間 尚樹	工学部
19		松山 克胤	工学部
20		山口 明	工学部
21		伊藤 幸男	農学部
22		伊藤 芳明	農学部
23		折笠 貴寛	農学部
24		佐藤 至	農学部
25		鈴木 忠彦	農学部
26		関野 登	農学部
27		立川 史郎	農学部
28		築城 幹典	農学部
29		塚本 知玄	農学部
30		三浦 靖	農学部
31		三宅 諭	農学部
32		今井 潤	地域連携推進センター
33		中西 貴裕	情報メディアセンター
34		吉田 等明	情報メディアセンター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
情報科目	情報基礎	

思想と文化分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	中村 安宏	人文社会科学部
2		池田 成一	人文社会科学部
3		音喜多 信博	人文社会科学部
4		海妻 径子	人文社会科学部
5		佐藤 芳彦	人文社会科学部
6		樋口 知志	人文社会科学部
7		開 龍美	人文社会科学部
8		藤本 幸二	人文社会科学部
9		宇佐美 公生	教育学部
10		菅野 文夫	教育学部
11		今野 日出晴	教育学部
12		佐藤 由紀男	教育学部
13		武田 京子	教育学部
14		室井 麗子	教育学部
15		安井 もゆる	教育学部
16		藪 敏裕	教育学部
17		古賀 潔	農学部
18		江本 理恵	大学教育総合センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
人間と文化	哲学の世界	
	倫理学の世界	
	日本の思想と文化	
	アジアの思想と文化	
	欧米の思想と文化	
	日本の歴史と文化	
	アジアの歴史と文化	
	欧米の歴史と文化	
	ジェンダーの歴史と文化	
	女性と科学の関係史	新規科目
	大学の歴史と現在	
	岩手大学ミュージアム学	
	人類の歴史と地球の現在	
	日本事情 A	
	日本事情 B	
	思想と文化	

心と表象分科会名簿

	氏 名	専任担当
1	代表者 神 常雄	教育学部
2	家井 美千子	人文社会科学部
3	織田 信男	人文社会科学部
4	小島 聡子	人文社会科学部
5	佐藤 正恵	人文社会科学部
6	中里 まき子	人文社会科学部
7	松岡 和生	人文社会科学部
8	山口 浩	人文社会科学部
9	山本 昭彦	人文社会科学部
10	阿久津 洋巳	教育学部
11	我妻 則明	教育学部
12	阿部 裕之	教育学部
13	岩木 信喜	教育学部
14	牛渡 克之	教育学部
15	大河原 清	教育学部
16	大野 眞男	教育学部
17	川口 明子	教育学部
18	菊地 悟	教育学部
19	木村 直弘	教育学部
20	近藤 克義	教育学部
21	境野 直樹	教育学部
22	佐々木 正利	教育学部
23	重野 和彦	教育学部
24	白石 文子	教育学部
25	煤孫 康二	教育学部
26	田中 隆充	教育学部
27	玉澤 友基	教育学部
28	平田 光彦	教育学部
29	宮崎 眞	教育学部
30	本村 健太	教育学部
31	山崎 浩二	教育学部
32	山本 奨	教育学部
33	藁谷 収	教育学部
34	立原 聖子	保健管理センター
35	早坂 浩志	保健管理センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
人間と文化	心の理解	
	日本の文学	
	言葉の世界	
	中国の文学	
	欧米の文学	

平成 24 年度分科会メンバー表・開講科目一覧

欧米の言語論	
芸術の世界	
日本語表現技術入門	
心と表象	

公共社会分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	横山 英信	人文社会科学部
2		井上 博夫	人文社会科学部
3		内田 浩	人文社会科学部
4		江原 勝行	人文社会科学部
5		小野澤 章子	人文社会科学部
6		菊池 孝美	人文社会科学部
7		杭田 俊之	人文社会科学部
8		齊藤 彰一	人文社会科学部
9		笹尾 俊明	人文社会科学部
10		鈴木 護	人文社会科学部
11		高橋 宏一	人文社会科学部
12		田口 典男	人文社会科学部
13		塚本 善弘	人文社会科学部
14		西牧 正義	人文社会科学部
15		深澤 泰弘	人文社会科学部
16		藤本 幸二	人文社会科学部
17		藤原 千沙	人文社会科学部
18		松岡 勝実	人文社会科学部
19		丸山 仁	人文社会科学部
20		宮本 ともみ	人文社会科学部
21		遠藤 匡俊	教育学部
22		菊地 洋	教育学部
23		佐藤 眞	教育学部
24		岩渕 明	工学部
25		鈴木 忠彦	農学部
26		小野寺 純治	地域連携推進センター
27		早川 智津子	国際交流センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
人間と社会	市民生活と法	
	憲法	
	経済のしくみ	
	現代社会と経済	
	市民と政治	
	現代政治を見る眼	
	社会的人間論	
	地域と生活	
	地域と社会	
	対人関係の心理学	
	知的財産入門	集中講義
	著作権法概論	
	知財ワークショップ	集中講義

平成 24 年度分科会メンバー表・開講科目一覧

持続可能なコミュニティーづくり実践学	
地元の企業に学ぶE S D	
社会と知的財産	
公共社会	

現代の諸問題分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	三井 隆弘	教育学部
2		小野澤 章子	人文社会科学部
3		海妻 径子	人文社会科学部
4		川崎 秀二	人文社会科学部
5		竹村 祥子	人文社会科学部
6		遠藤 孝夫	教育学部
7		滝吉 美知香	教育学部
8		田代 高章	教育学部
9		立花 正男	教育学部
10		塚野 弘明	教育学部
11		土屋 明広	教育学部
12		土屋 直人	教育学部
13		土井 宣夫	教育学部
14		名古屋 恒彦	教育学部
15		新妻 二男	教育学部
16		藤井 知弘	教育学部
17		HALL JAMES	教育学部
18		麦倉 哲	教育学部
19		渡瀬 典子	教育学部
20		小山 猛	工学部
21		平井 寛	工学部
22		岡田 啓司	農学部
23		佐藤 和憲	農学部
24		大川 一毅	評価室
25		岡本 崇宅	大学教育総合センター
26		岡崎 正道	国際交流センター
27		松岡 洋子	国際交流センター
28		田中 吉兵衛	教員養成機構

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
人間と社会	現代社会の社会学	
	キャリアを考える	
	多文化コミュニケーションA	
	多文化コミュニケーションB	
	地場産業・企業論	集中講義
	ボランティアとリーダーシップ	新規科目、集中講義
	現代の諸問題	

生物の世界分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	西山 賢一	農学部
2		荒木 功人	工学部
3		一ノ瀬 充行	工学部
4		坂田 和実	工学部
5		富田 浩史	工学部
6		松浦 哲也	工学部
7		山口 昌樹	工学部
8		若林 篤光	工学部
9		居在家 義昭	農学部
10		磯貝 雅道	農学部
11		磯部 公安	農学部
12		板垣 匡	農学部
13		上村 松生	農学部
14		宇塚 雄次	農学部
15		岡村 泰彦	農学部
16		片山 泰章	農学部
17		加藤 一幾	農学部
18		河村 幸男	農学部
19		木村 賢一	農学部
20		黒田 榮喜	農学部
21		小森 貞男	農学部
22		御領 政信	農学部
23		斎藤 靖史	農学部
24		佐川 了	農学部
25		佐々木 淳	農学部
26		佐藤 繁	農学部
27		佐藤 れえ子	農学部
28		佐原 健	農学部
29		澤井 健	農学部
30		島村 俊介	農学部
31		下野 裕之	農学部
32		白旗 学	農学部
33		壽松木 章	農学部
34		高畑 義人	農学部
35		立澤 文見	農学部
36		立石 貴浩	農学部
37		谷口 和之	農学部
38		堤 賢一	農学部
39		長澤 孝志	農学部
40		中牟田 信明	農学部
41		橋爪 一善	農学部
42		橋爪 力	農学部
43		平田 統一	農学部

44	古市 達哉	農学部
45	古濱 和久	農学部
46	松原 和衛	農学部
47	宮崎 雅雄	農学部
48	村上 賢二	農学部
49	村元 隆行	農学部
50	安田 準	農学部
51	山岸 則夫	農学部
52	山田 美鈴	農学部
53	山田 美和	農学部
54	山本 欣郎	農学部
55	横井 修司	農学部
56	RAHMAN ABIDUR	農学部
57	渡邊 学	農学部

全学共通教育科目 開講一覧 (H 2 4)

履修区分	授業科目名	備考
人間と自然	生命のしくみ	後期 1 クラスは放送大学科目
	生物の世界	

自然と数理の世界分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	八木 一正	教育学部
2		石垣 剛	人文社会科学部
3		尾臺 喜孝	人文社会科学部
4		川崎 秀二	人文社会科学部
5		河田 裕樹	人文社会科学部
6		北爪 英一	人文社会科学部
7		奈良 光紀	人文社会科学部
8		西崎 滋	人文社会科学部
9		花見 仁史	人文社会科学部
10		三浦 康秀	人文社会科学部
11		吉村 泰樹	人文社会科学部
12		押切 源一	教育学部
13		川田 浩一	教育学部
14		重松 公司	教育学部
15		武井 隆明	教育学部
16		土井 宣夫	教育学部
17		土谷 信高	教育学部
18		中村 好則	教育学部
19		藤井 義久	教育学部
20		本田 卓	教育学部
21		山崎 浩二	教育学部
22		岩淵 明	工学部
23		宇井 幸一	工学部
24		小笠原 敏記	工学部
25		長田 洋	工学部
26		鎌田 康寛	工学部
27		小林 宏一郎	工学部
28		小林 悟	工学部
29		是永 敏伸	工学部
30		坂田 和実	工学部
31		嶋田 和明	工学部
32		鈴木 映一	工学部
33		高木 浩一	工学部
34		高橋 和貴	工学部
35		谷口 宏	工学部
36		田野崎 真司	工学部
37		内藤 智之	工学部
38		中村 満	工学部
39		成田 晋也	工学部
40		萩原 義裕	工学部
41		藤原 民也	工学部
42		三好 扶	工学部
43		三輪 讓二	工学部

44	向川 政治	工学部
45	八代 仁	工学部
46	吉澤 正人	工学部
47	鈴木 忠彦	農学部
48	三輪 弼	農学部
49	小川 薫	地域連携推進センター
50	木村 毅	地域連携推進センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
人間と自然	自然のしくみ	
	自然と数理	
	数理のひろがり	
	宇宙のしくみ	
	物質の世界	
	自然と法則	
	自然と数理の世界	

科学技術分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	柳岡 英樹	工学部
2		山崎 浩二	教育学部
3		會澤 純雄	工学部
4		安倍 正人	工学部
5		叶 榮彬	工学部
6		伊藤 歩	工学部
7		井山 俊郎	工学部
8		岩崎 正二	工学部
9		内館 道正	工学部
10		瓜生 誠司	工学部
11		大石 好行	工学部
12		大西 弘志	工学部
13		岡 英夫	工学部
14		小川 智	工学部
15		小山田 哲也	工学部
16		門磨 義浩	工学部
17		兼岩 憲	工学部
18		菊池 弘昭	工学部
19		木村 彰男	工学部
20		厚井 裕司	工学部
21		越谷 信	工学部
22		今野 晃市	工学部
23		堺 茂樹	工学部
24		佐藤 淳	工学部
25		佐藤 宏明	工学部
26		佐藤 信	工学部
27		芝崎 祐二	工学部
28		嶋田 和明	工学部
29		末永 陽介	工学部
30		関本 英弘	工学部
31		大坊 真洋	工学部
32		谷口 英夫	工学部
33		谷口 宏	工学部
34		千葉 則茂	工学部
35		恒川 佳隆	工学部
36		土岐 規仁	工学部
37		永田 仁史	工学部
38		中西 良樹	工学部
39		七尾 英孝	工学部
40		西川 尚宏	工学部
41		西館 数芽	工学部
42		西谷 泰昭	工学部
43		西村 文仁	工学部

44	西山 清	工学部
45	羽原 俊祐	工学部
46	晴山 巧	工学部
47	平塚 貞人	工学部
48	平原 英俊	工学部
49	廣瀬 宏一	工学部
50	福江 高志	工学部
51	藤岡 豊太	工学部
52	藤代 博之	工学部
53	藤田 尚毅	工学部
54	藤本 忠博	工学部
55	船崎 健一	工学部
56	細貝 拓也	工学部
57	松川 倫明	工学部
58	三浦 健司	工学部
59	水野 雅裕	工学部
60	水本 将之	工学部
61	南 一郎	工学部
62	村岡 宏樹	工学部
63	森 誠之	工学部
64	山口 明	工学部
65	山口 勉功	工学部
66	山田 弘	工学部
67	山中 克久	工学部
68	山本 英和	工学部
69	湯川 俊浩	工学部
70	横田 政晶	工学部
71	吉野 泰弘	工学部
72	吉原 信人	工学部
73	吉本 則之	工学部
74	吉森 久	工学部
75	盧 忻	工学部
76	脇 裕之	工学部
77	武田 純一	農学部
78	原澤 亮	農学部
79	山下 哲郎	農学部
80	比屋根 哲	連合農学研究科
81	対馬 正秋	地域連携推進センター

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
人間と自然	科学と技術の歴史	
	くらしと科学技術	
	科学技術	

環境分科会名簿

		氏 名	専任担当
1	代表者	河合 成直	農学部
2		井上 博夫	人文社会科学部
3		竹原 明秀	人文社会科学部
4		西崎 滋	人文社会科学部
5		開 龍美	人文社会科学部
6		松岡 勝実	人文社会科学部
7		丸山 仁	人文社会科学部
8		宇佐美 公生	教育学部
9		内山 三郎	教育学部
10		梶原 昌五	教育学部
11		金澤 俊成	教育学部
12		菊地 洋一	教育学部
13		菅原 悦子	教育学部
14		土谷 信高	教育学部
15		長澤 由喜子	教育学部
16		中村 一基	教育学部
17		名越 利幸	教育学部
18		三井 隆弘	教育学部
19		山崎 浩二	教育学部
20		石川 奈緒	工学部
21		海田 輝之	工学部
22		大河原 正文	工学部
23		大塚 尚寛	工学部
24		鴨志田 直人	工学部
25		齊藤 貢	工学部
26		清水 健司	工学部
27		中澤 廣	工学部
28		成田 榮一	工学部
29		晴山 涉	工学部
30		松林 由里子	工学部
31		南 正昭	工学部
32		青井 俊樹	農学部
33		東 淳樹	農学部
34		安 嬰	農学部
35		伊藤 菊一	農学部
36		井良沢 道也	農学部
37		岡田 秀二	農学部
38		岡田 益己	農学部
39		小田 伸一	農学部
40		木崎 景一郎	農学部
41		喜多 一美	農学部
42		木下 幸雄	農学部
43		國崎 貴嗣	農学部

44	倉島 栄一	農学部
45	小出 章二	農学部
46	小林 沙織	農学部
47	小藤田 久義	農学部
48	颯田 尚哉	農学部
49	佐野 宏明	農学部
50	澤口 勇雄	農学部
51	庄野 浩資	農学部
52	関野 登	農学部
53	出口 善隆	農学部
54	橋本 良二	農学部
55	濱上 邦彦	農学部
56	廣田 純一	農学部
57	前田 武己	農学部
58	松木 佐和子	農学部
59	松嶋 卯月	農学部
60	三宅 諭	農学部
61	武藤 由子	農学部
62	山本 清龍	農学部
63	山本 信次	農学部
64	山本 清二	農学部
65	吉川 信幸	農学部

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
環境教育 科目	「環境」を考える	
	生活と環境	
	都市と環境	
	地域の環境保全を考える	
	地球環境と社会	
	水と環境	
	廃棄物と環境	
	植物栽培と環境テクノロジー	
	森林と環境	
	動物と環境	
	人の暮らしと生物環境	
	環境マネジメントと岩手大学	

総合科目

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
総合科目	文化の伝統と現在	
	コミュニケーションの現在	
	現代社会をみる視角	
	岩手の研究	
	これからの健康科学	
	科学技術と現代社会	
	現代職業選択論	
	岩手大学論	
	図書館への招待	
	宮沢賢治の思想と文学	
	環境マネジメント実践学	
	いわて学Ⅰ	集中講義
	いわて学Ⅱ	集中講義
	国際研修－エネルギーと持続可能な社会－	新規科目、集中講義
総合科目特別講義		

高年次課題科目

全学共通教育科目 開講一覧 (H24)

履修区分	授業科目名	備考
高年次課題科目	男女共同参画の実践を学ぶ	集中講義
	都市の自然再生プランニング	
	北上川流域学実習	集中講義
	津波の実際から防災を考える	集中講義
	環境都市盛岡づくりプロジェクト	
	社会のなかの法律問題を考える	
	日本の文化・社会と国際ボランティア	
	高年次課題科目特別講義Ⅰ	
	高年次課題科目特別講義Ⅱ	放送大学科目 (問題解決の進め方)

平成24年度 分科会FD担当責任者名簿

外国語分科会	金子 百合子
健康・スポーツ分科会	清水 将
情報基礎分科会	藤本 忠博
思想と文化分科会	菅野 文夫
心と表象分科会	大河原 清
公共社会分科会	藤本 幸二
現代の諸問題分科会	土屋 明広
生物の世界分科会	御領 政信
自然と数理の世界分科会	八木 一正
科学技術分科会	柳岡 英樹
環境分科会	梶原 昌五

平成24年度総合科目企画・実施委員会委員名簿

全学共通教育部門長 (分科会からの代表)	横山 英信
外国語分科会	秋田 淳子
健康・スポーツ分科会	澤村 省逸
情報基礎分科会	藤本 忠博
思想と文化分科会	江本 理恵
心と表象分科会	近藤 克義
公共社会分科会	笹尾 俊明
現代の諸問題分科会	竹村 祥子
生物の世界分科会	松原 和衛
自然と数理の世界分科会	八木 一正
科学技術分科会	柳岡 英樹
環境分科会	木崎 景一郎
(授業担当者(代表))	
文化の伝統と現代	秋田 淳子
コミュニケーションの現在	橋本 学
現代社会をみる視角	西牧 正義
岩手の研究	横山 英信
これからの健康科学	澤村 省逸
科学技術と現代社会	小野寺 英輝
現代職業選択論	
岩手大学論	江本 理恵
図書館への招待	
宮澤賢治の思想と文化	山本 昭彦
岩手大学の環境マネジメント	梶原 昌五
いわて学Ⅰ・Ⅱ	(岩手県立大学が実施)
国際研修ーエネルギーと持続可能な社会ー	尾中 夏美
総合科目特別講義(危機管理と復興)	後藤 尚人

〈平成24年度検証後〉

分科会教育目標及び成績評価基準のガイドライン

「外国語」分科会

(1) 教育目標

1) 英語

「英語」は、学生の習熟度に応じ、a) 十分な英語力を身につけていない学生に対しては、英文法や基礎的表現の復習を通して、読み書きの基礎的な能力、および簡単な日常会話ができるコミュニケーション能力を育成し、b) 基礎的な運用能力を身につけている学生に対しては、各学問分野の入門的な書物を十分に読みこなせる読解力、平易な英語を使って正しく書ける作文力、身近な話題について説明したり意見を述べたりすることができる能力を養い、c) 高度な学力を有する学生に対しては、各学問分野のより精緻な英文や時事英語を早く正しく読める読解力、様々なトピックについて、明確な英語を用いて自分の意見を書くことができる作文力、さらには自分の意思や意見を十分に表現できるスピーチ能力やプレゼンテーション能力の育成を図る。また、全ての授業を通して異文化理解の促進を図る。

2) 英語以外の外国語

「英語以外の外国語」は、

- a) 日常生活に必要な簡単な会話ができるようにすること
- b) 外国語の基礎的な文法を習得し、簡単な文章を読むことができるようにすること
- c) 日常生活で使う簡単な文章を書けるようにすること
- d) 外国語学習を通して、異文化理解の基礎的知識を獲得すること

の4点を身につけることを教育目標とする。具体的には、初級では「入門・発展」を修めることにより各語学検定試験の4級程度、また中級では3級程度をマスターしたと認められる程度のレベルをめざす。

3) 日本語

「日本語」は、受講学生（外国人留学生）が既に初中級レベルの日本語をマスターしていることを前提に、上級レベルの会話・読解・作文等の指導を行うこととしております。日本人学生や教師、一般市民等と十分な会話を交わすことができ、日本語の新聞・雑誌・教科書等を概ね読むことができ、作文やレポートも日本人学生にあまり劣らない程度に書くことができるという日本語力を修得させることを教育目標としてめざします。

(2) 授業科目の位置づけと到達目標

1) 英語

- ・英語総合Ⅰ（初級），英語総合Ⅱ（初級）
 - 十分な英語力を身に付けていない学生を対象にして、「読むこと」と「書くこと」を中心に
して英語力の向上を図る。
- ・英語コミュニケーションⅠ（初級），英語コミュニケーションⅡ（初級）
 - 十分な英語力を身に付けていない学生を対象にして、「聞くこと」と「話すこと」を中心に
して英語力の向上を図る。
- ・英語総合Ⅰ（中級），英語総合Ⅱ（中級）
 - 基礎的な英語力を身に付けている学生を対象にして、「読むこと」と「書くこと」を中心に
して英語力の更なる向上を図る。
- ・英語コミュニケーションⅠ（中級），英語コミュニケーションⅡ（中級）
 - 基礎的な英語力を身に付けている学生を対象にして、「聞くこと」と「話すこと」を中心に
して更なる英語力の向上を図る。
- ・英語総合Ⅰ（上級），英語総合Ⅱ（上級）
 - 高度な英語力を身に付けている学生を対象にして、「読むこと」と「書くこと」を中心にし
て英語力の更なる向上を図る。
- ・英語コミュニケーションⅠ（上級），英語コミュニケーションⅡ（上級）
 - 高度な英語力を身に付けている学生を対象にして、「聞くこと」と「話すこと」を中心にし
て更なる英語力の向上を図る。

2) 英語以外の外国語

- ・初級ドイツ語（入門），初級フランス語（入門），初級ロシア語（入門），初級中国語（入門），初級韓国語（入門）
 - それぞれの言語について，文法と発音，および「読む」「書く」「聞く」「話す」の基本的な
力を養う。
- ・初級ドイツ語（発展），初級フランス語（発展），初級ロシア語（発展），初級中国語（発展），初級韓国語（発展）
 - それぞれの言語について，文法と発音，および「読む」「書く」「聞く」「話す」の基本的な
力を発展させ，各語学検定試験の4級程度の力を養う。
- ・中級ドイツ語，中級フランス語，中級ロシア語，中級中国語，中級韓国語
 - それぞれの言語において基礎的能力を身に付けた者に対して，文法と発音，および「読む」「書く」「聞く」「話す」の基本的な力を発展させ，各語学検定試験の3級程度の力を養う。

3) 日本語

- ・上級日本語 A, 上級日本語 E
 - 口頭表現（プレゼンテーション, 討論, 高度な会話）の能力を養う。
- ・上級日本語 B, 上級日本語 F
 - アカデミックリーディング（論文, 資料読解）の能力を養う。
- ・上級日本語 C, 上級日本語 G
 - 文系・理系別専門日本語（基礎専門用語）の能力を養う。
- ・上級日本語 D, 上級日本語 H
 - アカデミックライティング（論文, レポート作成）の能力を養う。
- ・各授業は技能別に編成され, それぞれ日本語能力試験 1 級合格以上の知識, 技能と基礎的なアカデミックジャパニーズ（専門日本語）の習得を到達目標とする。すなわち, 高度の文法・漢字（2,000 字以上）, 語彙（10,000 語以上）を習得し, 大学生活を送る上で必要な総合的な日本語の知識・技能を習得させることを到達目標とする。

(3) 成績評価基準のガイドライン

1) 英語

出席, 授業中の言語活動（積極的な参加）, 課題, 試験（ミニテストなども含む）の結果を総合的に判断し, 上級, 中級, 初級のレベルごとに設定された目標（下記参照）に照らし合わせて成績を付ける。

- ・英語総合 I（初級）, 英語総合 II（初級）
 - 英文法の知識や基礎的表現力が身に付き, 基礎的な読み書き能力が身に付く。
- ・英語コミュニケーション I（初級）, 英語コミュニケーション II（初級）
 - 英語を使って簡単な日常会話ができる程度のコミュニケーション能力が身に付く。
- ・英語総合 I（中級）, 英語総合 II（中級）
 - 各学問分野の入門的な書物など比較的レベルの高いテキストを読みこなせる読解力があり, また平易な英語を使って正しく書ける作文力がある。
- ・英語コミュニケーション I（中級）, 英語コミュニケーション II（中級）
 - 英語を使って, 身近な話題について説明したり意見を述べたりできる能力がある。
- ・英語総合 I（上級）, 英語総合 II（上級）
 - 各学問分野のより精緻な英文や時事英語などのテキストを早く正しく読める読解力, 様々なトピックについて, 明確な英語を用いて自分の意見を書くことができる作文力が身に付く。
- ・英語コミュニケーション I（上級）, 英語コミュニケーション II（上級）
 - 英語を使って自分の意思や意見を十分に表現できるスピーチ能力やプレゼンテーション能力が身に付く。

2) 英語以外の外国語

それぞれの段階で、定期試験、小テスト、出席、それ以外の平常点などの中から2つ以上の基準をもって多角的に判断する。

3) 日本語

出席、授業参加態度、課題の3つの観点から総合的に評価する。教員の意見を一方的に聞くだけでなく、授業に積極的に参加し、課される課題に対して十分に取り組み、成果を示すことに対して評価を行う。

成績評価は以下のように行う。

「秀」：出席の基準を満たし、授業に積極的に関与し、課題に対して授業を通じて得た知識を生かして自らの知見を十分に表現した。

「優」：出席、授業態度が優秀で、授業中に得た知識を十分に活用して課題に取り組んだ。

「良」：出席、授業態度が良好で、授業内容を十分理解し、課題に取り組んだ。

「可」：出席、授業態度に問題がなく、授業内容をある程度理解し、課題に取り組んだ。

「健康・スポーツ」分科会

(1) 教育目標

健康・スポーツ科目は、スポーツの実践を通して、健康と体力の保持増進を図るとともにコミュニケーション能力を高め、スポーツの科学的方法やスポーツ文化についても理解を深め、生涯スポーツ社会の実現に対応できる実践力を育てることを教育目標とします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

評価方法	割合	評価の観点				評価の具体的な基準	
		関心・意欲・態度	知識・理解	技能・表現	志向・判断		
健康・スポーツA	平常点	75%	◎	○	○	○	S:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に大いに取り組んでいる。 A:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 B:授業に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 C:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みが少し不足している。 D:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みが全く不足している。
	課題	25%		◎	○	○	S:課題・レポートの内容がかなり秀でている。 A:課題・レポートの内容が秀でている。 B:課題・レポートの内容が普通である。 C:課題・レポートの内容が低い。 D:課題・レポートの内容がかなり低い。
健康・スポーツB	平常点	75%	◎	○	○	○	S:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に大いに取り組んでいる。 A:授業に積極的に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 B:授業に参加し協力してスポーツの実践に取り組んでいる。 C:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みが少し不足している。 D:授業に参加し協力してスポーツを実践する取り組みが全く不足している。
	課題	25%		◎	○	○	S:課題・レポートの内容がかなり秀でている。 A:課題・レポートの内容が秀でている。 B:課題・レポートの内容が普通である。 C:課題・レポートの内容が低い。 D:課題・レポートの内容がかなり低い。
健康・スポーツC	平常点	75%	◎	○	○	○	S:集中講義に積極的に参加し協力して冬季スポーツの実践に大いに取り組んでいる。 A:集中講義に積極的に参加し協力して冬季スポーツの実践に取り組んでいる。 B:集中講義に参加し協力して冬季スポーツの実践に取り組んでいる。 C:集中講義に参加し協力して冬季スポーツを実践する取り組みが少し不足している。 D:集中講義に参加し協力して冬季スポーツを実践する取り組みが全く不足している。
	課題	25%		◎	○	○	S:課題・レポートの内容がかなり秀でている。 A:課題・レポートの内容が秀でている。 B:課題・レポートの内容が普通である。 C:課題・レポートの内容が低い。 D:課題・レポートの内容がかなり低い。

平常点・課題のうち、「D」がある場合は不可とする。

「情報基礎」分科会

(1) 教育目標

「情報基礎」は、高度情報通信社会において主体的に学生生活、社会生活を送る上で必要とされる基礎・基本的な能力を育成するために開設された科目です。

この科目は、情報及び情報手段を活用できる基礎的な知識や技能を習得することを通して、情報や情報手段を適切に取捨選択し意思決定するために必要な見方や考え方を身につけること、さらには、情報化の進展が人間や社会に及ぼす影響を理解して今後の情報社会に参画する上で望ましい態度を身につけることを教育目標としています。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 授業の目的

授業の目的にあたっては、分科会の教育目標に従って、この授業科目を学ぶ目的を、授業を行う側の視点から明記する。

全学共通教育の基礎としての部分で、「情報及び情報手段を活用できる基礎的な知識や技能を習得すること」「情報や情報手段を適切に取捨選択し意思決定するために必要な科学的な見方や考え方を身につけること」「今後の情報社会を参画する上で望ましい能力と態度を身につけること」は共通する授業の目的であると考えられる。

しかし、同時に専門教育の基礎として、最終的にどのようなことができるようになって欲しいのか（「実験データを分析し、レポートを作成する」という場面において、エクセルやワード等を適切に選択し利用して、目的を達成できるようになって欲しいのか、「授業で用いる教材を作成する」という場面において、ワードやパワーポイント等を適切に選択し利用して目的を達成できるようになって欲しいのか、など）については、各学部、学科ごとに今後の専門教育との関連を明らかにし、検討した上で決定し、明記することとする。

2) 到達目標

授業の目的に沿って、今度は、具体的に「学生が何をできるようになるのかを自分自身で確認できるような形で」到達目標を記述する。授業の目的が、授業をする側（教員側）からの視点で書かれたものであれば、到達目標は、学生側の視点で書かれたものとなる。その意味では、学生自身の自主学習に対する指針ともなるべき部分である。

上記の「授業の目的」と関連して、「情報及び情報手段を活用できる基礎的な知識や技能を習得」でどの程度の知識や技能を習得しなければならないのか（ワード、エクセルを使える、UNIXの基本的なコマンドが使える、など）、「情報や情報手段を適切に取捨選択し意思決定するために必要な見方や考え方を身につける」ために、どのような題材を学習し、どこまでできるようにならなければいけないのか（「実験データを分析し、レポートを作成する」という課題において、エクセルやワード等を適切に選択し利用して時間内に目的を達成できる、「授業で用いる教材を作成する」という課題において、ワードやパワーポイント等を適切に選択し利用して時間内に目的を達成できる、など）、「情報化の進展が人間や社会に及ぼす影響を理解」でどのような理解を求めるのか（開発者の立場から人間や社会に及ぼす影響を考えるのか、ユーザ（消費者）の立場から考えるのか、

など) など、具体的な到達点として何を要求するのかについては、各学部、学科ごとに今後の専門教育との関連を明らかにし、検討した上で具体的に示すようにする。

情報基礎分科会においては、この「到達目標」を明確にすることが要求されている。少なくとも、同じ学部もしくは学科内では、一定の到達目標を持つ必要がある。

3) 成績評価の方法と基準

○成績評価方法

出席点(授業に出席したことによる点数)は不可だが、平常点として、授業中に実施した課題(指示されたことができたかどうか)による評価を加えることは十分に考えられる。また、実践的な能力を身につけることを目指す意味より、最終テストによる評価だけではなく、できる限り、通常の授業及び授業時間以外に学生が行う課題を評価方法として加えるようにする。

○観点

- ・それぞれの評価方法に対して、複数の観点からの評価を行うことを意識する。
(人間の身体を測定するのに、身長(長さ)を測定したり、体重(重さ)を測定したりするように、できるだけ色々な観点で測定した方が実態に近づける、という考え方に基づく。)
- ・4つの観点(「関心・意欲」「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」)をバランス良く含むこと。
- ・「知識・理解」もしくは「技能・表現」だけに偏らないように配慮すること。
- ・情報基礎では、特に「思考・判断」(自分で選択できる)の観点を取り入れ、そのような実習を行わせるようにする。

○基準

- ・それぞれの「方法」において、具体的に何をどのように評価するのかを明記すること。
- ・それぞれの「方法」において、全体(100%)に対して、どのぐらいの割合(例えば30%など)を占めるものなのかを明記すること。

○秀, 優, 良, 可

設定した到達目標に照らし合わせて、「秀」「優」「良」「可」の基準を明記すること。例えば、「秀:与えられた課題に対して、使うソフトウェアを自分で選択して時間内に解決できる」、「優:与えられた課題に対して、使うソフトウェアの候補を指示すれば、その中から選択して、時間内に解決できる」など、それぞれの「到達目標」に照らし合わせておおよその「像」を示すこと。

特に「可」の学生は最低限どの程度の能力が身につけているのかについては、できる限り明記すること。

情報基礎分科会では、「到達目標への達成度を基準とした絶対評価」を行うことを基本とするが、秀, 優, 良, 可のバランスが極端にならないよう(ほぼ全員が秀, ほぼ全員が不可など), 常に到達目標及び評価の基準を見直すこととする。

「思想と文化」分科会

(1) 教育目標

「思想と文化」は、人間と思想・文化との関係を主題とする教養科目です。

すなわち、これは、主として思想・文化・歴史の観点から、人間の生み出す思想と文化およびその歴史をめぐるさまざまな問題を主題として扱う科目です。この科目では、学生の皆さんが現代の思想や文化に特徴的な課題や、それを理解するために必要な歴史的な課題にふれるとともに、あわせて思想・歴史・文化にかかわる学問分野に特有の「ものの見方・考え方」にもふれることを通じて、教養科目全体としての教育目標〔特に①と②〕の達成をめざします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 到達目標

- ・学生の皆さんが、思想・文化・歴史にかかわる学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことができるようになる。
- ・学生の皆さんが、あらゆる学問分野の基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すための、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、思想・文化・歴史との関係において、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことができるようになる。

2) 成績評価基準

(A)成績評価の方法について

- ・現行のシラバス手引き等にある評価項目をふまえて評価を行うが、個々の授業科目において評価方法の選択の余地が実質的に残されるよう配慮する。
- ・評価項目としては、出席、テスト、レポート、レスポンスカードなど、共通の評価項目を踏まえて評価していく。
- ・各評価項目の重みづけについては、授業担当者が自身で決定できるものとする。

(B)成績評価の基準について

- ・シラバスで定めた「到達目標」の達成度を基準として成績評価を行う。

評価	基準
秀	所期の「到達目標」にほぼ完全に達しているか、または傑出した水準に達している。
優	やや問題はあるが、所期の「到達目標」に十分に達している。80～89点に対応。
良	誤りや不十分な点があるが、所期の「到達目標」にかなりの程度まで達している。70～79点に対応。
可	所期の「到達目標」に最低限ではあるが達している。60～69点に対応。
不可	単位を与えるためにはさらに勉強が必要である。60点未満に対応。

「心と表象」分科会

(1) 教育目標

「心と表象」は、人間の心の世界とその具体的な表れ（表象）としての言葉・文学・芸術の世界を主題とする教養科目です。すなわち、これは心の世界、言葉と文学の世界、芸術の世界の諸相とその背景にある諸問題を主題として扱う科目です。

この科目では、学生の皆さんが、人間の心に関する諸問題と人間の表象（表現）活動としての言葉、文学および芸術の諸相を理解するとともに、あわせて心、言葉、文学、芸術にかかわる学問分野に特有の「ものの見方・考え方」にもふれることを通じて、教養科目全体としての教育目標 [特に①と②] の達成をめざします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 到達目標

- a) 学生の皆さんが、心の世界、言葉と文学の世界、芸術の世界にかかわる学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことができるようにする。
- b) 学生の皆さんが、あらゆる学問分野の基盤となっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すための、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、心の世界、言葉と文学の世界、芸術の世界との関係において、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら養うことができるようにする。

2) 成績評価基準のガイドライン

- a) 科目間の不均衡をさけるため、各授業担当者は、成績評価が（ほぼ全員がAとかDなど）極端に偏らないよう配慮する（この点はシラバス等には記載しない）。
- b) 各授業担当者は、担当科目の成績評価の方法と基準をあらかじめシラバスに明示する。[シラバスに入力する成績評価の方法と基準は、基本的にアイアシスタントでのシラバス入力の手順に準拠する。]
- c) 評価方法の項目としては、①試験、②レポート、③講義への貢献度（出席回数、課題発表、質疑・討論等）、④その他講義内容に応じ各担当教官が指示した事項、が挙げられるが、これらの中から各授業担当者が授業の内容に応じて、できるだけ複数の評価方法を適宜選択し、シラバスに明示する。

「公共社会」分科会

(1) 教育目標

「公共社会」分科会は、個々人の単なる集合ではなく、人と人との関係を含んだ概念である「社会」を扱う授業科目を担当します。

「公共社会」分科会は、一見混沌としているように見える現代の複雑な社会現象について、その表層部分にのみ注目するのではなく、広い視野をもって個々の社会現象間の連関を認識することを通して、現代社会を科学的に把握するための知識や「ものの見方・考え方」を習得し、もって現代社会に適切に対応し、これからの社会を形成していく市民としての基礎的素養を身につけることを教育目標とします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 成績評価の方法

出席点（授業に出席したことによる点数）のみでの成績評価は行わないこととするが、最終試験・最終レポートだけではなく、出席状況やレスポンスカードの内容、中間試験・中間レポートなども評価の対象とする。

2) 成績評価の基準

- ・秀 — 社会現象・社会問題に関する基礎知識や主要見解を十分に理解するとともに、自分なりの観点で社会現象・社会問題を分析する能力を身につけている。
- ・優 — 社会現象・社会問題に関する基本知識や主要見解を十分に理解するとともに、一定の観点から社会現象・社会問題を分析する能力を身につけている。
- ・良 — 社会現象・社会問題に関する基本知識や主要見解を十分に理解するとともに、社会現象・社会問題を論理立てて説明する能力を身につけている。
- ・可 — 社会現象・社会問題に関する基本知識や主要見解を理解するとともに、社会現象・社会問題の背景を一通り説明することができる。

「現代の諸問題」分科会

(1) 教育目標

「現代の諸問題」は現代社会に生起する様々な問題を主題とする教養科目です。

「日本事情 A・B」においては、留学生を主たる対象とする日本語教育をとおして日本の歴史・文化・風俗等を理解させるとともに、「現代社会の社会学」では、地域社会や現代家族の変容過程を社会的視点から把握することによって「現代をみる眼」の習得を教育目標とします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

「現代の諸問題」分科会は、以下のような成績評価基準と成績評価方法を作成します。

1) 成績評価基準

秀：到達目標（各教員が定める）のすべてにおいて特に高い水準にある。（90点）

優：到達目標のすべてにおいて高い水準に達している。(80点)

良：到達目標をある程度達成している。(70点)

可：到達目標の一部を達成しているが、学習成果が十分でない。(60点)

2) 成績評価方法

平常点 20%

レスポンスカードの内容 40%

期末試験 40%

なお、教員の判断により、レポートを課し、レスポンスカードの得点に含めても良い。

「生物の世界」分科会

(1) 教育目標

「生物の世界」は現代社会に生きている人、すなわちこれから社会にでて生きていこうとしている理科系、文科系を問わず全ての学生に教養としての現代生物学あるいは生命科学を様々な角度から複眼的、鳥瞰的かつ総合的に概説することによって、学生が生命のしくみを日常生活と関連づけて理解し、いのちのあり方を見つめ、改めて自分を知ることができるような講義内容とし、科学的な生命観を養うことを目標とする。

(2) 成績評価基準のガイドライン

「生物の世界」の分科会は以下に示した成績評価基準と成績評価方法を採る。本分科会の教育目標に従い、生命のしくみに対する科学的な「ものの見方・考え方」の習得を測定するために多様な評価方法を採る。

1) ガイドライン

秀：生命のしくみについて十分に理解し、自分なりの観点で生命現象を科学的に分析し、十分に理解する能力を身につけていること。(90点)

優：生命のしくみについて十分に理解し、一定の観点で生命現象を科学的に分析し、理解する能力を身につけていること。(80点)

良：生命のしくみについて理解し、一定の観点で生命現象を科学的に分析し、理解する能力を身につけていること。(70点)

可：生命のしくみについて理解し、科学的に思考する能力を身につけていること。(60点)

不可：上記「可」の到達目標を達していない。

2) 成績評価法

平常点、小テスト、レポート、期末試験等により評価する。これらの成績評価の比重については、担当教員の総合判断による。

「自然と数理の世界」分科会

(1) 教育目標

「自然と数理の世界」分科会は、自然科学的な自然認識の到達点を踏まえつつ、自然科学における各学問分野、とりわけ、数学・物理学・化学の分野を中心として、それぞれの学問分野に特有な基礎的概念と「ものの見方・考え方」の理解を図り、論理的な思考力を養成することを目標とする。

(2) 成績評価基準のガイドライン

「自然と数理の世界」分科会は、以下に示した範囲内で成績評価基準と成績評価方法を作成する。本分科会の教育目標に照らし、基礎的概念と「ものの見方・考え方」の理解や論理的な思考力を測定するために多様な評価方法を採るものとする。

- ※ 到達目標に対応した基準を設定する。どのような到達目標に到達すれば、「秀」、「優」、「良」、「可」なのかを明記する。
- ※ 成績評価の方法を示す。平常点、小テスト、レポート、期末試験など。
- ※ 複数の方法で評価する場合には、それぞれの方法でどのような基準で判定し、およそどのくらいの割合で集計するかを明示する。

「科学技術」分科会

(1) 教育目標

科学技術と人間社会の関わりをテーマに、現代社会の繁栄を担う様々な科学技術開発の歴史と現状そして将来を、社会や経済との関連も含めて理解し、幅広い教養とものの見方・考え方を習得することを目指します。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) 到達目標・・・中世・近世以降の科学と技術の歴史と、先端科学技術（例えば、ロボット、コンピュータ、エレクトロニクス、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、新材料など）の現状を、講義と自宅学習を通じて理解する。さらに、人間社会との関わりの中から科学技術の将来のあるべき姿について、自らの考えをまとめることが出来る能力を習得する。

2) 成績評価の基準

本分科会では以下に示す評価基準で評価する。

- ・これまでの科学と技術の歴史と、先端科学技術のいくつかの分野の歴史と現状を理解出来ているか。（「可」、「良」の評価基準とする）
- ・科学技術の歴史と現状の理解に基づき、将来のあるべき姿について自らの考えをまとめることが出来るか。（「優」、「秀」の評価基準とする）
- ・成績は平常点（レスポンスカードの提出や授業中の発言など）20%、レポートや期末テスト80%で総合評価する。
- ・関連する内容に関する書籍や論文を自ら読んでまとめるレポートを課し、評価に加える。

「環境」分科会

(1) 教育目標

「環境教育科目」は、本学における環境教育の出発点として位置づけられる教育科目です。

この科目では、教育科目全体としての上記の教育目標に沿い、環境に対する幅広い関心と深い認識を促し、環境についての多角的な「考え方」を養うことをめざします。

(2) 成績評価基準のガイドライン

1) ガイドライン

秀：到達目標（各教官が定める）のほぼすべてにおいて特に高い水準に達している。（90点）

優：到達目標のほぼすべてにおいて高い水準に達している。（80点）

良：到達目標をある程度達成している。（70点）

可：到達目標の一部を達成しているが、学習成果が十分でない。（60点）

不可：到達目標を達成していない。

2) 成績評価方法

平常点 20%

レスポンスカード 40%

学期末試験 40%

なお、教員の判断により、レポートを課し、レスポンスカードの得点に含めても良い。

平成20年3月3日

オムニバス方式授業科目の講義間の連携のためのガイドライン

複数の教員が一つの授業科目を担当するいわゆるオムニバス授業は、多角的・学際的視野を学生に提供できるなど長所が多い反面、一つの授業科目としての統一性に欠けるといふ欠点も指摘されてきた。事実、各講義担当者が自分の担当分以外には無関心で、受講者の立場からすると前後に脈絡のないバラバラな話を聞かされたという印象しか残らない授業科目も皆無ではなかったと思われる。

こうした反省を踏まえて、平成17年に大学教育センター全学共通教育企画・実施部門では、総合科目担当者を対象にしたアンケート調査や当時の「総合科目分科会」の検討を経て、「オムニバス方式の学際的な授業科目における講義間の密接な連携について」（平成17年9月）を策定し、総合科目の授業方法の改善に活用してきた。

以下に箇条書きされている新たなガイドラインは、旧「総合科目分科会」に替る「総合科目企画・実施委員会」が従来の指針を再検討するとともに、課題として残された点にも検討を加えて策定したものであり、平成20年度開講科目から活用することとする。

- 1 オムニバス方式授業科目の講義間の連携は以下のような方法で当該科目の代表者を通じて達成を図る。
 - (1) 各授業科目の担当代表者は科目の責任者及びコーディネーターの役割を担い、各科目は、原則として、一人の担当者による通常の科目と同じように担当代表者の科目として扱う。なお、代表者及び授業担当者の教育貢献度等については別途検討する。
 - (2) 担当代表者は授業の目的・到達目標・授業の概要・成績評価基準などについて講義担当者間で共通理解を図り、シラバス記載や成績提出等に責任を持つ。
 - (3) 担当代表者は初回のオリエンテーション等により受講者に対して授業の目的等について周知を図る。
 - (4) 担当代表者は原則として2回程度講義担当者全員を招集して授業の趣旨・内容等について検討会など（授業に組み入れることも可）を開催し、講義担当者全員が授業科目全体の把握に努める。講義担当者に学外者がいる場合も何らかの方法で相互理解を図る。
 - (5) その他、担当代表者は可能な範囲内で他の担当者の講義に出席するなど連携に必要と思われる措置を講ずる。
- 2 各講義担当者は上記の役割を担う代表者に協力するとともに、以下の点に留意する。
 - (1) 各講義担当者は授業科目全体における自分の担当分の位置と意義を十分理解する。
 - (2) アイアシスタントなどの有効活用により、講義内容や学生への配付資料等を担当者間で共有する。
 - (3) その他連携に必要と思われる措置を講じる。
- 3 大学教育総合センターは担当代表者が円滑に役割を果たせるように協力する。
 - (1) 大学教育総合センターは「総合科目企画・実施委員会」を通じてオムニバス方式授業の実施状況を把握する。
 - (2) その他連携に必要と思われる措置を講じる。

平成20年3月3日

「総合科目」の教育目標と成績評価のガイドライン

(1) 教育目標

多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的判断力を学生が自ら培うことを支援する。(『履修の手引き』より)

(2) 成績評価のガイドライン

1) 授業科目の目的

上記の「総合科目」全体の教育目標を踏まえて、授業科目ごとに目的を設定する。

2) 授業科目の到達目標

授業の目的に沿って、「具体的に何を出来るようになるのかを学生自らが確認できる形で」到達目標を記述する。言い換えれば、教員が設定した目的に対して学生は何が出来れば到達したことになるのかを具体的に記述して、自主的な学習の指針を与える。

3) 成績評価の方法と基準

- ・ 到達目標を踏まえた絶対評価とする。
- ・ 期末試験だけでなく、複数の方法で評価する。
- ・ 平常点については出席回数だけではなく、レスポンスカード、iカード等も利用する。
- ・ レポートやテストなども複数の観点(関心・意欲、知識・理解、技能・表現、思考・判断など)から評価する。
- ・ 上記の評価方法について何(平常点、テストなど)をどの程度の割合(例えば平常点30%など)で評価するかを明示する。

4) 授業担当者間の確認

オムニバス形式授業科目では「オムニバス方式授業科目の講義間の連携のためのガイドライン」を踏まえて、成績評価についても一つの授業科目としての統一を図れるよう成績評価基準等を確認する。

第3回 岩手大学全学共通教育シンポジウム

日 時：平成24年12月7日（金）15：00～17：30

場 所：学生センターA棟 G29講義室

テーマ：岩手大学全学共通教育の実施体制の現状と課題

－安定的・継続的な実施のための全学的体制づくりに向けて－

（開催趣旨）

全学共通教育の運営について、現在の分科会体制に変更してから6年が経過しましたが、様々な問題点が蓄積されており、全学共通教育の運営も現状を維持することが難しくなってきました。

今回は、弘前大学の教養教育の実情を参考にしつつ、分科会代表あるいは授業担当教員から全学共通教育の実施体制の現状及び課題を報告していただき、今後の方向について教職員が意見を交流し合う場にしたいと考えております。

15:00～15:20 開会

学長挨拶

開催趣旨説明（横山 大学教育総合センター全学共通教育部門長）

15:20～16:00 話題提供－弘前大学の21世紀教育について－

弘前大学21世紀教育センター長 木村宣美 教授

16:05～17:30 パネルディスカッション

（進行）横山 英信 大学教育総合センター全学共通教育部門長

（報告）三井 隆弘 現代の諸問題分科会代表

河合 成直 環境分科会代表

小野寺英輝 総合科目「科学技術と現代社会」科目代表

大学教育総合センター長挨拶

閉会



教育改善部門

教育改善部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	武井隆明	教育学部
全学共通教育部門長	横山英信	人文社会科学部
専任教員	江本理恵	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出委員)	五味壮平	人文社会科学部
	後藤尚人	人文社会科学部
	宮川洋一	教育学部
	山崎浩二	教育学部
	松浦哲也	工学部
	吉野泰弘	工学部
	横井修司	農学部
	三浦靖	農学部
学務課長	浅沼良庸	学務部

活動報告

部門長 武井 隆明

FDについて調べてみると、設置基準の改正で、学士課程は、1999年9月に組織的な研修及び研究の努力が義務化、2008年4月には義務化された（大学設置基準第25条の3）。また、2007年4月に大学院課程が義務化された（大学院設置基準第14条の3）。岩手大学においても、1999年頃からFD活動についていろいろ議論されてきたと思う。この一年を振り返ってみても、大学として、各部局として、そして部局内の学科等において、研修会や学習会、授業評価等が、ほぼ定例的に行われてきていることが分かる。そのような活動が、大学から各個人まで、自己評価なり、認証評価の場面などで、根拠資料として重要な役割を果たしていることは周知の通りである。一方で、本来の目的である「授業の内容及び方法の改善」にどの様につながっているかの検証は難しい。ここ2、3年ほどの卒業（終了）時アンケートの回収率の低下を受け、改めて目的が何であるのかが議論される場面もある。何のためのFDかを見つめ直す時期に来た気がする。

そのような中で、本年度は、各学部等や全学共通教育での学生による授業評価アンケートの実施状況や活用事例について、情報交換会も行われた。学部毎にいろいろ考え、そして工夫もされていることが分かり、引き続き意見交換をする場面を設けるべきであると感じた。また、農学部の学生からもコメントをもらえ、今後は学生からの意見もFD活動に活かせる仕組みも考えていく必要があるように感じた。なお、年度末の忙しい時期で、それも急な報告依頼にもかかわらず、準備をして報告していただいた各部局の先生方と学生に改めて感謝したい。

この3月に岡山大学の「学生FDサミット2013春」に参加した。「学生FD」や「学生FDサミット」とは何かもイメージできず、大きな不安を抱きながらの参加となった。まずは学生主体の企画ということで、学生が主体となって授業の内容及び方法の改善のために何ができるかを考える場ということらしい。2009年から始まり、年2回開催で今回が7回目とのことであった。「授業の内容及び方法の改善」とは学生のためにあり、単にアンケート回答のみならず、いろいろな場面での学生との懇談会や、それこそ学生主体のFD活動の支援等も考えても良い時期と感じた。とはいえ、そのようなことはかつては学生自治会の活動の一環だったはずである。今の大学には学生による主体的活動を制限する「何か」があるようだ。「学生の主体的学び」がいわれているが、その実現のためにも、「何か」を明確にする必要があるかも知れない。

兎も角、以下に、今年度の活動の概容を報告する。詳細は資料編を参照願いたい。なお、資料の順番と順不同となることをご容赦願いたい。

【定例事業】

*全学共通教育科目の授業アンケートの実施

十分に定着してきたこともあり、学生への負担も考え、2010年度から原則隔年で行うこととしている。本年度は前期開講科目におけるアンケートの実施を原則とした。なお、アンケート結果は全学共通教育の各分科会の実情を把握するデータともなると考え、全学共通教育部門会議に資料として提出することとした。

*全学共通教育科目の授業アンケートに基づく優秀授業の選出

前年度後期と本年度前期実施のアンケート結果に基づき、優秀授業選出方針を確認して優秀授業の選出を行い、表彰および懇談会を都合2回行った。

*全学共通教育科目の授業公開

前期は6月の第3週，後期は11月の第3週に実施した。各学部の専門科目についても，希望があれば合わせて案内をした。

*FD合宿研修

「これからの大学教育の在り方を考える－“大学教育改革プラン”を受けて」をテーマに，8月23日，24日に八幡平ハイツで実施した。前年度（2011年度）からいわて高等教育コンソーシアムとの共催事業となっている。

*学習会等

- 8月8日（水）カリキュラム・マップ作成 ワークショップ
（講師：江本理恵 氏）
- 11月6日（火）3つのポリシー・ブラッシュ・アップ ワークショップ（1）
（講師：佐藤浩章 氏（愛媛大学教育企画室））
- 11月6日（火）授業デザイン ワークショップ入門
（講師：佐藤浩章 氏，山田剛史 氏 他（愛媛大学教育企画室））
- 11月21日（水）3つのポリシー・ブラッシュ・アップ ワークショップ（2）
（講師：江本理恵 氏）
- 3月18日（月）「学生による授業アンケート」に関する意見交換会

東北大学高等教育開発推進センターの関内隆副センター長に，東北地方の大学の調査結果と東北大学における授業アンケートの活用事例について講演していただき，その後，各学部や全学共通教育における取り組みについての報告，および学生からのコメントも頂いた上で，意見交換を行った。

*入学前教育

推薦入試，AO入試合格者を対象に，入学時までの学習の継続を目的に行われている。大学教育総合センター運営委員会の下に入学前教育実施小委員会を置いて実施されている。

*卒業（終了）時アンケート

インターネットを利用したアンケートの実施で，3年目となった。このアンケートの活用についての検討が話題になっている。各学部や研究科においては，それぞれで分析し，活用することになっている。学部以外の部局に関する項目や大学全体に関わると思われる項目について，グラフ化を行ない，経年変化の概略を調べてみたので，資料編に含めている。なお，この報告書の原稿の関係で2012年度の卒業時アンケートのデータも間に合ったので，2009年度から2012年度の4年分のデータとなっている。

【審議事項】

*FDガイドラインの見直し

前年度の大学教育総合センター運営委員会において継続審議になっており，各部局から挙がってきた意見を当部門会議で検討し，一部修正してセンター運営委員会に諮り，了承された。今後はこのガイドラインに沿ってFD研修等が企画実施されることとなった。

平成 24 年度学習会等実施報告

教育改善部門では、平成 24 年度に以下の学習会等を実施しました。今年度の課題として、「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」の策定がありましたので、それらの課題に対応するための学習会等を中心に計画・実施しました。また、今年度は学生支援部門と共催で「発達障がいについての学習会」を開催したところ、大変好評だったので、今後も続けていきたいと思ひます。以下に、主なものについて、簡単に報告します。(文責：江本理恵)

カリキュラム・マップ・作成 ワークショップ

日 時：平成 24 年 8 月 8 日 13:00～14:30

会 場：学生センター A 棟 G 3 2 教室

講 師：岩手大学大学教育総合センター 江本理恵

内 容：各教育プログラム(学科、課程、コース等)での策定が必要な「カリキュラム・ポリシー」及び「カリキュラム・マップ」「カリキュラム・チェックリスト」について、参加者同士で考えるワークショップを開催しました。「ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)」「カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)」等については、「これ」と決まったものではなく、それぞれの機関で決めていかなければなりません。したがって、各教育プログラムでポリシー策定に関わる先生方に集まっていただいて、文献等を頼りに「どのような『カリキュラム・ポリシー』を作るのか」について意見交換を行いました。

3つのポリシー・ブラッシュ・アップ ワークショップ(1)

日 時：平成 24 年 11 月 6 日 13:00～14:30

会 場：学生センター A 棟 G 2 1 教室

講 師：愛媛大学教育企画室准教授 佐藤浩章氏

内 容：「3つのポリシー」の第一案ができたところで、それをブラッシュ・アップするためのワークショップを開催しました。前年度に来ていただいた佐藤先生に事前に各教育プログラムの「3つのポリシー」を見ていただき、全体に対してコメントをいただいた後、2人組を作って、お互いの「ポリシー」を読み、コメントしました。どうしても同じ専門の中で策定していると表現が専門的なものになりがちですが、他分野の先生の視点を入れることで、より「わかりやすいポリシーの表現」に向けて、ブラッシュ・アップができたかと思ひます。

3つのポリシー・ブラッシュ・アップ ワークショップ(2)

日 時：平成 24 年 11 月 21 日 13:00～15:00

会 場：学生センター B 棟多目的室

講 師：岩手大学大学教育総合センター 江本理恵

内 容：上記ブラッシュ・アップワークショップに参加できなかった関係者を対象として、2回目のブラッシュ・アップワークショップを開催しました。

授業デザイン ワークショップ入門

日 時：平成 24 年 11 月 6 日 15:00～17:00

会 場：学生センター B 棟多目的室

講 師：愛媛大学教育企画室准教授 佐藤浩章氏、山田剛史氏 他

内 容：学生の主体的な学びを引き出すための「多様な授業手法（アクティブ・ラーニング等）」について学び、自身の授業に取り入れて行くためのワークショップを行いました。短時間でしたが、大変密度の濃いワークショップで、参加者の満足度も高かったようです。教育(授業)はどうしても自分が受けてきたものに引きずられてしまうものですが、このようなワークショップを通して、多様な方法があることを知り、取り入れられそうなものは取り入れてみることで、大学の教育改善は進んでいくのだと思います。今回の講師陣は全国的に大変人気のある講師たちで、他大学からの参加も多くいただきました。岩手大学の参加者が少なかったのが残念です。

「学生による授業アンケート」に関する意見交換会

日 時：平成 25 年 3 月 18 日 15:00～17:00

会 場：学生センター B 棟多目的室

講 師：東北大学高等教育開発推進センター教授 関内隆氏

内 容：東北大学高等教育開発推進センター教授の関内先生より、東北大学の全学教育で行っているアンケートやその活用方法等についてお話を伺った後、各学部等で行っている「授業アンケート」について、各担当者がその状況について報告を行いました。東北大学の取り組みの優れた点は、「授業アンケート」を教学の PDCA サイクルの 1 つとして取り入れる試みが続いているところではないかと思います。関内先生は、教員は教育改善推進の「主体」と捉え、「教員が主体となる課題解決志向の OJT 型 FD」として、「授業アンケート」を活用した全学的な PDCA サイクルに取り組んでいるそうです。「授業アンケート」(をはじめとした FD) をやらなければならないものとして嫌々やるのと、うまく取り入れて改善のサイクルに利用するのでは、数年後には大きな差が出てくるものと思います。私たちも、もう少し危機感を持って、前向きの「改善サイクル」を作り出す努力をしなければならぬと思いました。

平成 24 年度岩手大学教員参加研修会等一覧

研 修 名	主 催	目 的・内 容	対 象 者	参 加 者	実 施 期 間	備 考
新採用教員研修 (4月)	大学教育総合センター	岩手大学教員として必要な教員組織、学務系の諸手続、学事関係スケジュール等の情報提供を行う。また、アイデアスタメントの利用方法とシラバス作成に関する研修を実施。	・前年度 10月 1日以降の採用教員 ・当該年度 4月採用教員	17名	平成 24 年 4 月 4 日 (水) ・ 5 日 (木)	会場：学生センター-G32教室ほか
平成 24 年度 F D 合同研修会	大学教育総合センター・いわて高等教育コンソーシアム	大学の理念や目標、教育課程のあり方、教育方法等について教員の共通理解を深めるとともに、教育の質の充実を図ることを目的に実施。 24年度テーマ：これからの大学教育のあり方を考える — 「大学改革実行プラン」を受けて— 基調講演：文部科学省高等教育局大学振興課学務係長 安部田 康弘氏	岩手大学・いわて高等教育コンソーシアム構成大学教員	岩手大学 27名 他大学 5名	平成 24 年 8 月 23 日 (木) ・ 24 日 (金)	会場：八幡平ハイツ
カリキュラム・マップ作成ワークショップ (8月) 3つのポリシー・ティプロマ・ポリシー」策定に関するワークショップ (11月)	大学教育総合センター	3つのポリシー (アドミニション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ティプロマ・ポリシー) 策定に関するワークショップを実施。	各学部・研究科関係教員	計 40名	平成 24 年 8 月 8 日 (水) 13:00~14:30 平成 24 年 11 月 6 日 (火) 13:00~14:30 平成 24 年 11 月 21 日 (水) 13:00~15:00	会場：学生センター-G32教室ほか
新採用教員研修 (10月)	大学教育総合センター	岩手大学教員として必要な教員組織、学務系の諸手続、学事関係スケジュール等の情報提供を行う。また、アイデアスタメントの利用方法とシラバス作成に関する研修を実施。	当該年度 4月 2日以降の採用教員	4名	平成 24 年 10 月 2 日 (火)	会場：学生センター-G32教室ほか
大学教職員のためのメンタルヘルスケア研修会	岩手医科大学・いわて高等教育コンソーシアム	教職員がストレスに対する理解を深め、自分のストレスに気づき対処する方法を学ぶとともに、周囲のメンタルヘルスのケアの仕方を学ぶことで、職場のメンタルヘルスをどう改善できるかを考察することを目的とする。	いわて高等教育コンソーシアム構成大学教職員	岩手大学教員参加 2名	平成 24 年 10 月 5 日 (金) 10:00~17:00	会場：岩手医科大学 ※FD・SD共通研修会
授業デザインワークショップ入門	主催：愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 共催：大学教育総合センター・いわて高等教育コンソーシアム・東北大学ほか	学生の主体的な学びを引き出すための「多様な授業の手法 (アクティブ・ラーニング等)」に関する内容を中心に、授業デザインワークショップを実施。 実施主体：愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室	高等教育機関の教員	岩手大学教員参加 9名	平成 24 年 11 月 6 日 (火) 15:00~17:00	会場：岩手大学学生センター-B棟 多目的室
発達障がいに関する学習会 1	大学教育総合センター・学生特別支援室・いわて高等教育コンソーシアム	発達障がいに関する基礎的な知識・対応方法を学ぶ研修会を実施 講師：岩手産業保健推進センターメンタルヘルス対策相談員 坂下 史絵 氏	いわて高等教育コンソーシアム構成大学教職員	岩手大学・他大学教職員 97名	3回実施 平成 24 年 11 月 28 日 (水) 10:00~12:00 平成 24 年 12 月 3 日 (月) 15:00~17:00 平成 24 年 12 月 13 日 (木) 15:00~17:00	会場：岩手大学学生センター-G28教室、図書館多目的室ほか

平成24年度岩手大学教員参加研修会等一覧

研 修 名	主 催	目 的・内 容	対 象 者	参 加 者	実 施 期 間	備 考
発達障がいに関する学習会2	大学教育総合センター・学生特別支援室・いわて高等教育コンソーシアム	「岩手大学における発達障がい学生への支援～実践から学ぶ～」 講師：岩手大学学生支援センター 特命准教授 吉永 崇史 氏	いわて高等教育コンソーシアム構成員 成大学教員	岩手大学・他大学教員 約100名	平成24年12月13日(木) 15:00~17:00	会場：教育学部北桐ホール
授業アンケートに関する意見交換会	大学教育総合センター	授業アンケートの効果的な活用方法について、東北大学における授業アンケートの活用事例や各学部での実施状況の情報交換及び意見交換会を実施。	各学部・研究科関係教員	20名	平成25年3月18日(月) 15:00~17:00	会場：岩手大学学生センターB棟 多目的室
人文社会科学部FD講演会	人文社会科学部総合的FD委員会・大学教育総合センター	FD講演会として、広島大学総合科学部の学部改革及び、ミッソジョン再定職への対応についての講演会、意見交換を実施。 講師：広島大学総合科学部・総合科学研究科 教授 岩永 誠 氏	人文社会科学部教員 (他学部教員も参加可)	15名	平成25年3月25日(月) 13:00~15:00	会場：岩手大学学生センターB棟 多目的室
東北大学高等教育開発推進センター各種研修会	東北大学	東北大学高等教育開発推進センター（教育関係共同利用拠点）実施の各種教員研修会への参加 ※大学教育総合センターで旅費負担を行っている	高等教育機関の教員	岩手大学教員参加計6名		※東北大学高等教育開発推進センターは、文科省から教育関係共同利用拠点「教職員の組織的な研修等の実施機関」の認定を受けており、多種多様な研修を開発し、学内外の教職員への提供を行っている。

過去の学習講演会等 (2005 年度から 2012 年度まで、主にセンター通信の erudio を参照)

2012 年度

- ・(8月8日) カリキュラム・マップ作成 ワークショップ (講師:江本理恵 氏)
- ・(11月6日) 3つのポリシー・ブラッシュ・アップ ワークショップ (1) (講師:佐藤浩章 氏 (愛媛大学教育企画室))
- ・(11月6日) 授業デザインワークショップ入門 (講師:佐藤浩章 氏, 山田剛史 氏 他 (愛媛大学教育企画室))
- ・(11月21日) 3つのポリシー・ブラッシュ・アップ ワークショップ (2) (講師:江本理恵 氏)
- ・(3月18日) 学生による授業アンケートに関する意見交換会 (講師:関内隆 氏 (東北大学高等教育開発推進センター))

2011 年度

- ・(9月2日) 【学びのマネジメント WG 学習会】 ロールモデル型 e ポートフォリオシステムを用いたマルチキャリアパス支援 (講師:小川賀代日本女子大理学部准教授)
- ・(11月7日) 【大教センター学習会】 学士課程教育の構築に向けて ―この10年の政策動向― (講師:高橋浩太朗文科省大学改革推進室学務係長)
- ・(12月14日) 【大教センター学習会】 3つのポリシー (ディプロマポリシー, カリキュラムポリシー, アドミッションポリシー) の開発と一貫性構築手法 (講師:佐藤浩章愛媛大教育・学生支援機構教育企画室准教授)
- ・(3月22日) 【評価室学習会】 これからの「大学評価」 (講師:齋藤貴浩大阪大教育実践センター准教授)

2010 年度

- ・(9月30日) 学習等達成度記録簿による教育効果の測定 (講師:田中仁東北大学院工学研究科・工学部教授)
- ・(9月24日) 学士力に関する学習会について (報告者:砂山稔人社教授, 五味壮平人社准教授)
- ・(11月29日) 大学教職員のための企画力養成講座～教職協働を目指して～ (講師:湊敬治愛媛大教育・学生支援機構教育企画室准教授)
- ・(震災のため中止) 大学授業改善のための講演会―先生, だめ, ダメー! こんな授業やっちゃー! (ザ・ギース, 夙川アトム)

2009 年度

- ・(12月18日) 「大学教育の革新とFDの新展開」 (講師:川島啓二国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官)
- ・(3月5日) 「FDのあり方を考える」 (講師:田中毎実京都大高等教育研究開発推進センター教授)

2008 年度

- ・(5月14日) 特別講演会「法人化第2期に向けた学士課程教育の改革方向」(講師:川嶋太津夫 神戸大学大学教育推進機構教授)
- ・(10月7日) FD 講演会「教員職能開発(FD)から大学教育開発(ED)へ ―FDをめぐる7つの誤解と課題―」(講師:羽田貴史東北大教授)
- ・(11月6日) FD 研究会「授業応答システム「クリッカー」 ―北海道大学におけるクリッカーの有効な利用法―」(講師:鈴木久男北大大学院教授)
- ・(2月24日) FD 講演会&意見交換会「企業の求める人材と大学教育への期待」(1) ―企業経営の立場からの期待― (講師:鎌田罔雄セイコーインスツル(株)常勤監査役), (2) ―岩手大学OBの立場からの期待― (講師:高橋良治盛岡セイコー工業(株)品質保証部部长)

2007 年度 (特になし)

2006 年度

- ・(7月14日) FD 講演会「FDの開発と実践:山形大学編」(講師:小田隆治山形大高等教育研究企画センター教授)
- ・(9月11日) FD 研究会「単位制度について考える」(講師:土持ゲーリー法一弘前大21世紀教育センター教授)
- ・(12月18日) FD 研究会「理系基礎教育の実践とe-Learningの活用 ～千歳科学技術大学の事例から」(講師:小松川浩千歳科学技術大光科学部助教授)
- ・IT・FD 講習会「授業に役立つパワーポイントの使い方」, 「授業に役立つ動的なパワーポイント教材の作成」, 「授業に役立つパワーポイント教材の各機能」, 「ワードを活用したポスターの作成」, 「エクセルを活用したデータ集計」(担当:福永良浩教育評価・改善部門)

2005 年度

- ・(1月11日) センター主催研究会 ～中央教育審議会答申を読み解く～ 我が国の高等教育の将来像(答申)

平成 24 年度 ファカルティ・ディベロップメント 合宿研修会

実施報告

平成24年度テーマ

これからの大学教育のあり方を考える
-「大学改革実行プラン」を受けて-



国立大学法人岩手大学

大学教育総合センター

Iwate University : University Education Center



平成 24 年度 F D 合宿研修会

平成 24 年 8 月 23 日 八幡平ハイツにて



FD合宿研修会の開催にあたって

岩手大学学長 藤 井 克 己

岩手県内の国公立5大学等からなる『いわて高等教育コンソーシアム』のFD・SD連携推進委員会と岩手大学の大学教育総合センターとの共催によるFD合宿研修会に、今年も多くの先生方に参加申込みを頂き、有難うございます。

近年の大学教育のテーマを一言で述べるなら『多様性と標準性の調和』と整理することが出来るでしょう。これは2008年3月に中教審大学分科会より出された『学士課程教育の再構築に向けて』の副題となっているものです。大学に多様な学生を受け入れて、幅広い内容の教養科目から専門科目へと深化させていく各種教育プログラムを、多様な教員集団で実施することは、大学教育全体の個性化と特色化を強めることにつながるでしょう。しかしその一方で、今日では学士課程教育の質の保証、標準性の問題が強く求められてきています。

本年4月には中教審大学分科会大学教育部会より「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」の審議まとめが公表されました。この報道に当たっては、日本の大学生の学修時間不足が多く取り上げられていました。しかし本文にはこれに加え、現在の学士課程教育に求められている役割として、『『答えのない問題』を発見して、その原因について考え、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えること…』が重要であるとしています。

そしてこのような学生の主体的な学びを確立するため、学士課程教育の質的転換を促しています。決して学修時間の量的な不足だけを問題視しているわけではないのです。学士の学位は120幾つという単位の寄せ集めの結果としてではなく、ディプロマポリシーに向けて構築された教育プログラムの成果です。その意味で、これに主体的に関わる十数名の教員集団（Faculty）の総意が体系化して込められていなければなりません。

今回のFD合宿研修では、「大学改革に関する文教施策の動向について」文部科学省高等教育局大学振興課学務係長の安部田康弘氏より、ご講演いただく予定です。2日間の研修を通じて、教員の「教育力」の向上はもとより、各大学の学士課程教育プログラムの見直し、再構築、体系化に資するものとなり、研修の実をあげられることを期待するものです。

FD合宿研修会スケジュール

□1日目（8月23日）

- 10：30～11：50 開会・オリエンテーション
- 11：50～12：40 昼食・休憩
- 12：40～14：00 講演「大学改革に関する文教施策の動向について」
- 14：10～15：50 プログラムⅠ
- 16：00～17：50 プログラムⅡ
- 20：20～ ナイトセッション
- 21：30～ 情報交換会

□2日目（8月24日）

- 9：00～11：30 プログラムⅢ
- 11：30～12：00 研修会総括
- 12：00 閉会

講演

「大学改革に関する文教施策の動向について」

文部科学省高等教育局大学振興課学務係長 安部田康弘氏

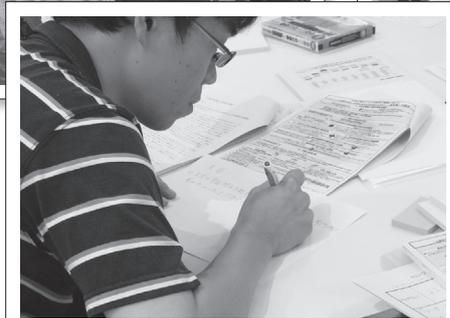
プログラムの冒頭に、文部科学省高等教育局大学振興課学務係長の安部田氏から、「大学改革に関する文教施策の動向について」というタイトルでご講演をいただきました。今までの大学改革に関する様々な資料をご用意いただき、それらの資料に沿って丁寧にご説明をいただきました。



プログラム I

「『未来を創出する大学教育の構築に向けて（答申案）』を学ぶ」

プログラム I では、『未来を創出する大学教育の構築に向けて（答申案）』の内容を読み、それを共有する活動を行いました。具体的には、7つのグループに答申の各章を割り当て、各グループが割り当てられた答申の箇所を読んで、書かれている内容をまとめ、発表しました。答申によると、「生涯学び続ける」ことができる学生、「自分で勉強して問題解決できる」力を学生に身につけさせる大学教育が求められており、そのために、大学の教育を変えていく必要があるとのこと。時間が足りず、内容について十分に議論できなかつたことが残念でした。



プログラムⅡ

『大学改革実行プラン』とは何か？

プログラムⅠを受けて、プログラムⅡでは『大学改革実行プラン』について共有する活動を行いました。プログラムⅠ同様に、各グループに『大学改革実行プラン』の各項目を割り当て、その内容を整理し、グループの見解も付け加えた上で、発表しました。「ミッション再定義」や「COC」など、すぐに関係してきそうな内容が取り上げられました。

総合討論では、「教育の質保証」について、卒業生の学生の教育成果をどのように測定するのか、について、議論がありました。医学部、歯学部、薬学部では、4年修了時に共通試験が行われており、獣医学でもそのような共通試験の取り組みの導入が検討されていることが紹介されました。

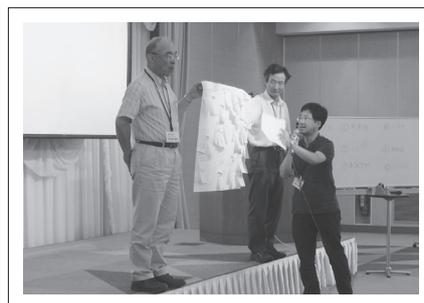


プログラムⅢ

『これからの大学教育はどうあるべきか - 『大学への提言』の作成』

プログラムⅢでは、答申案や大学改革実行プランの内容等を受けて、これからの大学教育のあり方を議論しながら、「大学への提言」を作成しました。提言内容として、入試制度、授業改善やカリキュラムの問題、学生の基礎学力・意欲の問題、学生支援の問題、学生への経済支援、就職活動の問題、教育制度設計、教育環境、グローバル化への対応、地域の中での大学の位置づけの明確化等について様々な提案がされました。提案の中には、教員の多忙化の解消、人員の増加、研究資金の増額等もありましたが、おそらく今の状況では予算が増えて教育環境

境がよくなることは考えられないから、それを踏まえた上で、例えばカリキュラムのスリム化を検討することなども必要ではないか、という意見も出されました。



ナイト・セッション

「岩手大学の三陸復興への取組」

三陸復興推進機構長 岩渕 明氏

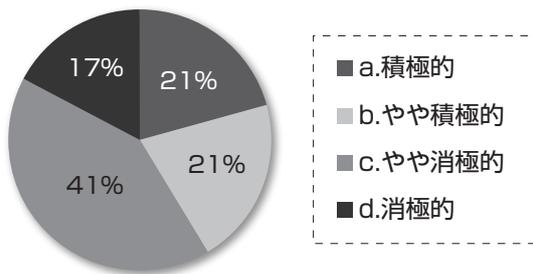
夕食後のナイトセッションでは、岩手大学の三陸復興機構長の岩渕理事から、三陸復興に向けての岩手大学の取り組みをお話いただきました。岩手大学に所属していても、それぞれの先生方がどのように三陸復興に取り組んでいるのかを知ることがなかったので、とてもよい機会になりました。



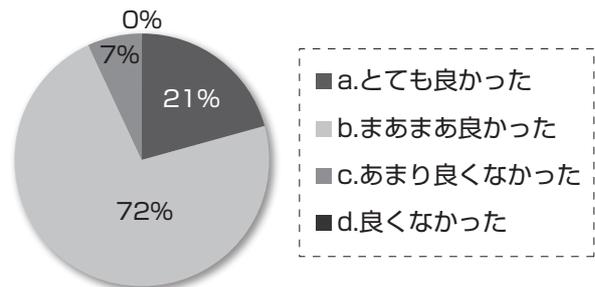
参加者アンケート集計結果

(アンケート回収枚数: 枚)

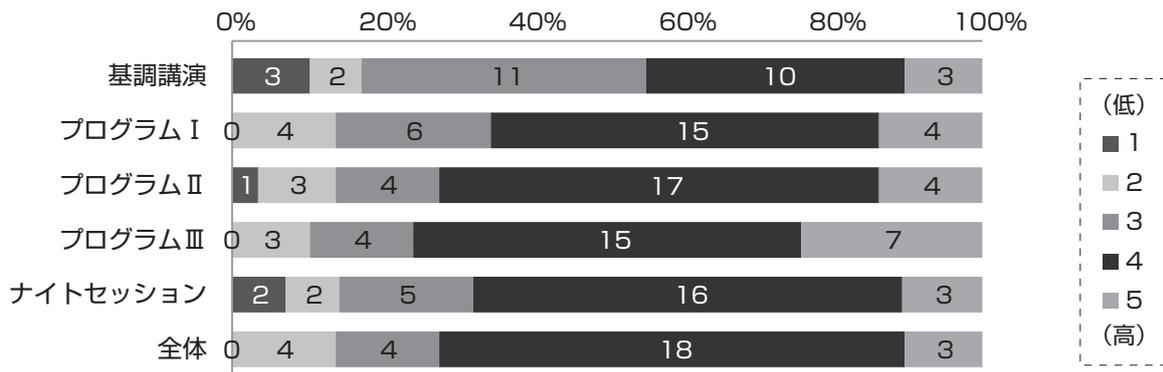
○今回の研修会について、どのような意識で参加されましたか？



○結果的に、今回の研修会に参加して良かったと思いますか？



○今回の研修会の各プログラムについて、5段階で評価してください。



参加者からの感想 (一部抜粋)

- 他大学や他学部の教員と交流ができてよかった。
- 学生の主体性を育むことの重要性に焦点が当たることがありましたが、我々教員側も主体的に大学のあり方、教育体制、研究のあり方等について考え発信していく必要があることを感じました。プログラムの内容も、参加者の主体性を引き出す形になっていて良かったと思います。
- 内容は興味深いのですが、読み込む時間が足りなかったのが残念でした。参加のハードルを下げるためには仕方がないのですが、大学の学修同様「事前の学修時間」「事後の学修時間」の活用も考えた方が良いのかもしれない。準備、運営、お疲れ様でした。

平成24年度 ファカルティ・ディベロップメント 合宿研修会

実施報告

1. 目的

いわて高等教育コンソーシアムとして、教育の質の充実を図るために、大学の理念や目標、教育課程のあり方、教育の内容や方法について教員の共通理解を深めるとともに、日頃接点の少ない他大学の教員相互の意思疎通を図ること、そして、教員自身の「教育者」としての責任を相互に確認することを目的とした教員研修会を実施する。

今年度は、中教審や文部科学省より相次いで出された大学教育に関する審議まとめやプラン等を読み解き、これからの大学教育のあり方について、一人一人が考え、議論を交わす機会とする。

2. 内容

テーマ：これからの大学教育のあり方を考える - 「大学改革実行プラン」を受けて

講演： 「大学改革に関する文教施策の動向について」

文部科学省高等教育局大学振興課学務係長 安部田康弘氏

プログラムⅠ：「未来を創出する大学教育の構築に向けて（答申案）」を学ぶ

プログラムⅡ：「大学改革実行プラン」とは何か？

プログラムⅢ：これからの大学教育はどうあるべきかー『大学への提言』の作成

3. 日時

平成24年8月23日(木)・24日(金)

5. 場所

八幡平ハイツ

〒028-7302 岩手県八幡平市八幡平温泉郷

TEL:0195-78-2121 FAX:0195-78-2041

4. 参加者

○教員

岩手大学 27名 岩手医科大学 2名 富士大学 2名 盛岡大学 1名

○スタッフ

岩手大学8名

○その他

講演講師1名 ナイトセッション講師1名

6. 主催

岩手大学大学教育総合センター

いわて高等教育コンソーシアムFD・SD連携推進委員会

平成24年度FD合宿研修会実施報告書

発行日：平成25年6月25日

発行：国立大学法人岩手大学大学教育総合センター

平成22年2月22日

全学共通教育 学生による授業アンケート 実施スケジュール

大学教育総合センター
教育評価・改善部門

■趣旨・目的

平成16年度より大学教育総合センターにて実施している「全学共通教育：学生による授業アンケート」は、平成21年度で丸6年を迎える。この間、めざましい授業の改善が行われ、ほぼ当初の「改善」の目的は達成されたと考えてもよいだろう。「授業アンケート」は授業の「点検」の意味では必要であるが、教員にとっては授業中にそのための時間を割かなければならないし、学生にとっても受講している様々な授業でアンケートに回答することになり、負担が大きい。

そこで、授業アンケートの実施の目的を授業科目の「改善」から「点検」へ変更し、実施回数を減らして教員・学生双方の負担の軽減をはかり、授業アンケート効果を高めるものとする。

■実施ルール

- ・通常の科目は2年に1回のペースでアンケートを実施する。
- ・新規開講授業科目はアンケートを実施する
- ・転換教育科目（基礎ゼミ，初年次ゼミ）は、しばらくの間，毎年実施する。
- ・隔年開講科目（総合科目）は開講の度に実施する。
- ・アンケートを希望する科目があれば、実施する。
- ・優秀授業の選出は年に1回とする。

■実施スケジュール

平成22年度	前期	教養科目（文化，社会，自然） 共通基礎科目（情報基礎，外国語，健・スポ） 転換教育科目（基礎ゼミナール）
	後期	転換教育科目（初年次自由ゼミナール） 新規開講科目／アンケート実施希望科目 教養科目（総合）※隔年開講科目のみ
平成23年度	前期	転換教育科目（基礎ゼミナール） 新規開講科目／アンケート実施希望科目
	後期	教養科目（文化，社会，自然，総合，環境） 共通基礎科目（外国語，健・スポ） 転換教育科目（初年次自由ゼミナール） アンケート実施希望科目
平成24年度	前期	教養科目（文化，社会，自然） 共通基礎科目（情報基礎，外国語，健・スポ） 転換教育科目（基礎ゼミナール）
	後期	転換教育科目（初年次自由ゼミナール） 新規開講科目／アンケート実施希望科目 教養科目（総合）※隔年開講科目のみ

優秀授業選出方針（平成23年度）

大学教育総合センター
教育改善部門

■優秀授業選出方針

- 1：アンケート実施授業科目を対象として、授業科目区分ごとに「優秀授業」を決定します。
- 2：履修人数の少ない授業科目については対象から外します。授業科目区分毎に履修登録人数の平均を出し、明らかに履修登録人数が少ない授業（履修登録人数の平均の30%以下）については、対象から外します。
- 3：履修登録人数に比べて、アンケート回答者（回収枚数）が少ない授業科目については、対象から外します。回答者数が履修登録人数の70%未満の授業科目については、対象から外します。
- 4：各授業科目区分での優秀授業対象科目（アンケートを実施している、履修者数が規定を満たしている、回収率が70%以上）の20%の科目数（四捨五入）が選出されることを基準とします。ただし、区切りとなる科目の集計値とそれ以前、もしくは以降の集計値に差があまりない場合には、対象科目数の15%（四捨五入）～25%（四捨五入）範囲内の科目で、集計値の区切りの良いところまでを選出することとします。また、対象科目数が5科目未満の場合は、その区分からは選出しないこととします。
- 5：設問Dの各項目について、評点を定め、平均値を算出します。平成20年度は、選択肢の「そう思う」を2点、「まあそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「全くそう思わない」を-2点と評点を決めました。これを、各項目について、（「そう思う」と回答した人数×2＋「まあそう思う」と回答した人数×1＋「あまりそう思わない」と回答した人数×-1＋「全くそう思わない」と回答した人数×-2）÷（「そう思う」と回答した人数＋「まあそう思う」と回答した人数＋「あまりそう思わない」と回答した人数＋「全くそう思わない」と回答した人数）という式にあてはめ、点数を計算します。
- 6：5で算出した設問Dの各項目の値の平均をとります。
ここでいくつかの項目を集計よりはずしました。集計除外項目（候補）とその理由は裏面の通りです。
- 7：設問Eについても、5の方法で評定値を算出します。
- 8：6で出した値と7で出した値とを合計します。
- 9：8で算出した値について、上位から並べ、実施授業科目数の20%を基準とし、15%～25%の範囲以内に収まる範囲で「上位群」を判定し、それらの科目を抽出します。
- 10：1～9で抽出された授業科目を「優秀授業科目」候補科目とします。その後、自由記述項目等を加味して、教育改善部門会議での審議の結果、「優秀授業科目」を決定します。

集計除外項目（候補）

f. 板書、ビデオ、プロジェクター等で指示されたものは、わかりやすいものでしたか？

→板書やビデオ、プロジェクターは、「わかりやすい解説」を行うための「手段」であったり、もしくは教室の「環境」に左右されたりするので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

g. 教科書や参考書、配付資料は、学習の助けになりましたか？

→教科書や参考書、配布資料は、「わかりやすい解説」を行うための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

i. 授業の中で、学生が参加して活動するような機会がありましたか？

→「学生が参加して活動するような機会」がある授業が好ましい授業形態の1つであることは確かですが、履修人数等の関係上、「やりたくてもできない」場合もあるので、参考情報の1つとして扱いました。（健康・スポーツ科目：i）

l. この授業では、アイアシスタントが授業中や授業時間以外の学習に活用されていましたか？

→アイアシスタント関連項目はデータ収集を目的に導入された項目なので、今回は、参考情報の1つとして扱います。来年度以降、FDプランの1つとして、集計項目になる可能性はあります。（健康・スポーツ科目：k）

m. この授業及び授業時間外の学習中に、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？

→上記はGPの成果測定のためのデータ収集を目的に導入された項目なので、参考情報の1つとして扱います。（健康・スポーツ科目：l）

q. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫しながら問題に取り組む機会がありましたか？

→問題解決活動を授業中もしくは授業時間外学習（自習）で行ったかどうかについての項目です。今後、「問題解決活動」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間はありましたか？

→教養教育の目標の1つでもある、常識・通念を問い直すことができたかどうかについての項目です。今後、これらの目標を達成することも目指すべき授業の1つですが、授業の題材などにもよるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

s. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけることの大切さに気づく機会があったと思いますか？

→課題探求活動を授業中もしくは授業時間外学習（自習）で行ったかについての項目です。今後、「課題探求」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

t. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？

→授業科目によっては、必ずしも「学生が役に立つと思う授業」＝「いい授業」ではないので、今回は参考情報の1つとして扱いました。（外国語科目：q）（健康・スポーツ科目：p）

u. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？

→その授業科目で扱う題材や履修学生の所属学部などによって今後に対する意識も変わってくるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。（外国語科目：r）（健康・スポーツ科目：q）

平成23年度 後期学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目の選出

教育改善部門では、全学共通教育科目を対象に、いくつかの授業科目を除いて、2年に1回のペースで学生による「授業アンケート」を実施しています。平成 23 年度は後期開講科目、平成 24 年度は前期開講科目が授業アンケートの対象科目となります。

授業アンケートの結果は、個々の授業担当者に返却する他、部門会議で作成した基準にしたがって「全学共通教育優秀授業科目」を選出しています。

平成 23 年度後期の優秀授業科目は以下の通りです。

平成 24 年 7 月 11 日に、藤井学長をお迎えしての全学共通教育優秀授業科目の表彰状の授与と懇談会を行いました。

平成23年度後期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目一覧

人間と文化

0006	心の理解	松岡和生
0014	芸術の世界	煤孫康二
0013	欧米の言語論	齋藤伸治

人間と社会

0044	多文化コミュニケーションB	松岡洋子
0033	社会的人間論	塚本善弘
0041	対人関係の心理学	川原正広

人間と自然

0054	宇宙のしくみ	石垣剛
------	--------	-----

環境教育科目

0074	人の暮らしと生物環境	小田伸一
0065	生活と環境	菅原悦子
0067	地域の環境保全を考える	竹原明秀

外国語科目(英語総合)

0303	英語総合 I (中級)	小林葉子
0317	英語総合 II (上級)	HALL JAMES MERIWETHER
0339	英語総合 II (中級)	松林城弘
0319	英語総合 II (中級)	伊東栄志郎
0333	英語総合 I (中級)	松林城弘

外国語科目(英語コミュニケーション)

0367	英語コミュニケーション II (上級)	Gavin Young
0313	英語コミュニケーション II (上級)	Blair Benjamin Reed
0349	英語コミュニケーション II (上級)	Blair Benjamin Reed
0328	英語コミュニケーション II (中級)	ASANO ROBERT KEN
0315	英語コミュニケーション II (中級)	Gavin Young
0309	英語コミュニケーション I (上級)	Gavin Young

外国語科目(英語以外)

0479	上級日本語 G	藪敏裕
0478	上級日本語 F	岡崎正道
0469	初級韓国語(発展)	齋藤春佳
0477	上級日本語 E	松岡洋子
0429	初級フランス語(発展)	中里まき子

健康・スポーツ

01016	バドミントン	阿部令奈
01017	バレーボール	若林美帆
01034	バレーボール	阿部令奈
01033	体力トレーニング	佐々木彩野
01011	体力トレーニング	澤村省逸
01030	ニュースポーツ	浅沼道成



平成24年度前期 授業アンケート(基礎ゼミナール) 学生の学習状況集計結果

大学教育総合センター

B この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数は？

	全体	人社	教育	工	農
0回	85.3%	77.6%	82.0%	88.2%	91.3%
1回	10.1%	12.3%	13.7%	8.5%	7.2%
2回	1.0%	2.3%	0.5%	1.1%	0.0%
3回以上	3.6%	7.8%	3.9%	2.2%	1.4%
合計	997	219	205	365	208

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？その内容はわかりましたか？

	全体	人社	教育	工	農
わかった	18.4%	36.4%	15.6%	10.3%	16.4%
だいたいわかった	36.9%	52.3%	33.2%	34.1%	29.5%
あまりわからなかった	11.0%	6.8%	10.2%	14.1%	10.6%
わからなかった	2.1%	0.9%	1.5%	3.2%	1.9%
読まなかった	31.6%	3.6%	39.5%	38.4%	41.5%
合計	1002	220	205	370	207

c. 1回の授業に対して、平均してどのぐらいの時間をかけて予習・復習をしましたか？

	全体	人社	教育	工	農
ほとんどしなかった	57.8%	35.6%	62.9%	61.6%	69.4%
30分ぐらい	20.0%	34.2%	16.6%	15.1%	17.2%
1時間ぐらい	12.4%	18.7%	7.8%	13.0%	9.1%
2時間ぐらい	4.9%	5.9%	4.9%	5.1%	3.3%
3時間ぐらい	2.7%	3.7%	2.9%	3.0%	1.0%
4時間以上	2.2%	1.8%	4.9%	2.2%	0.0%
合計	1003	219	205	370	209

d. この授業の学習において、あなたはどのぐらいアイアシスタントを利用しましたか？

	全体	人社	教育	工	農
よく利用した	4.0%	1.8%	2.0%	4.1%	8.2%
たまに利用した	13.3%	10.0%	16.2%	13.6%	13.5%
ほとんど利用しなかった	13.9%	12.3%	16.2%	12.7%	15.4%
まったく利用しなかった	68.8%	75.9%	65.7%	69.6%	63.0%
合計	1001	220	204	369	208

e. (上記の回答が①～③の場合)アイアシスタントの何の機能を利用しましたか？(複数回答可)

	全体	人社	教育	工	農
授業記録	42.6%	53.7%	44.1%	35.2%	45.2%
i カード	3.3%	11.1%	1.5%	2.4%	1.2%
課題・レポート	35.6%	5.6%	35.3%	45.6%	40.5%
学習記録	9.4%	16.7%	11.8%	5.6%	8.3%
その他()	9.1%	13.0%	7.4%	11.2%	4.8%
合計	331	54	68	125	84

f. 基礎ゼミナール用のテキスト『学びのはじめ』はこの授業におけるあなたの学習に役に立ちましたか？

	全体	人社	教育	工	農
とても役に立った	10.5%	14.6%	14.7%	8.4%	5.7%
役に立った	26.6%	31.1%	28.9%	25.2%	22.0%
少し役に立った	32.7%	26.5%	33.3%	31.4%	40.7%
役に立たなかった	4.6%	2.7%	2.0%	6.2%	6.2%
使わなかった	25.7%	25.1%	21.1%	28.7%	25.4%
合計	1001	219	204	369	209

平成 24 年度前期授業アンケート集計結果

g. 授業の中で、図書館やミュージアムなど、学内の施設について見学する機会がありましたか？

	全体	人社	教育	工	農
あった	65.2%	55.5%	67.8%	62.7%	77.4%
なかった	26.8%	40.9%	25.4%	25.7%	15.4%
はっきり憶えていない	8.0%	3.6%	6.8%	11.6%	7.2%
合計	1003	220	205	370	208

h. 授業の中で、図書館の使い方(本の借り方、蔵書の検索方法など)を学ぶ機会がありましたか？

	全体	人社	教育	工	農
あった	51.6%	57.1%	44.4%	42.3%	69.4%
なかった	37.7%	37.9%	47.8%	41.5%	21.1%
はっきり憶えていない	10.7%	5.0%	7.8%	16.3%	9.6%
合計	1002	219	205	369	209

i. 授業の中で、大学での授業の受け方(講義の聴き方、ノートの取り方、レポートの書き方など)を学ぶ機会がありましたか？

	全体	人社	教育	工	農
あった	56.3%	65.9%	52.2%	60.3%	43.1%
なかった	22.6%	21.8%	27.3%	20.0%	23.4%
はっきり憶えていない	21.1%	12.3%	20.5%	19.7%	33.5%
合計	1004	220	205	370	209

j. 授業を受ける中で、高校までの学習と大学での学習の違いに気づかされる機会がありましたか？

	全体	人社	教育	工	農
あった	83.6%	91.3%	86.8%	79.7%	79.4%
なかった	4.9%	2.3%	2.0%	6.8%	7.2%
はっきり憶えていない	11.5%	6.4%	11.2%	13.5%	13.4%
合計	1003	219	205	370	209

k. 班活動を行う機会がありましたか？また、(班活動に限らず)何らかの学習活動の成果をみんなの前で発表する機会がありましたか？(複数回答可)

	全体	人社	教育	工	農
班活動を行う機会があった	50.7%	44.6%	49.1%	47.6%	64.2%
発表する機会があった	44.8%	55.1%	45.9%	45.2%	31.6%
両方ともなかった	2.8%	0.3%	2.8%	3.9%	3.5%
はっきり憶えていない	1.7%	0.0%	2.1%	3.3%	0.7%
合計	1381	325	283	485	288

l. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)の作成や授業中の課題、小テスト等に積極的に取り組みましたか？

	全体	人社	教育	工	農
そう思う	37.3%	35.5%	40.0%	30.5%	48.3%
すこしそう思う	25.3%	19.1%	23.9%	26.8%	30.6%
あまりそう思わない	4.6%	5.0%	3.4%	5.1%	4.3%
そう思う思わない	1.7%	0.5%	0.5%	3.8%	0.5%
機会がなかった	31.2%	40.0%	32.2%	33.8%	16.3%
合計	1004	220	205	370	209

m. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組みましたか？

	全体	人社	教育	工	農
そう思う	36.9%	37.3%	42.0%	31.4%	41.1%
すこしそう思う	40.0%	36.8%	34.6%	42.0%	45.0%
あまりそう思わない	8.3%	9.5%	6.3%	7.9%	9.6%
そう思う思わない	1.7%	0.9%	0.0%	3.5%	1.0%
機会がなかった	13.2%	15.5%	17.1%	15.2%	3.3%
合計	1003	220	205	369	209

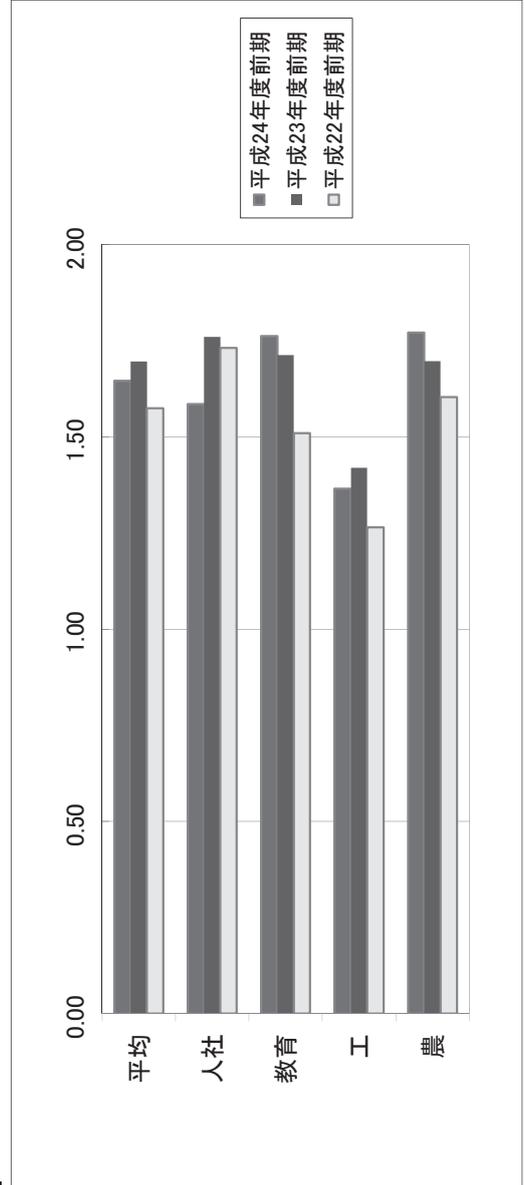
n. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか？

	全体	人社	教育	工	農
そう思う	43.6%	42.7%	56.6%	36.3%	44.5%
すこしそう思う	45.7%	45.9%	39.0%	48.8%	46.4%
あまりそう思わない	8.8%	10.0%	2.9%	11.7%	8.1%
そう思う思わない	2.0%	1.4%	1.5%	3.3%	1.0%
合計	1003	220	205	369	209

C この授業に関し、下記の事項の回答として、下の①～④の中から最もあてはまるものを選択し、番号をマーク(●)してください。

	平均
a. この授業全体に対する目的や到達目標についての説明はありましたか？	1.29
b. この授業の内容は、授業の目的、到達目標の達成に役に立つものだと思いますか？	1.41
c. この授業の成績評価の方法や基準などについての説明はありましたか？	0.74
d. この授業の内容、進行は、おおよそシラバスに沿ったものでしたか？	1.18
e. 授業中の教員の説明や指示はわかりやすいものでしたか？	1.50
f. 板書・ビデオ・プロジェクト等で提示されたものは、わかりやすいものでしたか？	1.24
g. 教科書や参考書、配付資料等は、学習の助けになりましたか？	1.33
h. 授業の中で、学生が参加して活動するようないかなる機会がありましたか？	1.82
i. この授業では、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示が出されていきましたか？	1.37
j. この授業では、アイアシスタントが授業中や授業時間以外の学習に活用されていきましたか？	-0.89
k. 授業中及び授業時間外の学習中で、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？	0.01
l. 授業中及び授業時間外の学習中で、あなたが考え、工夫しながら問題に取り組む機会がありましたか？	1.56
m. 授業中及び授業時間以外の学習中で、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか？	1.46
n. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけたことの大切さを感じましたか？	1.34
o. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？	1.64
p. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？	1.30
平均	1.14

D 結果として、この授業を履修してよかったですか？



平成24年度前期

平均	人社	教育	工	農
1.65	1.58	1.76	1.36	1.77

平成23年度前期

平均	人社	教育	工	農
1.70	1.76	1.71	1.42	1.70

平成22年度前期

平均	人社	教育	工	農
1.57	1.73	1.51	1.26	1.60

平成24年度前期 授業アンケート 学生の学習状況集計結果

大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
指定(指導)されたから	2.9%	11.9%	3.0%	92.3%	75.5%	26.5%
単位がとりやすそうだったから	28.7%	24.3%	30.4%	0.8%	3.5%	6.6%
自分の専門と関係がなさそうだから	11.0%	12.5%	9.2%	0.3%	0.4%	2.1%
先輩などからすすめられたから	16.5%	12.0%	16.0%	0.5%	1.9%	7.8%
他にやりたい科目がなかったから	16.7%	15.4%	16.3%	0.7%	14.4%	17.8%
シラバスを読んで興味を持ったから	45.2%	42.3%	39.6%	1.2%	4.0%	30.3%
友達が選択するから	12.3%	10.8%	11.3%	0.5%	0.7%	4.6%
自分の専門に関係が深そうだから	7.4%	7.3%	11.0%	1.8%	7.6%	17.9%
他の科目で人数制限を受けたから	0.8%	1.4%	0.3%	0.0%	0.4%	4.0%
その他(具体的に:)	2.6%	3.6%	2.1%	0.5%	5.0%	15.0%
合計(回収枚数)	2127	2395	1163	888	2282	809

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数は？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
0回	58.2%	54.3%	57.1%	83.7%	71.5%	61.1%
1回	19.7%	20.6%	21.8%	11.9%	16.9%	22.9%
2回	12.1%	14.0%	12.0%	3.0%	7.2%	9.2%
3回以上	10.0%	11.1%	9.0%	1.5%	4.5%	6.8%
合計	2104	2359	1129	875	2247	805

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？その内容はわかりましたか？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
わかった	17.5%	19.3%	18.8%	15.2%	12.7%	16.7%
だいたいわかった	53.0%	53.2%	52.7%	32.4%	36.3%	45.6%
あまりわからなかった	11.7%	8.4%	12.5%	5.9%	10.4%	7.2%
わからなかった	2.2%	1.1%	1.6%	1.0%	2.3%	0.9%
読まなかった	15.7%	18.0%	14.4%	45.5%	38.3%	29.6%
合計	2118	2384	1156	886	2276	807

c. 1回の授業に対して、平均してどのぐらいの時間をかけて予習・復習をしましたか？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
ほとんどしなかった	79.5%	84.5%	75.0%	83.6%	30.7%	33.5%
30分ぐらい	15.4%	13.1%	19.8%	13.8%	34.9%	45.7%
1時間ぐらい	3.7%	1.9%	4.1%	1.7%	23.3%	18.8%
2時間ぐらい	0.5%	0.3%	0.5%	0.3%	8.0%	1.7%
3時間ぐらい	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	1.7%	0.2%
4時間以上	0.9%	0.2%	0.3%	0.6%	1.3%	0.0%
合計	2121	2387	1160	884	2275	809

d. この授業の学習において、あなたはどのぐらいアイアシスタントを利用しましたか？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
よく利用した	13.1%	2.8%	4.7%	33.6%	7.5%	2.6%
たまに利用した	16.9%	15.5%	17.7%	23.2%	11.8%	15.7%
ほとんど利用しなかった	16.4%	19.1%	16.3%	11.8%	15.1%	16.8%
まったく利用しなかった	53.5%	62.6%	61.3%	31.3%	65.7%	64.9%
合計	2122	2392	1159	887	2279	809

e. (上記の回答が①～③の場合)アイアシスタントの何の機能を利用しましたか？(複数回答可)

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
授業記録	28.9%	55.8%	61.2%	13.6%	58.2%	62.2%
i カード	27.0%	10.0%	2.8%	32.1%	4.1%	3.9%
課題・レポート	33.9%	10.3%	12.0%	48.8%	12.4%	10.1%
学習記録	6.2%	12.9%	10.7%	2.1%	14.4%	14.0%
その他()	4.1%	11.0%	13.3%	3.4%	11.0%	9.8%
合計	1152	952	467	900	834	307

f. レスポンスカード(iカード、電子メール等も含む)の作成や授業中の課題、小テスト等に積極的に取り組みましたか？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
そう思う	32.5%	29.8%	33.1%	52.4%	44.8%	39.7%
すこしそう思う	30.5%	33.3%	39.1%	33.2%	36.0%	35.7%
あまりそう思わない	10.6%	10.5%	11.0%	5.3%	6.1%	7.4%
そう思わない	3.7%	4.7%	4.5%	1.5%	1.5%	1.5%
機会がなかった	22.7%	21.7%	12.4%	7.7%	11.6%	15.8%
合計	2122	2386	1157	888	2275	802

g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組みましたか？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
そう思う	20.9%	21.9%	31.3%	45.6%	31.7%	27.4%
すこしそう思う	27.6%	29.9%	40.4%	40.0%	41.4%	35.1%
あまりそう思わない	10.5%	10.3%	14.6%	7.2%	11.0%	12.5%
そう思わない	2.8%	4.0%	5.3%	1.8%	1.8%	2.4%
機会がなかった	38.2%	33.9%	8.4%	5.4%	14.1%	22.7%
合計	2123	2392	1158	888	2280	807

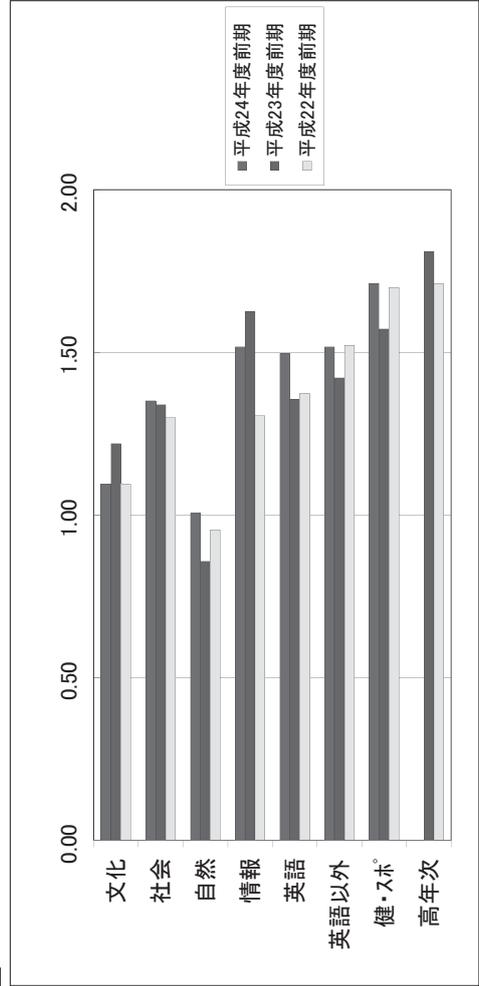
h. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか？

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
そう思う	20.3%	26.0%	19.2%	35.4%	34.4%	29.0%
すこしそう思う	45.2%	47.4%	48.4%	49.9%	48.9%	47.2%
あまりそう思わない	25.5%	20.3%	26.4%	11.4%	14.0%	20.4%
そう思わない	8.9%	6.4%	6.0%	3.3%	2.7%	3.3%
合計	2125	2392	1159	887	2278	809

D この授業に関し、下記の事項の回答として、下の①～④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

	文化	社会	自然	情報	英語	英語以外
a. 教員はこの授業の目的や到達目標についてわかりやすく説明していましたか？	1.02	1.27	0.91	1.29	1.36	1.40
b. この授業の内容は、授業の目的、到達目標の達成に役に立つものだと思いますか？	1.07	1.33	1.01	1.44	1.41	1.46
c. 教員は、この授業の成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していましたか？	1.05	1.37	0.91	1.26	1.34	1.35
d. この授業の内容、進捗は、おおよそシラバスに沿ったものでしたか？	1.13	1.32	1.17	1.32	1.16	1.38
e. 授業中の教員の説明や指示はわかりやすいものでしたか？	1.02	1.36	0.84	1.10	1.35	1.43
f. 板書・ビデオ・プロジェクト等で提出されたものは、わかりやすいものでしたか？	0.96	1.21	0.95	1.30	1.18	1.31
g. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか？	1.11	1.44	1.04	1.20	1.15	1.59
h. 教員は、毎回の授業で、その回の学ぶべきポイントを示していましたか？	0.84	1.18	0.78	1.36	1.06	1.39
i. 授業の中で、学生が参加して活動するような機会はありましたか？	0.19	0.10	0.02	1.19	1.51	1.60
j. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていましたか？	0.42	0.72	0.58	0.89	1.06	1.36
k. この授業では、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示が出されていましたか？	0.68	0.70	0.83	1.21	1.35	1.30
l. この授業では、AIアシスタントが授業中や授業時間以外に活用されていましたか？	-0.32	-0.72	-0.73	0.66	-0.74	-0.73
m. この授業及び授業時間外の学習中に、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？	-0.64	-0.24	-0.36	-0.76	-0.43	-0.78
n. 授業開始時間・終了時間も守られていましたか？	1.34	1.51	1.43	1.55	1.56	1.57
o. 授業はよく準備されていると思いますか？	1.35	1.55	1.33	1.49	1.47	1.55
p. 授業に対する教員の熱意を感じますか？	1.39	1.47	1.19	1.28	1.53	1.58
q. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫しながら問題に取り組む機会がありましたか？	0.47	0.58	0.74	1.10	1.41	1.44
r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか？	0.93	0.99	1.03	1.03	1.10	1.15
s. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけることの大切さに気づく機会はありましたか？	0.42	0.60	0.49	0.69		
t. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？	0.82	1.32	0.82	1.62		
u. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？	0.56	0.81	0.47	1.09		
平均	0.75	0.95	0.74	1.11	1.10	1.19

E 結果として、この授業を履修してよかったですか？



平成24年度前期

文化	社会	自然	情報	英語	英語以外	健・スポ
1.09	1.35	1.01	1.52	1.50	1.52	1.71

平成23年度前期

文化	社会	自然	情報	英語	英語以外	健・スポ	高年次
1.22	1.34	0.86	1.62	1.36	1.42	1.57	1.81

平成22年度前期

文化	社会	自然	情報	英語	英語以外	健・スポ	高年次
1.09	1.30	0.95	1.31	1.37	1.52	1.70	1.71

平成24年度前期 授業アンケート 学生の学習状況集計結果 (健康・スポーツ科目)

大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

楽しそうな種目だと思ったから	78.5%
経験のない種目だったから	10.6%
あまり動なくてもすみそうな種目だったから	6.0%
他にやりたい種目がなかったから	9.6%
先輩などからすすめられたから	1.4%
友達が選択するから	13.2%
他の種目で人数制限を受けたから	5.8%
その他(具体的に:)	5.1%
合計(回収枚数)	1118

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数は？

0回	80.8%
1回	14.0%
2回	4.0%
3回以上	1.3%
合計	1117

b. あなたが履修した種目は第一希望のものでしたか？

はい	91.0%
いいえ	9.0%
合計	1074

c. あなたは、体を動かすことが好きな方だと思いますか？

そう思う	50.5%
少しそう思う	29.5%
あまりそう思わない	14.3%
そう思わない	5.7%
合計	1115

d. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？
その内容はわかりましたか？

わかった	10.6%
だいたいわかった	24.6%
あまりわからなかった	6.6%
わからなかった	0.5%
読まなかった	57.7%
合計	1115

e. この授業の学習において、あなたはどのぐらい
アイアシスタントを利用しましたか？

よく利用した	2.9%
たまに利用した	5.8%
ほとんど利用しなかった	14.0%
まったく利用しなかった	77.3%
合計	1111

f. 1回の授業に対して、平均してどのぐらいの時間をかけて
予習・復習をしましたか？

ほとんどしなかった	96.4%
30分ぐらい	2.0%
1時間ぐらい	0.5%
2時間ぐらい	0.2%
3時間ぐらい	0.2%
4時間以上	0.8%
合計	1104

g. 体を動かすことの大切さについて、授業中に説明があり
ましたか？

あった	27.8%
あったと思う	49.4%
なかったと思う	18.9%
なかった	3.9%
合計	1117

h. この授業における自分自身の学習状況は、満足できる
ものだと思いますか？

そう思う	58.4%
すこしそう思う	35.6%
あまりそう思わない	5.3%
そう思わない	0.7%
合計	1116

D この授業に関し、下記の事項の回答として、下の①～④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んでください。

a. 教員は、授業の目的や到達目標についてわかりやすく説明していましたか？	1.46
b. この授業の内容は、授業の目的、到達目標の達成に役に立つものだったと思いますか？	1.51
c. 教員は、成績評価の方法や基準などについて、わかるように説明していましたか？	1.23
d. 授業の内容、進行は、おおよそシラバスに沿ったものでしたか？	1.28
e. 安全に運動を行うための指導(準備運動、道具の使い方など)がありましたか？	1.66
f. 教員の技能に関する指導はわかりやすいものでしたか？	1.43
g. 教員は、授業時間外にやるべきことを、わかりやすく説明していましたか？	0.51
h. 教員は、毎回、学生が学ぶべきポイントを示していましたか？	1.16
i. 学生が授業に参加しやすくなるための働きかけはありましたか？	1.48
j. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業中に対応をしていましたか？	1.22
k. この授業では、アイアシスタントが授業中や授業時間以外の学習に活用されていましたか？	-0.87
l. 授業中及び授業時間外の学習で、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？	-0.92
m. 授業開始時間・終了時間は守られていましたか？	1.71
n. 授業はよく準備されていたと思いますか？	1.56
o. 授業に対する教員の熱意を感じましたか？	1.64
p. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？	1.38
q. この授業で学んだ種目を、さらに続けたいと思いますか？	1.29
平均	1.10

優秀授業選出方針（平成 24 年度）

大学教育総合センター
教育改善部門

■優秀授業選出方針

- 1：アンケート実施授業科目を対象として、授業科目区分ごとに「優秀授業」を決定します。
- 2：履修人数の少ない授業科目については対象から外します。授業科目区分毎に履修登録人数の平均を出し、明らかに履修登録人数が少ない授業（履修登録人数の平均の 30%以下）については、対象から外します。
- 3：履修登録人数に比べて、アンケート回答者（回収枚数）が少ない授業科目については、対象から外します。回答者数が履修登録人数の 70%未満の授業科目については、対象から外します。
- 4：各授業科目区分での優秀授業対象科目（アンケートを実施している、履修者数が規定を満たしている、回収率が 70%以上）の 20%の科目数（四捨五入）が選出されることを基準とします。ただし、区切りとなる科目の集計値とそれ以前、もしくは以降の集計値に差があまりない場合には、対象科目数の 15%（四捨五入）～ 25%（四捨五入）範囲内の科目で、集計値の区切りの良いところまでを選出することとします。また、対象科目数が 5 科目未満の場合は、その区分からは選出しないこととします。
- 5：設問 D の各項目について、評点を定め、平均値を算出します。平成 20 年度は、選択肢の「そう思う」を 2 点、「まあそう思う」を 1 点、「あまりそう思わない」を - 1 点、「全くそう思わない」を - 2 点と評点を決めました。これを、各項目について、（「そう思う」と回答した人数 × 2 + 「まあそう思う」と回答した人数 × 1 + 「あまりそう思わない」と回答した人数 × - 1 + 「全くそう思わない」と回答した人数 × - 2） ÷ （「そう思う」と回答した人数 + 「まあそう思う」と回答した人数 + 「あまりそう思わない」と回答した人数 + 「全くそう思わない」と回答した人数）という式にあてはめ、点数を計算します。
- 6：5 で算出した設問 D の各項目の値の平均をとります。
ここでいくつかの項目を集計よりはずしました。集計除外項目（候補）とその理由は裏面の通りです。
- 7：設問 E についても、5 の方法で評定値を算出します。
- 8：6 で出した値と 7 で出した値とを合計します。
- 9：8 で算出した値について、上位から並べ、実施授業科目数の 20%を基準とし、15%～ 25% の範囲以内に収まる範囲で「上位群」を判定し、それらの科目を抽出します。
- 10：1～9 で抽出された授業科目を「優秀授業科目」候補科目とします。その後、自由記述項目等を加味して、教育改善部門会議での審議の結果、「優秀授業科目」を決定します。

集計除外項目（候補）

f. 板書、ビデオ、プロジェクター等で指示されたものは、わかりやすいものでしたか？

→板書やビデオ、プロジェクターは、「わかりやすい解説」を行うための「手段」であったり、もしくは教室の「環境」に左右されたりするので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

g. 教科書や参考書、配付資料は、学習の助けになりましたか？

→教科書や参考書、配布資料は、「わかりやすい解説」を行うための「手段」の1つなので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

i. 授業の中で、学生が参加して活動するような機会がありましたか？

→「学生が参加して活動するような機会」がある授業が好ましい授業形態の1つであることは確かですが、履修人数等の関係上、「やりたくてもできない」場合もあるので、参考情報の1つとして扱いました。（健康・スポーツ科目：i）

l. この授業では、アイアシスタントが授業中や授業時間以外の学習に活用されていましたか？

→アイアシスタント関連項目はデータ収集を目的に導入された項目なので、今回は、参考情報の1つとして扱います。来年度以降、FDプランの1つとして、集計項目になる可能性はあります。（健康・スポーツ科目：k）

m. この授業及び授業時間外の学習中に、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？

→上記はGPの成果測定のためのデータ収集を目的に導入された項目なので、参考情報の1つとして扱います。（健康・スポーツ科目：l）

q. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫しながら問題に取り組む機会がありましたか？

→問題解決活動を授業中もしくは授業時間外学習（自習）で行ったかどうかについての項目です。今後、「問題解決活動」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間はありましたか？

→教養教育の目標の1つでもある、常識・通念を問い直すことができたかどうかについての項目です。今後、これらの目標を達成することも目指すべき授業の1つですが、授業の題材などにもよるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

s. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけることの大切さに気づく機会があったと思いますか？

→課題探求活動を授業中もしくは授業時間外学習（自習）で行ったかどうかについての項目です。今後、「課題探求」を取り入れた授業は目指すべき授業の1つですが、大人数講義科目等では実施が難しい面もあるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。

t. この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？

→授業科目によっては、必ずしも「学生が役に立つと思う授業」=「いい授業」ではないので、今回は参考情報の1つとして扱いました。（外国語科目：q）（健康・スポーツ科目：p）

u. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？

→その授業科目で扱う題材や履修学生の所属学部などによって今後に対する意識も変わってくるので、今回は参考情報の1つとして扱いました。（外国語科目：r）（健康・スポーツ科目：q）

平成24年度 前期学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目の選出

教育改善部門では、全学共通教育科目を対象に、いくつかの授業科目を除いて、2年に1回のペースで学生による「授業アンケート」を実施しています。平成24年度は前期開講科目、平成25年度は後期開講科目が授業アンケートの対象科目となります。

授業アンケートの結果は、個々の授業担当者に返却する他、部門会議で作成した基準にしたがって「全学共通教育優秀授業科目」を選出しています。

平成24年度前期の優秀授業科目は以下の通りです。

平成25年1月30日には、全学共通教育優秀授業科目の表彰状の授与と懇談会を行いました。

平成24年度前期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目一覧

人間と文化

0008 心の理解	早坂浩志
0013 欧米の文学	中里まき子
0001 哲学の世界	音喜多信博
0019 大学の歴史と現在	江本理恵

人間と社会

0052 対人関係の心理学	川原正広
0051 対人関係の心理学	田村達
0029 市民生活と法	深澤泰弘
0033 憲法	江原勝行
0053 キャリアを考える	中村謙一

人間と自然

0066 物質の世界	吉澤正人
------------	------

情報基礎

0120 情報基礎	松館敦子
0114 情報基礎	中西貴裕
0118 情報基礎	松館敦子

健康・スポーツ

01014 サッカー	鳴尾直軌
01063 テニス	吉田実
01065 ニュースポーツ	若林美帆
01016 バレーボール	若林美帆
01022 バレーボール	若林美帆
01030 バドミントン	清水茂幸
01033 サッカー	鳴尾直軌
01062 バレーボール	小笠原義文

英語総合

0320 英語総合 I (中級)	伊東栄志郎
0331 英語総合 I (上級)	Gavin Young
0354 英語総合 I (上級)	三浦勲夫
0317 英語総合 I (上級)	Hareyama James Franciscus
0332 英語総合 I (上級)	松林城弘
0322 英語総合 I (初級)	星野勝利
0319 英語総合 I (中級)	佐藤智子
0304 英語総合 I (初級)	小林葉子

英語コミュニケーション

0324 英語コミュニケーション I (上級)	Gavin Young
0371 英語コミュニケーション I (中級)	ASANO ROBERT KEN
0341 英語コミュニケーション I (上級)	Gavin Young
0312 英語コミュニケーション I (初級)	Blair Benjamin Reed
0369 英語コミュニケーション I (中級)	Blair Benjamin Reed
0327 英語コミュニケーション I (中級)	ASANO ROBERT KEN
0329 英語コミュニケーション I (初級)	Hareyama James Franciscus
0326 英語コミュニケーション I (中級)	Ishikawa Peggy Marrie

英語以外の外国語

0452 初級中国語(入門)	呉慧敏
0471 上級日本語 B	岡崎正道
0423 初級フランス語(入門)	横井雅明
0446 初級ロシア語(入門)	長野俊一
0466 初級韓国語(入門)	立花春佳
0462 初級韓国語(入門)	崔在繕



平成24年度前期全学共通教育優秀授業科目表彰式にて

平成24年度後期 全学共通教育授業アンケート 学生の学習状況集計結果

大学教育総合センター

B この授業を選択した最も強い動機を、下記の中から3つ以内を選んで番号にマークしてください。

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
指定(指導)されたから	1.3%	8.6%	1.8%	4.3%	47.4%	88.1%	28.7%
単位がとりやすそうだから	16.7%	16.0%	23.1%	59.5%	8.7%	2.3%	6.1%
自分の専門と関係がなさそうだから	12.4%	9.3%	12.4%	9.7%	7.0%	0.3%	3.0%
先輩などからすすめられたから	7.8%	8.2%	12.9%	8.6%	6.1%	0.6%	7.0%
他にやりたい科目がなかったから	16.0%	13.4%	16.1%	12.4%	8.2%	8.2%	23.5%
シラバスを読んで興味を持ったから	63.1%	47.4%	50.7%	41.6%	38.3%	2.0%	34.8%
友達が選択するから	10.5%	13.8%	12.9%	16.2%	10.8%	0.6%	0.9%
自分の専門に関係が深そうだから	4.2%	16.4%	8.1%	1.6%	14.9%	5.4%	17.4%
他の科目で人数制限を受けたから	0.3%	0.4%	0.2%	0.0%	2.8%	0.3%	1.3%
その他(具体的に:)	1.6%	5.6%	2.4%	1.6%	2.1%	2.5%	9.6%
合計(集計枚数)	306	268	542	185	572	354	230

C この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数は？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
0回	58.9%	43.3%	57.5%	50.9%	61.5%	57.8%	48.3%
1回	21.1%	26.2%	22.2%	19.4%	19.4%	22.0%	19.6%
2回	11.0%	19.0%	13.4%	14.9%	12.4%	12.4%	11.3%
3回以上	9.0%	11.4%	6.9%	14.9%	6.7%	7.8%	20.9%
合計(回答数)	299	263	537	175	566	346	230

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？その内容はわかりましたか？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
わかった	20.3%	19.5%	15.9%	27.3%	15.1%	19.2%	18.9%
だいたいわかった	62.6%	64.3%	62.5%	59.6%	56.5%	36.4%	44.7%
あまりわからなかった	4.9%	6.8%	10.5%	3.8%	11.9%	7.6%	3.9%
わからなかった	0.3%	1.9%	1.3%	1.6%	1.4%	2.3%	3.1%
読まなかった	11.8%	7.5%	9.8%	7.7%	15.1%	34.5%	29.4%
合計(回答数)	305	266	542	183	570	354	228

c. 1回の授業に対して、平均してどのぐらいの時間をかけて予習・復習をしましたか？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
ほとんどしなかった	62.7%	62.5%	81.1%	89.1%	83.5%	27.5%	32.2%
30分ぐらい	31.0%	31.5%	13.5%	9.8%	14.2%	33.7%	48.7%
1時間ぐらい	6.2%	5.2%	4.6%	0.5%	1.9%	25.5%	17.0%
2時間ぐらい	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.2%	9.6%	2.2%
3時間ぐらい	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.2%	3.4%	0.0%
4時間以上	0.0%	0.4%	0.0%	0.5%	0.0%	0.3%	0.0%
合計(回答数)	306	267	541	184	569	353	230

d. この授業の学習において、あなたはどのぐらいアイアシスタントを利用しましたか？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
よく利用した	33.0%	40.1%	1.8%	2.2%	7.4%	2.8%	2.2%
たまに利用した	12.1%	16.9%	19.7%	9.8%	34.0%	8.8%	11.3%
ほとんど利用しなかった	15.0%	12.7%	20.5%	17.4%	21.2%	13.8%	14.8%
まったく利用しなかった	39.9%	30.3%	57.9%	70.7%	37.4%	74.6%	71.7%
合計(回答数)	306	267	542	184	570	354	230

e. (上記の回答が①～③の場合)アイアシスタントの何の機能を利用しましたか？(複数回答可)

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
授業記録	26.6%	19.4%	53.0%	69.4%	41.9%	66.3%	60.9%
i カード	55.9%	63.0%	2.7%	12.2%	10.4%	0.0%	1.4%
課題・レポート	11.7%	13.3%	25.1%	2.0%	28.8%	12.0%	4.3%
学習記録	2.7%	2.8%	11.9%	10.2%	9.0%	13.0%	20.3%
その他()	3.2%	1.4%	7.3%	6.1%	9.9%	8.7%	13.0%
合計(回答数)	188	211	219	49	413	92	69

f. レスポンスカード(iカード、電子メール等も含む)の作成や授業中の課題、小テスト等に積極的に取り組みましたか？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
そう思う	53.3%	44.6%	44.8%	42.9%	51.7%	50.9%	36.5%
すこしそう思う	35.3%	40.8%	40.8%	44.0%	37.8%	30.4%	42.6%
あまりそう思わない	4.9%	8.2%	9.8%	7.7%	5.2%	5.7%	12.6%
そう思わない	1.6%	2.2%	1.7%	1.6%	1.6%	2.3%	4.3%
機会がなかった	4.9%	4.1%	3.0%	3.8%	3.7%	10.8%	3.9%
合計(回答数)	306	267	542	182	572	352	230

g. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組みましたか？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
そう思う	36.9%	32.6%	38.7%	19.7%	23.1%	43.3%	25.7%
すこしそう思う	43.1%	47.2%	42.3%	33.3%	32.4%	35.4%	39.6%
あまりそう思わない	8.8%	10.5%	10.3%	13.1%	7.4%	9.6%	15.2%
そう思わない	1.0%	1.1%	2.4%	0.5%	1.9%	2.3%	4.3%
機会がなかった	10.1%	8.6%	6.3%	33.3%	35.2%	9.3%	15.2%
合計(回答数)	306	267	542	183	571	353	230

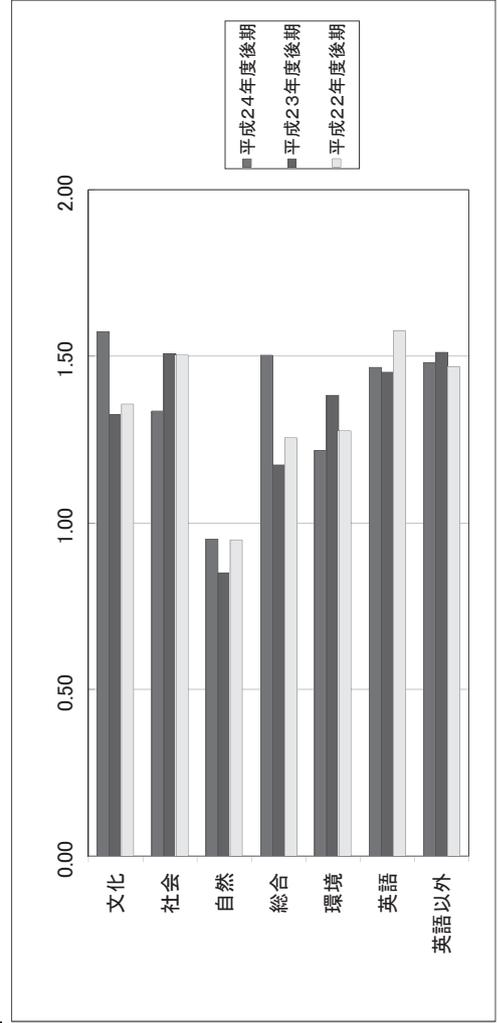
h. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか？

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
そう思う	32.7%	21.7%	23.8%	31.0%	24.3%	41.0%	24.3%
すこしそう思う	52.0%	58.4%	46.9%	53.3%	52.8%	41.8%	53.9%
あまりそう思わない	12.1%	16.9%	21.4%	14.7%	19.1%	14.7%	16.5%
そう思わない	3.3%	3.0%	7.9%	1.1%	3.8%	2.5%	5.2%
合計(回答数)	306	267	542	184	572	354	230

D この授業に関し、下記の事項の回答として、下の①～④の中から最もあてはまると思うものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

	文化	社会	自然	総合	環境	英語	英語以外
a. 教員はこの授業の目的や到達目標についてわかりやすく説明していましたか？	1.41	1.04	1.07	1.37	1.03	1.40	1.39
b. この授業の内容は、授業の目的、到達目標の達成に役に立つものだと思いますか？	1.53	1.18	1.07	1.44	1.16	1.31	1.48
c. 教員は、この授業の成績評価の方法や基準などについて、わかりやすく説明していましたか？	1.38	1.13	1.11	1.39	1.18	1.28	1.46
d. この授業の内容、進修は、おおよそシラバスに沿ったものでしたか？	1.47	1.31	1.27	1.47	1.36	1.26	1.41
e. 授業中の教員の説明や指示はわかりやすいものでしたか？	1.54	0.98	0.87	1.54	1.16	1.27	1.56
f. 板書・ビデオ・プロジェクター等で提出されたものは、わかりやすいものでしたか？	1.56	1.17	0.88	0.58	0.67	1.14	1.26
g. 教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか？	1.48	1.33	1.00	1.05	0.99	1.16	1.74
h. 教員は、毎回の授業で、その回の学びべきポイントを示していましたか？	1.27	0.83	0.77	1.43	1.36	0.90	1.50
i. 授業の中で、学生が参加して活動するよう機会がありましたか？	0.39	0.76	0.16	1.69	1.31	1.37	1.62
j. 教員は、学生の疑問点や意向をくみ取り、授業に反映させていましたか？	1.03	0.76	0.75	-0.82	0.06	1.06	1.45
k. この授業では、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示が出されていましたか？	1.44	1.22	0.91	-0.21	1.25	1.30	1.51
l. この授業では、アイアシスタントが授業中や授業時間以外の学習に活用されましたか？	-0.32	0.71	-0.69	0.54	0.66	-0.91	-1.19
m. この授業及び授業時間外の学習中に、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？	-0.10	0.26	-0.14	1.30	1.18	-0.26	-1.15
n. 授業開始時間・終了時間も守られていましたか？	1.40	0.46	1.46	0.77	0.82	1.56	1.55
o. 授業はよく準備されていると思いますか？	1.58	1.29	1.45	1.22	1.26	1.49	1.60
p. 授業に対する教員の熱意を感じますか？	1.58	1.34	1.41	0.98	0.82	1.50	1.50
q. 授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫しながら問題に取り組む機会がありましたか？	1.03	1.06	0.79			1.42	1.35
r. 授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか？	1.37	1.28	1.02			1.15	0.95
s. 授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけたことの大切さに気づく機会がありましたか？	1.09	1.01	0.55				
t. この授業で学んだことは、あなたにとっても、今後役に立ちそうだと思いますか？	1.45	1.40	0.83				
u. この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？	1.17	0.80	0.55				
平均	1.18	1.01	0.81	0.98	1.02	1.08	1.17

E 結果として、この授業を履修してよかったですと思いますか？



平成24年度後期 全学共通教育授業アンケート(初年次自由ゼミナール) 学生の学習状況集計結果

大学教育総合センター

B この授業に関し、下記の事項について該当する選択肢を1つ選んで、番号をマークしてください。

a. あなたがこの授業を休んだ回数は？

	全体
0回	74.1%
1回	18.5%
2回	3.7%
3回以上	3.7%
合計	27

b. この科目を履修する前にシラバスを読みましたか？その内容はわかりましたか？

	全体
わかった	55.6%
だいたいわかった	37.0%
あまりわからなかった	0.0%
わからなかった	0.0%
読まなかった	7.4%
合計	27

c. 1回の授業に対して、平均してどのぐらいの時間をかけて予習・復習をしましたか？

	全体
ほとんどしなかった	22.2%
30分ぐらい	29.6%
1時間ぐらい	37.0%
2時間ぐらい	7.4%
3時間ぐらい	0.0%
4時間以上	3.7%
合計	27

d. この授業の学習において、あなたはどのぐらいアイアシスタントを利用しましたか？

	全体
よく利用した	14.8%
たまに利用した	0.0%
ほとんど利用しなかった	14.8%
まったく利用しなかった	70.4%
合計	27

e. (上記の回答が①～③の場合)アイアシスタントの何の機能を利用しましたか？(複数回答可)

	全体
授業記録	50.0%
i カード	40.0%
課題・レポート	0.0%
学習記録	0.0%
その他()	10.0%
合計	10

f. 基礎ゼミナール用のテキスト『学びのはじめ』はこの授業におけるあなたの学習に役に立ちましたか？

	全体
とても役に立った	25.9%
役に立った	44.4%
少し役に立った	11.1%
役に立たなかった	0.0%
使わなかった	18.5%
合計	27

平成 24 年度後期授業アンケート集計結果

g. 授業の中で、図書館やミュージアムなど、学内の施設について見学する機会はありましたか？

	全体
あった	11.1%
なかった	88.9%
はっきり憶えていない	0.0%
合計	27

h. 授業の中で、図書館の使い方(本の借り方、蔵書の検索方法など)を学ぶ機会はありましたか？

	全体
あった	0.0%
なかった	88.9%
はっきり憶えていない	11.1%
合計	27

i. 授業の中で、大学での授業の受け方(講義の聴き方、ノートの取り方、レポートの書き方など)を学ぶ機会はありましたか？

	全体
あった	51.9%
なかった	37.0%
はっきり憶えていない	11.1%
合計	27

j. 授業を受ける中で、高校までの学習と大学での学習の違いに気づかされる機会はありましたか？

	全体
あった	88.9%
なかった	7.4%
はっきり憶えていない	3.7%
合計	27

k. 班活動を行う機会はありましたか？また、(班活動に限らず)何らかの学習活動の成果をみんなの前で発表する機会はありましたか？(複数回答可)

	全体
班活動を行う機会があった	61.8%
発表する機会があった	38.2%
両方ともなかった	0.0%
はっきり憶えていない	0.0%
合計	34

l. レスポンスカード(カード、電子メール等も含む)の作成や授業中の課題、小テスト等に積極的に取り組みましたか？

	全体
そう思う	57.7%
すこしそう思う	34.6%
あまりそう思わない	0.0%
そう思う思わない	0.0%
機会がなかった	7.7%
合計	26

m. 提出物(宿題・レポート等)に対し、納得いくまで取り組みましたか？

	全体
そう思う	51.9%
すこしそう思う	48.1%
あまりそう思わない	0.0%
そう思う思わない	0.0%
機会がなかった	0.0%
合計	27

n. この授業におけるあなたの学習は、満足できるものだと思いますか？

	全体
そう思う	88.9%
すこしそう思う	11.1%
あまりそう思わない	0.0%
そう思う思わない	0.0%
合計	27

C この授業全般に関する質問です。下記の事項の回答として、下の①～④の4段階の中から最もあてはまるものを1つ選んで、番号をマーク(●)してください。

a.	この授業全体に対する目的や到達目標についての説明はありましたか？	1.72
b.	この授業の内容は、授業の目的、到達目標の達成に役に立つものだと思いますか？	1.89
c.	この授業の成績評価の方法や基準などについての説明はありましたか？	1.20
d.	この授業の内容、進行は、おおよそシラバスに沿ったものでしたか？	1.54
e.	授業中の教員の説明や指示はわかりやすいものでしたか？	1.81
f.	板書・ビデオ・プロジェクター等で提出されたものは、わかりやすいものでしたか？	1.52
g.	教科書や参考書、配布資料等は、学習の助けになりましたか？	1.72
h.	授業の中で、学生が参加して活動するような機会がありましたか？	1.96
i.	この授業では、授業時間以外に行う学習(予習・復習・宿題・レポートなど)について、わかりやすく指示が出されていましたか？	1.83
j.	この授業では、アイアシスタントが授業中や授業時間以外の学習に活用されていましたか？	-0.78
k.	この授業及び授業時間外の学習中に、持続可能な社会や環境等について考える機会がありましたか？	0.09
l.	授業中及び授業時間外の学習中に、あなた自身が考え、工夫しながら問題に取り組む機会がありましたか？	1.78
m.	授業中及び授業時間以外の学習中に、新鮮な驚きを感じる瞬間がありましたか？	1.83
n.	授業中及び授業時間以外の学習中に、自分で探求すべき課題を見つけることの大切さに気づく機会がありましたか？	1.77
o.	この授業で学んだことは、あなたにとって、今後役に立ちそうだと思いますか？	1.83
p.	この授業で学んだことを、さらに勉強したいと思いますか？	1.77
平均		1.47

平成 24 年度前期 全学共通教育授業公開実施報告

2012年6月18日
大学教育総合センター

■実施日程

平成 24 年 6 月 11 日（月）～6 月 15 日（金）

■参加者数（のべ人数）

	月	火	水	木	金	合計
モニター	1	1	0	0	0	2
一般	1	2	3	0	4	10

※受付通過人数

- ・在校生の家族 8名
- ・一般 2名

■授業公開を知ったきっかけ

- ・入学式で配布されたちらし 7人
- ・岩手大学のwebページ 3人

■ご参観された授業についてのご感想等

◎教養科目（人間と文化） 月 1・2 【モニター】

- ・学生の反応を確認しながら具体的な事例を交え、わかりやすく講義されており、学生もそれに聞き入っていた様に思います。
- ・遅刻する学生も多いですね。40分も遅れ、先生に一礼することもせず入っていく姿に残念な思いをもちました。
- ・出席は、アンケート内に書く学籍番号で取っておられましたが、アンケートだけに個人を特定されることを避けたい学生もいたと思われます。

◎教養科目（人間と自然） 月 3・4 【モニター】

- ・積極的に前に座る学生も多く、モチベーションの高さにうれしく思いました。

◎教養科目（人間と社会） 火 1・2

- ・就職してからの仕事を続ける大変さや、我慢して乗り越えた時の感動がよく伝わってきました。仕事に就くという姿勢の大切さ、日々勉強していかなければいけないということを実感させられました。とてもよい内容だったと思います。

◎教養科目（人間と社会） 火1・2 【モニター】

- ・ 大学OBの学生時代～現在までをキャリアの順に話してもらい、現学生にとって、大変身近でこれからの学生生活の過ごし方にとっても参考になる講義だったと思います。OBの方が就職してから転機が幾度もあったようでしたが、その都度の切り抜けたことの要因等は実感のこもったことなので感動しました。（OBの中学生時代と高校時代のお話に触れられていなかったのが、なぜ?と気になりました。）

◎教養科目（人間と社会） 火3・4 【モニター】

- ・ 講義は社会人の私にとっては理解しやすく分かりやすいものでしたが、刺激性・感情性報酬で（例）での説明はとても良いと思います。学生生活の日常の例での説明を取り入れたらもっと分かりやすく記憶に残るのではと感じました。

◎教養科目（人間と文化） 水1・2

- ・ 公開授業を受けさせていただいたのは初めてでしたが、興味深く学ばせていただくことができました。今回はうつについての講義でしたが、現代社会のかかえている身近な問題でしたので、少しの時間ではありましたがその内容についてビデオ等もおりませながら、わかりやすく話をしていただけましたので、とても良かったです。また、次回の講義にも出席したいと思わせていただけるような内容でした。ありがとうございました。

◎教養科目（人間と文化） 水1・2

- ・ うつ病とうつ状態とは違うこと、性格や環境に影響される事等勉強できました。そして、死にたいというより消えたいという気持ち。自殺で亡くなる人を助けてあげられる社会になるとよいと思います。そして悲しみは消えなくても、置いておく事ができる事、前を見て楽しい人生でありたいと思います。

◎共通基礎科目（英語） 金3・4

- ・ 学生に戻った気持ちになり、新鮮でした。子供がどのような環境の元で勉強しているのか、授業を見学し、体験できてうれしく思います。英語コミュニケーションの授業では、高校の英語の授業とは違い、教科書を片手にではなく、自由な開放的な感じを受けました。

◎共通基礎科目（英語以外の外国語） 金3・4

- ・ 全部ドイツ語だけで授業していると思ったので、日本語の説明があつて助かった。英語と発音が似た部分があるのかな。昔と同様、電子辞書でなく紙の辞書を使っていたのでホッとした。

■その他、ご意見、ご感想等

◎出席表にチェックを入れ、すぐに退出した学生がいました。事情がそれぞれあるのでしょうが、もっと厳格にできないものかと思いました。(月3・4校時)【モニター】

◎授業が始まってからおしゃべりがなかなかやめられない学生、時間に遅れてもなぜか堂々と入室してくる学生がいるのにはちょっと驚きでした。高校とは違うでしょうが、時間を守るというルールがなっていない気がして残念に思いました。寝ている学生も多々いて、結局は自己責任ということなんですね。もう少し自覚を持ってほしいと思いました。(火1・2校時)

◎年に2回くらい公開講座があっても良いと思う。岩手大学の雰囲気、学生の様子も知ることができる(地域に知ってもらう良い機会)と思うので。

◎「キャリアを考える」講座は今日初めてでしたので、キャリアをどのような位置付けしているかどうか?と思いました。

キャリア→職業キャリア

→これまでの生きてきた全てをも合わせているのか

また、生き方(過去、現在、未来)の全部を指しているのか。教授の講義のありかた、進め方を知りたいと思いました。また機会があれば、受講したいと思います。ありがとうございました。(火1・2校時)【モニター】

◎各講義の内容を一言で良いので紹介していただけると、講義選択時にもっと興味・関心が持てると思う。公開授業の機会を増やしても良いと思う。地域に岩手大学の雰囲気や良いところを知ってもらうきっかけになると考えるので。

平成 24 年度後期 全学共通教育授業公開実施報告

2012 / 11 / 19

大学教育総合センター

■実施日程

平成 24 年 11 月 12 日（月）～11 月 16 日（金）

■参加者数（のべ人数）

	月	火	水	木	金	合計
モニター	0	0	0	0	0	0
一般	1	1	0	0	4	6

※受付通過人数

- ・在校生の家族 3 人

■授業公開を知ったきっかけ

- ・岩手大学から送付された案内 2 人

■ご参観された授業へのご感想等

- ◎ 共通基礎科目（外国語科目） 火 1・2 英語総合Ⅱ（中級）

78歳を目前にした老人ですが、Asahi Weekly を購読していますが、リスニングの力のなさを痛感。さらに生涯学習に勇気づけられた次第の謝。私語が全くない若者にちょっとおどろき。若者には「動」がピッタリ。万歳。

- ◎ 共通基礎科目（外国語科目） 金 1・2 初級中国語（発展）

生徒はまじめにとりこんでいた。内容はさっぱりわからない。

■その他のご意見、ご感想等

- ◎ 多くの若者を目の当たりに見て、老化にブレーキがかかったか。うらやましいかぎりです。

- ◎ やはり来ている保護者は少ないものですね。というか、ほとんどいない。

平成 24 年度入学前教育実施及び小委員会の設置について

大学教育総合センター

○経緯

大学教育総合センターでは、平成 18 年度に入学前教育の試行を行い、平成 19 年度から運営委員会の基に入学前教育実施小委員会を設置し、全学的体制で入学前教育を実施しています。これは、AO、推薦入試など、従来の「入試」以外の方法で早い時期に入学が決まる生徒が増えてきたことに伴い、それらの生徒の学習意欲の低下、学力の不足といった問題が指摘されていることを受け、生徒の学習意欲の低下、学力の不足を補うための取り組みの 1 つとして検討し、実施しているものです。平成 19 年度の提出率は約 65% でしたが、その後、各学部のご協力もいただき、平成 21 年度の提出率は約 99% となりました。

また、全学体制になり、多様な専門の教員が選ぶことで、課題図書のパリエーションも増え、対象生徒に多様な選択肢を与えることが可能になりました。平成 20 年度より各課題図書を推薦した教員の学部がわかるようになっておりますが、必ずしも進学予定学部の教員が推薦した本を選ぶわけではなく、「(進学予定) 学部の教授のおすすめの本をあえて選ばなかったことで、逆に視野が広がったと思う。」のように総合大学に進学するメリットを享受している生徒もいます。

この間、対象生徒へのアンケート、及び、対象高校へのアンケート（添付資料参照）も実施しており、好評をいただいています。

○目的と内容

前述の通り、一般的に、入学前教育を実施する目的として、大きく 2 つが考えられます。1 つは「学習意欲の低下を防ぐ」、もう 1 つは「学力の不足を補う」です。

大学教育総合センターでは、「全学体制」で実施する入学前教育では、前者の「学習意欲の低下を防ぐ」ことを主な目的とし、どの学部に進学する生徒にも共通で必要となる「文章作成能力」(=「指定された文献を丁寧に読み、指示に従って正確に文書としてまとめる」)の向上を目標とした課題を提案しました。これは、「学力の不足を補う」ための「学力の不足」が具体的に何なのか、それが各学部学科課程によって異なることが想定され、「全学共通」としての課題設定が難しい（実施するとなれば、各学部ごととなり、学部にかかなりの負担が生じてしまう）ことが理由として挙げられます。

さらに、推薦入試合格者への対応は高等学校により大きく異なり、大学からの「入学前教育」の実施について、歓迎する声から生徒への過度な負担を心配する声まであり、大学教育総合センターでは、あくまでも「高校教育」には抵触しない範囲、また、生徒（及び教員）への負担が重くならない範囲での実施を考えました。これは入学が決まった大学からの「大学の学習のほんのわずかな先取り」の働きかけにより、「大学生になる」ことに対する生徒の期待感をふくらませ、学習意欲を向上させて、高校での学習にも身を入れてもらうことを狙っています。

これらの検討によって、「指定された課題図書の中から 1 冊を選んで読み、指示に従ってレポートを作成する」という現在の入学前教育としての「読書レポート」の作成が開発され、現

在に至っています。生徒から提出されたレポートについては、各学部の教員のご協力のもと、300文字程度のコメントを作成して生徒に返送しています。余裕のある生徒は、コメントを読んだ上でレポートを改善し、再提出しています。

ただし、「学力の不足を補う」ことも将来的には検討する必要があると考え、大学教育総合センターでは、教員に負担をかけずに実施できるe-ラーニングの利用について検討を進めてきました。今までも高校までの数学の範囲を効率よく学ぶための数学教材や、総合的な英語力を測定できる英語教材の提供等を行ってきており、今年度も数学の教材は提供を予定しています。来年度を目指しての英語教材の検討も行っています。

同時に、各学部独自で入学前教育を実施するのであれば、その実施を支援することも委員を通して伝えており、例えば、教育学部が実施している推薦入試合格者向けの「レポート課題」の資料を同封して対象者に送付していますし、工学部に進学予定者の所属高校長あてには工学部長からの文書を送付しています。また、工学部進学予定者に対する数学のe-Learning教材の提供に協力しています。

○実施上の工夫

入学前教育を実施するにあたって難しい点は、対象となる生徒への連絡方法（コミュニケーション方法）です。平成18年度より試行錯誤しながら、以下の工夫を行いました。

・入学手続き時の住所シール

現在、推薦入試合格者への合格通知等は、受験生が試験時に記入した住所シールを利用しており、大学（入試課）では、受験生の住所等を管理していません。そこで、昨年度までは、大学教育総合センターのスタッフが入学手続き時に提出される誓約書に書かれている住所を入力して住所情報を作成していました。入学手続き時（12月15日頃）から年内発送（12月25日頃）までの期間が非常に短く、負担が大きい業務でした。今年度からは、入学手続き時に入学前教育用の住所シールへの住所記入を依頼することになりましたので、住所情報作成にかかる負担を減らすことができます。

・プレ・アイアシスタントの運用

対象生徒との連絡方法は郵送が大原則ですが、それだけでは不十分だと考え、対象生徒とのコミュニケーションの場として、入学前教育専用Webシステム「プレ・アイアシスタント」を開発・運用しています。レポートの提出・コメントの返却の他、様々なメッセージを発信したり、質問を受け付けたりしています。また、これは「レポート提出状況管理システム」としても重宝しており、切後すぐに提出状況をご連絡できる体制を整えることができました。

・本の入手方法の改善

対象生徒より「読みたい本が売っていなかった（手に入らなかった）」という意見がよせられたので、大学生協と連携して、FAXで申し込めば本が購入できるような体制をとっています。また、生協の書籍コーナー（ワゴン）で扱う他、推薦入試合格者向けのイベント等の時にも課題図書を販売しています。

・コメントの作成方法

コメントの作成は、「推薦した図書に対する読書レポートは推薦した学部が担当する」を基本ルールにしています。特定の図書に偏りが発生し、特定の学部に負担がかかる場合

には、負担割合を調整しますが、センターをふくめた5部局でコメント作成を担当しています。また、作成されたコメントについては、センター専任教員がチェックし、誤字脱字等の簡単な修正を加えて、コメント作成者によるばらつきを押さえる工夫をしています。

○体制・スケジュール等

- 運営委員会の下に、入学前教育実施小委員会を設置する（「第6回大学教育総合センター運営委員会（平成19年10月4日）資料8」）。各学部1名ずつの委員を選出する。
- 入学前教育実施小委員会には、大学教育総合センターより、委員長と委員を1名ずつ選出する。
- 小委員会が扱う入学前教育実施の内容は、推薦・AO入試合格者を対象とした「読書レポートの作成」とする。ただし、各学部で実施する取り組みに対してはできる限り支援する。また、センターとして「e-Learningを活用した教科学習」に実験的に取り組む。
- AO入試合格者のみを対象とした入学前教育については、小委員会では扱わない。
- 平成24年度：スケジュール（案）

5月	運営委員会：入学前教育の実施・小委員会設置の確認と委員選出依頼 (6月末まで：学務課まで)
7月	入学前教育実施小委員会：業務内容・スケジュールの確認等
11月	入学前教育実施小委員会：課題図書を選定等
12月下旬	入学前教育対象者への課題の発送，高校長への文書発送
2月中旬	読書レポート提出〆切：委員への読書レポートの分配
3月上旬	コメント作成〆切
3月中旬	対象者へのコメントの返送・希望者のみ再提出受付
5月中旬	入学前教育実施小委員会反省会：実施状況についてのまとめ

平成24年12月26日

「読書レポート」の作成と提出について

岩手大学大学教育総合センター

1. 「読書レポート」の目的

この「読書レポート」の作成は、図書を1つの情報資料として読み込み、そこから適切な情報を取り出して、簡潔でわかりやすい文章としてまとめることを通して、本を読むことで「自分の考えを深める」ことのできる力を養うことを目的としています。この力を養うためには、問題関心を深めていくことが重要です。問題関心が深まることによって情報が持っている意味や重要性が的確に捉えられるようになります。

2. 「読書レポート」の作成の仕方

- (1) 課題図書の中から1冊を選び、下記の手順に従って、レポートをまとめます。
- (2) 第1章には、その課題図書を選んだ理由を200字程度にまとめます。
- (3) 第2章には、本の各章ごとの要約文を作ります。以下の手順でまとめてみましょう。
(全体で2,000字程度になるようにまとめます)

- ①本の各章ごとに、キーワードを3つ以内で選びます。
- ②そのキーワードを基に、その章の内容を要約します。

【アドバイス1】選んだ課題図書によって「章」と明記されていないものもありますが、目次を見て、「最も大きなくくり」を「章」としてとらえてみてください。また、「小説」のように「大きなくくり」が明確でないものは、内容の区切りの良いところで「章」を区切ってください。

【アドバイス2】第2章は、選んだ本の「章」に相当する複数の「節」から構成されます。レポートの構成を意識して、見た目にもわかりやすく書いてください。

(例)

第1章 「〇〇××」を選んだ理由
 ・・・・本文

第2章
 1. 序章 ウェブ社会
 キーワード：チープ革命、ネット社会、リアル社会
 ・・・・本文

2. 第1章 「革命」であることの真の意味
 キーワード：オープンソース、三大潮流、シリコンバレー
 ・・・・本文

・・・・

第3章
 ・・・・本文

第4章
 ・・・・本文

第5章
 ・・・・本文

- (4) 第3章では、その本の内容全体から得られた知識や考え方を総括的にまとめます(400字程度)。ここはあくまでも「本の内容」に沿ってまとめてください。
- (5) 第4章では、著者の主張(本の中で繰り返し書かれている著者の考え方)に対する自分の考えをまとめます(400字程度)。ここは、「自分の考え」を書いてください。
- (6) 最後の章では、次に読んでみたい本の題名や分野を挙げ、その理由をまとめます(200字程度)。理由を書くときには、今回読んだ本との関係を示すのがポイントです。

3. 「読書レポート」作成上のアドバイス

- (1) レポートは、A4版のレポート用紙を使って作成します。原稿用紙でもかまいませんが、枚数が増えてしまいますので、「自分で判断して」選んでください。
- (2) レポートには、「選んだ図書名」「レポートのタイトル」「入学予定学部」「受験番号」「名前」を明記した表紙をつけてください。
- (3) レポートの最初には、「レポートのタイトル」「受験番号」「名前」を明記してください。本文は、章分けをし、小見出しを付け、適宜段落分けをして、丁寧な字で読みやすく作成してください。
- (4) 電子ファイルで作成する場合は、ワープロソフト（ワード、もしくは、一太郎）で作成してください。同じように、(2)の表紙をつけ、(3)の小見出し等をつけて読みやすいレポートを作成してください。
- (5) レポートの各項目について、文字数の目安が指定されています。それよりも極端に長く／短くならないように注意してまとめてください。目安として、2割以内と言われています（1000字の場合は800～1200字の範囲内）。
- (6) 上記レポートをまとめるにあたって、「批判的に本を読む」ことを意識してください。本に書かれていることは常に正しいとは限りません。具体的には、以下の手順で考えてみましょう。
 - ①書いてあることの中で、どれが情報の提示で、どこが著者の意見なのかを区別してみましょう。
 - ②提示されている情報（事実）が確かかどうか、確かめる方法を考えます。本やインターネット等を利用して実際に確かめてみましょう。
 - ③著者の考えが踏まえられた事実（根拠）と矛盾していないか、考えてみましょう。
- (7) 1冊の本について「読書レポート」を作成し、提出したら、他の本にも挑戦してみましょう。期限内に提出されたレポートは、何冊分でも受け取ります。
- (8) プレ・アイアシスタント（別紙参照）にアクセスすると、レポート作成のアドバイス等が参照できます。機会があれば、アクセスしてみましょう。

4. 提出期限と提出方法

以下の2つの方法より、都合のよい方を選択して提出してください。提出方法によって提出締め切り日が変わりますが、扱いが変わることはありません。

■方法1：プレ・アイアシスタント（別紙参照）を利用して提出

岩手大学が用意した入学前の生徒専用のe-Learningサイト（<http://pre-ia.iwate-u.ac.jp/>）にアクセスして、ワープロソフト（Word、一太郎等）を用いて作成したレポートを提出してください。この「プレ・アイアシスタント」には、岩手大学の教員によるレポート作成に関するアドバイスや図書の紹介などが随時掲載されていきます。ぜひ、積極的にアクセスし、読書レポートの作成に役立ててください。

提出期限：平成25年2月18日（月） 23：00

■方法2：郵送で提出

郵送で提出する場合には、レポートを下記の宛先まで送ってください。

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-34

岩手大学 大学教育総合センター

※「読書レポート在中」と封筒の表面に赤字で記入すること。

提出期限：平成25年2月15日（金） （消印有効）

入学前教育課題図書一覧

2012/12/26
大学教育総合センター

『科学の世界と心の哲学 — 心は科学で解明できるか』（中公新書） 小林道夫（著）

【内容紹介】

現代社会に生きるわたしたちは、自然科学は絶対に正しいものだと思っている。そして、人間の「心」についても、いつの日か自然科学的に（脳科学やコンピュータ・シミュレーションによって）解明されると信じられている。しかし、厳密に考えて、「科学」とは一体何であろうか。人間の「心」も科学によって説明し尽くされるのであろうか。こういった問題を、「科学哲学」の立場から考察しているのが本書である。これらは答えることの難しい問題であるが、著者は一度徹底的に問い直してみることを読者に促している。（人文社会科学部教員）

『タテ社会の人間関係 — 単一社会の理論』（講談社現代新書） 中根千枝（著）

【内容紹介】

「日本論」の不朽の名著。出版から半世紀近く、現代の日本は欧米化が進んだといわれるが、今読んでも全く古くは感じられない。それは「単一性」という社会の特徴が根本的なところではあまり変化していないからだろう。先輩・後輩関係、場による集団帰属意識（「ウチ」）、「ヨソ」との関わり方から政治家・学者らの非論理的・感情的発言まで、様々な問題が幅広く取り上げられており、現代日本社会に興味のある人には必読の教養書といえる。（人文社会科学部教員）

『働くということ — グローバル化と労働の新しい意味』（中公新書） ロナルド・ドーア（著）

【内容紹介】

「21世紀初頭には、私たちは週15時間程度働けばすむようになる」というケインズの予言とは、逆の方向に世の中が進んでいます。先進諸国でも、グローバル経済の進展による企業間競争の激化を理由に労働時間の短縮は進んでいません。また、所得格差の拡大、雇用機会の不平等など経済的格差の課題も抱えています。みなさんが社会に出て働くときにもう一度読み直してほしい良書です。（人文社会科学部教員）

『100年の難問はなぜ解けたのか — 天才数学者の光と影』（新潮文庫） 春日真人（著）

【内容紹介】

ミレニアム懸賞問題であった「ポアンカレ予想」が解決された。しかし、解決したロシア人数学者は数学におけるノーベル賞と言われるフィールズ賞の受賞を拒否し、社会との関わりをも断ってしまう。一体彼に何が起こったのか？本書は数学の非専門家である著者が世紀の難問「ポアンカレ予想」の解決に至る過程を、長年に渡る幾多の数学者たちの挑戦の軌跡を辿るように、丁寧な取材をもとに綴ったノンフィクションである。（人文社会科学部教員）

『思考の整理学』（ちくま文庫） 外山滋比古（著）

【内容紹介】

とても多くの大学生や大学関係者に読まれ続けている本です。小さな文庫本ですが、その内容は深いと思います。皆さんが高校で勉強していることと、大学で身に付けることがどのように違うのかを教えてください。大学では知識の幅をより広げて深めることができますが、このようなこととは質の異なる「研究」の意味について知ることができると思います。（教育学部教員）

『新編 教えるということ』（ちくま学芸文庫） 大村はま（著）

【内容紹介】

日本を代表する国語教師、大村はまが50年に及ぶ教師生活、そして退職後も精力的に教育に携わってきた中で、教師の仕事「教える」とは何かを問いかけた図書です。表題作「教えるということ」の他、「教師の仕事」「教室に魅力を」などが収録されています。教師という職業に限らず、責任ある職業人のあり方を考えさせてくれる名著です。（教育学部教員）

『遠野物語へようこそ』（ちくまプリマー新書） 三浦佑之、赤坂憲雄（著）

【内容紹介】

2010年に刊行100年を迎えた『遠野物語』。私たちの日常と異界の接点を考えさせるこの図書の成立背景、代表的なエピソードなどの平易な解説から説き明かす入門書です。歴史学、社会学、民俗学等々の学問の入門書としても読めますし、『遠野物語』の物語としての面白さの案内書としても最適です。岩手に学びみなさんが、岩手の魅力を新たに発見できる好著です。（教育学部教員）

『困ります、ファインマンさん』（岩波現代文庫） R. P. ファインマン（著）

【内容紹介】

物理学者であるファインマンによってユーモアいっぱい語られる様々なことへの好奇心、科学に対する誠実な態度、物事を考える喜びに満ちた生き方は、自然とあなたたちに自己を顧みさせてくれます。（工学部教員）

『働かないアリに意義がある』（メディアファクトリー新書） 長谷川英祐（著）

【内容紹介】

女王のために黙々と働く働きバチや働きアリたちに共感を覚えた経験は誰にもあるはず。しかし実際に観察すると、アリもハチもその7割はボーッとしており、約1割は一生働かないという。この働かないアリがいるからこそ、組織が存続していけるというのである！これらを「発見」した著者による本書は、アリやハチなどの集団社会の研究から動物行動学と進化生物学の最新知見を紹介する科学読み物である。（工学部教員）

『低炭素社会』（幻冬舎新書） 小宮山宏（著）

【内容紹介】

低炭素社会とは、地球温暖化の主原因である大気中のCO₂（二酸化炭素）を減らした社会のこと。鳩山首相は国連気候変動サミットで、CO₂の1990年比25%削減を宣言した。経済界からは多くの批判が上がったが、25%削減は、日本が国際社会のリーダーとなるまたとない切り札なのだ。そのためにはどの産業を強化すべきか、生活スタイルをどう変えるか、環境技術の第一人者が明快に解き明かす、これから10年の戦略。（工学部教員）

『ソウの時間ネズミの時間 — サイズの生物学』（中公新書） 本川達雄（著）

【内容紹介】

動物が変われば時間が変わる。絶対不変と思われる時間が、それぞれの動物にとって違うようだ。一生の間に心臓が打つ数や体重あたりのエネルギー使用量は、サイズによらず一定であるという。エネルギー量は仕事量であるから、これを使って仕事をすることで意味のある時間が生まれる。ならば機械に頼る現代人の時間は、イキモノとして意味があるのだろうか？本書は人類の将来についても貴重なヒントを提供している。（工学部教員）

『科学者という仕事 — 独創性はどのように生まれるか』（中公新書） 酒井邦嘉（著）

【内容紹介】

大学に進学しても、研究を職業とする人はごく少数の限られた人だと思います。しかし本書は、研究のプロになりたいと思う人はもちろん、そうでなくても社会で充実した人生を送りたい人にとって、独創性がいかに重要かについて大学で学ぶための重要な提言を論理的に述べています。感情のみが支配する社会ではなく、論理性が今後は益々重要視されると思いますので、文系、理系を問わず必読の1冊と思います。（農学部教員）

『科学は誰のものか — 社会の側から問い直す』（NHK出版生活人新書） 平川秀幸（著）

【内容紹介】

遺伝子組み換え、クローン、そしてiPS細胞。今や私たちは、食べ物から医療に至るまで、「生命」観を変える可能性を持つ画期的な科学技術を目の前にしている。科学とは何か？科学的思考とは何か？私たちの暮らしに深く関わる科学技術の問題にこれからどう冷静に向き合っていくのか？専門家の知識と一般市民の知性をつなぐ科学技術社会論の入門となる1冊である。（農学部教員）

『キリマンジャロの雪が消えていく — アフリカ環境報告』（岩波新書） 石弘之（著）

【内容紹介】

はるか昔、人類の祖先はアフリカ大陸で生まれたという。そして現在、豊かな自然の多様性を誇っていたアフリカが、解決の決定打がない貧困や環境破壊に苦しみ続けている。爆発的な人口増加、世界経済に翻弄される農業生産、不安定な政治情勢や温暖化による環境変化もさらなる悪化に追い打ちをかける。長年国際環境問題に関わってきた著者は、アフリカ大陸が抱える問題は将来人類が向き合う課題でもあると語りかける。野生動物の保護や国際協力・援助のあり方についても考えさせられる。（農学部教員）

『ボローニャ紀行』（文春文庫） 井上ひさし（著）

【内容紹介】

文化による都市再生のモデルとして世界に知られるイタリアの小都市ボローニャ。この街を訪れた著者による紀行文です。本書の中にもでてきますが、世界で最初にできた大学が「ボローニャ大学」です。ボローニャでは、「ボローニャ方式」と言われる方式で様々な工夫を凝らしながら街を作り上げていますが、そこには、ボローニャ大学の学生さんも大活躍しています。この本を読みながら、大学生時代に勉強に加えて何をしたいか、考えてみましょう。（高畑副学長）

※各書籍紹介末尾の（ ）には各図書を推薦した教員の専任担当学部等が書かれています。これらの情報も参考に、みなさんは、進学予定学部にかかわらず、自由に「読みたい」と思った本を選んでください。

入学前教育用

e-Learning教材紹介

大学教育総合センター

岩手大学の入学前教育では、読書レポートの他に数学と英語のe-Learning教材を用意しました。これらの教材は、受験のためではなく、入学後の大学での学びに必要な内容で構成しました。環境が整えば、ぜひ、挑戦してみてください。もちろん、手持ちの参考書等で学習を進めていただいてもかまいません。大学に入学したら勉強が終わるわけではないので、入学後に備えて、学習を続けるように心がけてください。

これらのe-Learning教材へは、岩手大学の入学前教育専用サイト「プレ・アイアシスタント」の左側のメニュー「教科学習」の各項目からアクセスすることができます。ID、パスワードは、「プレ・アイアシスタント」と同じです。

■もう一度数学

◇特徴

高校数学で学ぶ単元から、大学各分野で要求される計算力を養うために作成された、完全自習用教材です。学生が「理解できる」「計算できる」を主眼において作られているため、定理や公式の証明が丁寧に説明されています。また、例題やイラストを用いて、わかりやすく解説してあります。また「問題集」がついていますので、自身の学習の成果を確認しながら進めることができます。（平成25年1月7日より使えるようになります。）

◇内容

- ・数と数列（1）、（2）
- ・関数と2次曲線
- ・三角比と三角関数
- ・指数関数・対数関数
- ・微分入門（1）、（2）
- ・積分入門（1）、（2）
- ・ベクトル入門（1）、（2）、（3）
- ・複素数と複素数平面（1）、（2）

※金沢電子出版が提供する「もう一度数学」の教材を使っています。
※工学部の入学予定生徒は、必ず、この数学教材に取り組んでください。

■English Preparatory Course

◇特徴

高校英語の範囲を押さえながら、受験のための英語ではなく、大学で学問を修めるために必要な英語の基礎力を鍛えます。（平成25年1月15日から3月10日まで使えます。）

◇内容

- ・言語知識
 - ・語彙（形容詞、動詞、副詞、等）
 - ・文法（時制、動詞の変化、等）
- ・読解
 - ・速読問題（理解）
- ・聴解
 - ・リスニング問題（文法、語彙、等）

平成24年度 入学前教育 読書レポート提出状況一覧

2013/3/29
入学前教育実施小委員会

推薦学部	書籍名	人社	教育	工	農	人社(AO)	合計(通)
人	100年の難問はなぜ解けたのか	2	3	9	1	1	16
	働くということ	3	0	3	0	2	8
	タテ社会の人間関係	8	2	2	0	1	13
	科学の世界と心の哲学	3	0	1	0	1	5
教	遠野物語へようこそ	6	10	5	0	1	22
	新編 教えるということ	2	26	0	1	0	29
	思考の整理学	7	12	9	2	1	31
	ゾウの時間ネズミの時間	1	6	10	3	1	21
工	低炭素社会	4	0	16	1	0	21
	働かないアリに意義がある	4	11	22	11	0	48
農	困りませ、ファインマンさん	1	0	5	0	0	6
	キリマンジャロの雪が消えていく	1	1	3	5	0	10
	科学は誰のものか	0	0	5	2	0	7
	科学者という仕事	0	0	6	1	0	7
セ	ポロニーヤ紀行	2	2	2	1	1	8
合計(通)		44	73	98	28	9	251
提出者数(人)		44	71	96	28	9	248
対象者数(人)		44	71	96	28	9	248
提出率		100%	100%	100%	100%	100%	100.0%
読書レポート担当数(通)		40	47	93	24	-	-

※大学教育総合センター担当分 → 「100年の」2通、「働かないアリ」2通、「教えるということ」15通、「思考の整理学」20通

平成24年度 卒業時アンケート集計結果

		人文 社会 科学 学部	教育 学部	工学 部	農学 部	合計
回答者総数	(アンケート回収率:回答者/卒業者数)	89 39.2%	37 14.1%	189 45.4%	104 45.2%	419 36.9%
A: 性別	男性	35 39.3%	15 40.5%	159 84.1%	47 45.2%	256 61.1%
	女性	53 59.6%	22 59.5%	30 15.9%	57 54.8%	162 38.7%
	未記入	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
B: 入学年度	2003	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	1 0.2%
	2006	1 1.1%	0 0.0%	3 1.6%	0 0.0%	4 1.0%
	2007	1 1.1%	0 0.0%	4 2.1%	11 10.6%	16 3.8%
	2008	5 5.6%	1 2.7%	7 3.7%	6 4.8%	18 4.3%
	2009	81 91.0%	36 97.3%	174 92.1%	87 83.7%	378 90.2%
	2010	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%	0 0.0%	1 0.2%
	未記入	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
	C: 入学形態	推薦	15 16.9%	9 24.3%	42 22.2%	15 14.4%
一般前期	51 57.3%	20 54.1%	103 54.5%	73 70.2%	247 58.9%	
一般後期	15 16.9%	8 21.6%	35 18.5%	14 13.5%	72 17.2%	
編入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.9%	2 0.5%	
編入(一般)	0 0.0%	0 0.0%	4 2.1%	0 0.0%	4 1.0%	
編入(推薦)	0 0.0%	0 0.0%	2 1.1%	0 0.0%	2 0.5%	
編入(社会人)	2 2.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.5%	
社会人	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	
その他(外国人など)	6 6.7%	0 0.0%	3 1.6%	0 0.0%	9 2.1%	
D: 所属する「課程(学科)」		89 100.0%	37 100.0%	189 100.0%	104 100.0%	419 100.0%
E: 出身の都道府県	岩手県	43 48.3%	21 56.8%	86 45.5%	28 26.9%	178 42.5%
	岩手県以外の東北	36 40.4%	13 35.1%	42 22.2%	39 37.5%	130 31.0%
	東北以外の国内	8 9.0%	3 8.1%	58 30.7%	36 34.6%	105 25.1%
	外国	2 2.2%	0 0.0%	3 1.6%	1 1.0%	6 1.4%
F: 卒業後の進路(決定した進路)	民間企業	34 38.2%	12 32.4%	78 41.3%	48 46.2%	172 41.1%
	公務員	29 32.6%	1 2.7%	19 10.1%	23 22.1%	72 17.2%
	教員	0 0.0%	0 0.0%	2 1.1%	0 0.0%	2 0.5%
	自営業(実家など)	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	2 0.5%
	フリー(独立)の専門職	0 0.0%	1 2.7%	0 0.0%	1 1.0%	2 0.5%
	大学院	6 6.7%	4 10.8%	73 38.6%	19 18.3%	102 24.3%
	研究生	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	1 0.2%
	専門学校	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%
	その他	5 5.6%	5 13.5%	2 1.1%	4 3.8%	16 3.8%
	未定(わからない)	13 14.6%	4 10.8%	15 7.9%	7 6.7%	39 9.3%
	QA1: 全学共通教育の必要取得単位数についてどのように考えますか。	少なすぎる	3 3.4%	3 8.1%	11 5.8%	2 1.9%
ちょうどいい		65 73.0%	27 73.0%	147 77.8%	73 70.2%	312 74.5%
多すぎる		21 23.6%	7 18.9%	31 16.4%	29 27.9%	88 21.0%
未記入		0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QA2: 受講した全学共通教育科目の内容をトータルにみたとき、どの程度満足していますか？	満足	10 11.2%	4 10.8%	12 6.3%	11 10.6%	37 8.8%
	やや満足	48 53.9%	12 32.4%	70 37.0%	38 36.5%	168 40.1%
	どちらとも言えない	20 22.5%	11 29.7%	61 32.3%	28 26.9%	120 28.6%
	やや不満	9 10.1%	10 27.0%	39 20.6%	21 20.2%	79 18.9%
	不満	2 2.2%	0 0.0%	7 3.7%	6 5.8%	15 3.6%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QB1: 入学時に期待していた通りの教育を受けられましたか。	そう思う	35 39.3%	8 21.6%	24 12.7%	32 30.8%	99 23.6%
	少し思う	40 44.9%	16 43.2%	77 40.7%	39 37.5%	172 41.1%
	どちらとも言えない	6 6.7%	6 16.2%	44 23.3%	17 16.3%	73 17.4%
	あまりそう思わない	6 6.7%	6 16.2%	38 20.1%	9 8.7%	59 14.1%
	そう思わない	2 2.2%	1 2.7%	6 3.2%	7 6.7%	16 3.8%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QB2: 他の「課程(学科)」に進路を変更したいと思ったことはありませんか。	そう思う	8 9.0%	7 18.9%	21 11.1%	12 11.5%	48 11.5%
	少し思う	13 14.6%	9 24.3%	43 22.8%	23 22.1%	88 21.0%
	どちらとも言えない	2 2.2%	2 5.4%	12 6.3%	4 3.8%	20 4.8%
	あまりそう思わない	17 19.1%	7 18.9%	28 14.8%	19 18.3%	71 16.9%
	そう思わない	49 55.1%	12 32.4%	85 45.0%	46 44.2%	192 45.8%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QB3: 「コース」での教員の教育に対する姿勢について、どの程度満足していますか。	満足	52 58.4%	7 18.9%	17 9.0%	30 28.8%	106 25.3%
	やや満足	29 32.6%	16 43.2%	78 41.3%	48 46.2%	171 40.8%
	どちらとも言えない	3 3.4%	11 29.7%	56 29.6%	17 16.3%	87 20.8%
	やや不満	5 5.6%	3 8.1%	25 13.2%	6 5.8%	39 9.3%
	不満	0 0.0%	0 0.0%	13 6.9%	3 2.9%	16 3.8%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QB4: 「コース」の授業の成績評価について、どの程度満足していますか。	満足	49 55.1%	8 21.6%	22 11.6%	35 33.7%	114 27.2%
	やや満足	33 37.1%	18 48.6%	80 42.3%	45 43.3%	176 42.0%
	どちらとも言えない	5 5.6%	7 18.9%	57 30.2%	20 19.2%	89 21.2%
	やや不満	1 1.1%	3 8.1%	19 10.1%	4 3.8%	27 6.4%
	不満	1 1.1%	1 2.7%	11 5.8%	0 0.0%	13 3.1%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QB5: 「コース」の教員と学生との関係について、どのように思っていますか。	いろいろと接触することが多く、親密である	54 60.7%	21 56.8%	30 15.9%	53 51.0%	158 37.7%
	接触はあるが、親密ではない	30 33.7%	14 37.8%	104 55.0%	45 43.3%	193 46.1%
	接触はあまりない	5 5.6%	0 0.0%	48 25.4%	5 4.8%	58 13.8%
	その他	0 0.0%	2 5.4%	7 3.7%	1 1.0%	10 2.4%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
QB6: 「コース」の学生間の関係について、どのように思っていますか。	いろいろと接触することが多く、親密である	43 48.3%	26 70.3%	98 51.9%	73 70.2%	240 57.3%
	接触はあるが、親密ではない	37 41.6%	10 27.0%	61 32.3%	24 23.1%	132 31.5%
	接触はあまりない	7 7.9%	0 0.0%	23 12.2%	7 6.7%	37 8.8%
	その他	1 1.1%	1 2.7%	7 3.7%	0 0.0%	9 2.1%
	未記入	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%

平成 24 年度卒業時アンケート集計結果

QB7:「コース」で開講されている授業科目のバリエーションについてどう思いますか。	十分な選択肢が用意されている	51	57.3%	17	45.9%	89	47.1%	59	56.7%	216	51.6%
	やや少ない	33	37.1%	18	48.6%	87	46.0%	38	36.5%	176	42.0%
	大いに少ない	5	5.6%	2	5.4%	13	6.9%	7	6.7%	27	6.4%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	満足	38	42.7%	6	16.2%	14	7.4%	30	28.8%	88	21.0%
QB8:「コース」で受けた教育を全体としてみたとき、どの程度満足していますか。	やや満足	40	44.9%	16	43.2%	101	53.4%	49	47.1%	206	49.2%
	どちらとも言えない	4	4.5%	10	27.0%	45	23.8%	17	16.3%	76	18.1%
	やや不満	7	7.9%	5	13.5%	21	11.1%	8	7.7%	41	9.8%
	不満	0	0.0%	0	0.0%	7	3.7%	0	0.0%	7	1.7%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.2%
QC1:「コース」で学んだ内容はあなたの卒業後の進路にどの程度関連があると思いますか。	強く関連している	19	21.3%	18	48.6%	76	40.2%	59	56.7%	172	41.1%
	少し関連がある	25	28.1%	11	29.7%	67	35.4%	23	22.1%	126	30.1%
	関連はない	33	37.1%	7	18.9%	29	15.3%	15	14.4%	84	20.0%
	どちらとも言えない/わからない	12	13.5%	1	2.7%	17	9.0%	7	6.7%	37	8.8%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
QC2:「学部」の就職や進学に関する支援にはどの程度満足していますか。	満足	16	18.0%	8	21.6%	32	16.9%	13	12.5%	69	16.5%
	やや満足	25	28.1%	9	24.3%	75	39.7%	36	34.6%	145	34.6%
	どちらとも言えない	38	42.7%	16	43.2%	53	28.0%	26	25.0%	133	31.7%
	やや不満	5	5.6%	4	10.8%	18	9.5%	15	14.4%	42	10.0%
	不満	5	5.6%	0	0.0%	10	5.3%	14	13.5%	29	6.9%
QC3: 希望する進路(就職先、進学先)はいつ頃決めましたか。	入学前から	6	6.7%	7	18.9%	25	13.2%	12	11.5%	50	11.9%
	1~2年次	10	11.2%	3	8.1%	19	10.1%	8	7.7%	40	9.5%
	3~4年次	67	75.3%	24	64.9%	131	69.3%	73	70.2%	295	70.4%
	5~6年次(獣医のみ)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	5.8%	6	1.4%
	その他	6	6.7%	3	8.1%	14	7.4%	5	4.8%	28	6.7%
QC4: 進路の準備(就職活動、進学するための勉強)はいつ頃から始めましたか。	入学前から	0	0.0%	1	2.7%	5	2.6%	2	1.9%	8	1.9%
	1~2年次	4	4.5%	2	5.4%	5	2.6%	2	1.9%	13	3.1%
	3~4年次	80	89.9%	31	83.8%	168	88.9%	90	86.5%	369	88.1%
	5~6年次(獣医のみ)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	6.7%	7	1.7%
	その他	4	4.5%	3	8.1%	11	5.8%	3	2.9%	21	5.0%
QC5: 決定した進路(就職先、進学先等)に対してどの程度満足していますか。	満足	39	43.8%	17	45.9%	71	37.6%	41	39.4%	168	40.1%
	やや満足	28	31.5%	9	24.3%	68	36.0%	32	30.8%	134	32.0%
	どちらとも言えない	12	13.5%	10	27.0%	36	19.0%	26	25.0%	84	20.0%
	やや不満	2	2.2%	2	5.4%	9	4.8%	4	3.8%	17	4.1%
	不満	7	7.9%	2	5.4%	5	2.6%	1	1.0%	15	3.6%
QD1: どの程度学業を重視したと思いますか。	未記入	1	1.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.2%
	重視した	34	38.2%	9	24.3%	48	25.4%	23	22.1%	114	27.2%
	少し重視した	33	37.1%	13	35.1%	81	42.9%	48	46.2%	175	41.8%
	あまり重視しなかった	19	21.3%	13	35.1%	51	27.0%	26	25.0%	109	26.0%
	重視しなかった	3	3.4%	2	5.4%	9	4.8%	7	6.7%	21	5.0%
QD2: どの程度サークル活動を重視したと思いますか。	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	重視した	28	31.5%	12	32.4%	55	29.1%	37	35.6%	132	31.5%
	少し重視した	20	22.5%	13	35.1%	56	29.6%	21	20.2%	110	26.3%
	あまり重視しなかった	12	13.5%	6	16.2%	25	13.2%	13	12.5%	56	13.4%
	重視しなかった	5	5.6%	2	5.4%	20	10.6%	14	13.5%	41	9.8%
QD3: 大学事務のサービスについて、どの程度満足していますか。	サークルには入らなかった	24	27.0%	4	10.8%	32	16.9%	19	18.3%	79	18.9%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.2%
	満足	13	14.6%	3	8.1%	20	10.6%	3	2.9%	39	9.3%
	やや満足	20	22.5%	9	24.3%	56	29.6%	19	18.3%	104	24.8%
	どちらとも言えない	32	36.0%	13	35.1%	56	29.6%	30	28.8%	131	31.3%
QD4: 教室、研究室の施設など、学習環境について、どの程度満足していますか。	やや不満	10	11.2%	9	24.3%	27	14.3%	34	32.7%	80	19.1%
	不満	14	15.7%	3	8.1%	30	15.9%	18	17.3%	65	15.5%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	満足	17	19.1%	7	18.9%	26	13.8%	19	18.3%	69	16.5%
	やや満足	34	38.2%	17	45.9%	76	40.2%	32	30.8%	159	37.9%
QD5: 図書館について、どの程度満足していますか。	どちらとも言えない	18	20.2%	9	24.3%	41	21.7%	19	18.3%	87	20.8%
	やや不満	15	16.9%	3	8.1%	34	18.0%	28	26.9%	80	19.1%
	不満	5	5.6%	1	2.7%	12	6.3%	6	5.8%	24	5.7%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	満足	25	28.1%	11	29.7%	58	30.7%	23	22.1%	117	27.9%
QD6: 学食、生協について、どの程度満足していますか。	やや満足	41	46.1%	15	40.5%	68	36.0%	42	40.4%	166	39.6%
	どちらとも言えない	9	10.1%	8	21.6%	46	24.3%	24	23.1%	87	20.8%
	やや不満	11	12.4%	1	2.7%	12	6.3%	9	8.7%	33	7.9%
	不満	3	3.4%	2	5.4%	5	2.6%	6	5.8%	16	3.8%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
QD7: 大学生活全般についてどう感じていますか。	満足	22	24.7%	10	27.0%	46	24.3%	19	18.3%	97	23.2%
	やや満足	45	50.6%	19	51.4%	94	49.7%	42	40.4%	200	47.7%
	どちらとも言えない	7	7.9%	4	10.8%	22	11.6%	19	18.3%	52	12.4%
	やや不満	9	10.1%	1	2.7%	20	10.6%	16	15.4%	46	11.0%
	不満	6	6.7%	3	8.1%	7	3.7%	8	7.7%	24	5.7%
QH1:「学部」の教育には厳しさを感じましたか。	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	とても充実していた	33	37.1%	10	27.0%	34	18.0%	23	22.1%	100	23.9%
	充実していた	43	48.3%	15	40.5%	109	57.7%	61	58.7%	228	54.4%
	どちらとも言えない	8	9.0%	5	13.5%	30	15.9%	12	11.5%	55	13.1%
	あまり充実していなかった	5	5.6%	6	16.2%	13	6.9%	5	4.8%	29	6.9%
QH1:「学部」の教育には厳しさを感じましたか。	充実していなかった	0	0.0%	1	2.7%	3	1.6%	3	2.9%	7	1.7%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	感じた	6	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	1.4%
	少し感じた	18	20.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	18	4.3%
	どちらとも言えない	25	28.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25	6.0%
QH1:「学部」の教育には厳しさを感じましたか。	あまり感じなかった	30	33.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	30	7.2%
	感じなかった	10	11.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	10	2.4%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

QH2: この「学部」で幅広く学べたと思いますか。	そう思う	40	44.9%					40	9.5%
	少しそう思う	40	44.9%					40	9.5%
	どちらとも言えない	3	3.4%					3	0.7%
	あまりそう思わない	4	4.5%					4	1.0%
	そう思わない	2	2.2%					2	0.5%
	未記入	0	0.0%					0	0.0%
QH3: この「学部」で専門的な勉強・研究ができたと思いますか。	そう思う	32	36.0%					32	7.6%
	少しそう思う	42	47.2%					42	10.0%
	どちらとも言えない	7	7.9%					7	1.7%
	あまりそう思わない	6	6.7%					6	1.4%
	そう思わない	2	2.2%					2	0.5%
	未記入	0	0.0%					0	0.0%
QH4: 副専攻制度には総合的な視野を育むという意味で効果があると思いますか。	効果あり	26	29.2%					26	6.2%
	少し効果あり	37	41.6%					37	8.8%
	どちらとも言えない	13	14.6%					13	3.1%
	あまり効果はない	9	10.1%					9	2.1%
	効果なし	4	4.5%					4	1.0%
	未記入	0	0.0%					0	0.0%
QH5: この「学部」で学び、総合的な視野を身につけられたと思いますか。	そう思う	28	31.5%					28	6.7%
	少しそう思う	44	49.4%					44	10.5%
	どちらとも言えない	9	9.0%					8	1.9%
	あまりそう思わない	6	6.7%					6	1.4%
	そう思わない	3	3.4%					3	0.7%
	未記入	0	0.0%					0	0.0%
QH6: この「学部」で学び、自分の専門分野を学問全体の中で相対的に位置づけることができるようになったと思いますか。	そう思う	22	24.7%					22	5.3%
	少しそう思う	38	42.7%					38	9.1%
	どちらとも言えない	15	16.9%					15	3.6%
	あまりそう思わない	11	12.4%					11	2.6%
	そう思わない	3	3.4%					3	0.7%
	未記入	0	0.0%					0	0.0%
QH7: 人文社会科学部は今後も「総合的な教育・研究を行う学部」であって欲しいと思いますか。	そう思う	42	47.2%					42	10.0%
	少しそう思う	30	33.7%					30	7.2%
	どちらとも言えない	9	10.1%					9	2.1%
	あまりそう思わない	7	7.9%					7	1.7%
	そう思わない	1	1.1%					1	0.2%
	未記入	0	0.0%					0	0.0%
QH8: この「学部」で学んで良かったと思いますか。	そう思う	56	62.9%					56	13.4%
	少しそう思う	27	30.3%					27	6.4%
	どちらとも言えない	3	3.4%					3	0.7%
	あまりそう思わない	1	1.1%					1	0.2%
	そう思わない	1	1.1%					1	0.2%
	未記入	1	1.1%					1	0.2%

平成24年度
修了時アンケート集計結果

		人文社会科学	教育学研究科	工学研究科	農学研究科	合計
回答者総数	(アンケート回収率:回答者/修了者数)	17 154.5%	6 5.5%	99 43.2%	27 41.5%	149 44.7%
A: 性別	男性	8 47.1%	4 66.7%	86 86.9%	14 51.9%	112 75.2%
	女性	9 52.9%	2 33.3%	12 12.1%	12 44.4%	35 23.5%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	1 3.7%	2 1.3%
B: 入学年度	2009	10 58.8%	2 33.3%	8 8.1%	0 0.0%	20 13.4%
	2010	1 5.9%	0 0.0%	3 3.0%	1 3.7%	5 3.4%
	2011	5 29.4%	4 66.7%	86 86.9%	24 88.9%	119 79.9%
	2012	1 5.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.7%	2 1.3%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%
C: 入学形態	推薦	0 0.0%	0 0.0%	23 23.2%	0 0.0%	23 15.4%
	一般	13 76.5%	6 100.0%	73 73.7%	26 96.3%	118 79.2%
	社会人	2 11.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 1.3%
	その他(外国人など)	2 11.8%	0 0.0%	2 2.0%	0 0.0%	4 2.7%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	1 3.7%	2 1.3%
D: 所属する「専攻」		17 100.0%	6 100.0%	99 100.0%	27 100.0%	149 100.0%
E: 出身の都道府県	岩手県	1 5.9%	1 16.7%	35 35.4%	6 22.2%	43 28.9%
	岩手県以外の東北	6 35.3%	1 16.7%	41 41.4%	11 40.7%	59 39.6%
	東北以外の国内	0 0.0%	0 0.0%	12 12.1%	5 18.5%	17 11.4%
	外国	1 5.9%	0 0.0%	2 2.0%	0 0.0%	3 2.0%
	未記入	9 52.9%	4 66.7%	9 9.1%	5 18.5%	27 18.1%
F: 卒業後の進路(決定した進路)	民間企業	5 29.4%	0 0.0%	82 82.8%	13 48.1%	100 67.1%
	公務員	5 29.4%	0 0.0%	4 4.0%	10 37.0%	19 12.8%
	教員	1 5.9%	3 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 2.7%
	自営業(実家など)	1 5.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.7%
	フリー(独立)の専門職	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	大学院	0 0.0%	0 0.0%	3 3.0%	2 7.4%	5 3.4%
	研究生	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	0 0.0%	2 1.3%
	専門学校	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	その他	2 11.8%	1 16.7%	0 0.0%	0 0.0%	3 2.0%
	未定(わからない)	3 17.6%	2 33.3%	7 7.1%	1 3.7%	13 8.7%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	1 1.0%	1 3.7%	2 1.3%
	QB1: 「専攻」では入学時に期待していた通りの教育を受けられましたか。	そう思う	4 23.5%	4 66.7%	39 39.4%	6 22.2%
少し思う		9 52.9%	0 0.0%	37 37.4%	12 44.4%	58 38.9%
どちらとも言えない		3 17.6%	0 0.0%	11 11.1%	1 3.7%	15 10.1%
あまりそう思わない		0 0.0%	1 16.7%	4 4.0%	6 22.2%	11 7.4%
そう思わない		1 5.9%	1 16.7%	6 6.1%	1 3.7%	9 6.0%
未記入		0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%
QB2: 「専攻」の教員の研究指導について、どの程度満足していますか。	満足	12 70.6%	4 66.7%	39 39.4%	8 29.6%	63 42.3%
	やや満足	3 17.6%	1 16.7%	32 32.3%	10 37.0%	46 30.9%
	どちらとも言えない	2 11.8%	0 0.0%	13 13.1%	3 11.1%	18 12.1%
	やや不満	0 0.0%	0 0.0%	4 4.0%	4 14.8%	8 5.4%
	不満	0 0.0%	1 16.7%	9 9.1%	1 3.7%	11 7.4%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%
QB3: 「専攻」の授業の成績評価について、どの程度満足していますか。	満足	8 47.1%	4 66.7%	42 42.4%	9 33.3%	63 42.3%
	やや満足	6 35.3%	0 0.0%	34 34.3%	10 37.0%	50 33.6%
	どちらとも言えない	3 17.6%	1 16.7%	14 14.1%	7 25.9%	25 16.8%
	やや不満	0 0.0%	0 0.0%	7 7.1%	0 0.0%	7 4.7%
	不満	0 0.0%	1 16.7%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.7%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%
QB4: 「専攻」の教員と学生の関係について、どのように思っていますか。	いろいろと接触することが多く、親密である	9 52.9%	4 66.7%	40 40.4%	9 33.3%	62 41.6%
	接触はあるが、親密ではない	6 35.3%	2 33.3%	42 42.4%	14 51.9%	64 43.0%
	接触はあまりない	1 5.9%	0 0.0%	10 10.1%	2 7.4%	13 8.7%
	その他	0 0.0%	0 0.0%	5 5.1%	1 3.7%	6 4.0%
	未記入	1 5.9%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	4 2.7%
QB5: 「専攻」の学生間の関係について、どのように思っていますか。	いろいろと接触することが多く、親密である	8 47.1%	3 50.0%	58 58.6%	8 29.6%	77 51.7%
	接触はあるが、親密ではない	7 41.2%	1 16.7%	33 33.3%	9 33.3%	50 33.6%
	接触はあまりない	2 11.8%	2 33.3%	6 6.1%	8 29.6%	18 12.1%
	その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.7%	1 0.7%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%
QB6: 「専攻」で開講されている授業科目のバリエーションについてどう思いますか。	十分な選択肢が用意されている	13 76.5%	4 66.7%	52 52.5%	6 22.2%	75 50.3%
	やや少ない	3 17.6%	2 33.3%	40 40.4%	19 70.4%	64 43.0%
	大いに少ない	0 0.0%	0 0.0%	5 5.1%	1 3.7%	6 4.0%
	未記入	1 5.9%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	4 2.7%
QB7: 「専攻」で受けた教育を全体としてみたとき、どの程度満足していますか。	満足	7 41.2%	4 66.7%	30 30.3%	3 11.1%	44 29.5%
	やや満足	8 47.1%	1 16.7%	38 38.4%	15 55.6%	62 41.6%
	どちらとも言えない	1 5.9%	1 16.7%	18 18.2%	4 14.8%	24 16.1%
	やや不満	0 0.0%	0 0.0%	6 6.1%	3 11.1%	9 6.0%
	不満	0 0.0%	0 0.0%	5 5.1%	1 3.7%	6 4.0%
未記入	1 5.9%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	4 2.7%	
QC1: 「専攻」で学んだ内容はあなたの卒業後の進路にどの程度関連があると思いますか。	強く関連している	4 23.5%	4 66.7%	33 33.3%	9 33.3%	50 33.6%
	少し関連がある	2 11.8%	1 16.7%	43 43.4%	6 22.2%	52 34.9%
	関連はない	8 47.1%	1 16.7%	14 14.1%	8 29.6%	31 20.8%
	どちらとも言えない/わからない	3 17.6%	0 0.0%	7 7.1%	3 11.1%	13 8.7%
	未記入	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%
QC2: 「大学院・研究科」の就職や進学に関する支援にはどの程度満足していますか。	満足	7 41.2%	2 33.3%	30 30.3%	4 14.8%	43 28.9%
	やや満足	4 23.5%	2 33.3%	25 25.3%	3 11.1%	34 22.8%
	どちらとも言えない	4 23.5%	2 33.3%	28 28.3%	10 37.0%	44 29.5%
	やや不満	1 5.9%	0 0.0%	7 7.1%	3 11.1%	11 7.4%
	不満	1 5.9%	0 0.0%	7 7.1%	6 22.2%	14 9.4%
未記入	0 0.0%	0 0.0%	2 2.0%	1 3.7%	3 2.0%	

QC3: 希望する進路(就職先、進学先)はいつ頃決めましたか。	修士課程入学前から	5	29.4%	4	66.7%	16	16.2%	10	37.0%	35	23.5%
	修士課程1年次	2	11.8%	0	0.0%	50	50.5%	7	25.9%	59	39.6%
	修士課程2年次	4	23.5%	0	0.0%	21	21.2%	9	33.3%	34	22.8%
	その他	6	35.3%	2	33.3%	10	10.1%	0	0.0%	18	12.1%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	2	2.0%	1	3.7%	3	2.0%
QC4: 進路の準備(就職活動、進学するための勉強)はいつ頃から始めましたか。	修士課程入学前から	3	17.6%	1	16.7%	10	10.1%	2	7.4%	16	10.7%
	修士課程1年次	3	17.6%	1	16.7%	74	74.7%	18	66.7%	96	64.4%
	修士課程2年次	4	23.5%	2	33.3%	6	6.1%	5	18.5%	17	11.4%
	その他	7	41.2%	2	33.3%	7	7.1%	1	3.7%	17	11.4%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	2	2.0%	1	3.7%	3	2.0%
QC5: 決定した進路(就職先、進学先等)に対してどの程度満足していますか。	満足	10	58.8%	4	66.7%	53	53.5%	16	59.3%	83	55.7%
	やや満足	3	17.6%	0	0.0%	23	23.2%	8	29.6%	34	22.8%
	どちらとも言えない	1	5.9%	1	16.7%	13	13.1%	2	7.4%	17	11.4%
	やや不満	2	11.8%	0	0.0%	7	7.1%	0	0.0%	9	6.0%
	不満	1	5.9%	1	16.7%	1	1.0%	0	0.0%	3	2.0%
未記入	0	0.0%	0	0.0%	2	2.0%	1	3.7%	3	2.0%	
QD1: どの程度学業を重視したと思いますか。	重視した	7	41.2%	3	50.0%	43	43.4%	13	48.1%	66	44.3%
	少し重視した	6	35.3%	1	16.7%	39	39.4%	12	44.4%	58	38.9%
	あまり重視しなかった	3	17.6%	1	16.7%	11	11.1%	1	3.7%	16	10.7%
	重視しなかった	1	5.9%	1	16.7%	5	5.1%	0	0.0%	7	4.7%
	未記入	0	0.0%	0	0.0%	1	1.0%	1	3.7%	2	1.3%
QD2: どの程度サークル活動を重視したと思いますか。	重視した	4	23.5%	1	16.7%	5	5.1%	2	7.4%	12	8.1%
	少し重視した	4	23.5%	0	0.0%	15	15.2%	2	7.4%	21	14.1%
	あまり重視しなかった	0	0.0%	1	16.7%	10	10.1%	6	22.2%	17	11.4%
	重視しなかった	2	11.8%	0	0.0%	15	15.2%	5	18.5%	22	14.8%
	サークルには入らなかった	7	41.2%	4	66.7%	52	52.5%	11	40.7%	74	49.7%
未記入	0	0.0%	0	0.0%	2	2.0%	1	3.7%	3	2.0%	
QD3: 大学事務のサービスについて、どの程度満足していますか。	満足	4	23.5%	3	50.0%	15	15.2%	2	7.4%	24	16.1%
	やや満足	9	52.9%	0	0.0%	21	21.2%	4	14.8%	34	22.8%
	どちらとも言えない	2	11.8%	1	16.7%	27	27.3%	10	37.0%	40	26.8%
	やや不満	1	5.9%	1	16.7%	17	17.2%	9	33.3%	28	18.8%
	不満	1	5.9%	1	16.7%	17	17.2%	1	3.7%	20	13.4%
未記入	0	0.0%	0	0.0%	2	2.0%	1	3.7%	3	2.0%	
QD4: 教室、研究室の施設など、学習環境について、どの程度満足していますか。	満足	7	41.2%	3	50.0%	22	22.2%	2	7.4%	34	22.8%
	やや満足	7	41.2%	1	16.7%	32	32.3%	10	37.0%	50	33.6%
	どちらとも言えない	1	5.9%	1	16.7%	17	17.2%	7	25.9%	26	17.4%
	やや不満	2	11.8%	1	16.7%	17	17.2%	6	22.2%	26	17.4%
	不満	0	0.0%	0	0.0%	10	10.1%	1	3.7%	11	7.4%
未記入	0	0.0%	0	0.0%	1	1.0%	1	3.7%	2	1.3%	
QD5: 図書館について、どの程度満足していますか。	満足	5	29.4%	2	33.3%	20	20.2%	6	22.2%	33	22.1%
	やや満足	8	47.1%	1	16.7%	39	39.4%	9	33.3%	57	38.3%
	どちらとも言えない	1	5.9%	2	33.3%	28	28.3%	7	25.9%	38	25.5%
	やや不満	1	5.9%	1	16.7%	6	6.1%	3	11.1%	11	7.4%
	不満	1	5.9%	0	0.0%	5	5.1%	1	3.7%	7	4.7%
未記入	1	5.9%	0	0.0%	1	1.0%	1	3.7%	3	2.0%	
QD6: 学食、生協について、どの程度満足していますか。	満足	4	23.5%	2	33.3%	16	16.2%	3	11.1%	25	16.8%
	やや満足	9	52.9%	2	33.3%	43	43.4%	11	40.7%	65	43.6%
	どちらとも言えない	3	17.6%	2	33.3%	19	19.2%	6	22.2%	30	20.1%
	やや不満	1	5.9%	0	0.0%	15	15.2%	3	11.1%	19	12.8%
	不満	0	0.0%	0	0.0%	5	5.1%	3	11.1%	8	5.4%
未記入	0	0.0%	0	0.0%	1	1.0%	1	3.7%	2	1.3%	
QD7: 大学生生活全般についてどう感じていますか。	とても充実していた	8	47.1%	3	50.0%	20	20.2%	6	22.2%	37	24.8%
	充実していた	6	35.3%	1	16.7%	58	58.6%	16	59.3%	81	54.4%
	どちらとも言えない	2	11.8%	2	33.3%	14	14.1%	3	11.1%	21	14.1%
	あまり充実していなかった	1	5.9%	0	0.0%	4	4.0%	1	3.7%	6	4.0%
	充実していなかった	0	0.0%	0	0.0%	2	2.0%	0	0.0%	2	1.3%
未記入	0	0.0%	0	0.0%	1	1.0%	1	3.7%	2	1.3%	
QH1: 「研究科」の教育には厳しさを感じましたか。	感じた	3	17.6%							3	2.0%
	少し感じた	2	11.8%							2	1.3%
	どちらとも言えない	4	23.5%							4	2.7%
	あまり感じなかった	7	41.2%							7	4.7%
	感じなかった	0	0.0%							0	0.0%
未記入	1	5.9%							1	0.7%	
QH2: 「研究科」で幅広く学べたと思いますか。	そう思う	3	17.6%							3	2.0%
	少しそう思う	10	58.8%							10	6.7%
	どちらとも言えない	3	17.6%							3	2.0%
	あまりそう思わない	0	0.0%							0	0.0%
	そう思わない	0	0.0%							0	0.0%
未記入	1	5.9%							1	0.7%	
QH3: 「研究科」で専門的な勉強・研究ができたと思いますか。	そう思う	9	52.9%							9	6.0%
	少しそう思う	5	29.4%							5	3.4%
	どちらとも言えない	1	5.9%							1	0.7%
	あまりそう思わない	1	5.9%							1	0.7%
	そう思わない	0	0.0%							0	0.0%
未記入	1	5.9%							1	0.7%	
QH4: 「研究科」で学び、総合的視野を身につけられたと思いますか。	そう思う	7	41.2%							7	4.7%
	少しそう思う	6	35.3%							6	4.0%
	どちらとも言えない	2	11.8%							2	1.3%
	あまりそう思わない	1	5.9%							1	0.7%
	そう思わない	0	0.0%							0	0.0%
未記入	1	5.9%							1	0.7%	
QH5: 「研究科」で学び、自分の専門分野を学問全体の中で相対的に位置づけることができるようになったと思いますか。	そう思う	4	23.5%							4	2.7%
	少しそう思う	8	47.1%							8	5.4%
	どちらとも言えない	3	17.6%							3	2.0%
	あまりそう思わない	0	0.0%							0	0.0%
	そう思わない	1	5.9%							1	0.7%
未記入	1	5.9%							1	0.7%	

平成 24 年度卒業時アンケート集計結果

QH6: 人文社会科学研究科は今後も「総合的な教育・研究を行う研究科」であって欲しいと思いますか。	そう思う	8	47.1%					8	5.4%
	少しそう思う	5	29.4%					5	3.4%
	どちらとも言えない	2	11.8%					2	1.3%
	あまりそう思わない	1	5.9%					1	0.7%
	そう思わない	0	0.0%					0	0.0%
	未記入	1	5.9%					1	0.7%
QH7: 「研究科」で学んで良かったと思いますか。	そう思う	10	58.8%					10	6.7%
	少しそう思う	5	29.4%					5	3.4%
	どちらとも言えない	1	5.9%					1	0.7%
	あまりそう思わない	0	0.0%					0	0.0%
	そう思わない	0	0.0%					0	0.0%
	未記入	1	5.9%					1	0.7%

過去4年間の卒業（修了）時アンケート結果を眺めて

教育改善部門（武井隆明）

卒業（修了）時アンケートは 2009 年度の卒業（修了）時から行われ、4 年間の結果が揃っている。質問項目は大きく 4 つのブロックに分けられている。卒業時アンケートでいえば、QA1 と QA2 が全学共通教育に関わること、QB1～QB8 は課程やコースの専門教育に関わること、QC1～QC5 は進路との関係、QD1～QD7 はその他で大学生活全般についての質問である。各学部や研究科においては、それぞれで分析し、活用することになっている。それ故、教育改善部門としてはそれ以外の部分に焦点を当て、特に学部以外の部局に関する項目や大学全体に関わると思われる項目について、4 年間の変化に注目して簡単な整理を試みた。ここでは卒業時アンケート結果に限定し、さらに質問項目も次ページの 8 項目に限定している。また、この試みが今後のアンケート結果活用の検討の材料になればとも思っている。

なお、アンケートの回収率は 2009 年度が 9 割弱であったが、2010 年度から 2012 年度までの 3 年間は 4 割程度と、かなり低かった。ただ回収率が大きく異なっても、集計結果においては年度による変化はあまりないように見えるが、一応注意しておく必要はある。

まず注目した項目は、QB5 と QB6 である。QB5 は「「コース」の教員と学生の関係についてどのように思っていますか？」であるが、2010 年度は「いろいろと接触する事が多いし、親密である」が少し下がり、「接触があまりない」と感じた学生の割合が少し増えた感じである。2009、2011、2012 年度は同じ傾向である。2010 年度の卒業時とは大震災直後に当たり、何らかの影響があったのかも知れない。また、QB6 は「「コース」の学生間関係についてどのように思っていますか？」で、QB5 の教員との関係より学生同士の関係の方が親密であると感じている割合が圧倒的に多いが、少し下がり加減であるようだ。分析するに当たり、特にこの 2 項目を選んだ理由は、教職員の多忙化も問題にされている中で、学生への教職員の多忙化の影響が検討できる項目と思われるからである。各学部でのより詳細な分析は可能と思われるが、QD1 の「どの程度学業を重視したと思いますか？」も含め、大学全体としても今後も継続して注視すべき項目と思われる。なお、QD1 では、学業を重視したという割合がわずかながら下がる傾向にあるようだ。

学習環境全般の満足度として、教室や研究室（QD4）、図書館（QD5）、生協（QD6）、そして、QD7 として大学生活全般の充実感について、検討してみた。概略を見ると、この 4 つの項目は同じパターンを示している（次々頁の別なグラフ参照）。「満足」が 2、3 割、「やや満足」が最大で大凡 4 割か 5 割程度、「どちらとも言えない」が 2 割程度、そして「やや不満」、「不満」と減少していて、よく似ている。また、回収率も違うが、年度による違いも小さいように見える。対象学生が違うはずであるが、似た傾向を示すことも不思議な気がした。なお、「満足」と「やや満足」の合計で見ると、滞在時間が多かったと思われる教室や研究室への満足度が少し低いようである。

大学生活全般について、回答者の 8 割以上が「とても充実していた」、「充実していた」と答えており、取り敢えずは大きな問題点は無いと考えてよいのであろうか。

最後に、このアンケートそのものへのコメント（自由記述）も紹介しておく。

アンケートそのものへのコメント（自由記述）

2010 年度 ・このようなアンケートをとるなら、具体的に何をどのように改善して欲しいかという意見まで聞かなければ、アンケート結果がいきてこないと思う。

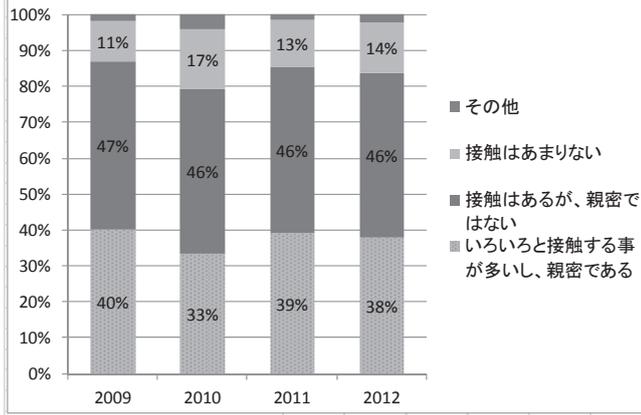
- ・無駄なアンケートはへらすべき。授業アンケートとかも意味がない（86 項目もいらぬ）。
- ・アンケートの質問の仕方が不適切なようです。改善した方がよいと思います。

2011 年度 ・興味ない。どうせ何も変わらないし変えるつもりもないでしょうし。なんでこんなアンケートをしたのか疑問に感じる。

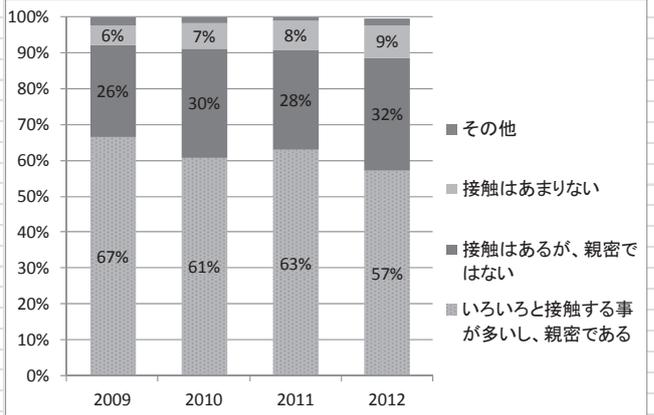
- ・今回のアンケートで聞かれているサークルの欄にサークルに所属していないの欄があり、所属することが基本のような考えはどうかと思う。

卒業時アンケート 4年間の推移

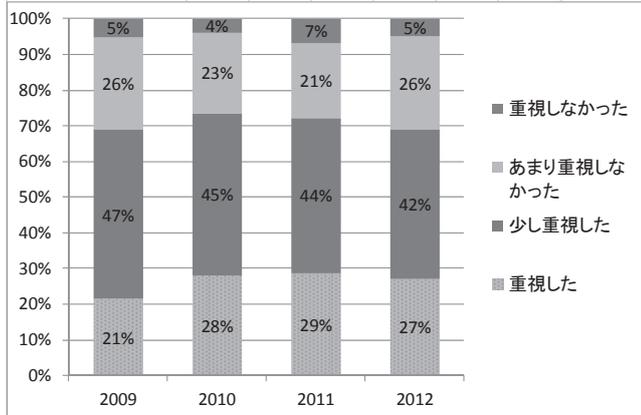
QB5:「コース」の教員と学生の関係についてどのように思っていますか？



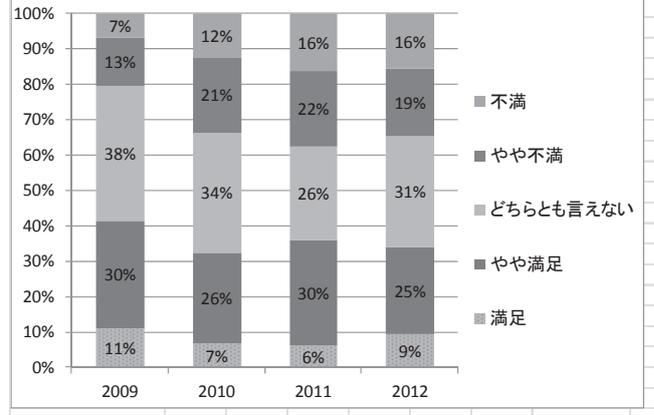
QB6:「コース」の学生間についてどのように思っていますか？



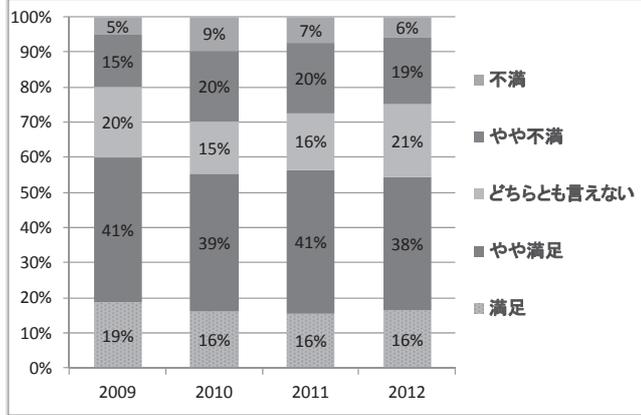
QD1:どの程度学業を重視したと思いますか？



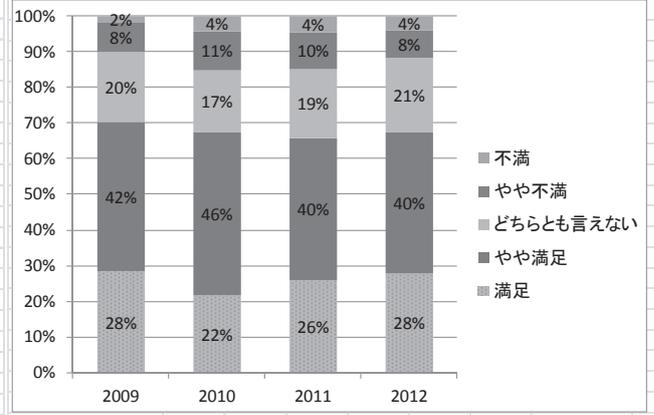
QD3:大学事務のサービスについてどの程度満足していますか？



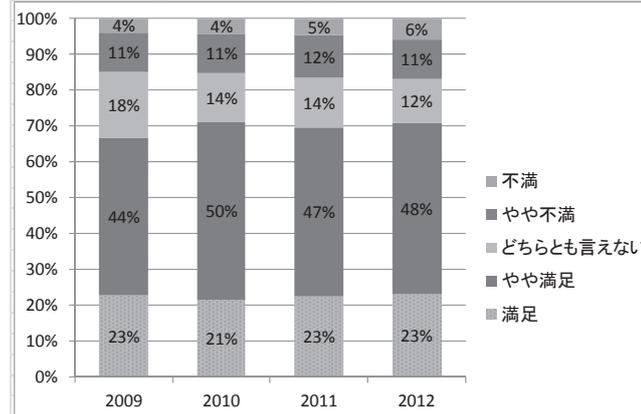
QD4:教室、研究室の施設など学習環境についてどの程度満足していますか？



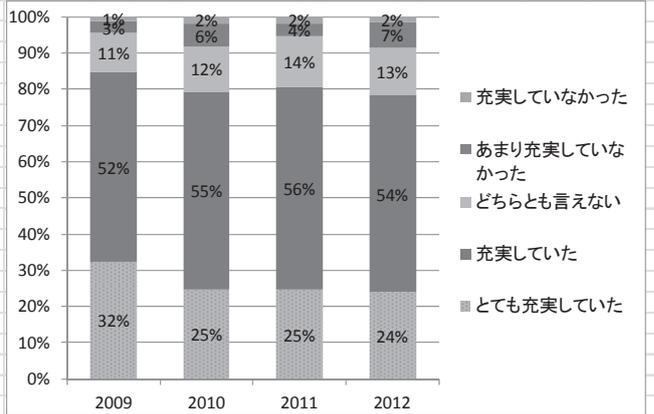
QD5:図書館についてどの程度満足していますか？



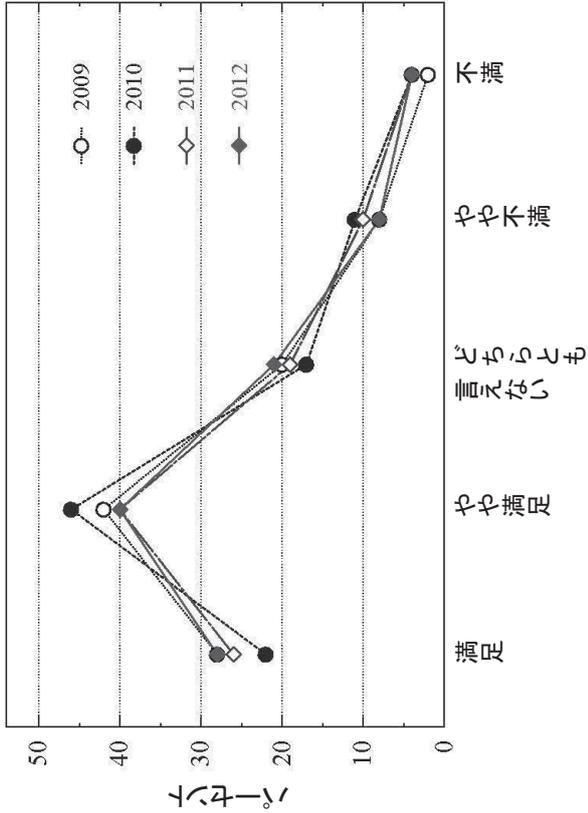
QD6:学食、生協についてどの程度満足していますか？



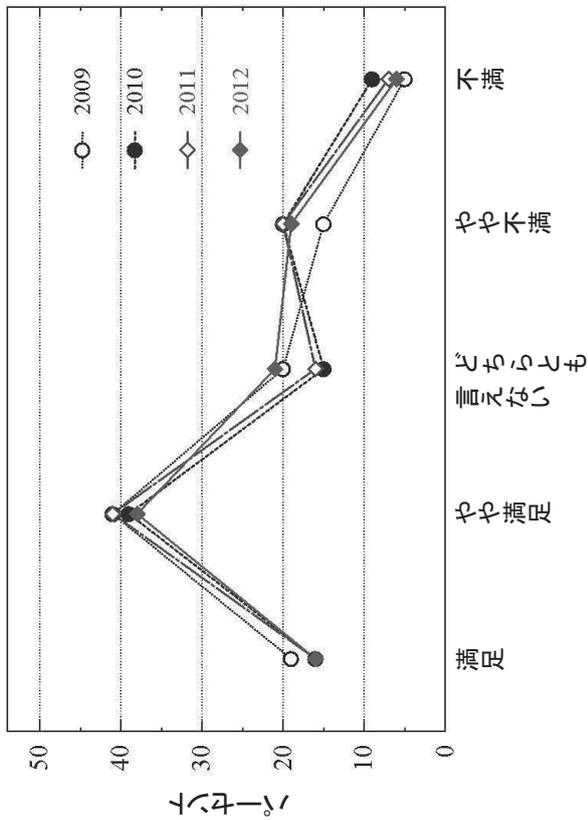
QD7:大学生生活全般についてどう感じていますか？



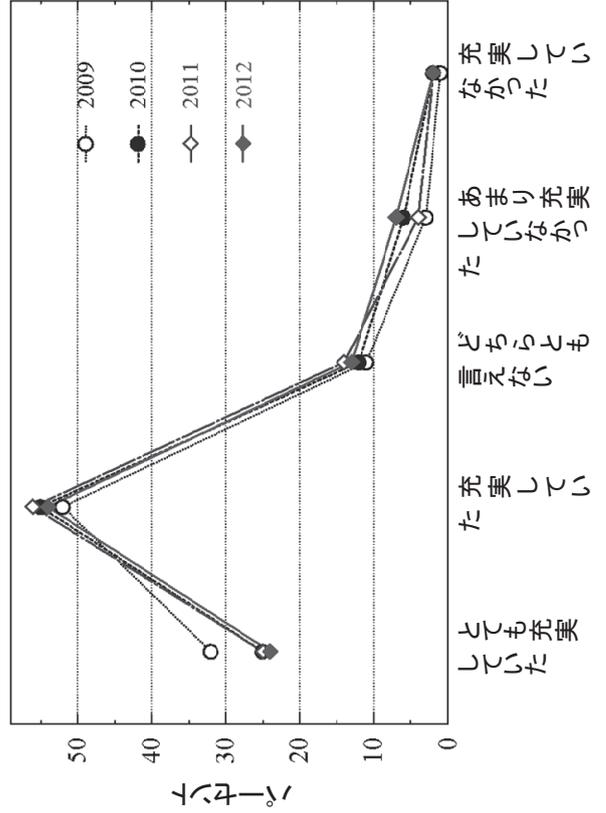
QD5: 図書館についての程度満足していますか？



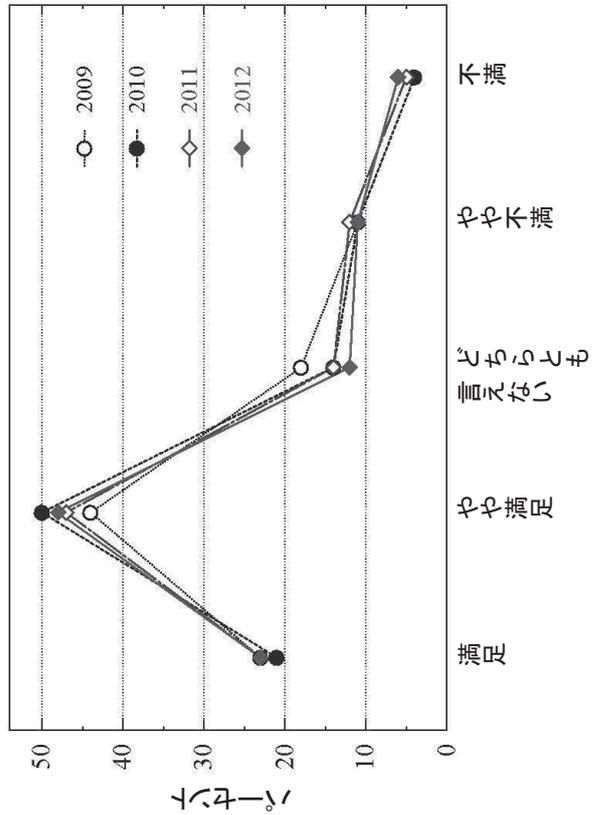
QD4: 教室、研究室の施設など学習環境についての程度満足していますか？



QD7: 大学生生活全般についてどう感じていますか？



QD6: 学食、生協についての程度満足していますか？







專門教育等連携部門

専門教育等連携部門会議委員名簿

(平成 24 年 4 月 1 日)

	氏 名	担 当 部 局 等
部門長	松 川 倫 明	工学部
専任教員		
兼務教員 (各学部教務委員会選出教員)	河 田 裕 樹	人文社会科学部
	犬 塚 博 彦	教育学部
	嶋 田 和 明	工学部
	國 崎 貴 嗣	農学部
学務課長	浅 沼 良 庸	学務部

活動報告

部門長 松川 倫明

2012年度は初年次教育の質の保証という観点から以下の事項を中心に、活動を行った。

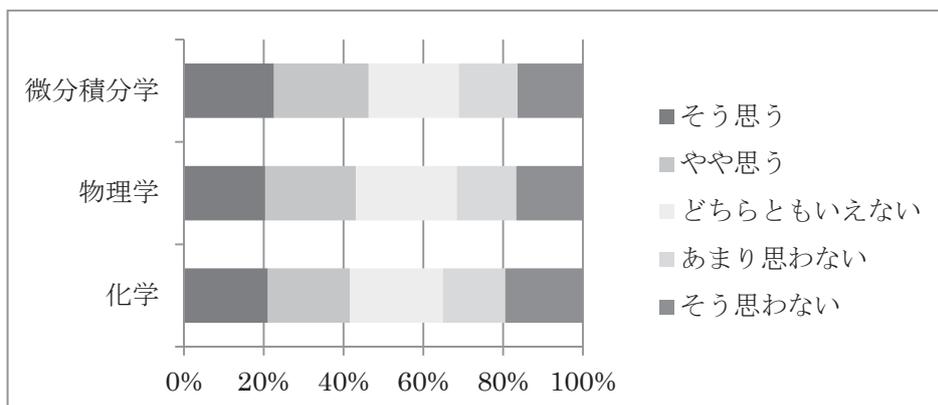
1. 専門基礎教育の充実に向けた検討

本部門では、専門基礎教育の充実に向けた検討を行うために、工学部学生を対象に専門基礎科目の習熟度別クラス編成に関する意識調査を7月及び2月に実施しました。その集計結果の一部を記載します。

「全学共通教育科目の英語では、初級・中級・上級の習熟度別のクラス編成を行っています。あなたが受講している専門基礎科目でも習熟度別のクラス編成を行った方が良いと思いますか？」

(選択肢：①そう思う ②やや思う ③どちらともいえない ④あまり思わない ⑤そう思わない)

という問いに対して、以下に示すように微分積分学Ⅰは、工学部学生（回答総数434）の約半数（47%）が、肯定的な回答をしています。



肯定的な回答の比率について微分積分学Ⅰの学科別のデータを紹介しますと、①再履修クラス54%、②応用化学・生命工学科50%、③マテリアル工学科47%が上位に位置しています。

また、物理学の学科別のデータは、①応用化学・生命工学科56%、②マテリアル工学科50%、③機械システム工学科40%、化学の学科別のデータは、①マテリアル工学科53%、②社会環境工学科47%、③機械システム工学科46%です。

成績評価との相関を調べるために、H24年度前期の成績評価比率のデータを参考に「不可」の比率の高い順に学科ごとに並べると、微分積分学Ⅰ：①再履修クラス、②電気電子・情報システム工学科B、③社会環境工学科、物理学：①社会環境工学科、②機械システム工学科、化学：①社会環境工学科、②マテリアル工学科となります。（下線の学科は、上位3位までに含まれているもの）担当教員の成績評価基準が教科単位で統一されているとは限らないので、習熟度クラス編成の肯定的な回答比率と同一科目における「不可」の比率に相関があるとは一概に言えませんが、数学や化学の科目において、相関があるように推定できます。

授業担当教員の因子を無視すると、習熟度別のクラス編成を希望する比率の高い科目と学科の性格は相関があるように思えます。例えば、マテリアル工学科や応用化学・生命工学科は、学科の性格（数学を頻繁に使う学科という印象はあまりない）を考慮するとあまり数学が得意でない学生が比較的多く入学しており、そのことが恐らくアンケート結果に反映していると予想されます。また、微分積分学Ⅰの再履修クラスの比率が最も高いのは、成績が不振で単位認定がされない学力不足の学生の意向がストレートに反映されているものと思えます。同様に、応用化学・生命工学

科は化学を勉強する学科という印象が強く化学の学力が高い学生は多いが、物理学を高校で深く勉強してくる学生は少ない、または物理の学力の高い学生は少ないと考えられるので、物理学の比率が高くなったと推測されます。 マテリアル工学科はすべての科目において、上位に位置していることは、予備校の入試データにより予想されているように入学希望者の学力平均が工学部の6学科の中で下位に属しているということと関係があるかもしれません。

また、このアンケートの自由記載欄において、現在の英語科目の習熟度別クラス編成に関して興味深い意見がありました。現在の習熟度別クラス編成は、負担（クラスにより）が大きく公平性に欠ける、初級クラスでも十分難しい、上級クラスの「可」と初級クラスの「秀」などの成績評価基準に統一性が保たれていないのではないか。また、Pre-TOEFLはやらないでセンター試験の成績でクラス分けした方がよいなどの意見もありました。

2. 専門基礎科目に関する懇談会（数学・理科）

- ・今年度は、専門基礎科目に関する懇談会を科目別（数学・理科）に9月27日・28日に開催しました。出席者は、専門基礎科目担当教員及び各学部教務関係委員等からなる。
- ・科目の開講状況を確認した後、クラスサイズ、TAの活用法、習熟度別クラス編成等について活発な意見交換がなされました。

3. 基礎ゼミ総括及び転換教育の教育目標についての検討

- ・基礎ゼミナールが全学共通教育科目として導入されてから今年度で6年が経過したことを踏まえ、各学部の実施体制や取り組み内容について総括を行った。学部課程によっては、基礎ゼミナールの内容を転換教育という教育目標を逸脱して専門科目のイントロダクションという性格を持たせていることが報告された。当該科目は専門科目のイントロダクションではないと共通理解に達したが、実施する学科・課程の担当教員に周知し、具体的に改善する方策については課題が残った。
- ・授業アンケートの集計結果や成績評価基準について、意見交換を行った。また、授業アンケート結果と成績評価との相関の有無について検討を行った。
- ・転換教育の教育目標についての検討を行い、2013年度の履修の手引きから修正案を掲載することにした。

4. 外国語自主学習の総括

- ・2年次以降に外国語の授業が開講されていないことを補うために準備されている外国語自主学習プログラムの利用状況について、データの集計を行い、利用率を向上させる方策を検討した。
- ・各学部における外国語関連の専門科目の開講状況について、総括を行った。
- ・TOEIC等の英語統一試験の試行や現在の全学共通科目の外国語の開講時期について、意見交換を行った。

専門基礎科目に関する懇談会（数学）メモ

日時：平成24年9月27日（木） 13:00～14:40

場所：学生センターB棟多目的室

【出席者】

専門教育等連携部門長：松川倫明

人文社会科学部：尾臺喜孝、川崎秀二、奈良光紀

教育学部：犬塚博彦

工学部：嶋田和明、柳岡英樹、瓜生誠司

農学部：國崎貴嗣、濱上邦彦

大学教育総合センター：高畑義人、長野俊一

学務部：渡部徹、浅沼良庸、山崎義夫

（計15名）

議題に先立ち、専門教育等連携部門長から、懇談会開催の趣旨について説明があり、今年度は数学と理科（物理学・化学）に分けてより深い議論を行いたい旨が述べられた。

次いで、配付資料について説明があり、議題に沿って以下のとおり意見交換を行った。

議題1 科目の開講状況について

① 工学部のクラスサイズについて

（人文社会科学部担当教員）

- ・昨年度は、入学者数が多かったためクラスサイズが一段と大きかったが、今年度はほぼ一昨年度の状況に戻った。ただ、それでも線形代数学は80名程度の履修者がおり、クラスサイズはまだ大きいと感じている。
- ・学部専門科目に移る平成12年度より前は、定員80人の学科なら2クラスに分けていたが、今は1クラスの扱いになっている。
- ・昨年度の懇談会で要望を出した数学へのTA配置については、今年度から半数以上のクラスでTAを付けてもらい、その点は評価している。TAが付いたことでレポートや演習の回数を増やすことができた。ただ、一方でレポートの評価、添削等は担当教員が行っているため、回数が増えた分、授業の負担が増えた面もある。
- ・微分積分学では再履修クラスを設けている一方で、線形代数学では再履修クラスを設けておらず、以前から要望を出しているが改善されていない。微分積分学は再履修クラスができて

から5、6年経つが、クラスサイズは大分改善された。

② 再履修クラスについて

（人文社会科学部担当教員）

- ・担当したクラスでは97名中14名が再履修者だった。1年生はほぼ毎回出席しているが、再履修者は1回も出てこないのが約半数、残りの学生も出席率が悪く、試験結果も悪い。結局、単位を取れたのは3名だけだった。

再履修の学生は授業に対するモチベーションが全然違うので、線形代数学の再履修クラスを作った方が良いと思う。

- ・確かにアンケートの結果では、微分積分学Ⅰの再履修クラスの学生は、半数以上がクラス分けに肯定的だった。やはり学力にばらつきがあって、受講生の学力をある程度均質にした方が教えやすいのではないか。
- ・確かに授業に毎回出席していても、テストの結果が悪く、単位を落とす再履修者もいる。根本的に数学が苦手な学生もいるのかなと思う。
- ・再履修者は普段のレポートの提出状況も悪く、試験も一部の学生しか受けていない。習熟度別クラス分けや再履修クラスを設けたことで、再履修者の意識が変わるのか伺いたい。
- ・再履修クラスを作った方が良いというのは、単にクラスサイズが小さくなるという意味と、再履修クラスの方が指導しやすいという意味で言っている。
- ・再履修者にとっては再履修クラスがあった方が授業を受けやすい。微分積分学の再履修クラスは全学共通教育科目の時間帯に設定しているが、線形代数学は学部専門科目の時間枠で再履修することになる。2年次の必修科目と重複する場合があり、再履修者への便宜が図られていない。学生は再履修できる場所を探している状態だ。

（工学部）

- ・微分積分学の非常勤講師を確保するだけで相当な苦労があったと聞いている。新たな再履修クラスのために非常勤講師を探すのは簡単ではない。工学部としては、今年からTAを配置して授業の支援をすることで、今のクラスサイズを維持しつつ、昨年度に比べ、より効果的な授業を進めていただくことに協力しているというスタンスである。

③ TAの活用について

- ・工学部は今年度から数学にTAを配置したわけだが、TAの業務内容や、結果として授業にどう貢献したのかお伺いしたい。
- ・レポートの整理をしてもらえるようになったので、これまでよりこまめに課題を出すことが

でき、クラス全体の理解度をタイムラグなしに把握できるようになった。

ただ、最終的には教員がレポートに目を通すため、かえって授業の負担は増えて、クラスサイズを小さくすることへの欲求は大きくなった。

- ・授業の最後に演習を行っており、その採点を行わせている。演習のでき具合をこまめに見られるようになったが、微分積分学 I では TA が付いているクラスとそうでないクラスがあるため、授業のやり方を変える必要があつてややこしかった。
- ・TAの活用方法として、TA が授業外で学生の指導にあたるようなことも行ってみてはどうか。
- ・TAの拘束時間の問題もあつて、今回は授業時間中に TA を使った。将来的には試してみても良いと思う。
- ・どの程度の学力の TA がくるかわからないという問題がある。事前に TA に演習問題を解かせてみたが、解答できず、TA に問題の解説をする必要があつた。
- ・次年度の授業担当を決める際に、こういう TA をお願いしたいという希望を工学部に出していただけるとありがたい。
- ・東北大学では、SA（スチューデント・アシスタント）を活用した学習支援の取り組みを既に行っており、理系の学生の需要が高い。今後の方策として考える余地があるのではないか。
- ・理系基礎学習支援講座を大学教育総合センターで開講しているが、あまり機能していない。科目担当者が実施するより、組織的に TA による学習支援を行う必要があるのではないか。

④ 農学部の開講状況について

- ・農学部で、人文社会科学部の教員への要望等があれば、お話しいただきたい。
- ・農学部としては、人文社会科学部の教員に対して特にこれという要望はない。
- ・農学部の基礎数学入門は2クラス合わせて90名程度受講しているが、必修科目にしている共生環境課程以外の学生は1割も受けていない。
- ・農学部では、共生環境課程で一部を必修としている以外は専門基礎科目を必修としておらず、理系学部として数学、物理等の理系基礎をしっかりと学ばせなくても良いのかという議論は前からあつた。25年度以降は、専門基礎科目の履修方法にある程度しぼりをつけることにしているので、理系基礎という考えに少し戻ったと言える。したがって、来年度は数学の履修者が増えることになると思う。
- ・今までのところ農学部の数学の履修者は40名程度で、クラスサイズとしてはちょうど良かったが、必修度が高くなると工学部と同じ問題が起きると思う。

議題2 専門基礎科目の習熟度別クラス編成に関するアンケート調査結果について

議題3 専門基礎科目に関する福井大学の取り組み事例について

① 習熟度別クラス編成について

- ・習熟度別クラス編成に関するアンケートについて、学生がどんなイメージで回答したのか疑問が残る。英語と同様に40人程度のクラスサイズで実施するイメージで、きめ細かい指導をしてくれると考えたのではないか。
- ・英語では習熟度別クラスにおいて授業内容をどう変えているのか。
- ・英語では、上級、中級、初級でクラス分けを行っているが、授業の内容は統一しているわけではなく、担当教員にまかせている。
- ・英語では、最終的には同じレベルに到達することを目的としているわけではないのか。
- ・以前に行った英語の担当教員との懇談では、習熟度別クラス編成と履修時期を1年次集中としたことに対する教育効果の検証を、まだ行っていないという話だった。ただ、再履修者は減少したそうだ。
- ・特に英語は非常勤講師への依存度が高く、講師の入れ替わりも激しいので、授業内容のすり合わせや成績評価基準の徹底は難しい。
- ・数学で考えるなら、教える項目は一緒にして、演習では初級クラスで基本的な問題、上級で応用的な問題と分けてみてはどうか。
- ・習熟度別クラスでは、レベルの違うクラス間での成績評価の問題が必ず出てくる。
- ・それを解決するには、統一テストをするしかないと思う。英語の担当教員からは、統一テストの実施を検討してみたいという話はあった。
- ・数学の場合、授業でどの範囲まで扱うかが違ってくる。統一テストでは上級クラスでしか扱わない範囲からも出題することになるが、それで良いのか。
- ・福井大学の事例では、習熟度別クラスを導入した結果として、より高いレベルの専門科目に進んだときに支障が出ていないのか伺いたい。初級クラスの最低水準の到達度で良いと考えるなら、より高度な工学教育をどう捉えているのか。
- ・福井大学の場合は、AO入試や推薦入試で多様な学力を持った学生が入学する中で、出口で最低限の学力を保証する最初の段階として、専門基礎科目を位置付けていると思われる。詳細は分からないので、必要があれば福井大学の実務担当者を招いて、講演会を行ってみても良い。
- ・習熟度別クラスにするかどうかと併せて、導入の仕方も考えてもらわないと困る。
- ・工学部では、習熟度クラスにした結果、初級クラスと上級クラスといった最終的に到達度が異なる学生が出て支障はないのか伺いたい。

- ・工学部教務委員会の立場としては、一定の学力の保証をした上で、専門課程に進んでほしいところである。初級クラスの「秀」や「優」で単位を取って、専門課程に進んでよいのかという問題意識はある。
- ・当然、ここまでは教えるというミニマム・エッセンシャルは必要になる。
- ・まず、アンケートで要望が多かった学科で試行してみて、結果を検証してみてもどうか。
- ・工学部から問題として出されるのは、再履修者が非常に多いということだが、1年次での受講体制よりも、むしろ再履修者をどうするかを話し合った方がよい。再履修者が多いのは、2度、3度と単位を落とす学生が累積することで増えているのであって、線形代数学では再履修者の半数以上が単位を落としている。
- ・現状では、微分積分学Ⅰで80名、微分積分学Ⅱで100名近い再履修者がいる。
- ・ある意味では、数学の担当教員は厳正な成績評価を行っているとも考えられる。そもそも、大学が求めている学力に達していない学生が入学していることが問題なのではないか。そのフォローアップがリメディアル教育なのだが、学習支援講座の受講生は極端に少ない。
- ・工学部でも、工学入門の受講対象者をもっと広げて良いのではないかという意見もある。ただ、受講後の改善効果をまだ検証していない状況である。
- ・工学部の中にも色々な意見が存在しており、どういう学生を受け入れるかという入試のあり方の問題も含め、簡単にはいかない。
- ・現在の入試制度を変えない方向であるなら、補習授業や習熟度別クラス等の対応が必要ということだと思う。
- ・今は数学Ⅲ、Cを学習していない学生にもわかるように授業を進めているので、その意味では、物理に比べると数学は現行の教育体制でもできることは多いと思う。

② 学生の学力の変化等について

- ・微分積分学の未履修者がこれほど多くなったのは、ここ数年の傾向かと思われるが、以前の学生と比べて何が違ってきていると感じているかお伺いしたい。
- ・まずもって言えば、以前に比べクラスサイズが大きくなっている。
- ・数学Ⅱ、Bといった科目名は一緒でも、高校で学習する内容は減っている。大学では同じ時間数で身に付けさせる範囲は増えてきている。一方、工学部からは授業で教える範囲や内容への要望が出てくる状況にはなっていないようだ。学生が2年次、3年次になった時に、この部分を教えられていないので困ったというような話もないが、それは現在の授業内容で良いということなのか。
- ・学科では、特にここを教えてほしいという要望は出ていない。問題になるのはもっぱら再履

修者の問題である。

- ・ 専門基礎科目以外でも、工学基礎科目の複素解析を担当していて、とても困った経験があるが、工学部全体としては、今の授業のレベルですら単位を落とす学生がいて、対策をしっかりと行いたいということなのだろう。
- ・ 習熟度別クラスの導入には工学部内でも色々な意見があり、一本化できていない。教務委員会でも否定的な意見が根強くある。
- ・ 来年度の担当体制の打ち合わせの際には、習熟度別クラスにするのかどうか、試行をするにしても範囲や実施方法を知らせるようにしていただきたい。

専門基礎科目に関する懇談会（物理学・化学）メモ

日時：平成24年9月28日（金） 10:30～12:00

場所：学生センターB棟多目的室

【出席者】

専門教育等連携部門長：松川倫明

人文社会科学部：河田裕樹、西崎滋

教育学部：菊地洋一、武井隆明、犬塚博彦

工学部：嶋田和明、大坊真洋、松浦哲也、芝崎祐二

農学部：國崎貴嗣、山田美鈴

大学教育総合センター：高畑義人、長野俊一、江本理恵

学務部：浅沼良庸、山崎義夫

（計17名）

議題に先立ち、専門教育等連携部門長から、懇談会開催の趣旨について説明があり、今年度は数学と理科（物理学・化学）に分けてより深い議論を行いたい旨が述べられた。

次いで、配付資料について説明があり、議題に沿って以下のとおり意見交換を行った。

議題1 科目の開講状況について

（人文社会科学部化学担当教員）

- ・化学では、農学部・工学部で同じ教科書を使用して、主に物理化学の分野、化学の基礎として化学結合を教えている。農学部と工学部では、学力の程度に差はないと感じている。
- ・農学部の授業では、今年度は共同獣医学科のほとんどの学生が受講し、他の課程とあわせて50名以上が履修した。例年よりレベルが高かった。
- ・化学の担当者間では、やはり学生の学力にギャップがあるという話が出ている。できない学生にはレポート課題や試験の後のフォローを充実させていくほかない。
- ・問題となっているのは学生実験である。ここ2、3年の傾向だが、学生実験のTAが決まらない。工学部から3名、農学部から4名のTAを出してもらっているが、特に農学部でTAのなり手がいない。
- ・実験では、テーマに応じて担当のTAを付け、TAには受講生の実験を見てもらうのと、レポートを見てもらっているが、TAの学生には負担が大きい。レポートの方が負担となっているようだ。

- ・TAの負担を減らしてほしいとの要望を受けて、12テーマで行っていた実験を11テーマに減らして、TA1人に付きテーマ2つを見てもらうようにした。学生の負担を軽減したいと思うが、80名のレポート11回分を1人の教員で見るのは、かなりの負担である。工学部からは交代で研究室からTAを出してもらっている。

（人文社会科学部物理担当教員）

- ・農学部は前期に物理学入門と物理学実験、後期に物理学を2コマ開講している。後期の物理学は電磁気、熱力学の範囲を主に教えているが、農学部の学生が知っておいた方がよいという内容にしている。物理学実験はあまり受講する学生がおらず、後期の物理学も双方あわせて10人不足である。
- ・後期の物理学は、物理を少しは勉強した経験のある学生が受けているが、さすがに工学部対象の内容とまではいかない。
- ・物理学実験の方は、ニーズは少ないが、物理学を学習していない学生がけっこう受けるので、農学部で1科目として開講している。担当は人文社会科学部教員1名とTA2名で行っている。TAは社会環境工学専攻の学生で、工学部の実験も担当してもらっている。
- ・専門基礎科目が学部専門科目に移る前は、だいたい1科目に付き常勤2名、修士学生を非常勤講師として2名採用していたが、学部専門科目となってからはTAをお願いしている。TAには実験のレポートを見てもらい、採点もしてもらっている。TAの学生には負担のようで、他の科目のTAとは業務のアンバランスがあるようだ。
- ・工学部では、応化・生命、マテリアル、電気情報の学科が半期で物理学、機械システム、社会環境工学科は物理学I、IIで前後期の開講になっている。内容は物理学で力学と電磁気学を少し、物理学Iでは力学の範囲、IIでは電磁気学を教えている。受講生は80名程度で、講義の運営で特に問題はない。
- ・物理学実験は80名前後で部屋いっぱい状態でやっている。内容は前半4テーマ、後半6テーマに分けて20名程度のグループで実験を行っている。担当は、前半は教員とTAがそれぞれ1テーマ、後半は教員が2テーマ、TAは1テーマを専門で担当し、実験の指導とレポートの採点を行っている。
- ・物理学の内容は、農学部、工学部で同じ教科書だが、内容は以前より易しくしている。力学だけは、人文社会科学部の物理担当でまとめたテキストを使っている。授業についていけない学生がいることを考えると、習熟度別クラスという考え方もあるかと思う。ただ、到達度を一定にするには、習熟度の低い人は授業を倍受ける必要がある。そこまではする必要がないのであれば、対応はいくらでもできると思う。

- ・昨日の数学の懇談会では、教える項目は一緒にして、演習では習熟度別で基本的な問題、応用的な問題にするという話もあった。
- ・福井大学の事例について、2年次で到達度アンケートを実施しているようだが、合格しなかった者は進級できないということなのか。習熟度の低い学生への授業の仕方を変える必要はあると思うが、最終的には一定の到達度に持っていかないといけない。入学前の学習が不十分であることが原因なので、入学後にそれを補うような学習を余計にしてもらわないといけないのではないか。
- ・物理、化学では数学のような大量の再履修者の問題は起きていないのか。
- ・厳密に成績を出せばそうなる。最低限の到達度は維持しつつ、期末試験のレベルを落としていくしかない。再履修者はいるがそれほど多くない。
- ・化学も多くない。筆記試験以外にも、レポート課題や出席点も加味して評価を出している。

① TA の活用について

- ・化学、物理ともに、実験では TA がレポートの添削、採点まで行っているとの話だったが、授業の実施上、TA に行ってもらわないと無理ということなのか。工学部の他の実験では、TA はあくまで補助的な業務を行っている。
- ・全学的にはどうか分からないが、TA にそうやってもらわないと困る。当然、最終的には教員が責任をもって成績評価を行っているが、TA には授業前にガイダンスを行って、採点方法等を指導している。
- ・工学部では例年、学科長の研究室から TA を出しているが、化学実験の TA で問題が出てきたのはいつ頃からか。
- ・工学部の実験については、TA にレポートの採点をやらせることで問題にはなっていない。農学部では、化学実験の経験のある学生を選んでいるようだが、なり手がいない。
- ・TA の人選で授業に支障が出るようなら、人文社会科学部の担当教員から工学部に対して、こういう条件の学生という指定をしてもらっても良いのではないか。
- ・人文社会科学部の教員からはそこまで言えない。あくまで学部専門基礎科目の TA なので、学部で適任と思われる TA を出してほしい。最初の段階では、実験の経験や前後期で担当する等の要望を出していたが、最近はそこが曖昧になっているようだ。
- ・結局、学部の責任において適任の TA を出すということだと思われる。TA では務まらないなら、学部の教員が手伝いに入るしかないのではないか。
- ・数学の担当教員からは、TA が配置されたことで授業が改善されたが、TA が付いたことでかえって教員の負担が増えたと話があった。

- ・確かに TA に教える手間は増える。ただ、TA も半期やるとそれなりに成長するし、学生にもプラスになる。
- ・物理学実験で経験の無い学生に TA をやらせてしまい、学生には半期で2つのテーマの担当は負担だったようだ。前半と後半で TA を替えるのは教員にとって負担になるか。
- ・大学院生であれば十分に対応できる程度のテーマを任せているつもりだ。
- ・教員側の考えと違って、TA の学力が低下してきて、学生が負担に感じるようになってきている可能性があるのではないか。
- ・TA は自分が学部学生の時代に経験した実験を指導することになるので、そこはあまり問題ではないと思われる。
- ・農学部の TA からは、最終的にはやって良かったと感想をもらっているが、後輩への引き継ぎの時に、大変だったという話が伝わり、なり手がいないらしい。
- ・TA を送り出す指導教員も、TA が大学院生の教育の一貫であると指導する必要がある。
- ・確かに TA が戦力になり、大学院生の教育という面もあるが、院生が少ない研究科では、1人の院生に複数の科目から依頼が集中し、院生自身の研究が疎かになる懸念がある。院生も教員から依頼があれば、断りにくいのが実情だ。TA の教育効果は確かにあると思うが、担当科目を調整するシステムの必要性を感じる。
- ・農学研究科では制限時間を設けているが、院生が少ないところでは特定の院生に科目が集中して、教員もおかしいと感じているが、研究科の中で話し合っていないのが実情だ。
- ・授業担当教員から直接、院生に依頼がいくので、決まった後で指導教員が知る状態だ。
- ・物理学実験のレポート採点では、実験の空き時間等を利用するよう指導をしている。
- ・つまりは、TA の選出は各学部で責任を行い、TA の教育は授業担当教員がしっかり行うということだろう。

② 開講時期について

- ・電気電子・情報システム工学科では物理学を後期から開講しているが支障はないのか。
- ・学科改組の経緯でそうなったのだと思う。
- ・応用化学・生命工学科では、化学 I と II を前期に開講しているが、内容はどうなっているのか。
- ・以前から、そこは工学部の教員が担当している科目である。
- ・マテリアル工学科の化学 I、II と内容が異なるのか。
- ・工学部の教員が担当しているので、異なる教科書を使っていれば、内容も異なる。

議題2 専門基礎科目の習熟度別クラス編成に関するアンケート調査結果について

議題3 専門基礎科目に関する福井大学の取り組み事例について

- ・習熟度別クラスを考えた時に、一般化学的なものと入門化学的なものを全て入れて専門基礎科目となっているが、一つの科目で教えるのは厳しいのかなと感じる。
- ・その点は、工学部で補習授業として入門科目を前期前半に開講しており、サポートはしている。農学部の入門科目に内容は近いと思う。
- ・アンケートの回答者はそのシステムを知っているのか。入門的な補習科目があるなら、苦手な学生にはそこで底上げし、一般化学は全員でいっせいにやるという意識があれば、習熟度別クラスはいらないのではないか。
- ・微分積分学ではそのように行っていて、前期の前半で週2回開講しているが、再履修者の問題は解消されていない。
- ・習熟度別クラスはマイナス面として、到達点が変わってくる可能性がある。英語とちがって専門基礎科目は到達点を変えずに、全員が一定の学力になるように底上げする必要があると思うが、その議論に入門科目の話は出てないことは問題だと思う。
- ・入門科目は高校の復習だけで良いのかという議論もあり、同じ問題を抱えた大学では、初習物理学という、大学で初めて物理を学習する学生向けの科目を出してきている。
専門基礎科目の内容を踏まえた上での入門科目、入門科目を押さえた上での専門基礎科目としておかないと、全員の学力を一定のレベルにまで上げるのは難しいのではないか。
工学部に限って言えば、次の考えとして、入門科目の担当教員も入ってもらって議論を行ってはどうか。入門科目と専門基礎科目の連携ができていないから、大量の再履修者が出ている可能性がある。
- ・工学部では、入門科目は卒業要件外で、補強科目としていわばサービスで行っている。
- ・そうではなく、入門科目と専門基礎科目の内容を意見交換した方が良いと思う。入門科目の担当教員が非常勤であっても、内容について専門基礎科目の担当教員との意思疎通があって良い。
- ・工学部教務委員会と、入門科目の担当教員との意思疎通のルートはある。
- ・そのルートを専門基礎科目の担当教員ともつなげた方が良い。今後、入学する学生の学力を下がっていくなら、入門科目の強化をもっと考えていく必要がある。
- ・入門科目の履修対象者は、センター試験、2次試験で点数が低い者、高校での学習履歴がないもの等を選んで履修させている。そういう点では入門科目と専門基礎科目の接続を考えていった方が良いのかなと思う。
- ・習熟度別クラスの怖い点は、到達度が変わってしまうことである。本来、学力の低いクラス

は、演習のクラスも設けて時間をかけないと一定の学力には到達しない。そこまでできなくとも、入門科目を強化することで底上げはできると思う。

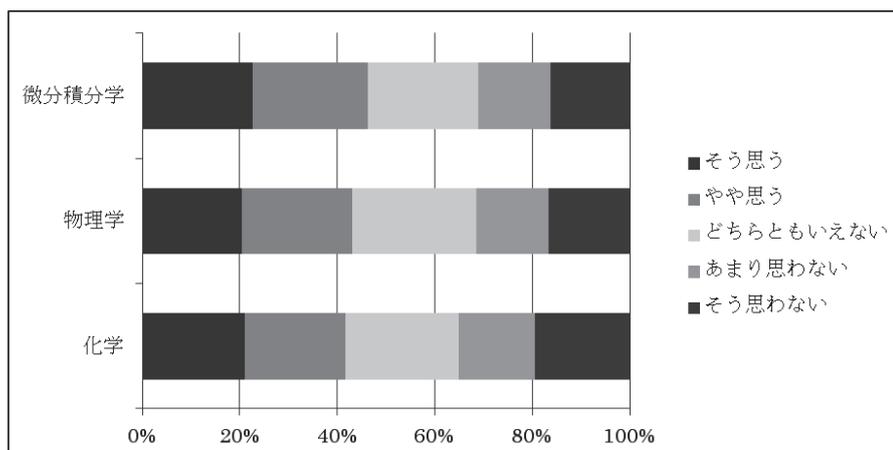
- ・入門科目は必修なのか。
- ・対象者には受けるように履修指導をしているが、強制ではないので履修しないで専門基礎科目を受ける学生もいると思う。
- ・結局、講義の内容ではなく、できるようになるまで演習クラス等で訓練するしかない。
- ・入門科目と専門基礎科目が平行している時期の効果はどのようなのだろうか。1年の猶予期間を設けて5年で卒業する制度を考えても良いのではないか。後は、高校までにどこまで学んでくるかの入試の問題でもある。高校までに、ここまではきちんと学んできてほしいという、メッセージを大学が送ることが重要なのではないか。
- ・カレッジ・レディネスという概念があるが、大学の授業を受ける準備が整っていることを学生に求める姿勢が必要と感じた。外国の大学では、1年間予備段階を設けている大学もある。学年の約半数が再履修となる科目があるというのは、非常に深刻であると感じた。
- ・今の話を聞いていると、入門科目はあくまで高校の復習であり、正規の科目とのギャップは埋まらない。可能かどうか分からないが、正規の授業に追いつけない受講者は、入門科目を補習クラスに代えて演習を行わせてはどうか。
- ・本来は、高校までにそういう体制ができていないといけないのかなと感じる。

議題4 カリキュラムにおける専門基礎科目の位置付けについて

- ・昨年の懇談会では、理系基礎としての専門基礎か、学部専門科目の基礎として科目を捉えるかという話があったが、応用化学・生命工学科の化学Ⅰ、Ⅱは後者の性格が強くて、人文社会科学部教員担当の化学は前者の性格が強いように思う。
- ・そもそも学部に専門基礎科目が移った経緯は、後者の考えであって、今もその位置付けは変わっていないと捉えている。
- ・昨年度の懇談会では、工学部では理系の専門基礎と捉えているということだった。
- ・一般物理や一般化学を専門基礎と呼ぶことに疑問がある。それは専門そのものと考えた方がすっきりする。工学部のカリキュラムの中に一般化学という科目があることは当然であって、専門科目の基礎としての専門基礎科目なのだろうが、昔の名称を引きずっているような気がする。
- ・数学は微分積分学等の内容を表す科目名だが、習熟度の低い学生には力学入門というのでも良いのでは。農学部では同じ物理学という科目名だが、内容は分野で2つに分けている。数名しか受講生はいないが、必要だろうということで用意している。

専門基礎科目の習熟度別クラス編成に関する意識調査・集計結果（2012年7月実施）

1. あなたが受講している専門基礎科目でも習熟度別のクラス編成を行った方が良いと思いますか？



・微分積分学 I

学科	応化生命		マテリアル		電気情報A		電気情報B		機械		社会環境		再履修		学部		
項目1	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	
そう思う	21	28	18	28	8	15	15	25	16	21	14	21	6	16	98	23	
やや思う	17	22	12	19	13	25	13	22	19	24	15	22	14	38	103	24	
どちらともいえない	13	17	12	19	14	27	13	22	17	22	19	28	10	27	98	23	
あまり思わない	14	18	11	17	7	13	7	12	9	12	12	18	4	11	64	15	
そう思わない	11	14	11	17	10	19	11	19	17	22	8	12	3	8	71	16	
回答総数	76	100	64	100	52	100	59	100	78	100	68	100	37	100	434	100	
					無回答1を除く		無回答1を除く				無回答1を除く						

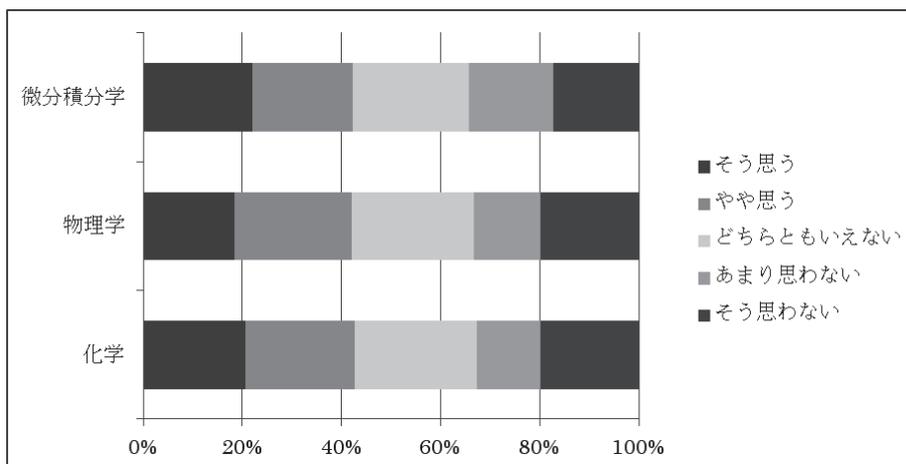
・物理学（物理学 I）（電気情報は後期実施）

学科	応化生命		マテリアル		電気情報A		電気情報B		機械		社会環境		学部	
項目1	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
そう思う	25	34	16	29	7	16	8	13	12	16	10	14	78	20
やや思う	16	22	12	21	10	22	16	26	18	24	15	21	87	23
どちらともいえない	16	22	10	18	13	29	14	23	22	29	22	31	97	25
あまり思わない	5	7	9	16	9	20	13	21	8	11	13	18	57	15
そう思わない	12	16	9	16	6	13	10	16	15	20	12	17	64	17
回答総数	74	100	56	100	45	100	61	100	75	100	72	100	383	100
	無回答2を除く													

・化学（化学 I）（電気情報は後期実施）

学科	応化生命		マテリアル		電気情報A		電気情報B		機械		社会環境		学部	
項目1	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
そう思う	18	20	23	32	7	13	14	19	13	17	18	23	93	21
やや思う	12	13	15	21	9	17	13	18	23	29	19	24	91	21
どちらともいえない	22	25	13	18	12	23	23	32	14	18	19	24	103	23
あまり思わない	17	19	7	10	14	27	11	15	12	15	8	10	69	16
そう思わない	20	22	14	19	10	19	11	15	16	21	15	19	86	19
回答総数	89	100	72	100	52	100	72	100	78	100	79	100	442	100

2. あなたが受講している専門基礎科目の習熟度別のクラス編成に対しても、センター試験の成績を利用して実施することについて適当であると思いますか？（ただし、推薦入試の入学者はセンター試験の成績を口頭試問や調査書等の成績と読み替えてください。）



・微分積分学 I

学科	応化生命		マテリアル		電気情報A		電気情報B		機械		社会環境		再履修		学部		
項目2	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	
そう思う	20	26	12	19	7	14	12	20	15	19	19	28	10	27	95	22	
やや思う	17	22	8	13	4	8	10	17	15	19	16	24	17	46	87	20	
どちらともいえない	15	20	13	20	17	33	18	31	22	29	14	21	2	5	101	23	
あまり思わない	12	16	14	22	13	25	12	20	9	12	8	12	5	14	73	17	
そう思わない	12	16	17	27	10	20	7	12	16	21	10	15	3	8	75	17	
回答総数	76	100	64	100	51	100	59	100	77	100	67	100	37	100	431	100	
					無回答2を除く		無回答1を除く		無回答1を除く		無回答2を除く						

・物理学 (物理学 I)

学科	応化生命		マテリアル		電気情報A		電気情報B		機械		社会環境		学部	
項目2	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
そう思う	22	30	8	15	6	13	10	16	12	16	12	17	70	18
やや思う	15	21	9	16	15	33	15	25	20	27	16	22	90	24
どちらともいえない	16	22	15	27	12	27	12	20	19	25	20	28	94	25
あまり思わない	8	11	10	18	7	16	11	18	7	9	8	11	51	13
そう思わない	12	16	13	24	5	11	13	21	17	23	16	22	76	20
回答総数	73	100	55	100	45	100	61	100	75	100	72	100	381	100
	無回答3を除く		無回答1を除く											

・化学 (化学 I)

学科	応化生命		マテリアル		電気情報A		電気情報B		機械		社会環境		学部	
項目2	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)	回答数	割合(%)
そう思う	20	22	17	24	10	19	13	18	15	19	16	20	91	21
やや思う	12	13	20	28	7	13	16	22	21	27	21	27	97	22
どちらともいえない	23	26	11	15	22	42	15	21	19	24	19	24	109	25
あまり思わない	16	18	9	13	7	13	12	17	6	8	7	9	57	13
そう思わない	18	20	15	21	6	12	16	22	17	22	16	20	88	20
回答総数	89	100	72	100	52	100	72	100	78	100	79	100	442	100

3. 専門基礎科目の習熟度別クラス編成について、あなたの意見や考えを自由に書いてください。

分類 A: 習熟度別クラス編成に関するもの B: センター試験の利用に関するもの C: その他(教授法、受講者数等)

・微分積分学 I (A: 53, B: 21, C: 12)

1. 応化生命

項目 1 ①を選択した人

- やはり、同じ学科でも学力の差はあるため、学力毎にクラス分けすべきだと思う (A)
- 授業を進めていく中で、どうしても授業の内容に追いつくことができない学生が出てきてしまいます。そのような学生にそなえて、学生の学力別クラス編成は学生としても同じレベルの人とともに勉学に励むことができ、また、先生方にとっても授業を行いやすいと思うので、習熟度別クラス編成に賛成します。(A)
- 数学はもっと人数を少なくしてやりたい(習熟度別でなくとも) (C)
- 少人数希望 (C)
- センターの成績で決めるのはおかしいと思います (B)
- 二次試験の点数で分ければいい (B)

項目 1 ②を選択した人

- 微積分の授業はともかく線形代数の授業はクラス分けして、個別指導をしていくのがいいのではないかと思います (A)
- 自分のレベルに合った授業が受けられるのでいいと思う (A)
- 入学時の習熟度≠入試時の成績であると (B)

項目 1 ③を選択した人

- 習熟度がセンター試験で量ることができるとはあまり思えないのでクラス分けは難しいと思う (B)

項目 1 ④を選択した人

- 大雑把に分ける分にはいいけれど、細かく分けると、やはり最終的な結果として格差が大きくなると思う (A)
- 頑張って上級に行ったのに可をとるより、初級で秀をとる方が実際は良いという状況ができるため (A)
- 大学院に進学する能力がつかなくなると思います (A)
- 初級、中級、上級の授業の違いがわからない (A)
- 専門科目をクラス分けすると、そのクラスによって理解度や期末テストの難易度が変わってしまい、可、不可、優、秀などの判定に差が出ると思う (A)
- 確かにできない人がみんなと一緒に授業するのは大変かもしれないが、先生によってすごく簡単な授業の人と課題や内容が難しかったり大変な人がいるのに、評定が出されるのは納得がいかないところがあるから。入門数学に関して、あるのはいいとは思いますが、ⅡB、ⅠAのテストを見て、その成績が悪いのにⅢCをいきなりやるのはなんか.... (A)
- センター試験の成績で入門の科目の受講生を選出することはセンター試験で実力を発揮できなかった人たちもいると思うので、センター試験の結果だけで選ぶのは良くないと思います (B)

項目 1 ⑤を選択した人

- クラスによって先生の質に差が出てくる (A)
- いいと思う。二次も考慮に入れたほうがよい (B)

2. マテリアル

①

- どの科目もまんべんなく受けたかった。物理と化学が同日の同時間だったので受けられなくて残念だった (C)
- 来年度の一年生から行ったほうが良いと思う (A)
- 初級は初級らしく、ゆっくり説明していただけたらそれでいいです(外国語が初級クラスですが、普通にむずかしいです) (A)
- 英語が得意な人が初級で受けていて、つまらなくて成績が伸びないと言っていたので、個人的に聞いたほうが良いと思う (A)
- 数学に関しては、理系であるのでクラス分けをせずとも問題はないと思います (A)
- 工学部の新生全体で分けたいと思う(学科のみでなくて)。センター以外のテストで習熟度を分ければ良いと思う (B)
- センター試験を参考にすると、微分積分や行列の内容が含まれないので、適切ではないと思われる (B)
- センター試験の成績はあくまで高校の成績であるから、現在の状況を主にしてクラス編成すべき (B)

②

- 3つくらいから選べるようにしてくれれば自分でレベルに合ったものをとれると思います (A)
- 工学入門について、何点からが抽出されているのでしょうか (C)
- 希望制にすべきだと思う (C)
- やる気の問題だと思うので、センターはあまり関係ないと思います。(B)

③

- マテ工は人数が少ないので分けなくても良いとおもう。2年次くらいからなら分けてもいいと思う (A)
- 数ⅢCの応用が多いので、センター試験よりも二次試験の成績を重視すべきだと思う (B)

④

- 教員が一方向的に講義をするという形になっているので、この授業において習熟度のバラつきが進行を妨げているとは思わないし、さほど高度な内容でもないので、クラス分けに対してあまり必要性を感じない (A)
- 全員の学力が均等に伸びるような指導を目指して欲しいです (A)
- 学生の習熟度の問題は学生たち自身の努力と関係があると思いますが、教授の授業のやり方も関係あるだろう (C)
- クラスを分けるのはいいが、習熟度に差がつくのではないかと思います (A)
- センター試験の後、二次試験で力が伸びる人もいると思うからセンターの点数で分けるのは適切ではない。二次試験を受けた人はそっちも加味して考えて欲しい (B)

- ⑤
- 初級のクラスの人には意識が低くなるため逆に学力の差がつくと思うからクラス編成はほらない (A)
 - Pre-TOEFL はやらないでセンターの成績でクラス分けした方がよい (C)

3. 電気情報 A

- ①
- その人たちのレベルに合った説明をしてほしい。説明が難しすぎる (A)
- ②
- 入れ替えを頻繁にしてほしい。やるなら。(A)
 - 習熟度別でクラス編成をするのはいいと思う (A)
 - 先生に質問しやすければ、どのようなものでも大丈夫では、と思う (C)
 - できない人はできないので、科目毎に考えたほうが良いと思います (A)
 - この科目は、不得が大きいので、上、下級の2つに分けても良いのかもしれない。センター利用だと、直感で正答率が高い人がいる可能性が大きいのでおすすめはできない (A, B)
- ③
- 3クラスより2クラスくらいで良いと思う本人の希望とセンター試験の結果などを組み合わせてやると良いと思う (A, B)
- ④記載なし
- ⑤
- 大学で初めて習う分野が多くあるので、必要ないと思う (A)
 - 学力差ができるのは当然だが、差を作るのは良くないと思う。クラス編成はあまり良いものではない (A)
 - 上級クラスを編成することで、そのクラスの授業が無駄に負担を大きくしている。あくまで一般教養であるから毎週のように大変な課題を出す事について納得ができない。もっと勉強したい人は自主的にやらせるべきであると思う(自主的にやるひとが少ないのかもしれないが...) (A)

4. 電気情報 B

- ①
- 記述力・論述力を見るため、二次試験的な形式のものでみるべき (B)
- ②
- 習ってない科目がある場合、習っている前提で授業を進められると困る場合があります (C)
- ③記載なし
- ④記載なし
- ⑤
- 身につけていない人にとってはとても良いものだと思う (A)
 - かえて不公平が生じると思う (A)
 - 必要だが、個人の選択にしたら良いと思う (A)
 - センターを利用したクラス編成であれば、全員が全力で受けた結果のクラス編成ということになるから適切な編成になると思う。しかし、英語のように、明らかにクラス分けを目的としたテストの結果によるクラス編成だと、実力はあっても、楽に単位を取りたいからという理由でわざと低い点数のクラスに行ってしまう人もいると思う。こういった、作為的に低い点数のクラスに行けるということの防止のためにも、センターの利用が一番良いと思う (B)

5. 機械システム

- ①
- センターじゃなくて問題作れ!! (B)
 - 習熟度別クラスに分けるのは賛成であるが、センター試験の結果で分けるのは良くないと思う。分ける段階で一番楽ではあるが、大学の数学は高校に比べてとても難しいため、大学一年前期もしくは、自主的に決めるのが良いと思う (B)
- ②
- やるならば工学入門のほうで実地すべき (A)
 - レベルの差が出てくるのでクラス分けしても良いとおもう (A)
- ③
- その人の知識であわせることができるので行っても良いと思う (A)
- ④
- わからなければ、自分でやればよい (A)
- ⑤記載なし

6. 社会環境

- ①
- 習熟度別にクラス編成をされれば、今よりは少人数でわからない所など先生に聞きやすいので良いと思う。今は、全てわかったこととされ、どんどん進んでしまうのでクラス編成されれば授業の内容の理解においつかなくなるということがなくなると思う (A)
 - クラスを分ける、分けないよりも、先生が生徒の理解度を理解しなければいけないと思う (C)
 - 人によって合うやり方がちがうと思うので、クラス分けしてほしい (A)
- ②
- 2に関して、センター試験の頃から学力が低下しつつあるので希望制でわけていただけるとありがたいです (B)

- ③
- 大変良いと思うが、私たちがどうこうできる話ではない (A)
 - 低いレベルの方が秀をもらえるようなクラス分けはよくないと思います (A)
 - しっかりと学べる環境さえ整えてあれば、クラス編成を行なおうが行なはまいが構わない (A)
- ④
- コマ数を増やすという手段がいいと思う (C)
- ⑤記載なし

7. 再履修クラス

- ①
- 学科の要求する理解度が高かった。私は手遅れだが、後輩のためぜひ実地してください (A)
 - 「上級習熟度の学生は更なる学力向上を目指し、初級習熟度の学生は学力の底上げを目指す」という形態であるクラス編成には賛成である (A)
 - 専門基礎科目は、初期の段階でしっかりと知識を固めないと、後半の勉強が大変になってしまうので、一人一人の身の丈にあった学習内容で授業を行うことが、確実な方法だと思います (A)
 - 人数が多いので、習熟度別のクラス編成は有効だと思う。だが、やるのであればそれなりの指導力を持った人に担当して欲しい。下手な人に教えられても意味がないし、勉学に対するモチベーションが下がると感じた (A)
- ②
- 専門とはいえ、興味や熱の入れ方は人それぞれなのでクラス分けをして授業を行うのも良いのかと思います (A)
 - 専門基礎科目についてはクラス編成することはいいと思います。しかし基礎科目の習熟度はその後の応用科目についても影響を与える可能性があるため、最終的な習熟度は均一もしくはある一定レベルにする必要があると思います。(A)
 - センター試験だけでなく二次試験の結果も考慮して受講生を抽出すべき。工学入門の各科目の開講について掲示していたりするが、去年受講しようとして手続きの仕方がわからないために受講できなかったため、アイアシスタントにも手続きの仕方などを掲示して欲しい (B)
- ③
- レベルで分けても、差が広がるだけ (A)
 - 推薦で入学した、苦勞している人を知っているため実地することに意義はあると思ったりします (A)
- ④
- 微分積分に関しては問題のレベルをもう少し下げたほうがいい (C)
 - 入学した後の同学科でのクラス編成については、より多くの友達をつくりたいという人の意に反しているためあまり賛同できない (A)
- ⑤
- 習熟度でクラスを分けると、クラス毎に講義の内容や難易度が違ってくるので、同じ科目で学んだ内容が異なってしまう。それに、初級クラスの人が単位を習得し、上級クラスの人が単位を落とすという逆転現象が起こりうる。センター試験の成績を利用する入試は、ほとんどの国公立大学で実地されているので、岩手大学で実地しても不思議ではなく、評価できる。しかし工学部ではセンターの比率が高すぎる。センターだけが得意な人が合格し、二次だけが得意な人が落ちるといった現象も起こりうる。(A, B)
 - いい所と悪い所をきちんと分けても実際には意味がないと思う。やはり分けずに競争があったほうがいいし、それで成績も上がりやすくなると思う。(A)

・物理学 (物理学 I) (A : 26, B: 10, C: 8)

1. 応化生命

- ①
- 授業中に追いついていない人もいるので、クラス分けはした方がよい (A)
 - 習熟度別にクラスをわけることで、授業に追いつきやすい人と追いつきにくい人との差が大きく開いてしまうことを防止するためにもなると思う (A)
 - 少人数希望 (C)
- ②
- 物理は高校で学習している人としていない人で差があるので、クラスを分ける方が効率がよいと思う (A)
 - センターや一般入試の成績≠入学時の成績だと感じる。クラス分けするかしないかなどを問うならば、入学時にクラス分けなどのテストや習熟度の確認を行い、平均的にどのくらいできるかを考慮すべきだと感じる (B)
- ③
- 上級での可く初級での秀となるからやらない方がよい。でもレベル別は学びやすい (A)
- ④記載なし
- ⑤
- クラスによって先生の質の差がでてくる (A)
 - 専門基礎科目でクラス分けすると、期末テストでの難易度に差がでるから (A)
 - 初・中・上級の授業の差がよくわからなかった (A)
 - 入門生物が必要だと考える (C)
 - 入門生物がほしい (C)

2. マテリアル

- ①
- クラスは分けるべきだが、そのクラスに見合った先生を担当にすべき (A)

専門基礎科目の習熟度別アンケート結果最終報告

- クラス分けは2～3で、できれば他学科とは一緒にしないでほしい (A)
 - もっときちんと理解できる先生がいい (C)
 - 何か簡単なテストをしてクラス分けしてほしい (B)
 - センターではなく、他のテスト成績で編成すべき (B)
 - 高校は高校、大学は大学の成績で評価すべき (B)
- ②
- レベル別にした方が授業のペースも考えやすいし、意識の高い人たちが集まれば、相乗効果でより良くなると思う (A)
 - できたら習熟度別のクラス編成にした方が生徒も学習に取り組みやすいと思うが、教授の意識が薄いなら、そのような政策も意味がないと思う (A)
 - センターは運や過去問をやればできるので参考にはならないと思う。物理1は得意だけど物理2は苦手という人でクラスがあったらいいのかなと思う。(B)
- ③
- 個人の意見を優先すべき。もし、このまま受講生を抽出していくならセンター試験でたまたまできなかった人も全くできないと判断されてしまうのは極論に思える。せめて二次試験の記述の仕方なども考慮した方が、より正確なクラス編成ができると思う。マークだけの成績ではその人がどこまで理解しているのかを判断するのは難しいと思うので、今後の見直しが必要だと思う。(A, B)
- ④
- やるならやるで価値のあるものにしてほしい (C)
 - 選べるようにしてほしい (A)
 - 大学来てから勉強するのだから習熟度はあまり関係ないのでは (A)
 - 習熟度が違う人と授業を受けた方が教えあったりできる (A)
 - 数学に関しては二次試験の成績を重視すべき。化学と物理は二次試験では選択であるから、センター重視でも良い (B)
- ⑤
- クラスによって意識の差がひらいて、逆に学力の差が広がると思う (A)
 - センター試験にⅡの範囲はないため、意味がない (B)

3. 機械システム

- ①
- 共通問題を使って編成すべき (B)
 - やらなくてはならないこと (A)
 - 自分で決めた方がいい (A)
- ②
- センターによってわかるのではなく、英語同様にクラス分けのテストを入学後にすべき (B)
- ③
- 自分の調度いいところで学習ができるのでいいと思う (A)
 - わからなければ自分でやればいいし、わかるなら自分で勝手にやればいい (A)
- ④
- きっと色々面倒だと思われる (C)
- ⑤記載なし

4. 社会環境

- ①
- クラス編成した方が、授業についていけないということがなくなって、全員が本当に授業内容を理解できると思う (A)
 - クラスによって授業が増えてもいいので、演習の時間をとってほしい (C)
- ②
- 習熟度別にする場合、クラス編成は希望性にしてほしい (A)
- ③
- 単位の取りやすさのレベルが違うのはよくない (A)
 - そんなに細かく分ける必要はない (A)
- ④
- 高校までの内容と大学でやる内容は違いすぎて、習熟度別クラス編成をする意味はあまりないと思う (A)
- ⑤
- 英語ではPre-TOEFLの試験でわざと間違える人がいたので、しないほうが良い (A)
 - コマ数を増やせばいい (C)

・化学(化学Ⅰ) (A: 52, B: 12, C: 10)

1. 応化生命

- ①
- その人に合ったクラスで授業を受けるのはいいと思う (A)
 - 少人数で授業を受けたい (C)
 - 同じ授業を受けていても、やはり理解の限界や習熟度に個人差が出てしまう。私は習熟度別クラス編成に賛成である (A)
 - 学内でも、学力別にクラス分けした方がいいと思う (A)
 - 授業についていけない人もいるので習熟度別クラス編成にするのは賛成だが、センター試験ではカンが当たって…というものありえるので出来れば2次試験で判別した方がいいと思う (A, B)

- 難易度についていけない (A)
- ②
 - レベルの差がありついていけない可能性があると思うのでクラス分けした方がそのような問題が少ないのかなと思った (A)
 - ある程度は必要かもと考えている (A)
 - 人によって理解度に差があるので習熟度別クラス編成は私は賛成します (A)
 - センターの点数ではなく本人の希望で編成して欲しい (B)
- ③記載なし
- ④
 - さらに差が出てしまうかも知れない (A)
 - クラス分けはしなくてもいいと思う。わからない人はわかる人と一緒に授業を受けることで、そのレベルまで達成すると思うから (A)
 - 専門基礎科目でクラスを上、中、初と分けてしまうことで研究室に入ったときに力の差がついてしまわないだろうか (A)
 - この授業は先生の説明がわかりやすく丁寧だったので、クラス分けは必要ないと感じました。また、全員化学を高校で学んでいるのでクラス分けはいらんと思います (A)
 - 数学はクラス編成してもいいと思う (A)
 - この授業には必要ないと思う (A)
- ⑤
 - 簡単なクラスで秀の人、難しいクラスの人が可とかだったらなんかおかしいと思う (A)
 - 化学は基礎からやっていたので、クラスを分ける必要はないと思う (A)
 - この科目に関してはいらんと思う (A)
 - 入門生物をつくってほしかった (B)
 - 先生の違いによって、生徒の有利・不利があると思うので、あまり良くないと思います (A)
 - 初級だからといって初級の授業をしているわけではないと思いました (A)

2. マテリアル

- ①
 - クラスを分けて実施した方がいいと思う。(A)
 - センター試験の成績だけではなく、二次試験の成績も反映させた方がいい (B)
 - 高校によって学力にも差が出ると思うので習熟度別のクラス編成を行った方がいい (A)
 - 今の専門基礎科目についていけないので習熟度別にしてほしい。また、数学の入門講座を受けているが、そうすると化学、物理の基礎講座がコマがかさなっていて受けられない (A, C)
 - 再来年度あたりから新入生に習熟度別のクラス編成を適応した方がいい (A)
 - 自分で初級、中級など選べるようにしてほしい (A)
 - 現在の状況でクラス編成すべき (A)
- ②
 - これはやってみないとわからないと思うが、良い面としてはその人にあった授業を受けられるが、悪い面としては知識に差ができてしまう点である (A)
 - 先生によって授業のレベルが違くとよく聞くので学科ごとにクラス編成すると、確かに人によって苦しいところがあるかもしれない。私は、学科ごとでも個人が努力するかしないかで成績なんて変わると思うので分ける必要はあまり感じない (A)
 - 成績によるクラス編成はさらにそこで成績の差が出ると思う。(A)
 - 教員にもっと熱意をもって講義をしてほしい。それなら習熟度別クラス編成をする必要はなくなると思う (C)
- ③
 - クラスごとに進むスピードが違わないようにしてほしい (A)
 - 選択できるようにしてほしい (A)
- ④
 - 個人差はあると思うが、理解できていない人(点が低い人)は、工学入門を受けるべきだとおもう (A)
 - わかりやすく丁寧に教えてくれるなら他はどうでもいい (A)
 - クラスを分けたら習熟度に差が出るのではないかと思う (A)
- ⑤
 - センターは意味がないと思う。(B)
 - まずは教授陣の時間が割かれる。友人どうしのつながりが薄れる。センターのマークミスの場合の対応 (A, B)

3. 機械システム

- ①
 - タダなのでいいと思う (A)
 - センターではなく、自分で問題をつくってやるべき by 後期入学 (B)
 - 学科別ではなく、習熟度別でわかるべき (A)
 - 入学当初に基本的事項のテストが必要 (B)
 - 今後の対応に期待 (C)
- ②
 - 自分は情報3年の学生だが、信号処理の講義で西山先生が「微積分学をおとす学生が多すぎる」と言っていた。(C)
 - とりいれた方が留年者の減少になるのでは (C)
 - クラスばかり分けても授業内容が見合っていなければ意味がない (A)
 - センター試験からは時間が経っているので、別の試験で実力を測ったほうが良い (B)
 - 自分のレベルにあった授業を受けた方がいい (A)

専門基礎科目の習熟度別アンケート結果最終報告

- ③
- その人の知識量に合わせた学習ができるので、行っても良い (A)
 - やはり全て平等にはじめるべき (A)
 - 全て編制するのは大変 (A)
- ④
- 高校からの内容のステップアップの授業もあるが、新しい内容の分野 (化学の量子論 etc…) もあるため、一概にクラス編成が良しとはできない (A)
 - クラスが多くなって逆に面倒になるのでは? (A)
 - 何故英語だけクラス分けしているのだろうと少し思った (A)
- ⑤
- 他のクラスの授業内容がくわしくはわからないのでクラス編成についてどうこう言えないが、クラスを分ける必要は無いと思う (A)
 - 高い専門性が求められているのではない限り、同じでいいと思う (A)
 - 習熟度別クラス編成は廃止すべきである。英語においては上級クラスの課題の量が他のクラスと比べて多く、とても負担になるので平等性を感じない (A)

4. 社会環境

- ①
- 習熟度別にクラス編成されれば、授業についていけなくなることもなくなると思う (A)
 - 授業時間が増えてもいいので、クラス分けした方が自分に合ったやり方で勉強できると思う (A)
 - センター試験のときと学力が同じではないと思うので、希望性にしてもらえるとありがたい (B)
 - このようなアンケートで何かが変わるとは思えない (C)
- ②
- 授業が難しかった (C)
 - 人によっては高校でほとんど学んでいない人もいるのでやった方がいい (A)
 - センターで判断するのではなく、二次のペーパーで判断すべき (B)
- ③
- 差が大きくひらいているなら、してもいいかもしれない (A)
- ④
- 回数を増やせばいいと思う (C)
 - どのような利点があるかわからない (A)
 - このことに関しては学生がとやかく口出しすることではない。先生方が入学式できっちりふり分けをして、その結果から選ばれている人が学ぶのだから (C)
- ⑤
- センターだけでやるのはどうかと思う (B)

追加 (後期分)

電気電子・情報 物理学 A

- ①
- 習熟度別クラス分けに賛成。
- ②
- 特になし
- ③
- 科目によってはクラス分けに賛成。
 - クラス編成はいらないと想う。
 - 変にクラス分けをするとやる気がへると考えられる。
- ④
- 単位の取りやすさに差がでて不公平だからやめた方がいいと思う。
 - 工学入門の授業があるのはよいと思うが、習熟度別クラス編成はいらないと想う。
- ⑤
- 特になし

電気電子・情報 物理 B

- ①
- 電電はコースがあるのでなおさらの方が良いと思う。
 - やってください
 - 初回テストで振り分けがいいと思う
- ②
- 上のクラスだからといって課題が多くするのはやめたほうがいい
 - センター試験の成績で抽出はどうでしょうかね
 - 大学で作った問題で再度やるべき
- ③
- 習っていない人に講座を開けば良い
- ④
- この科目には必要ない

- あまり必要ないと思う
- ⑤
- 入学までに学力は変わると思う
- 将来使う知識を学ぶ科目だから、クラスを分けて習熟度に差が出るとレベルの違いがはっきりしてしまいそうだから(問2で)5を選びました
- このままでよいのではないか

電気電子情報 化学A

- ①
- 高度な授業をやって、全然ついていけなくなるよりは、基礎をゆっくりやり、
- 知識をコンパクトに深めた方がいいのではないか。
- いいと思う。
- センターから二次までの期間やらない科目があると思う。
- センターには運の要素もあるので、習熟度別にすると入学前の筆記試験が必要
- だと思う。
- ②
- 習熟度別クラス編成を希望する。
- ③
- クラス編成しなくても良いと思う。
- ④
- 学科のクラスの人数上、分ける必要はない。
- 意味がない。
- 前期には工学入門数学・物理を受講したが、大学の授業への良い足がかりになったと思う。
- ひとまとめでいいと思う。ただ、希望者は補講などでサポートを利用すべきだと思う。
- やることがあまり変わらないのであれば、習熟度別にクラス編成するのではなく、
- 工学入門～の受講生を増やしたり、基準を上げれば良いと思う。
- クラスごとに授業内容に差がでてしまうと思う。
- いらなくと思う。苦手でも頑張ればなんとかなる！？
- ⑤
- 下手にクラス分けすると、レベルの差が出過ぎてやる気がなくなる生徒がでると考えます。(専門科目は自習が難しいので)
- 頑張れないやつは落とすべき。
- 基礎科目なので差はつけたくない、つけられたくないなあと思う。

電気電子・情報 化学B

- ①
- 自分自身、ついていけないという自覚があるので、実地しても良いと思います
- 化学IIを高校でやっていない人は、クラス編成しないとつらいのではないかと思います
- センター試験でクラス編成するのはどうかと思いました
- 入試を終えてから勉強するのはほぼない。初回にテストで振り分けるのがいいかと...
- 別にした場合に、内容に差が出たときに、調整が可能なのか
- ②
- レベルの高い級で、成績が取り辛くないならば良いと思う
- センター試験ではなく、大学が作ったものでクラスを分けるのが適切だと思う
- ③
- 力のある人、無い人で分けるのもよいが、基本的なことは同じスタートラインで始めるべき
- 習ってないところがある人のためにその範囲を勉強できる特別な講座を開講すれば良いと思う
- センター試験から入学までしばらく日があるので、覚えたことを忘れる人もいると思う。よってセンターでのクラス分けはあまり好ましくないと思う。
- クラスを編成した結果、同じ科目でもクラスによって難易度・課題の量・成績の付けかたなどで差が無いようにすべきだ
- ④
- 個人によって専門科目知識を将来使うかどうか異なると思うのでクラスは個人で決めるのが良いと思う
- この科目には必要ない
- ⑤
- 工学部に入ってくる人は理系科目に自身のある人が多いと自分は思っているので、必要ないと思う。だが、物理・化学の片方がニガテな人などがいるので、工学入門はあると良いと思う
- 専門基礎科目は、皆必要になってきて、必要な基準は一緒だから分けない
- 出来ない学生に無理にあわせる必要は無い
- 習熟度はそう簡単に計れるものではないと思う
- たしかに習熟度で分けるとやりやすくなるかも知れないが、専門科目は初めて習う人も多く、いくら基礎であっても忘れていることがあるかもしれない。なら習熟度クラス編成と専門基礎科目ではやるべきではない。

平成24年度基礎ゼミナール総括

学部	人社会学部	教育学部	工学部	農学部
実施単位	学部(課程単位ではない)	課程・コース	学科	課程・学科
担当体制(教員1人当たり)	3年に1回	輪番、固定、その併用	学科担任	課程・学科担任
クラス数・サイズ	20クラス・3名~15名	23クラス・6名~14名	5学科・40名~133名	5課程・学科31名~59名
学科・課程・コース・サブコース別データ	各課程の教員数に比例して、担当者を各課程に配分	学校教育コース(14名、各サブ事情反映、毎年/隔年/数年一度etc)、生涯(2名、隔年)、芸文(書道:1名毎年、美術:生員オムニバス、音楽5年に1回)	応化生命(14名) マテ(2年1回、9名)、電気電子・情報(電気電子18名、情報14名)、機械(17名)、社会環境(10名)	農学生命(担任10年1回、全教員毎年分担)、応用生物化学(担任11年1回、全教員毎年分担)、共生環境(担任8年1回、全教員毎年分担)、動物科学(担任8年1回)、共同獣医(担任25年1回)
実施内容	①少人数によるゼミナール形式 ②基礎ゼミナールに先立ち、新入生全員による合宿で、大学生活、大学講義など大学での「学び」について研修の実施	①講義&ゼミナール ②文献調査&文献講読 ③ディスカッション ④レポート作成 ⑤口頭発表	①レジュメ、プレゼン(5) ②研究室紹介(4) ③合宿研修(3) ④課題図書講読(3) ⑤講演会・交流会(3) ⑥図書館等学内施設見学と情報検索実習(3) ⑦実習(1)	①レポート、プレゼン(5) ②合宿研修(5) ③学内施設見学(4) ④講義・実習(3) ⑤研究室紹介(2)
評価できる点	①少人数編成により、受講生、教員とのコミュニケーションがとり易い。 ②受講生が希望するクラスに配属されている。 ③今年度実施した教員アンケートでは、初年次教育としての成果が得られているとの評価	①開講テーマの多様さ ②意欲高い学生が多い	①合宿研修 ②プレゼンテーション ③語学教育の必要性のアナウンス、国際研修への参加の呼びかけ等 ④少人数教育	①アカデミックスキルの演習、合宿研修、学内施設見学、環境DVD視聴など多様な内容で実施している。 ②課程の実状を踏まえた内容であり、学生からの満足度は高い。
改善すべき点	①基礎的なアカデミック・スキルを各ゼミがどの程度とりにいれているかの検証が必要 ②基礎ゼミクラス選択はシラバスのみで判断するので、その内容の充実化	①概要事前周知徹底 ②クラス分けの方法 ③受講数担当者意向反映 ④学習内容共通化徹底	①研究室紹介の比重 ②課題図書の講読方法 ③各コースの配分時間が短い(電気電子コースと情報コース) ④学生からの評価がやや低い(下記データ参照)	①多くの課程で、全学共通教育へのイントロダクションに関する内容が盛り込まれていない。 ②他学部や他課程との比較に基づく継続的改善の仕組みが確立されていない。
授業評価	最高値2、最低値-2(5段階に換算)	1.76(4.76)	1.36(4.36)	1.77(4.77)
H24前期	1.58(4.58)			
成績評価比率	秀:優:良:			
評価の比率の高い順	①優46②秀44③良7	①優44②秀41③良13	①優65②秀26③良6	①優66②秀32③良2
GPA値	3.31	3.24	3.14	3.30

参考資料
シラバスを一部添付(例)

平成24年度外国語の自主学習等についての総括

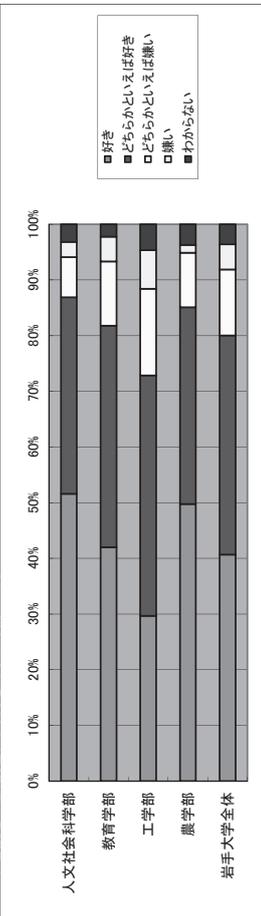
学部	人社会学部	教育学部	工学部	農学部
H24年度2年次以降の外国語関連科目の開講状況	英語講読(経済コース)	英語科以外は特に開講なし	2~3年次:科学技術英語・工業英語等(各学科、必修)、4年次:科学技術論文のセミナー(各学科3年次または4年必修)、特に応化生命3年次の化学英語IIでは「カナダ人によるICTコンテンツを利用したブレゼンテーションの講義」を実施	2年次:科学英語(農学生命と応用生物化学で必修)、3年次:科学文献読解法(選択)
TOEIC等の統一試験の実施に向けた検討状況	今年度3年生に受験を推奨し実施(後援会負担、希望者のみ)	2サブコースを除き消極的な意見が大多数	検討しているが、現段階では導入の予定なし	「全学で予算確保できれば試行で実施」という、消極的な意見が多い
ネットアカデミー等のICTの利用状況 *	31(S),53(SS),114	3(S),1(SS),47	131(S),178(SS),277	66(S),64(SS),224
国際研修等への参加状況**	9(オカナガン大学)17(群山大学)14,明知大学)3)H23実績	5(オカナガン大学)23(聖波大学8,清華大学9,タイ国内中学校等5,明知大学)1)H23実績	12(プリティッシュ・コロンビア大学/H24実績)H23実績は6名	6(パデュー大学3,オバーバン大学1,オカナガン大学2)H23実績
全学共通外国語科目等についての要望	英語教育の継続性は必要である。自主学習プログラムはあるが、それについての総括が必要。環境科学課程では、2年次以降に英語科目の開講を要望する	短期集中型から2年間の長期継続型へ	2年次に科学技術関連の英語演習科目の開講を要望する	特になし(入学前のPre-TOEFLを1年後期に移行させてもよい)

*右からネットアカデミー-S:スタンダードコース、SS:スーパースタンダードコース、国際交流センター英語ICTコンテンツのアクセス数 **太字は英語圏の大学

平成24年度 新入生アンケート集計(学部)

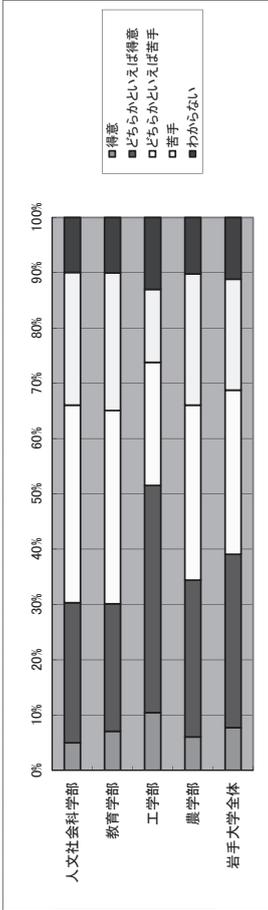
(H24)	Q1. 読書		Q2. 文章		Q3. 発表	
	好き :どちらか といえば 好き	嫌い :どちらか といえば 嫌い	得意 :どちらか といえば 得意	苦手 :どちらか といえば 苦手	得意 :どちらか といえば 得意	苦手 :どちらか といえば 苦手
人文社会科学部	51.6%: 35.3%: 7.2%: 3.2%	2.7%: 4.1%: 6.8%: 21.7%: 34.8%: 34.4%: 2.3%	7.2%: 25.8%: 41.2%: 21.7%: 4.1%	6.8%: 21.7%: 34.8%: 34.4%: 2.3%	2.3%: 4.1%: 6.8%: 21.7%: 34.8%: 34.4%: 2.3%	2.3%: 4.1%: 6.8%: 21.7%: 34.8%: 34.4%: 2.3%
教育学部	42.0%: 39.8%: 11.5%: 4.5%: 2.2%	3.9%: 36.4%: 37.9%: 20.1%: 2.2%	3.9%: 36.4%: 37.9%: 20.1%: 2.2%	5.6%: 29.7%: 38.3%: 23.8%: 2.8%	2.8%: 4.6%: 3.7%: 16.2%: 35.0%: 41.5%: 3.9%	3.9%: 36.4%: 37.9%: 20.1%: 2.2%
工学部	29.7%: 43.2%: 15.5%: 7.0%: 3.7%	13.7%: 36.0%: 42.7%: 4.6%	6.5%: 23.3%: 33.5%: 37%	5.1%: 18.1%: 30.2%: 42.3%: 4.2%	4.2%: 3.2%: 4.0%: 11.9%: 4.5%: 3.6%	3.8%: 3.8%: 3.6%: 3.6%: 3.8%: 3.2%
農学部	49.8%: 35.3%: 9.8%: 1.4%: 3.7%	6.5%: 23.3%: 33.5%: 37%	6.5%: 23.3%: 33.5%: 37%	5.1%: 18.1%: 30.2%: 42.3%: 4.2%	4.2%: 3.2%: 4.0%: 11.9%: 4.5%: 3.6%	3.8%: 3.8%: 3.6%: 3.6%: 3.8%: 3.2%
岩手大学全体	40.7%: 39.3%: 11.9%: 4.5%: 3.6%	4.6%: 23.2%: 36.9%: 31.5%: 3.8%	5.0%: 20.9%: 34.9%: 36.1%: 3.2%	5.0%: 20.9%: 34.9%: 36.1%: 3.2%	3.2%: 3.2%: 3.2%: 3.2%: 3.2%: 3.2%	3.2%: 3.2%: 3.2%: 3.2%: 3.2%: 3.2%

Q1. 本を読むこと(読書)は、好きですか、嫌いですか？

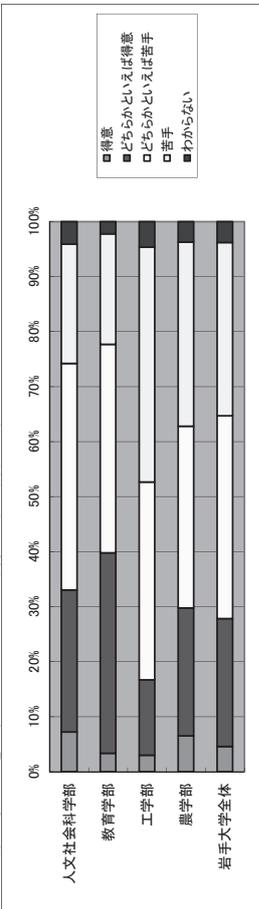


(H24)	Q4. 表やグラフ		Q5. パソコン		Q6. インターネット	
	得意 :どちらか といえば 得意	苦手 :どちらか といえば 苦手	得意 :どちらか といえば 得意	苦手 :どちらか といえば 苦手	得意 :どちらか といえば 得意	苦手 :どちらか といえば 苦手
人文社会科学部	5.0%: 25.3%: 35.7%: 24.0%: 10.0%	9.5%: 52.0%: 33.0%: 5.4%: 0.0%	82.4%: 14.0%: 2.3%: 1.4%: 0.0%	7.1%: 23.0%: 34.9%: 24.9%: 10.0%	6.7%: 57.2%: 30.9%: 5.2%: 0.0%	7.7%: 16.7%: 17.3%: 2.8%: 0.0%
教育学部	10.4%: 41.1%: 22.3%: 13.2%: 13.0%	6.0%: 51.0%: 33.4%: 9.0%: 0.5%	82.1%: 13.7%: 13.7%: 2.8%: 0.0%	6.0%: 51.0%: 33.4%: 9.0%: 0.5%	84.2%: 11.6%: 4.2%: 0.0%: 0.0%	7.7%: 16.7%: 17.3%: 2.8%: 0.0%
工学部	6.0%: 28.4%: 31.8%: 23.7%: 10.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%	81.5%: 14.1%: 3.8%: 0.8%: 0.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%	81.5%: 14.1%: 3.8%: 0.8%: 0.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%
農学部	7.7%: 31.3%: 29.7%: 20.1%: 11.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%	81.5%: 14.1%: 3.8%: 0.8%: 0.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%	81.5%: 14.1%: 3.8%: 0.8%: 0.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%
岩手大学全体	7.7%: 31.3%: 29.7%: 20.1%: 11.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%	81.5%: 14.1%: 3.8%: 0.8%: 0.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%	81.5%: 14.1%: 3.8%: 0.8%: 0.2%	7.6%: 53.5%: 31.8%: 6.9%: 0.3%

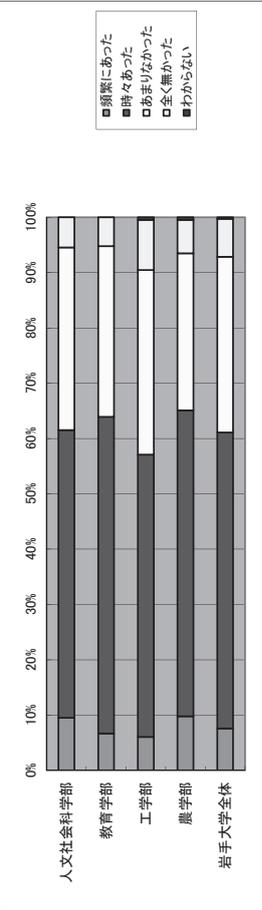
Q4. 数字を集めて計算したり、表やグラフを作成したりすることは、得意ですか、苦手ですか？



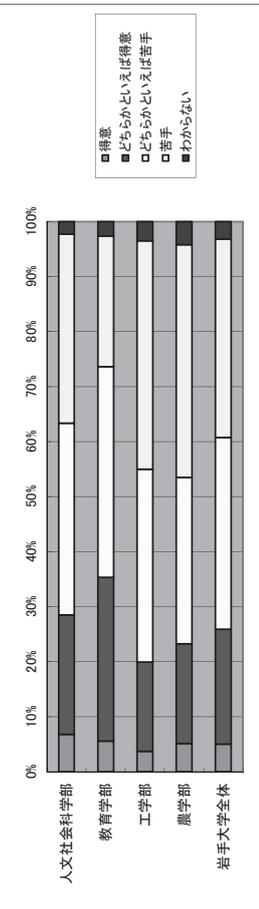
Q2. 自分の考えなどを文章としてまとめることは、得意ですか、苦手ですか？



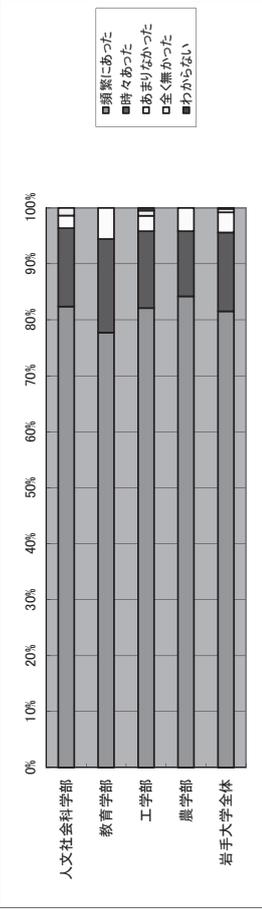
Q5. 今までに、家や学校でパソコンを利用して文書や表をつくる機会がありましたか？



Q3. 人前で話したり、発表したりすることは得意ですか、苦手ですか？



Q6. 今までに、パソコンや携帯電話でインターネットに接続する機会がありましたか？



岩手大学と放送大学との教育協力型単位互換指定科目：平成24年度分

(2012. 4. 1版)

科目分類 科目名 (岩手大学)	科目分類 科目名 (放送大学)	メディア	受講 者数	学 期	受 講 日 時 間	活動目的及び理由等	補助教員等
共通基礎：外国語	共通基礎：外国語	TV/R	60	前・後期	自由視聴	時間割上の制約の解消(平成19年度以降入学生履修への配慮)	なし
教養：人間と自然 「生命のしくみ」	共通：一般：自然系 「人体の構造と機能(12)」	TV	10	後期	水9・10	生命科学分野科目の充実	岩手大学 TA
教養：高年次課題 「高年次課題科目特別講義Ⅱ (問題解決の進め方)」	基礎科目 「問題解決の進め方(12)」	TV	10	後期	木3・4	ESD関連科目の充実	岩手大学 江本 理恵
専門：人社：国際文化 「文化記号論Ⅳ」	大学院科目：文化情報学プログラ ム 「21世紀メディア論(11)」	TV	10	後期	金3・4	人文社会科学部での文化論関連 科目の充実	岩手大学 後藤 尚人



學生支援部門

学生支援部門会議委員名簿

(平成24年4月1日)

	氏名	担当部局等
部門長	栗林 徹	教育学部
兼務教員 (各学部学生委員会選出教員)	松林 城弘	人文社会科学部
	ホール ジェームズ	教育学部
	土岐 規仁	工学部
	出口 善隆	農学部
学部選出教員	白倉 孝行	人文社会科学部
	菊地 悟	教育学部
	海田 輝之	工学部
	立川 史郎	農学部
学生支援課長	佐藤 祐一	学務部

活動報告

部門長 栗林 徹

東日本大震災被災学生への経済支援を実施

東日本大震災で被災した学生の皆さんの修学支援として、検定料の免除、入学料・授業料の減免、寄宿料の免除、岩手大学独自の奨学金の給付などの経済支援を行いました。

入学料免除者は56名、授業料免除者は283名、寄宿料免除者は11名となりました。

ボランティア促進イベントの開催

継続的なボランティア活動を支援するために、ボランティア促進イベントを次のとおり開催しました。合わせて、復興支援ボランティア活動の単位認定について説明を行いました。

イベントでは、講話と合わせてボランティア活動を行っている各サークル等の活動状況が報告され、各団体の情報が共有される良い機会となりました。

日時：平成24年7月19日（木）15時～16時30分

場所：学生センターA棟G29講義室

講話：「被災地支援ボランティアの現状と課題」

講師：岩手大学教育学部教授 名古屋 恒彦

駐輪指導の実施

構内環境整備と交通ルールの周知を図るために、平成24年度も春と秋の2回駐輪指導を行いました。

指導は、学生支援部門の委員と学生支援課職員、学生議会運営委員会委員が協働で行い、マナーの向上に努めました。

第55回盛岡・つなぎ間ロードレース大会の実施

第55回盛岡・つなぎ間ロードレース大会（太田橋脇～ホテル紫苑までの約12km）を、6月2日（土）に開催しました。団体の部では教育学部が、サークル対抗の部では陸上競技部が優勝しました。

参加者：学生143名、教職員10名



Let's びぎんプロジェクトの実施

Let's びぎんプロジェクトは、学生が共同で行う独創的なプロジェクトを支援するもので、1件あたり50万円を上限に経費を支援しています。

平成24年度は、審査の結果、6件を採択し支援を行いました。

保健管理センター教員と担任教員との連絡会

保健管理センター教員から担任教員へ学生相談について、また学生特別支援室コーディネーターから学生特別支援室の活動状況等について情報を提供するとともに、学生指導を行う上での留意点等について意見交換を行いました。

日時：平成24年9月10日（月）13:30～15:10

場所：学生センターA棟G29講義室

学生指導担当教職員研修会・課外活動サークルリーダーシップセミナーの実施

学生指導担当教職員研修会と課外活動サークルリーダーシップセミナーとの合同開催により、教職員と学生とが意見交換を行う場となることから、そのことが今後の学生指導及びサークル活動に資することを目的に実施しました。

日時：平成24年12月1日（土）13:00～19:50

場所：学生センターA棟G29講義室他

講演1 演題「ワークショップから探るリーダーシップ～リーダーシップって何だ！？～」

講師：トラブルカフェシアター代表 遠藤 雄史 氏

講演2 演題「安全・安心な大学生活のために」

講師：盛岡東警察署交通課長 田島 直樹 氏

講演3 演題「岩手大学における特別な支援を要する学生の現状と対応について」

講師：岩手大学学生特別支援室コーディネーター 新村 暁 氏

ワークショップ テーマ「健常者と障がいを持つ学生とが協働できるサークル活動とは」

助言者：岩手大学学生特別支援室コーディネーター 新村 暁 氏

学長と学生との懇談会の開催

平成24年度は、次のとおり3回開催し、学長にとっては学生の生の声を聞く機会となり、学生にとっては学長と直接話せる貴重な機会となり、双方にとって有意義なものとなりました。

第1回：平成24年6月27日（水）

平成24年度第1回ガンチョンタイムにおいて懇談会を開催

第2回：平成24年12月1日（土）

サークルリーダーシップセミナーでの交流会で、サークル代表者と活発な意見交換を実施

第3回：平成25年2月28日（木）

各学部卒業年次及び各研究科修了年次の代表学生の参加を得て、「岩手大学を選んだ理由」、「岩手大学に入学して良かったこと」、「改善して欲しいこと」について懇談会を実施

発達障がい学生への修学支援に関する学習会

発達障がいの学生は年々増加しており、教職員が発達障がいを理解することと、大学としてどのような支援が必要とされているかを学ぶため学習会を開催しました。

1. 発達障がいの理解と対応

第1回：平成24年11月28日（水）10：00～12：00

第2回：平成24年12月 3日（月）15：00～17：00

第3回：平成24年12月13日（木）15：00～17：00

講師：岩手産業保険推進センター メンタルヘルス対策相談員 坂下史絵 氏

2. 富山大学における発達障がい学生への支援 ～実践から学ぶ～

日時：平成24年12月21日（金）10：00～12：00

講師：富山大学学生センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室
特命准教授 吉永崇史 氏

上田地域活動推進会と学生との懇談会

平成25年1月31日（木）に、大学周辺の町内会の組織である上田地域活動推進会の皆さまと学生代表（学生4団体、環境マネジメント、学生寮、岩手大学まちづくりサークル）とが意見交換を行いました。

町内会からは、学生が広報誌『うえだっしょ』を作成し、上田商店街の情報を発信したことを高く評価したこと。社会人としてのマナーの徹底や積極的な町内会活動への参加が要望されたこと。学生にとっては地域の皆さまが日頃どのような気持ちで岩大生を見ているかが直接分かる貴重な機会となった。



寮生と学生指導担当教職員との懇談会

平成24年2月15日（金）に上田寮（自啓・同袍）、3月19日（火）に高松寮（北謳・紅梅）の寮生と学生指導担当教職員とが、寮運営の在り方や留学生との交流、お酒の問題について意見交換を行いました。

快適な寮生活の実現に向けて大学側と寮生側とも目指すところは同じであり、懇談会の継続的開催の必要性を確認しました。

学生表彰の実施

学生または学生団体（学生が任意に組織したサークル等のグループを含む）が研究活動、課外活動、社会活動等において、特に顕著な業績を挙げた場合にその学生及び学生団体を学長が表彰しております。

平成24年度の学生表彰は3月15日（金）に行われ、学長賞は個人13名、団体1団体、奨励賞は個人20名、団体4団体に授与しました。



平成24年度 岩手大学学生表彰者名簿

学長賞(個人)

番号	氏名	ふりがな	所属	推薦者	表彰理由
1	笹本 益民	ささもと ますみ	平成21年度入学 工学研究科 電気電子・情報システム工学専攻 平成23年3月修了	工学部 准教授 吉森 久	①平成24年度日本光学会 奨励賞
2	久保 貴寛	くぼ たかひろ	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 山口 勉功	①資源・素材2011秋季大会 若手ポスター賞 ②日本鉄鋼協会第164回秋季講演大会学生ポスターセッション 優秀賞
3	千葉 泰司	ちば たいじ	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 松川倫明	①金属二重鎖系銅酸化物の超伝導転移温度 世界記録更新 学術誌(Physica C)へ掲載
4	中村 佳良	なかむら よしふみ	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 成田 榮一	①木質炭化学会第10回研究発表会 優秀発表賞
5	鈴木 達也	すずき たつや	平成23年度入学 工学研究科 電気電子・情報システム工学専攻	工学部 助教 高橋 和貴	①平成23年電気学会 優秀論文発表賞(基礎・材料・共通部門表彰)
6	高橋 有	たかはし ゆう	平成22年度入学 連合農学研究科 生物資源科学専攻	連合農学研究科 研究科長 上村 松生	①2012年度日本育種学会秋季大会第122回講演会 優秀発表賞
7	鈴木 尋	すずき じん	平成19年度入学 農学部 獣医学課程	農学部 教授 原澤 亮	①日本学生支援機構優秀学生顕彰 奨励賞
8	高村 大地	たかむら だいち	平成19年度入学 農学部 獣医学課程	農学部 教授 山本 欣郎	①第154回日本獣医学会学術集会日本獣医解剖学会 奨励賞
9	佐々木 由衣	ささき ゆい	平成19年度入学 農学部 獣医学課程	農学部 教授 古濱 和久	①第154回日本獣医学会学術集会日本比較薬理学毒性学会 奨励賞
10	藤沢 沙也加	ふじさわ さやか	平成21年度入学 教育学部 生涯教育課程	陸上競技部監督 上演 龍也	①天皇賜盃第81回日本学生対校陸上競技選手権大会 女子400m 優勝 女子200m 第4位 ②第67回国民体育大会 女子400m 第6位 ③第52回実業団・学生対抗陸上競技選手権大会 女子400m 第4位
11	田村 友紀	たむら ゆき	平成22年度入学 教育学部 生涯教育課程	陸上競技部監督 上演 龍也	①天皇賜盃第81回日本学生対校陸上競技選手権大会 女子100m 第5位 女子200m 第6位 ②第67回国民体育大会 女子100m 第5位
12	小松 龍之介	こまつ りゅうのすけ	平成23年度入学 教育学部 生涯教育課程	陸上競技部監督 上演 龍也	①第28回日本ジュニア選手権 男子400mH 第5位
13	高橋 美誉	たかはし みえ	平成22年度入学 農学部 農学生命課程	オリエンテーリング部顧問 菊池 弘昭	①Junior World Orienteering Championships 2012 出場

学長賞(団体)

番号	団体名	推薦者	受賞理由
1	岩手大学環境マネジメント学生委員会(EMSC)	環境マネジメント推進室 室長 小川 智	①第21回地球環境大賞文部科学大臣賞

平成24年度岩手大学学生表彰者名簿（個人・団体）

奨励賞（個人）

番号	氏名	ふりがな	所属	推薦者	受賞理由
1	白幡 悠人	しらはた ゆうと	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 成田 榮一	①平成24年度化学系学協会東北大会 優秀ポスター賞
2	田名部 潤	たなべ じゅん	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 成田 榮一	①第17回応用物理学会東北支部学術講演会 講演奨励賞
3	今野 仁栄	こんの ひとえ	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 成田 榮一	①平成24年度日本セラミックス協会東北北海道支部研究発表会 優秀発表賞
4	千葉 裕介	ちば ゆうすけ	平成23年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 准教授 宇井 幸一	①平成24年度化学系学協会東北大会 優秀ポスター賞
5	阿部 朋子	あべ ともこ	平成24年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 成田 榮一	①平成24年度日本セラミックス協会東北北海道支部研究発表会 優秀発表賞
6	高橋 海	たかはし かい	平成24年度入学 工学研究科 フロンティア材料機能工学専攻	工学部 教授 成田 榮一	①平成24年度日本セラミックス協会東北北海道支部研究発表会 優秀発表賞
7	村田 朋恵	むらた ともえ	平成21年度入学 教育学部 学校教育教員養成課程	教育学部 教授 八木 一正	①日本理科教育学会（東北支部） 東北理科賞・学生研究奨励賞
8	黒澤 実姫	くろさわ みき	平成21年度入学 教育学部 学校教育教員養成課程	教育学部 教授 八木 一正	①日本理科教育学会（東北支部） 東北理科賞・学生研究奨励賞
9	福眞 広大	ふくま こうだい	平成22年度入学 工学部 応用化学・生命工学科	アーチェリー部顧問 西牧 正義	①第44回東北学生アーチェリー個人選手権大会 男子個人第4位 ②第67回国民体育大会（ぎふ清流国体） 出場 ③第44回東北学生アーチェリー王座決定戦 男子個人第5位
10	浅沼 愛	あさぬま めぐみ	平成24年度入学 人文社会科学部 環境科学課程	卓球部顧問 嶋田 和明	①第65回東北学生卓球選手権大会 女子シングルス 優勝
11	太田 紘介	おおた こうすけ	平成21年度入学 人文社会科学部 法学・経済課程	アメリカンフットボール部顧問 早川 浩之	①第37回東北学生アメリカンフットボールリーグ 敢闘賞受賞
12	大澤 雄介	おおさわ ゆうすけ	平成21年度入学 工学部 応用化学・生命工学科	アメリカンフットボール部顧問 早川 浩之	①第37回東北学生アメリカンフットボールリーグ オール東北メンバーに選出
13	下総 冬馬	しもふさ とうま	平成21年度入学 工学部 機械システム工学科	アメリカンフットボール部顧問 早川 浩之	①第37回東北学生アメリカンフットボールリーグ オール東北メンバーに選出
14	今川 来望	いまかわ くるみ	平成22年度入学 人文社会科学部 法学・経済課程	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第45回少林寺拳法東北学生大会 運用法女子有段の部:1位
15	一條 利一郎	いちじょう りいちろう	平成23年度入学 人文社会科学部 法学・経済課程	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第42回少林寺拳法東北学生新人大会 男子茶帯の部:1位
16	宮崎 真由美	みやざき まゆみ	平成22年度入学 教育学部 学校教育教員養成課程	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第45回少林寺拳法東北学生大会 女子有段単独演武の部:1位 ②少林寺拳法全国大会inかがわ 一般男女有段の部:敢闘賞
17	瀧澤 隼人	たきさわ はやと	平成23年度入学 工学部 機械システム工学科	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第42回少林寺拳法東北学生新人大会 男子茶帯の部:1位
18	佐々木 萌	ささき もえ	平成24年度入学 工学部 機械システム工学科	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第42回少林寺拳法東北学生新人大会 女子白・緑帯の部:1位
19	川名 悠加	かわな はるか	平成22年度入学 農学部 獣医学課程	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第45回少林寺拳法東北学生大会 女子有段の部:1位
20	和田 夏海	わだ なつみ	平成22年度入学 農学部 獣医学課程	少林寺拳法部顧問 新妻 二男	①第45回少林寺拳法東北学生大会 女子有段の部:1位

奨励賞（団体）

番号	団体名	推薦者	受賞理由
1	男子バスケットボール部	バスケットボール部顧問 栗林 徹	①第13回 東北大学バスケットボール1部リーグ 優勝 ②平成24年度 東北地区大学体育大会バスケットボール大会 優勝
2	男子ラクロス部	ラクロス部顧問 岩木 信喜	①第19回東北地区ラクロスリーグ戦:優勝 ②全国大会最終予選三地区リーグ戦:2位
3	ラグビー部	ラグビー部顧問 塚野 弘明	①2012年度東北地区大学ラグビーリーグ(1部)第2位
4	吹奏楽部	吹奏楽部顧問 河田 裕樹	①全日本吹奏楽コンクール東北大会(大学の部)銀賞



キャリア支援部門

キャリア支援部門会議委員名簿

(平成 24 年 4 月 1 日)

	氏 名	担 当 部 局 等
部門長	安 田 準	農学部
兼務教員 (各学部就職委員会選出教員)	竹 村 祥 子	人文社会科学部
	大河原 清	教育学部
	高 木 浩 一	工学部
	古 賀 潔	農学部
キャリア支援課長	大 内 正	学務部

活動報告

部門長 安田 準

「キャリア支援部門会議」

平成24年度のキャリア支援部門会議は、前年と同様に6回開催した。議題は第1回の年度計画の審議で始まり、学生の就職支援に係るガイダンス等の企画や内容を改善する検討に加えて、全国を9ブロックに分けて地域産業界と連携する文部科学省の新規公募事業に応募する事業内容の審議、キャリア教育科目授業担当の取り扱いなどを審議し、第6回には次年度への引継事項を取りまとめた。

「キャリア教育科目」

全学共通教育科目の「キャリアを考える」は、例年履修希望者の多い科目であり、前期授業の初回は、教室定員を上回る学生が履修を希望し、同じ内容のものを前・後期で開講して、合計450名ほどの学生が履修した。15回の講義の中では、本学を卒業した社会人もオムニバス方式により交替で講義の一部を担当した。「地場産業・企業論」は、前期の土曜日に集中講義形式で岩手県立大学と共催する授業であり、1コマの授業は岩手県知事から「地元の現状と未来・若者への期待」と題する講演をいただいた。両大学合わせて28名の学生が受講し、主に岩手大学学生センターB棟の講義室で行った。

後期の集中講義「知財ワークショップ 副題：地場産業ブランド戦略論」は、知財と地域の関係を探りながら就業力と地元定着を実践的に学ぶ授業で、土曜日の授業、産学官の講義、事業所訪問及びグループワークなどが特長である。授業最後の学生発表会には、履修学生のほか盛岡市商工観光部職員などが参加して、授業を通じて産学官の交流を行った。

この他に全学共通科目や専門教育科目の中で、「キャリア」をキーワードに授業をしているものはあるが、体系立てて一貫性のあるキャリア教育科目の授業構成にはなっていない。キャリア支援部門が本学のキャリア教育の実施母体となることは、今年度の部門会議で確認していて、前述の3科目を担当していた者の退職に伴う次年度の授業担当者を検討したが、学部教員を当てることは難しく、調整の結果、学内教育研究支援施設の教員をお願いすることとした。

「学生の就職支援」

就職活動を控えた学部3年生等の就職ガイダンスでは、前年度卒業学生の就職内定率が93.6%という比較的高い数値が発表された。就職難が改善されたかの印象を学生に与えたのか、夏季休業前の学生参加者は少なかったが、10月以降はいよいよ就職活動についての意識が芽生えたのか、参加者数も増加した。就職ガイダンスの内容は、企業の採用選考の段階に合わせて推移させながら3月の実践的な模擬面接講座まで続き、特にエントリーシートの添削や模擬面接は、就職ガイダンスのほかに個別に学生からの要望が多く、1月から3月まで続いた。

学生の就職活動は、企業の求人や採用活動も復調し学生から寄せられる内定状況も上向いた。一方、相変わらず公務員志望の学生が多く、秋口になって民間企業に進路変更を考える学生の就職相談等が増えた。

また、12月9日（日）の関東圏での就職支援業者が主催する企業合同説明会を皮切りに、同様の企業合同説明会の開催に合わせて、関東圏に2回、仙台市に3回学生を送迎するバスを無料で運行し、学生達の交通費を支援した。

平成24年度学部卒業生の就職内定状況は、全体で93.1%と昨年度より5.4%改善したが、全国平均より0.8%低く、国立大学法人大学のそれよりも2.2%低かった。本学の就職内定率の算出方法は、従来の方法に従っているが、近年、多くの大学の算出方法とは異なってきている。大学教育総合センター運営委員会に対し、キャリア支援部門会議においては従前の算出式で計算することを確認した旨を報告したところ、「大学の就職内定率が高いことは大学の魅力の1つであるから、本学は国立大学法人大学であっても地方大学なので、算出方法の変更を検討すること」を要望する意見が出された。

一方、教員採用実績は、地元岩手県教育委員会管内の教職員の採用数が少ないのも理由の1つだが、就職先として千葉県はじめ関東地区の公立学校の教職員になる者を含めても採用数は改善していない。その結果、全国の国立大学法人の教員養成課程を置く大学の中で最下位グループに甘んじている。

「学内企業合同説明会」

卒業年次生を対象に、9月27日（木）に開催した説明会は、企業60社と学生69名が参加し、個別面談の会場も用意した。

企業の求人活動開始が10月から12月になって2年目を迎え、学部3年生対象の学内企業合同説明会は、企業の求人活動が始まる12月1日（土）に冬季合説として開催し、北東北3大学の連携に則り相互に在籍する学生の参加を認めて、120社の企業と延べ849名の学生が参加した。2回目は春季合説として同様の受入を行い、1月17日（木）・18日（金）の2日間で240社の企業と延べ1,176名の学生が参加した。また、説明会に参加する企業の入れ替え時間帯で企業担当者と学部就職委員との名刺交換会も実施した。

「企業訪問」

教員とキャリア支援課職員が企業を訪問し、卒業生の評価や企業動向、採用選考の注目点及び大学教育に求める人材育成内容などの情報を収集する活動は、当初、訪問企業80社を目標としたが、教員や訪問企業との日程調整や人での確保が進まないまま雪の季節となり、訪問した企業数は30社に届かなかった。

なお、収集した情報から現代の学生気質や世相が感じられ、どのような業種の職業にも求められる人材と本学が目指すT字型人間の育成像が重なって見えてきた。企業からの情報は、産業界ニーズGPの「企業から大学に求められているニーズ調査」にも利用できた。

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」

文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」の後継事業として、平成23年度から「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の公募が予定されていたが、具体的な募集開始手続きが遅れ、採択後の事業開始が10月中旬となった。本学は北海道・東北ブロックの1構成大学として参加し、幹事大学は秋田県立大学が担うこととなった。

同ブロックの取組事業は「産官学連携による地域・社会の未来を拓く人材の育成」として3つのテーマを取り上げているが、本学はそのうちの2つのテーマ（「産業界と大学のニーズを踏まえたインターンシップの実施」、「早い段階から『将来目標』・『社会・企業』を意識させる正課外の取組」）に参画した。

本学の具体的な取組は、学生に入学後の早い時期から卒業後の社会人、職業人をイメージさせて、将来のために大学生活をどう過ごすべきかを気付かせる効果が高い「ジョブシャドウ」の実施とその拡大に取り組むほか、卒業生によるガイダンス講演、企業の人事担当者によるキャリアミーティング及び教職員にキャリア教育の重要性を認識いただくためのキャリア教育セミナーの開催を取り上げたが、全て正課外の取組である。

今年度の途中から開始された本事業の事業経費は、活動期間を勘案し年度要求限度額のほぼ半分の5,922千円を要求した。また、実りのある事業を進めるために企業のニーズを把握するWEB企業アンケートを作成し、企業が求める人材像の調査を実施した。

同ブロックの連携としては、12月18日（火）にジョブシャドウプログラムの導入を計画している岩手県立大学、秋田大学に本学を含めた3大学の担当者が盛岡に集まって、先行している本学の事例を参考にして情報交換を行った。年明けの1月30日（水）に弘前で開催した北東北地域ブロック会議、2月28日（木）の北海道地域ブロック会議及び3月1日（金）のブロック全体会議にも出席して本学の取組を紹介し、併せて他大学の取組の様子を伺った。また、本学の取組プログラムの参考になると思われる他のブロック大学の事業研究のために、新潟大学ほか私立の2大学を訪問して、意見交換と資料の収集を図った。

計画事業のうち「卒業生による在学生向けのガイダンス」は、1月22日（火）に宮城県下の2つの企業から各1名の卒業生を講師に招聘して「先輩から後輩についたえるセミナー」として在学生対象に、大学生時代を振り返って企業人・社会人の立場から大学時代にチャレンジして欲しい経験や習得して欲しい知識を取り上げて、大学生活の過ごし方を講義していただいた。また、3月19日（火）に行った学生を同行しての企業訪問は、県内の食品製造企業2社を人文社会科学部の2年生1名を同行して試行的に実施した。

なお、当該事業を推進する特任研究員の採用が1月になったことや本格的な取組が学生の就職活動開始の時期と重なり、十分な人手と時間を割けない状況の中で目立った取組実績を挙げる事ができないまま最初の年度を終え、平成24年度の事業評価会議と今後の活動への理解と協力をお願いする岩手県雇用促進産官連携協議会は開催しなかった。

キャリア支援部門活動推移（平成15年度～平成24年度）

キャリア支援部門活動推移（平成15年度～平成24年度）

活動内容	年度	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	特記事項
		2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	
事務組織		就職支援室	就職支援課		*		キャリア支援課		移転リニューアル			* H18年度から大学教育総合センター内に併合
就職率	学部計%	88.9	91	87.5	95.1	95.8	96.3	93	91.3	88.7	93.1	
企業訪問	訪問数	77	129	149	147	153	84	73	46	54	24	H20年度からは従来の東北中心から京葉、名阪、北海道にも拡大 ※ 22年度は取組みの遅れから減少
学内企業合同説明会	開催回数	1	1	1	1	3	3	3	3	3	3	H21～秋季合説は午後だけの開催
	学生数	718	1545	2520	2760	2430	3346	3232	3900	3888	2095	延べ参加人数
	企業数	108	216	324	353	508	465	358	367	411	418	
学内就職支援システム	求人登録数	2000	2700	4400	5600	7000	8000	9000	8000	6112	6683	H21～新システム導入（学内外からの利用も可能とした）
就職応援ブック	配布			開始	実施	←	←	←	←	リニューアル	←	小型化、ダイヤリー機能重視
キャリアガイダンス	開催数			47	40	72	91	80	92	81	73	H23～重点テーマ別ガイダンス、ES添削セミナー
ジョブカフェ岩大スポット(キャリア相談)	相談数			188	133	205	176	192	236	744	907	H22～「大学生の就業力GP」で相談体制を拡充
キャリア・アドバイザー	配置					開始 1	1	1	前期1 後期2	前期2 後期5	5	キャリア教育、キャリア・就職相談、5のうちヤングハローワーク1
キャリア教育(前後期講座:キャリアを考える)* OBOGとの連携	実施			後期試行	←	開講	←	←	←	←	←	自分の人生の目的と手段を探究し、ライフデザインとキャリアデザインを考え、そのための大学生活充実「学びプラン」を作成する
	履修者			18	12	240	480	480	480	418	480	
キャリア教育(前期講座:地場産業・企業論)* 岩手県立大学と共同、産学官連携	実施						開講	←	←	←	←	地元定着のための企業の魅力探究と課題の整理
	履修者						30	23	33	34	28	
キャリア教育(後期講座:地場産業プラント戦略論)* 産学官連携	実施							開講	←	←	←	知財の観点から地場産業を考え地元定着のための課題を整理
	履修者							18	5	14	10	
産業界ニーズGP	実施								大学生の就業力育成GP		実施	H24年度～26年度事業

キャリア支援部門会議

平成24年 4月23日（木）第1回キャリア支援部門会議

- 議 題：1. 副議長の選出等について
 2. 平成24年度事業計画（案）について
 3. 平成24年度就職関連行事予定について
 4. その他

- 報告事項：1. 平成23年度卒業生・修了生の就職状況
 2. その他

平成24年 6月21日（木）第2回キャリア支援部門会議

- 議 題：1. 学内企業説明会（夏季合説）の開催について
 2. 企業向け大学のパンフレットの作成について
 3. その他

- 報告事項：1. 平成23年度卒業生の就職状況（確定版）について
 2. 平成24年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について（申合せ）
 3. その他

平成24年 9月13日（木）第3回キャリア支援部門会議

- 議 題：1. 平成24年度後期の就職ガイダンス等の持ち方について
 2. 卒業予定者の就職内定状況の把握と就職支援について
 3. 就職率の算定方法について
 4. その他

- 報告事項：1. 9月27日（木）学内企業合同説明会Ⅲの対応について
 2. 『ジョブシャドウ』事業について
 3. その他
 (1) 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業の申請及び進捗状況について
 (2) いわて中小企業人材確保・定着支援事業等について
 (3) 大学生研究フォーラム2012参加報告について

平成24年11月29日（木）第4回キャリア支援部門会議

- 議 題：1. 学生保証人宛の就職支援内容の周知について
2. 卒業予定者の就職内定状況の把握について
3. 学内企業合同説明会の開催について
4. その他
(1) 平成24年度年度計画の進捗状況について
(2) その他

- 報告事項：1. 第3回学内企業合同説明会（9月27日開催）について
2. 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業について
3. 就活応援バスの運行について
4. その他

平成25年 1月21日（月）第5回キャリア支援部門会議

- 議 題：1. 平成25年度キャリア教育科目について
2. 卒業時アンケートによるキャリア教育・就職支援評価について
(岩手大学就職ナビ登録者宛のアンケート項目について)
3. その他

- 報告事項：1. 学内企業合同説明会について
2. 就職支援バスの運行について
3. 授業科目シラバスへの『就業力育成』教育内容の記載について
(シラバス作成時期に合わせて内容の取入れと記載の依頼)
4. その他
(1) 学部別卒業予定者の就職内定状況（12月末現在）

平成25年 3月21日（木）第6回キャリア支援部門会議

- 議 題：1. 平成24年度大学のキャリア支援の総括について
2. 平成25年度への引継事項について
3. キャリア教育科目について
4. その他

- 報告事項：1. 平成24年度卒業予定者の就職内定状況について
2. 産業界のニーズに対応した教育改善・体制整備事業について
3. その他

学部就職委員会

1 人文社会科学部

平成24年 5月21日（月）第1回就職委員会

- 議題
1. 委員名簿の確認
 2. 平成24年度への引継ぎ事項
 3. 平成24年度委員会の活動について
 4. 平成24年度委員会の予算（案）について
 5. その他
- 報告
1. 平成23年度卒業生・修了生の就職状況
 2. 全学就職委員会報告
 3. 七友会（同窓会）の就職講演・相談会（6月8日開催）について
 4. 4月5日の取組報告
 5. 今後予定される行事日程について
 6. その他

平成24年10月14日（金）第2回就職委員会

- 議題
1. インターンシップの事後指導について
 2. 入社就職ガイダンスについて
 3. 認証評価チェックリストによる改善の実施について
 4. 企業訪問について
 5. 合同企業説明会の名刺交換会について
 6. その他
- 報告
1. 卒業予定者の就職内定状況（10月分）について
 2. その他

平成25年 3月19日（金）第3回就職委員会

- 議題
1. 11月人文社会科学部就職説明会・懇親会について
 2. 人文社会科学部就職委員会と七友会共同主催キャリアを考える会開催について
 3. 教育学部主催の教職セミナー参加学生への補助について
 4. 就職委員会予算について
 5. 平成23年度インターンシップ研修報告書の配付について
 6. 平成25年度申し送り事項

- 報告
1. 平成24年度委員会活動について
 2. インターンシップ授業の経過報告
 3. 平成24年度委員会の予算執行について
 4. 全学キャリア支援部門会議の報告
 5. その他

2 教育学部

平成24年 4月10日(火) 第1回就職委員会

- 議題
1. 関東圏教員採用試験(大学推薦)応募者選考の審議日程について
 2. その他
 - (1) 委員の役割分担について
 - (2) その他

- 報告
1. 平成23年度卒業生の教員採用状況
 2. 平成24年度教採セミナー
 3. その他

平成24年 5月 2日(水) 第2回就職委員会

- 議題
1. 関東圏教員採用試験(大学推薦)応募者選考の選考について
 2. その他
 - (1) 委員の役割分担について
 - (2) その他

報告 なし

平成24年10月23日(火) 第3回就職委員会

- 議題
1. 教員採用対策のこれまでの反省と今後の具体的対策について
 2. その他
 - (1) 委員の役割分担について
 - (2) その他

- 報告
1. 就職状況調査について
 2. 第16期教員採用セミナーについて
 3. 大学推薦結果について
 4. 平成25年度岩手県教員採用試験結果等について

3 農学部

平成24年11月13日（火）第1回就職委員会

議題 1. 副委員長の選出について

2. 平成23年度農学部就職委員会からの引継ぎ事項について

3. 企業訪問について

4. 農学部就職ガイダンスの計画について

5. 学内企業合同説明会（名刺交換会）について

6. その他

報告 1. 第3回キャリア支援部門会議報告

2. 平成24年度就職状況について

3. その他

会議等

平成24年 4月26日(木) 第1回いわて中小企業人材確保・定着支援事業協議会

(岩手県民会館)

- 議題1. 「いわて中小企業人材確保・定着支援事業協議会設置要綱」の設定について
2. 事業の実施内容及びスケジュールについて
 3. 意見交換
 4. その他

平成24年 5月31日(木) 第1回盛岡地域中小企業人材マッチング支援事業意見交換会

(岩手教育会館)

- 議題1. 事業説明
- (1) 事業対象となる学生へのPR方法
 - (2) 学生にとって魅力的なコンテンツの作成
 - (3) その他

平成24年 6月12日(火) 平成24年度第1回全国就職指導ガイダンス

(東京ビックサイト)

1. 講演：学生の就職・採用活動について……就職問題懇談会
(社)日本経済団体連合会
2. 行政説明
3. 事例紹介
4. 大学と企業との情報交換会

平成24年 6月14日(木) 第2回いわて中小企業人材確保・定着支援事業協議会

(岩手県民会館)

- 議題1. 経過報告について
2. 事業の実施内容及びスケジュールについて
 3. 意見交換
 4. その他

平成24年 6月20日（木）いわて中小企業人材確保・定着支援事業第1回企業向け説明会
(岩手県民会館)

- 議題 1. いわて中小企業人材確保・定着支援事業について
2. いわて中小企業就職センターについて
 3. 各大学・学生就職の活動動向・採用にあたっての留意点について
 4. 質疑・応答
 5. その他

平成24年 7月24日（火）岩手新卒者就職応援本部会議（盛岡大二合同庁舎）

- 議題 1. 平成24年3月新規学校卒業者の求人・求職・就職状況について
2. 新規学卒者等の支援の状況と今後の取組について
 3. 意見交換
 4. その他

平成24年 8月17日（金）第2回盛岡地域中小企業人材マッチング支援事業意見交換会
(岩手教育会館)

- 議題 1. ジョブマッチ事業の現在の進行状況の報告について
2. 第1回イベント交流会開催内容について

平成24年10月 4日（木）平成24年度大学懇談会（仙台第2号合同庁舎）

質疑・意見交換

1. 平成24年度に実施した採用試験の実施結果等について
2. 人材確保活動について
3. 民間の就職動向について
4. 学生の就職意識・就職意欲について
5. その他

平成24年11月20日（火）平成24年度第2回全国就職指導ガイダンス

(神戸ポートピアホテル)

1. 講演：学生の就職・採用活動について……就職問題懇談会

(社) 日本経済団体連合会

2. 行政説明
3. 事例紹介
4. 大学と企業との情報交換会

平成24年12月18日（火）岩手新卒者就職応援本部分科会（盛岡大二合同庁舎）

- 議題 1. 平成25年3月新規学校卒業者等の求人・求職・内定状況について
2. 内定学生に対する就職支援の取組について（卒業前の集中支援）
 3. 労働法制の周知について
 4. 新規学卒者の離職率について
 5. 意見交換

平成25年 1月22日（火）第3回盛岡地域中小企業人材マッチング支援事業意見交換会
（岩手教育会館）

- 議題 1. ジョブマッチもりおか事業に係る意見交換
2. その他

平成25年 2月21日（木）第2回いわて中小企業人材確保・定着支援事業協議会
（エスポワールいわて）

- 議題 1. 平成24年度の事業系か報告について
2. 平成24年度の実績報告について
 3. 次年度の事業計画について
 4. 意見交換
 5. その他

平成25年 3月26日（火）岩手新卒者就職応援本部第2回会議（盛岡第二合同庁舎）

- 議題 1. 平成25年3月新規学校卒業者の求人・求職・就職状況について
2. 新規学卒者等への支援の状況と今後の取組について
 3. 意見交換
 4. その他

企業合同説明会

平成24年 9月27日(木) 岩手大学企業合同説明会Ⅲ(夏季合説)

全学部分 会 場：岩手大学中央食堂

参加企業：60社

学生参加：70名

平成24年12月 1日(土) 岩手大学企業合同説明会Ⅰ(冬季合説)

全学部分 会 場：岩手大学中央食堂

参加企業：120社

学生参加：849名

平成25年 1月17日(木)・18日(金) 岩手大学企業合同説明会Ⅱ(春季合説)

全学部分 会 場：岩手大学中央食堂

参加企業：240社

学生参加：1,176名(17日756名、18日420名)

就職ガイダンス等

平成24年 全学部	4月18日(水)	川崎市立学校教員採用説明会 講 師：川崎市教育委員会事務局教職 会 場：教育学部E23講義室 参加者：6名
平成24年 全学部	4月20日(金)	就職ガイダンス「面接対策セミナー個別・集団」 講 師：ジョブカフェいわて 会 場：学生センターB棟多目的室 参加者：7名
平成24年 全学部	4月24日(火)	さいたま市立学校教員採用説明会 講 師：さいたま市教育委員会教職員課 会 場：教育学部E28講義室 参加者：3名
平成24年 全学部	4月25日(水)	千葉県・千葉市公立学校教員採用説明会 講 師：千葉県教育庁教育振興部教職員課 会 場：教育学部北桐ホール 参加者：60名
平成24年 全学部	4月26日(木)	就職ガイダンス「面接対策セミナーグループディスカッション」 講 師：ジョブカフェいわて 会 場：学生センターB棟多目的室 参加者：5名
平成24年 全学部	4月26日(木)	横浜市公立学校教員採用説明会全学部 講 師：横浜市教育委員会事務局教職員人事課 会 場：教育学部E23講義室 参加者：13名
平成24年 全学部	4月27日(金)	岩手県公立学校教員採用説明会 講 師：岩手県教育委員会事務局教職員課 会 場：教育学部北桐ホール 参加者：59名
平成24年 全学部	5月 8日(火)	東京都公立学校教員採用説明会 講 師：東京都教育庁人事部選考課 会 場：教育学部E23講義室 参加者：7名
平成24年 全学部	5月11日(金)	東北地区県職員・警察官等採用上級試験説明会 講 師：東北地区県庁、県警察本部、盛岡市及び北上市職員採用 担当者 会 場：学生センターA棟・B棟GB11ほか 参加者：延べ400名
平成24年 農学部	5月18日(金)	農学部就職ガイダンス 講 師：(株)リクルート 会 場：農学部ぼらんホール 参加者：68名
平成24年 全学部	5月21日(月)	岩手県警察官採用説明会 講 師：岩手県警察本部警務部警務課 会 場：学生センターA棟G29講義室 参加者：3名

平成24年 工学部	5月22日(火)	工学部就職ガイダンス(学部・大学院) 講師：(株)リクルート 会場：工学部テクノホール 参加者：230名(2回分)
平成24年 人文社会科学部・教育学部	5月24日(木)	文系学部就職ガイダンス 講師：(株)リクルート 会場：学生センターA棟G1大講義室 参加者：187名
平成24年 全学部	6月1日(金)	就職ガイダンス「自己分析講座Ⅱ」 講師：(株)マイナビ 会場：学生センターA棟G2大講義室 参加者：53名
平成24年 全学部	6月2日(土)	教員採用セミナー「第1回面接対策講座」 講師：公立学校元校長等および教育学部教員 会場：教育学部総合教育研究棟各講義室および会議室 参加者：71名
平成24年 全学部	6月5日(火)	就職ガイダンス「業界研究講座Ⅰ」 講師：(株)ディスコ 会場：人文社会科学部51大講義室 参加者：38名
平成24年 全学部	6月7日(木)	教員採用セミナー「第2回面接対策講座」 講師：公立学校元校長等および教育学部教員 会場：教育学部総合教育研究棟各講義室および会議室 参加者：94名
平成24年 全学部	6月8日(金)	就職ガイダンス「業界研究講座Ⅱ」 講師：(株)ディスコ 会場：学生センターA棟G2大講義室 参加者：48
平成24年 全学部	6月11日(月)	就職ガイダンス「業界研究講座Ⅲ」 講師：(株)マイナビ 会場：学生センターA棟G28講義室 参加者：11名
平成24年 全学部	6月16日(土)	教員採用セミナー「第3回面接対策講座」 講師：公立学校元校長等および教育学部教員 会場：教育学部総合教育研究棟各講義室および会議室 参加者：72名
平成24年 全学部	6月19日(火)	就職ガイダンス「SPI模擬試験Ⅰ」 講師：(株)マイナビ 会場：学生センターA棟G38講義室 参加者：27名
平成24年 全学部	6月21日(木)	教員採用セミナー「第4回面接対策講座」 講師：公立学校元校長等および教育学部教員 会場：教育学部総合教育研究棟各講義室および会議室 参加者：89名

就職ガイダンス等

- 平成24年 6月22日(金) 就職ガイダンス「SPI模擬試験Ⅱ」
全学部 講師：(株)マイナビ
会場：学生センターA棟G37講義室
参加者：25名
- 平成24年 7月12日(木) 就職ガイダンス「エントリーシート対策講座Ⅰ」
全学部 講師：(株)マイナビ
会場：学生センターA棟G1大講義室
参加者：59名
- 平成24年 7月13日(金) 就職ガイダンス「エントリーシート対策講座Ⅱ」
全学部 講師：(株)ディスコ
会場：学生センターA棟G2大講義室
参加者：64名
- 平成24年 7月18日(水) 就職ガイダンス「就活身だしなみ講座Ⅰ服装編」
全学部 講師：(株)コナカ
会場：学生センターB棟GB21講義室
参加者：25名
- 平成24年 7月19日(月) 就職ガイダンス「就活身だしなみ講座Ⅱメイクアップ編」
全学部 講師：資生堂東北支社
会場：学生センターB棟GB21講義室
参加者：42名
- 平成24年 8月4日(土) 教員採用セミナー「第5回面接対策講座」
全学部 講師：公立学校元校長等および教育学部教員
会場：教育学部総合教育研究棟各講義室および会議室
参加者：47名
- 平成24年 8月11日(土) 教員採用セミナー「第6回面接対策講座」
全学部 講師：公立学校元校長等および教育学部教員
会場：教育学部総合教育研究棟各講義室および会議室
参加者：43名
- 平成24年 9月24日(月) 就職対策説明会(進路変更ガイダンス)
全学部 講師：キャリア支援課
会場：学生センターB棟GB11講義室
参加者：18名
- 平成24年10月12日(金) 文系学部就職ガイダンス
人文社会科学部・教育学部 講師：(株)リクルートキャリア
会場：学生センターA棟G1大講義室
参加者：44名
- 平成24年10月15日(月) 農学部就職ガイダンス
農学部 講師：(株)マイナビ
会場：農学部7番講義室
参加者：24名
- 平成24年10月16日(火) 工学部就職ガイダンス(学部・大学院)
工学部 講師：(株)リクルートキャリア
会場：工学部テクノホール
参加者：計202名(2回分)

- 平成24年10月24日(水) 横浜市公立学校教員採用説明会
全学部 講師：横浜市教育委員会事務局
会場：教育学部E23講義室
参加者：12名
- 平成24年11月1日(木) エントリーシート対策講座Ⅰ(基礎)
全学部 講師：(株)マイナビ
会場：学生センターA棟G2大講義室
参加者：125名
- 平成24年11月2日(金) エントリーシート対策講座Ⅱ(応用)
全学部 講師：(株)マイナビ
会場：学生センターA棟G1大講義室
参加者：109名
- 平成24年11月2日(金) さいたま市公立学校教員採用説明会
全学部 講師：さいたま市教育委員会
会場：教育学部E27講義室
参加者：14名
- 平成24年11月6日(火) エントリーシート対策講座Ⅲ(実践・添削)
全学部 講師：キャリアカウンセラー、キャリア支援課職員7名
会場：学生センターB棟多目的室
参加者：119名
- 平成24年11月8日(木) エントリーシート対策講座Ⅳ(実践・添削)
全学部 講師：キャリアカウンセラー、キャリア支援課職員7名
会場：学生センターB棟多目的室
参加者：139名
- 平成24年11月14日(水) 川崎市公立学校教員採用説明会
全学部 講師：川崎市教育委員会
会場：教育学部E23講義室
参加者：1名
- 平成24年11月19日(月) 千葉県公立学校教員採用説明会
全学部 講師：千葉県教育委員会
会場：教育学部北桐ホール
参加者：15名
- 平成24年11月26日(月) 栃木県公立学校教員採用説明会
全学部 講師：栃木県教育委員会
会場：教育学部E23講義室
参加者：1名
- 平成24年11月29日(木) 埼玉県公立学校教員採用説明会
全学部 講師：埼玉県教育委員会
会場：教育学部E23講義室
参加者：9名
- 平成24年12月12日(水) 宮城県公立学校教員採用説明会
全学部 講師：宮城県教育委員会
会場：教育学部E23講義室
参加者：25名

就職ガイダンス等

- | | |
|-----------------------|---|
| 平成24年12月17日(月)
農学部 | 農学部就職ガイダンス
発表者：各課程から学生1名
会場：農学部1号会議室
参加者：50名(教員含) |
| 平成25年1月10日(木)
全学部 | 財務専門官業務説明会
講師：東北財務局盛岡財務事務所
会場：学生センターB棟B11講義室
参加者：10名 |
| 平成25年1月10日(木)
全学部 | 東京都公立学校教員採用説明会
講師：東京都教育庁
会場：教育学部E21講義室
参加者：3名 |
| 平成25年3月14日(木)
全学部 | 労働基準監督官採用説明会
講師：岩手労働局
会場：人文社会科学部51大講義室
参加者：24名 |

企業訪問

平成24年 6月18日(月)

企業訪問(就職情報交換: 矢巾町役場、紫波町役場、白石食品工業(株))

場 所: 盛岡市近郊

訪問者: 花見就職委員(人社)、高橋主査

平成24年12月 6日(木)・7日(金)

企業訪問(就職情報交換: J A山形、(株)NDソフトウェア
(株)ニューメディア、福島中央市民医療生活協同組合、北芝電機(株)
ヨークベニマル(株)、 Grantマト(株))

場 所: 山形市、南陽市、米沢市、福島市、郡山市、名須川市

訪問者: 喜多就職委員(農学)、大内課長

平成24年12月10日(月)・11日(火)

企業訪問(就職情報交換: (株)国際ホテル、さくらの百貨店
ATV青森テレビ、(株)青南商事、キャノンプレジジョン(株)
青森県教育委員会)

場 所: 青森市・弘前市

訪問者: 滝吉就職委員(教育)、高橋主査

平成25年 1月11日(金)

企業訪問(就職情報交換: プライフーズ(株)、マルヨ水産(株)、
太平洋金属(株))

場 所: 八戸市近郊

訪問者: 高木委員長(工学)、中村キャリアアドバイザー

平成25年 3月19日(火)

企業訪問(就職情報交換: 白石食品工業(株)、岩手畜産流通センター)

場 所: 盛岡市近郊

訪問者: 大内課長、工学部清水教員、学生(人社1名)

大学生の就職力育成支援事業

平成24年 7月11日(水) ジョブシャドウ事前勉強会

全学部

指 導：キャリア支援課職員及び前年度ジョブシャドウ参加学
生有志

会 場：学生センターB棟多目的室

参加者：22名

夏季休業期間

ジョブシャドウを実施

全学部

受入先：企業及び法人 7機関

参加者：17名

平成24年 9月28日(金) ジョブシャドウ事後報告会

全学部

指 導：キャリア支援課職員及び前年度ジョブシャドウ参加学
生有志

会 場：学生センターB棟多目的室

参加者：17名

平成24年 9月29日(土) 早稲田大学ジョブシャドウイング事後勉強会に学生参加

全学部

(同様のプログラムに参加した学生同士で意見交換)

会 場：早稲田大学

参加者：本学のジョブシャドウ参加学生6名

「岩手大学ジョブシャドウ参加学生の報告書」作成

作成部数：300部

配布先：岩手県下の大学・高等学校、東日本地域の同G P プ
ログラム採択大学、若者就職支援関係機関ほか

産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

平成25年 1月22日（火）先輩から後輩に伝えるセミナー

全学部

講師；東北リコー（株）職員（工学部卒業生）

丸木医科器械（株）職員（人文社会科学部卒業生）

会場；学生センターA棟 G1 大講義室

参加者；3名

平成25年 3月19日（火）学生を同行した企業訪問

全学部

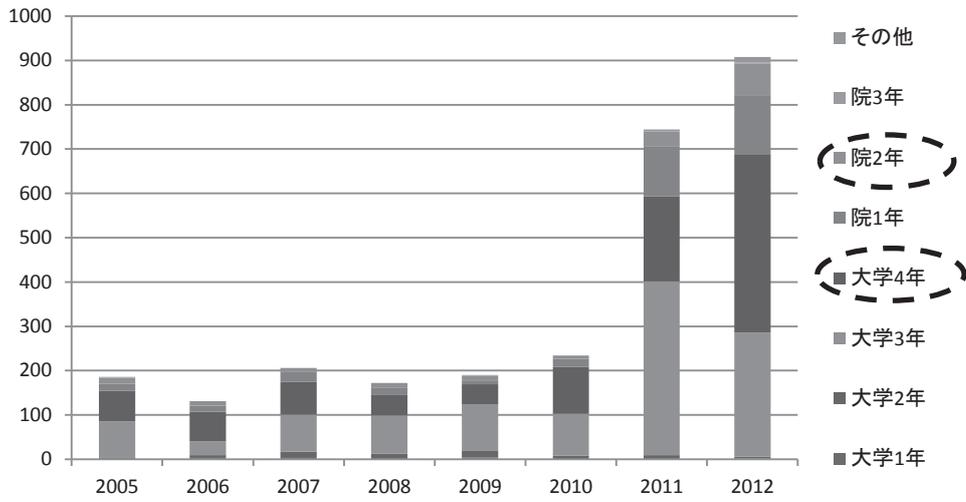
訪問先；白石食品工業（株）

（株）岩手畜産流通センター

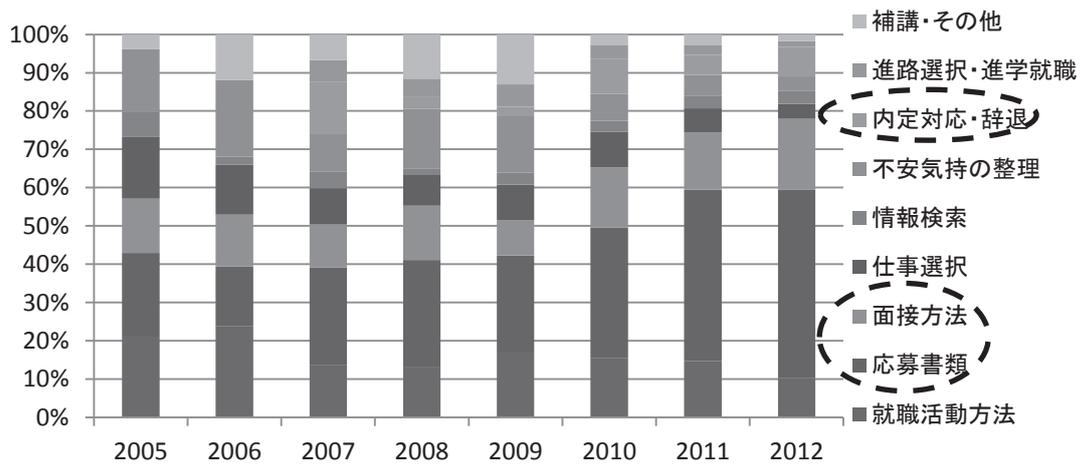
参加者；人文社会科学部2年生1名

2012年度 キャリア相談状況

年度別相談数推移(学年別・人)

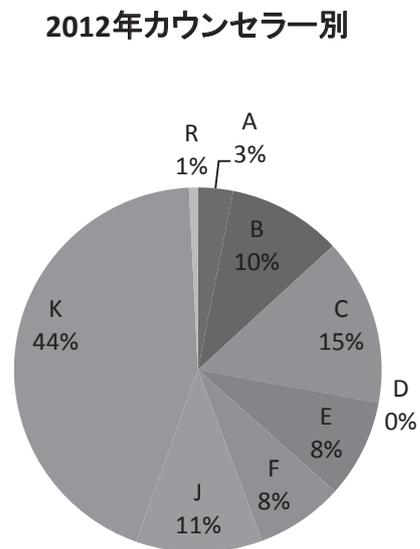
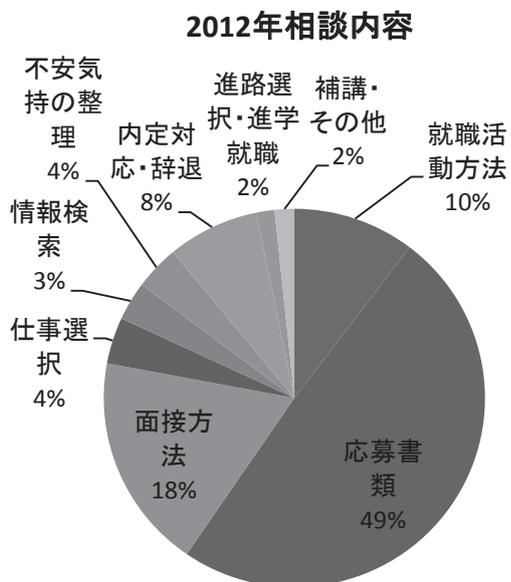
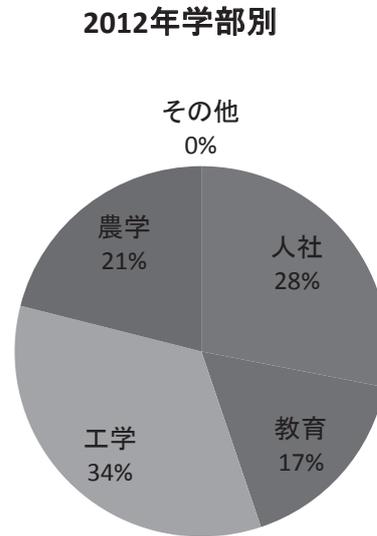
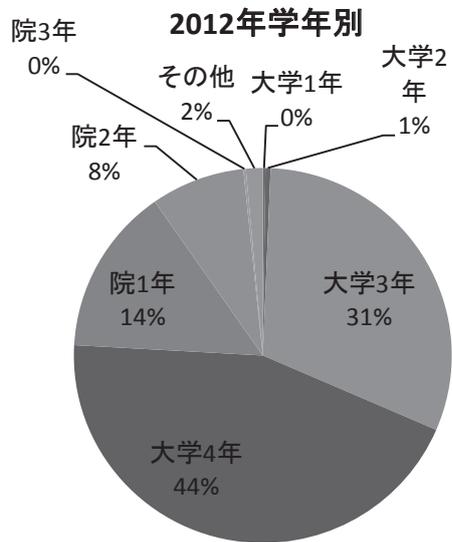


年度別相談内容比率

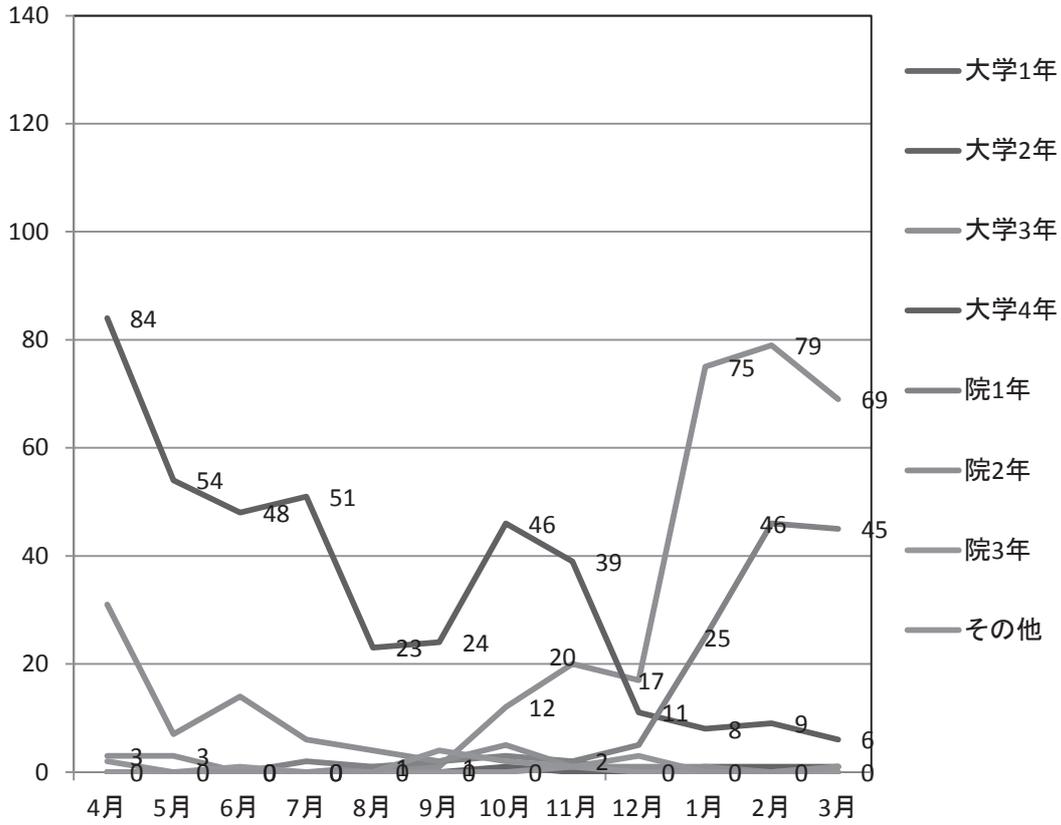


月別相談件数

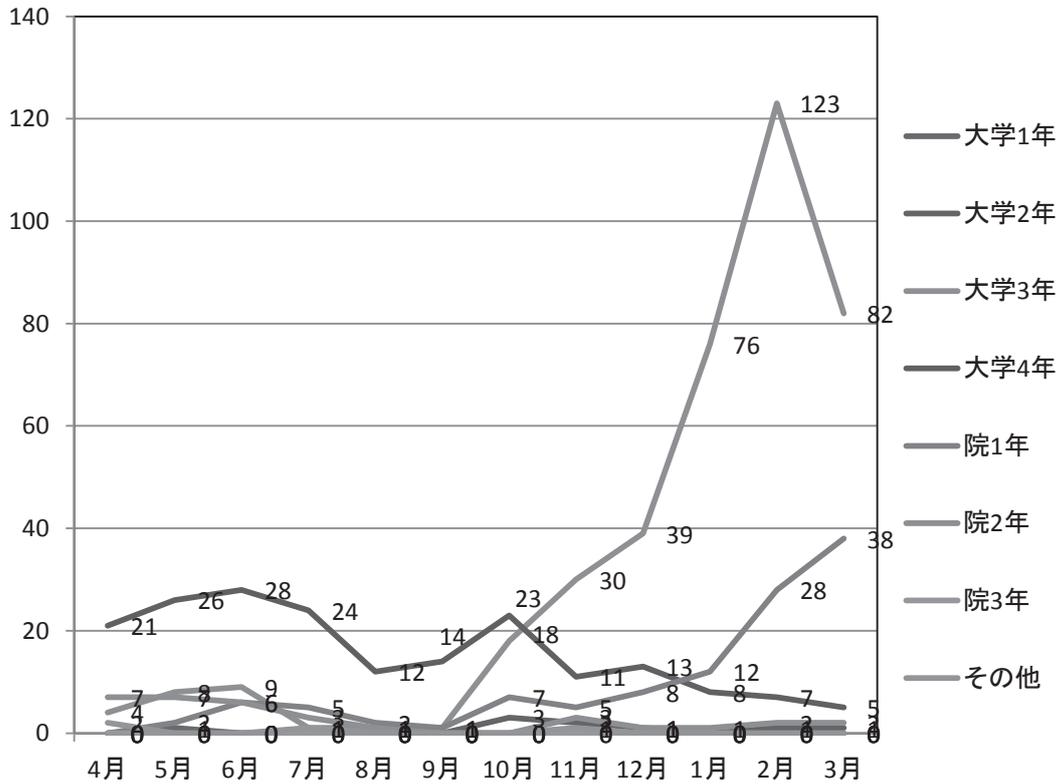




2012年度 学年別相談件数



2011年度 学年別相談件数



岩手大学
大学教育総合センター
年次報告 2012

平成 25 年 11 月 7 日 発行

- 編集・発行
岩手大学 大学教育総合センター
岩手県盛岡市上田3丁目18-34
- 印刷・製本
杜陵高速印刷株式会社



